

Oracle® Cloud

Oracle Content Management でのコンテンツ ツのキャプチャ



F40274-09
2021 June



Oracle Cloud Oracle Content Management でのコンテンツのキャプチャ、

F40274-09

Copyright © 2020, 2021, Oracle and/or its affiliates.

著者: Promila Chitkara

執筆協力者: Ron van de Crommert、Kalpana N

This software and related documentation are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are protected by intellectual property laws. Except as expressly permitted in your license agreement or allowed by law, you may not use, copy, reproduce, translate, broadcast, modify, license, transmit, distribute, exhibit, perform, publish, or display any part, in any form, or by any means. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of this software, unless required by law for interoperability, is prohibited.

The information contained herein is subject to change without notice and is not warranted to be error-free. If you find any errors, please report them to us in writing.

If this is software or related documentation that is delivered to the U.S. Government or anyone licensing it on behalf of the U.S. Government, then the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed or activated on delivered hardware, and modifications of such programs) and Oracle computer documentation or other Oracle data delivered to or accessed by U.S. Government end users are "commercial computer software" or "commercial computer software documentation" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, reproduction, duplication, release, display, disclosure, modification, preparation of derivative works, and/or adaptation of i) Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed or activated on delivered hardware, and modifications of such programs), ii) Oracle computer documentation and/or iii) other Oracle data, is subject to the rights and limitations specified in the license contained in the applicable contract. The terms governing the U.S. Government's use of Oracle cloud services are defined by the applicable contract for such services. No other rights are granted to the U.S. Government.

This software or hardware is developed for general use in a variety of information management applications. It is not developed or intended for use in any inherently dangerous applications, including applications that may create a risk of personal injury. If you use this software or hardware in dangerous applications, then you shall be responsible to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy, and other measures to ensure its safe use. Oracle Corporation and its affiliates disclaim any liability for any damages caused by use of this software or hardware in dangerous applications.

Oracle and Java are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

Intel and Intel Inside are trademarks or registered trademarks of Intel Corporation. All SPARC trademarks are used under license and are trademarks or registered trademarks of SPARC International, Inc. AMD, Epyc, and the AMD logo are trademarks or registered trademarks of Advanced Micro Devices. UNIX is a registered trademark of The Open Group.

This software or hardware and documentation may provide access to or information about content, products, and services from third parties. Oracle Corporation and its affiliates are not responsible for and expressly disclaim all warranties of any kind with respect to third-party content, products, and services unless otherwise set forth in an applicable agreement between you and Oracle. Oracle Corporation and its affiliates will not be responsible for any loss, costs, or damages incurred due to your access to or use of third-party content, products, or services, except as set forth in an applicable agreement between you and Oracle.

目次

はじめに

対象読者	xi
ドキュメントのアクセシビリティについて	xi
ダイバーシティ&インクルージョン	xi
関連リソース	xi
表記規則	xii

第 I 部 スタート・ガイド

1 コンテンツ・キャプチャについて学習

キャプチャ	1-1
変換	1-2
分類	1-2
ドキュメントの分割	1-2
メタデータの割当て	1-3
添付タイプ	1-3
バッチ・ステータス	1-3
リリース	1-3
コミット	1-4

2 コンテンツ・キャプチャ・プロセスの理解

ソース	2-1
プロセッサ	2-2
プロシージャ	2-3
バッチ	2-3
クライアント・プロファイル	2-3

3 コンテンツ・キャプチャのメイン・コンポーネントについて学習

キャプチャ・プロシージャ・ページ	3-1
コンテンツ・キャプチャ・クライアント	3-2
コンテンツ・キャプチャ・ファイル・インポート・エージェント	3-3

4 ロールおよびセキュリティについて学習

第 II 部 プロシージャの設定

5 コンテンツ・キャプチャ・プロシージャ・ページについて

6 新規プロシージャの作成

7 プロシージャの管理

プロシージャのフィルタ処理	7-1
プロシージャの編集	7-1
プロシージャの削除	7-2
プロシージャのコピー	7-2
プロシージャの検証	7-2
プロシージャのエクスポートまたはインポート	7-3

8 プロシージャ・セキュリティの構成

9 メタデータの構成

メタデータ・フィールドの構成	9-1
メタデータ・フィールドの追加または編集	9-1
メタデータ・フィールドの削除	9-2
メタデータ・フィールドの入力マスクの構成	9-3
メタデータ・フィールドの表示形式の構成	9-4
メタデータ・フィールドの自動入力の設定	9-5
正規表現の検証の構成	9-6
アセット・タイプ選択リストの作成を有効にするためのメタデータ・フィールドの構成	9-7
ユーザー定義の選択リストの構成	9-7

ユーザー定義の選択リストの追加または編集	9-8
テキスト・ファイルからコンテンツ・キャプチャ選択リストへの値のインポート	9-9
テキスト・ファイルへのコンテンツ・キャプチャ選択リスト値のエクスポート	9-9
ユーザー定義選択リストまたはアイテムの削除	9-10
ユーザー定義の選択リストの使用方法	9-10
アセット・タイプ選択リストの構成	9-10
アセット・タイプ選択リストの追加または編集	9-11
アセット・タイプ選択リストの削除	9-11
依存選択リストの構成	9-12
選択リストの依存性に関する重要なポイント	9-12
依存選択リストの追加または編集	9-12
依存選択リストの削除	9-14
アセット同期の構成	9-14
アセット・ルックアップの構成	9-15

10 分類の構成

バッチ・ステータスの追加、編集または削除	10-1
添付タイプの追加、編集または削除	10-2
ドキュメント・プロファイルの構成	10-2
ドキュメント・プロファイルの追加または編集	10-3
ドキュメント・プロファイルの削除	10-3
ドキュメント・プロファイルの使用	10-4

11 キャプチャ設定の構成

クライアント・プロファイルの構成	11-1
クライアント・プロファイルについて	11-2
クライアント・プロファイルの追加または編集	11-3
クライアント・プロファイルの非アクティブ化または削除	11-4
クライアント・プロファイルのタイプの構成	11-4
キャプチャのみ	11-5
キャプチャと索引	11-5
索引のみ	11-5
ユーザーに表示されるバッチ・リストのフィルタ	11-6
イメージのキャプチャと格納の構成	11-8
空白ページの検出の構成	11-9
イメージ以外のファイル・キャプチャ設定の構成	11-10
ドキュメント作成の構成	11-10

セパレータ・シート使用の構成	11-11
クライアント・プロファイルでの依存選択リストの使用	11-12
クライアント・プロファイルでのアセット・ルックアップの有効化	11-13
クライアント・プロファイルでのドキュメント・プロファイルの構成	11-13
クライアント・プロファイルへのセキュリティ・アクセスの付与または削除	11-14
クライアント・プロファイルの後処理の構成	11-14
リリース・プロセスの追加、編集または削除	11-15
インポート・プロセッサ・ジョブの構成	11-16
インポート処理について	11-16
インポート・プロセッサ・ジョブの追加または編集	11-17
インポート・プロセッサ・ジョブの非アクティブ化または削除	11-19
インポート・プロセッサ・ジョブでの空白ページ検出の構成	11-19
電子メール・メッセージおよび電子メール添付のインポートの構成	11-20
リスト・ファイル・インポートの構成	11-23
リスト・ファイル・インポート時の添付のインポート	11-25
フォルダからのファイル・インポートの構成	11-25
インポート中のメタデータ割当ての構成	11-27
インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成	11-28
電子メール・インポート用の Google Mail (OAuth) の設定	11-29
Google Mail アプリケーションの作成用のリダイレクト URL の取得	11-29
電子メール・インポート用の Google Mail アプリケーションの構成	11-30
キャプチャ電子メール・インポートのための Google メール OAuth	11-31

12 処理設定の構成

認識プロセッサ・ジョブの構成	12-1
認識処理について	12-1
ドキュメント編成方法	12-2
その他のキー認識プロセッサ・ジョブ設定	12-2
一般的な認識プロセッサ・ジョブ設定の構成	12-6
認識ジョブの追加または編集	12-6
認識ジョブの非アクティブ化または削除	12-7
認識プロセッサ・ジョブの後処理および監視の構成	12-8
認識プロセッサ・ジョブへのバッチ・フローの構成	12-9
ドキュメント編成に基づいたジョブの構成	12-9
固定数のページを含むドキュメント用のジョブの構成	12-9
各ページで同じバー・コード値を持つドキュメント用のジョブの構成	12-11
ドキュメント間にセパレータ・ページがあるバッチ用のジョブの構成	12-12
階層セパレータのあるドキュメントにジョブを構成	12-13

ドキュメントの編成を必要としないバッチ用のジョブの構成	12-14
バー・コード、パッチ・コードおよびセパレータ・ページ定義の構成	12-15
セパレータ・ページ定義の構成	12-15
バー・コード定義の追加または編集	12-17
階層セパレータ・ページ定義の構成	12-19
静的なドキュメント・プロファイルまたは動的に決定されるドキュメント・プロファイルの指定	12-21
メタデータ・フィールドの自動入力の指定	12-22
PDF への変換ジョブの構成	12-22
PDF への変換ジョブの後処理および監視の構成	12-24
PDF への変換ジョブへのバッチ・フローの構成	12-24
PDF への変換ジョブの非アクティブ化または削除	12-25
TIFF への変換ジョブの構成	12-25
TIFF 変換ジョブでの空白ページの検出の構成	12-26
ドキュメントのマージ方法とメタデータの割当て方法の指定	12-27
PDF 変換エンジンの構成	12-28
TIFF への変換ジョブへのバッチ・フローの構成	12-28
TIFF への変換ジョブの後処理および監視の構成	12-29
TIFF への変換ジョブの非アクティブ化または削除	12-30
アセット・ルックアップ・ジョブの構成	12-30
アセット・ルックアップ・ジョブの後処理とモニタリングの構成	12-31
アセット・ルックアップ・ジョブへのバッチ・フローの構成	12-32
アセット・ルックアップ・ジョブの非アクティブ化または削除	12-33
XML 変換ジョブの構成	12-33
XML 変換ジョブの後処理とモニタリングの構成	12-36
XML 変換ジョブへのバッチ・フローの構成	12-37
XML 変換ジョブの非アクティブ化または削除	12-37

13 コミット・プロファイルの構成

コミット処理について	13-1
コミット・プロファイルの追加または編集	13-4
コミット・プロファイルのアクティブ化と並替え	13-5
コミット・プロファイルの非アクティブ化または削除	13-6
ドキュメント・プロファイルに基づくコミット・プロファイルの制限	13-7
エージェントまたはビジネス・リポジトリのコミット・ドライバ設定の構成	13-7
ドキュメント・フォルダのコミット・ドライバ設定の構成	13-9
コミット・プロセッサへのバッチ・フローの構成	13-11

第 III 部 ドキュメントのスキャンとインポート

14 コンテンツ・キャプチャ・クライアントの設定

始める前に	14-1
コンテンツ・キャプチャ・クライアントのダウンロード	14-1
コンテンツ・キャプチャ・クライアントのインストール	14-2
コンテンツ・キャプチャ・クライアントの起動	14-2

15 コンテンツ・キャプチャ・クライアントについて

16 コンテンツ・キャプチャ・クライアント機能の理解

17 ハードコピー・ドキュメントのスキャン

スキャナの設定	17-1
スキャン・プリファレンスの構成	17-2
ドキュメントのスキャン	17-3

18 電子ドキュメントのインポート

インポート・ソースおよびインポートの設定	18-1
ドキュメントのインポート	18-2

19 ドキュメントのレビューと編集

ドキュメントおよびページのレビュー	19-1
ドキュメントの自動レビューおよび索引付けの無効化	19-2
選択したページのズームインとズームアウト	19-2
サムネイル表示のサイズ変更または再配置	19-2
特定のページへの移動	19-3
ページの印刷	19-3
関連付けられたアプリケーションでのドキュメントまたは添付の表示	19-3
ファイル情報の表示	19-4
ドキュメントの検索	19-5
ドキュメントおよびページの編集	19-6
イメージの品質の向上	19-6

別のドキュメントへのページの移動	19-6
ドキュメントの1つ以上のページの複製	19-7
ページの回転またはフリップ	19-7
メタデータ値のコピーと貼付け	19-7
ドキュメントのメタデータ値のクリア	19-8
ページの切り取り/コピーとイメージ・ドキュメントでの貼付け	19-9
ドキュメントの作成と削除	19-9
ドキュメントのキャプチャ	19-10
ドキュメントの分割	19-10
ドキュメント区切りの削除	19-10
ドキュメントとそのページの削除	19-11
ドキュメントの複製	19-11
添付の作成および削除	19-11
添付のキャプチャ	19-11
添付の分割	19-12
添付とそのページの削除	19-12
ページの追加、置換および削除	19-12
ページの挿入	19-13
ページの追加	19-13
ページの置換	19-14
ページの削除	19-14

20 ドキュメントの索引付け

メタデータによるドキュメントの索引付け	20-1
アセット・ルックアップ値によるドキュメントの索引付け	20-2

21 バッチの管理

バッチ情報の変更	21-2
バッチのリリース	21-2
バッチの検索またはリストのフィルタ処理	21-3
バッチ処理エラー	21-4
バッチ・エラーの検索	21-4

第 IV 部 自動ファイル・インポートの設定

22 監視対象ファイル・フォルダからのファイルのキャプチャ

監視対象ファイル・フォルダの理解	22-1
ファイル・インポート・エージェントの設定	22-2
ファイル・インポート・エージェントのダウンロードとインストール	22-2
ファイル・インポート・エージェント用の Oracle Identity Cloud Service (IDCS) アプリケーションの作成	22-3
Oracle Content Management のファイル・インポート・エージェントへの登録	22-4
キャプチャ・コマンドライン・ユーティリティの使用	22-5

23 モニター対象電子メール・アカウントからのファイルのキャプチャ

はじめに

このドキュメントは、管理者およびユーザーを対象としています。コンテンツ・キャプチャを管理、処理および使用する方法について説明します。

対象読者

このドキュメントは、管理者およびユーザーを対象としています。管理者向けに、コンテンツ・キャプチャの管理に関する情報が記載されています。また、エンド・ユーザー向けに、ビジネスの要件を満たすためにコンテンツ・キャプチャ・クライアントを使用してドキュメントをスキャン、インポートおよび自動処理する方法に関する情報も記載されています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Support へのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>)か、聴覚に障害のあるお客様は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

ダイバーシティ & インクルージョン

Oracle はダイバーシティ & インクルージョンに積極的に取り組んでいます。Oracle は、ソート・リーダーシップと革新性を高める社員の多様性を尊重し、その価値を重んじています。従業員、お客様、パートナー様にポジティブな影響をもたらすインクルーシブな文化を醸成する私たちのイニシアティブの一環として、製品やドキュメントからインセンシティブな用語を取り除くように努めています。また、Oracle 製品および業界標準が進化する中、お客様の既存の技術との互換性を維持する必要性およびサービスの継続性確保の要求にも留意しています。このような技術的な制限により、当社のインセンシティブな用語を削除する取組みは継続中であり、時間と皆様のご協力が必要となります。

関連リソース

詳細は、オラクル社の次の資料を参照してください。

- Oracle Public Cloud:
<http://cloud.oracle.com>
- [Oracle Content Management の新機能](#)
- [Oracle Content Management の管理](#)

- *Getting Started with Oracle Cloud*

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

表記規則	意味
太字	太字は、アクションに関連付けられたグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素や、本文または用語集で定義されている用語を示します。
イタリック体	イタリック体は、ブック・タイトル、強調、またはユーザーが特定の値を指定するプレースホルダー変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、またはユーザーが入力するテキストを示します。

第1部

スタート・ガイド

Oracle Content Management の機能の 1 つであるコンテンツ・キャプチャを使用すると、物理ドキュメントをスキャンして電子ドキュメントを大きなバッチにインポートし、それを処理して索引を付け、格納や追加処理のために Oracle Content Management にアップロードすることができます。

使用開始時に役立つ情報を次に示します:

- [コンテンツ・キャプチャについて学習](#)
- [コンテンツ・キャプチャ・プロセスの理解](#)
- [コンテンツ・キャプチャのメイン・コンポーネントについて学習](#)
- [ロールおよびセキュリティについて学習](#)

1

コンテンツ・キャプチャについて学習

Oracle Content Management のコンテンツ・キャプチャ機能は、ミッションクリティカルなビジネス・コンテンツをキャプチャ、索引付け、格納および管理するための 1 つのシステムを提供します。ドキュメントを一括してスキャンおよびインポートし、Oracle Content Management にアップロードする前に自動的に処理できます。ドキュメントは、スキャナから取得されたり、ファイルからインポートされた 1 つ以上のイメージで構成されます。また、Microsoft Word や PDF ファイルなどのイメージ以外の電子ファイルである場合もあります。イメージ以外のファイルをインポートする場合は、定義されたキャプチャ・フローによって元の形式が保持されるか、イメージ形式に変換されるか、またはインポートされないかが決まります。

作成するドキュメントのバッチはスケーラブルであるため、ドキュメントの再編成、ビジネス・ニーズに合わせたグループ化の自動化、請求またはファイリングの目的でのバー・コードの読取り、ドキュメントの索引付けによる検索の容易化、組織の標準形式への変換が可能です。物理ドキュメントと電子ドキュメントの一括処理とルーティングを自動化するコンテンツ・キャプチャ・ワークフロー、つまりプロシージャを作成します。

コンテンツをキャプチャするためのプライマリ・ドライバは、バッチとドキュメントです。ドキュメントはスキャンまたはインポートされ、バッチに保持されます。バッチは、スキャンされたイメージまたは電子ドキュメント・ファイル(PDF や Microsoft Office ファイルなど)で構成され、ドキュメントに編成されてメタデータ値が割り当て(索引付け)られます。各ドキュメントは、メタデータ値のセットを共有します。Oracle Content Management には、ドキュメントのインポート、PDF や TIFF への変換、バー・コードの自動認識、ドキュメントの自動分割、メタデータ値の移入および Oracle Content Management への最終出力の提供を行う様々なコンテンツ・キャプチャ・プロセッサが用意されています。

コンテンツ・キャプチャ・プロセスには次の主要なコンポーネントが含まれます:

- キャプチャ
- 変換
- 分類
- リリース
- コミット

キャプチャ

コンテンツ・キャプチャ・プロシージャでドキュメントをスキャンしたり、バッチにインポートする場合、様々な方法で行えます:

- 本番ドキュメント・イメージ・スキャナを使用した大量スキャン
- ビジネス・アプリケーションなどからのアド・ホックなリモート・スキャンまたはインポート
- 電子メール・アカウントやモニター対象のフォルダなどからの自動インポート

エンド・ユーザーは(プロシージャ・マネージャによって作成されたクライアント・プロファイルに基づいて)コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ソフトウェアを使用して手動でハードコピー・ドキュメントをスキャンしたり、電子ドキュメントをインポートできます。または、インポート・ジョブに格納されている設定を使用して、インポート・プロセッサは、イメージやその他の電子ドキュメントを電子メール、ネットワーク・フォルダ、またはリスト・ファイルから直接自動的にインポートすることもできます。

変換

ビジネス・ニーズに応じて、イメージ以外の入力ドキュメントおよび添付を別の形式に変換する必要が生じる場合があります。たとえば、インポートされた電子メール・メッセージに添付された PDF の経費報告書を、バー・コードを読み取るためにイメージに変換する必要がある場合があります。この場合、TIFF 変換プロセッサで PDF ファイルを TIFF イメージに変換します。TIFF 変換プロセッサは、変換ジョブに格納されている設定を使用してドキュメントまたは添付を自動的に変換し、バッチ内にマージします。PDF 変換プロセッサでは、ドキュメントがソース・ドキュメントと同じコンテンツ・タイプの PDF および検索可能な PDF に変換されます。

分類

分類は、バッチを論理ドキュメントに分割し、ドキュメント・プロファイルを割り当てるプロセスです。クライアント・プロファイルは、各ドキュメントに使用可能なメタデータ・フィールドおよび添付タイプのセットを指定します。分類には、バッチへのステータスの割当ても含まれます。

分類は、様々な方法で手動または自動で行うことができます:

- ドキュメントの分割
- メタデータの割当て
- 添付タイプ
- バッチ・ステータス

ドキュメントの分割

- コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ユーザーによって手動で。たとえば、ユーザーは、ドキュメントごとに特定のページ数に構成されたクライアント・プロファイルを選択できます。また、スキャンして新しいドキュメントを識別する前に、ドキュメント間にセパレータ・シートを挿入することもできます。コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ユーザーは、バッチを視覚的に検査しながら、大きなドキュメントを複数の小さなドキュメントに分割することで新しいドキュメントを作成できます。
- コンテンツ・キャプチャ・クライアントでのファイルのインポート中にユーザーによって手動で。
- インポート・プロセッサでジョブの設定に基づいてドキュメントをインポートする際に自動的に。
- 認識プロセッサによるバー・コードの認識時に自動的に。バッチが認識プロセッサに送信される場合、プロセッサは、バー・コードの認識とドキュメントの分類を自動的に行います。

メタデータの割当て

ドキュメントには、ドキュメント・プロファイルに基づいてメタデータ値のセットが割り当てられますが、これは[索引付け](#)と呼ばれます。このプロファイルは、特定のタイプのドキュメントの索引付けに使用可能なメタデータ・フィールドを識別します。メタデータ値は、様々な方法で割り当てることができます:

- コンテンツ・キャプチャ・クライアントのメタデータ・ペインでユーザーによって手動で。
- インポート・プロセッサでジョブの設定に基づいてドキュメントを処理する際に自動的に。
- 認識プロセッサでジョブの設定に基づいて処理する際に自動的に。
- アセット・ルックアップ・プロセッサでジョブの設定に基づいて処理する際に自動的に。

メタデータ・フィールドは、様々な方法で構成できます。入力マスクや表示形式を構成したり、検証のための正規表現を指定したりできます。メタデータ値は自動的に移入したり、選択リストや依存選択リストから選択したり(バー・コードから導出したり)できます。プロシージャ・マネージャはプロシージャでこれらのメタデータ・フィールド定義を構成し、クライアント・プロファイルまたはプロセッサ・ジョブで使用します。

添付タイプ

添付とは、プライマリ・ドキュメントに関連付けられたイメージ・ファイルまたはイメージ以外のファイルのことです。プロシージャ・マネージャが、ドキュメント・プロファイルに割り当てることができる[添付タイプ](#)を定義します。これらの添付タイプを使用して、ドキュメント・プロファイルに割り当てられているドキュメントの添付を分類できます。コンテンツ・キャプチャ・クライアントのユーザーは、添付の表示、添付タイプの変更、添付の作成、およびイメージ添付の変更を行えます。

バッチ・ステータス

プロシージャ・マネージャは、ビジネス・ニーズに合わせて[バッチ・ステータス](#)を定義します。そのバッチへの割当ては、コンテンツ・キャプチャ・プロセスでユーザーによって手動で行われたり、いずれかのプロセッサによって自動的に行われます。

リリース

Oracle Content Management ではロックアンドリリース方式を使用して、ある時点では常に1つのユーザーまたはプロセッサのみがコンテンツ・キャプチャ・バッチにアクセスできるようにします。バッチを作成したり、開く(展開する)と、バッチは自動的にロックされます。他のユーザーが使用できるようにするには、バッチを[リリース](#)するか、ロック解除する必要があります。バッチの作業が完了したら、リリースするかロック解除します。バッチをリリースすると、自動的にドキュメントおよびメタデータが **Oracle Content Management** と同期され、クライアント・プロファイルに次の処理が構成されている場合はバッチが次の処理(コミット、認識または変換)に送られます。

コミット

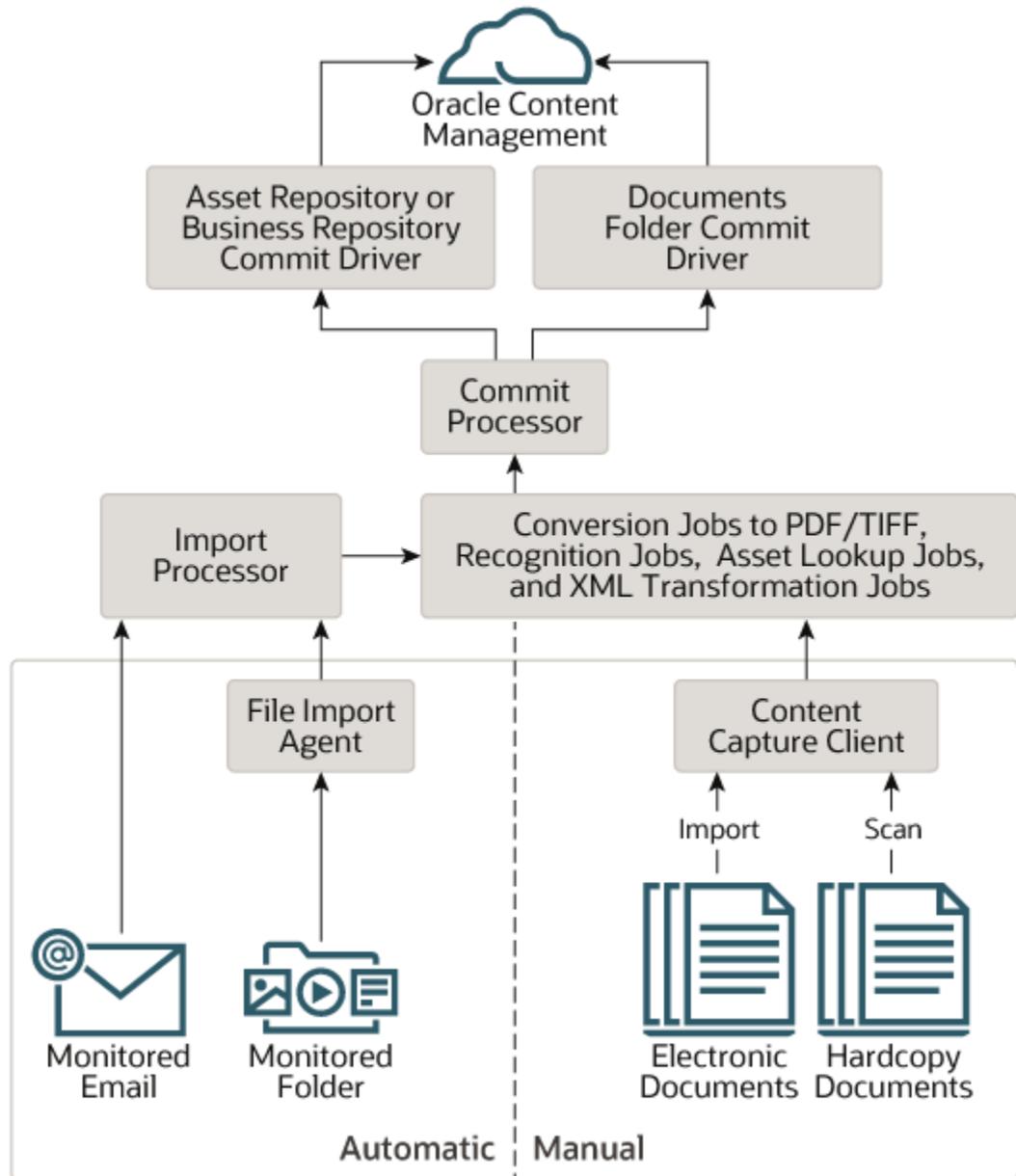
バッチがコミットされると、そのドキュメントおよびそのメタデータの全部が **Oracle Content Management** にアップロードされ、その後バッチから削除されます。これにより、**Oracle Content Management** 内でメタデータまたはコンテンツを介してドキュメントを検出およびアクセスできるようになります。ドキュメントの一部をコミットできない場合もあります。たとえば、必須のフィールドが入力されていないドキュメントはスキップされます。バッチ内のすべてのドキュメントがコミットされると、そのバッチもプロセスから削除されます。

コミット・プロセスの間、イメージ形式に変換されなかったイメージ以外のファイルは、当初の形式のまま残ります。

2

コンテンツ・キャプチャ・プロセスの理解

コンテンツのキャプチャおよび Oracle Content Management へのアップロードの基本的なプロセスを見てみましょう。



ソース

コンテンツは、様々なソースからキャプチャできます:

- コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ソフトウェアを使用してハード・コピー(印刷された)ドキュメントの**スキャン**によって手動で
- コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ソフトウェアを使用して電子ドキュメントの**インポート**によって手動で
- **モニター対象ファイル・フォルダ**から(ファイル・インポート・エージェントを介して)自動的に
- **モニター対象電子メール・サーバー・アカウント**の受信ボックスまたはフォルダから自動的に。

プロセッサ

ソースに関係なく、キャプチャされた各ドキュメントは数々のプロセッサを介した後、Oracle Content Management にアップロードされて格納されたり、さらに処理されたりします:

- **インポート・プロセッサ**では、ファイル・システム・フォルダ、区切り記号付きリストのテキスト・ファイル、または電子メール・サーバー・アカウントの受信ボックス/フォルダなどのソースから自動一括インポートできます。インポート・ジョブはソースをモニターし、指定された頻度で(1分、1時間または1日に1回)コンテンツをインポートします。
- **TIFF 変換プロセッサ**では、イメージ以外のドキュメントおよび添付を TIFF または JPEG 形式に自動的に変換します。変換時に様々な方法でドキュメントと添付をマージするよう選択できます。たとえば、変換プロセッサは、バー・コード処理用に PDF や Microsoft Office ドキュメントなどのドキュメント・ファイルを TIFF イメージに変換できます。
- **PDF 変換プロセッサ**では、ドキュメント、イメージおよび添付を PDF に変換します。
- **認識プロセッサ**では、自動的にバー・コードを認識し、ドキュメントを編成して索引を付けます。
- **コミット・プロセッサ**では、コミット・プロファイルを実行して、バッチ内のドキュメントを Oracle Content Management に自動的に出力およびアップロードしてから、バッチをプロシージャから削除します。
コミット・プロファイルには、ドキュメントとそのメタデータの出力方法が指定され、メタデータ・フィールドのマッピング、出力形式、エラー処理手順、およびコミット・ドライバ設定が含まれます。
- **アセット・ルックアップ・プロセッサ**では、クライアント・ユーザーが Oracle Content Management リポジトリでサポートされているアセットを検索できます。
- **XML 変換プロセッサ**では、クライアント・ユーザーが XML ドキュメントを XSLT ファイルに基づいた目的のスタイルに変換できます。

各プロセッサは、それらすべてが使用されるように構成されている場合、他のプロセッサと連携して動作します。バッチ・フロー内の多くのタスクは、インポート・プロセッサから始まり、構成されている形式にドキュメントを変換するために PDF または TIFF 変換プロセッサに渡されます。その後、バー・コードの認識、指定された方法でのドキュメントの編成、および索引付けのために認識プロセッサに引き継がれます。最後に、コミット・プロセッサが出力を Oracle Content Management に提供(アップロード)します。

キャプチャされたすべてのドキュメントは、コンテンツ・キャプチャ・プロセスで割り当てられたメタデータとともに、個別のコンテンツ・アイテムとして **Oracle Content Management** にアップロードおよび格納されます。これらのアイテムは他のアイテムと同様に **Oracle Content Management** でアクセスおよび管理できます。

プロシージャ

プロシージャは、最初のソーシングから最終的な **Oracle Content Management** へのアップロードまでが定義されたコンテンツ・キャプチャ・ワークフローです。各プロシージャは、特定の環境のメタデータ、処理ルール、構成プロファイルおよびバッチ・データを構成するための一元的な場所を提供する完全なコンテンツ・キャプチャ・システムです。コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ユーザーは、アクセス権が付与されたプロシージャ内でバッチを作成したり、アクセスします。

組織に複数のプロシージャを作成することで、コンテンツ・キャプチャおよび処理のあらゆるニーズ(部門別、場所別など)を効率的に管理できます。また、最適な再利用のために、複数のプロシージャ間で共通の構成要素を共有することもできます。また、プロシージャをコピーして他の環境に簡単に適応させることもできます。

バッチ

バッチには1つ以上のドキュメントが含まれており、ドキュメントどうしに関連がある(たとえば、1人の顧客に複数のドキュメントがある)場合も、関連がない(たとえば、ドキュメントがセパレータ・シートで区切られている)場合もあります。

- ドキュメントは、スキャンされたイメージや、**Microsoft Word** または **PDF** ファイルなどの電子ファイルで構成されます。
- ドキュメントには、イメージや電子ファイルなどの添付が含まれていることも、含まれていないこともあります。

バッチを操作するときは、それをロックできます。自分または別のユーザーがバッチをロックしている場合には、ロック・アイコンが表示されます。バッチをリリースすると、ロック・アイコンが削除され、クライアント・プロファイル設定に従って、別のユーザーまたはシステム・プロセッサが作業できるようにバッチが解放されます。

クライアント・プロファイル

プロシージャ・マネージャが定義したクライアント・プロファイルを使用して、バッチ内のページのグループを**スキャン**または**インポート**します。**クライアント・プロファイル**は、バッチ内のドキュメントのスキャン、インポートまたは索引付けの方法を決定する設定のグループです。クライアント・プロファイルで行われる処理は次のとおりです:

- スキャナの設定、バッチ内のドキュメントの作成方法と分割方法、メタデータ・フィールドが使用可能かどうか、バー・コードが処理されるかどうかとその方法、およびバッチをリリースした後にバッチに対して行われる処理などが制御されます。
- ドキュメントがキャプチャされるのみか、ドキュメントがキャプチャされて**索引付け**されるか、ドキュメントが索引付けされるのみかが決まります。
- イメージ以外の電子ファイル(**PDF** ドキュメントなど)が元の形式で保持されるか、イメージ形式に変換されるか、またはインポートされないかが決まります。
- 選択したドキュメントに対して入力するメタデータ・フィールド・セットが識別されます。

クライアント・プロファイルに索引付けが含まれている場合、顧客 ID や名前などのメタデータ値をドキュメントに割り当てることができます。通常、バッチ内の異なるタイプのドキュメントには、異なるメタデータ・フィールド・セットを使用できます。索引のみのバッチのドキュメントにメタデータ値を割り当てることができますが、ページを追加、挿入または置換することはできません。

バッチ内のドキュメントの作業が完了したら、バッチをリリースします。これにより、排他的使用からロックが解除されます(リリース・プロセスが定義されていない場合)。使用可能なリリース・プロセスを選択してバッチをリリースした場合、バッチで実行される次のアクションは、そのリリース・プロセスによって異なります。次に実行される処理は、クライアント・プロファイル設定によって異なります。

- バッチは、バッチ・ペインのリストから削除されて **Oracle Content Management** にコミットされたり、**PDF/TIFF** 変換やバー・コード認識などの他の処理のためにキューに入れられたりする場合があります。
- バッチはリストに残る場合もありますが、ロックは解除されます(ロック・アイコンは表示されません)。これによって、自分または別のユーザーがバッチをロックして、別の変更を追加できるようになります。

3

コンテンツ・キャプチャのメイン・コンポーネントについて学習

Oracle Content Management 向けのコンテンツをキャプチャするためには、3 つの主要なコンポーネントがあります:

- Oracle Content Management Web インタフェースの [キャプチャ・プロシージャ・ページ](#)、
- [コンテンツ・キャプチャ・クライアント](#) および
- [コンテンツ・キャプチャ・ファイル・インポート・エージェント](#)。

キャプチャ・プロシージャ・ページ

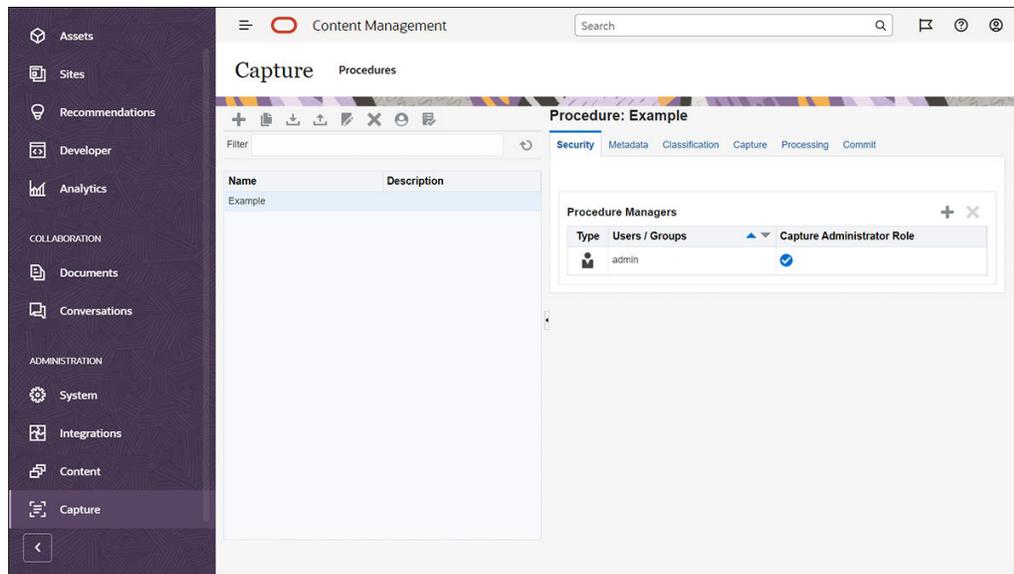
Oracle Content Management Web インタフェースのキャプチャ・プロシージャ・ページでは、[コンテンツ・プロシージャ・マネージャ](#)が[コンテンツ・キャプチャ・ワークフロー\(プロシージャ\)](#)を設定および構成します。各プロシージャは、特定の環境のメタデータ、処理ルール、構成プロファイルおよびバッチ・データを構成するための一元的な場所を提供する完全な[コンテンツ・キャプチャ・システム](#)です。[コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ユーザー](#)は、アクセス権が付与されているプロシージャ内にバッチを作成し、それにアクセスします。

組織に複数のプロシージャを作成することで、[コンテンツ・キャプチャ](#)および処理のあらゆるニーズ(部門別、場所別など)を効率的に管理できます。また、最適な再利用のために、複数のプロシージャ間で共通の構成要素を共有することもできます。さらに、プロシージャをコピーすると、別の環境に簡単に適応できます。

各プロシージャには 6 つの主要な構成領域があります:

- **セキュリティ** - これは、プロシージャにアクセスできるユーザーと、そのユーザーのロールを指定します。
- **メタデータ** - これは、[コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ユーザー](#)がバッチ内のドキュメントを索引付けおよび処理するときに使用できる [メタデータ・フィールド](#) および [ユーザー定義選択リスト](#) または [依存選択リスト](#) を構成します。
- **分類** - これは、[バッチ・ステータス](#)、[添付タイプ](#)、および [コンテンツ・キャプチャ・プロシージャ](#) で使用可能な [ドキュメント・プロファイル](#) を定義します。
- **キャプチャ** - これは、[クライアント・ユーザー](#) の [コンテンツ・キャプチャ・プロセス](#) を自動化する [クライアント・プロファイル](#) と、プロシージャ内でのドキュメントとインポートと編成の方法を定義する [インポート・プロセッサ・ジョブ](#) を定義します。
- **処理** - これは、ドキュメント内のバー・コードを処理する [認識プロセッサ・ジョブ](#) と、イメージおよびイメージ以外のドキュメントの変換方法や添付の処理方法を自動的に決定する [PDF への変換ジョブ](#) または [TIFF](#) を定義します。
- **コミット** - これは、完了したバッチ内でキャプチャおよび処理されたドキュメントが Oracle Content Management にアップロードされる方法、およびエラーが発生した場合に実行する処理を定義します。

詳細は、[プロシージャの設定](#)を参照してください



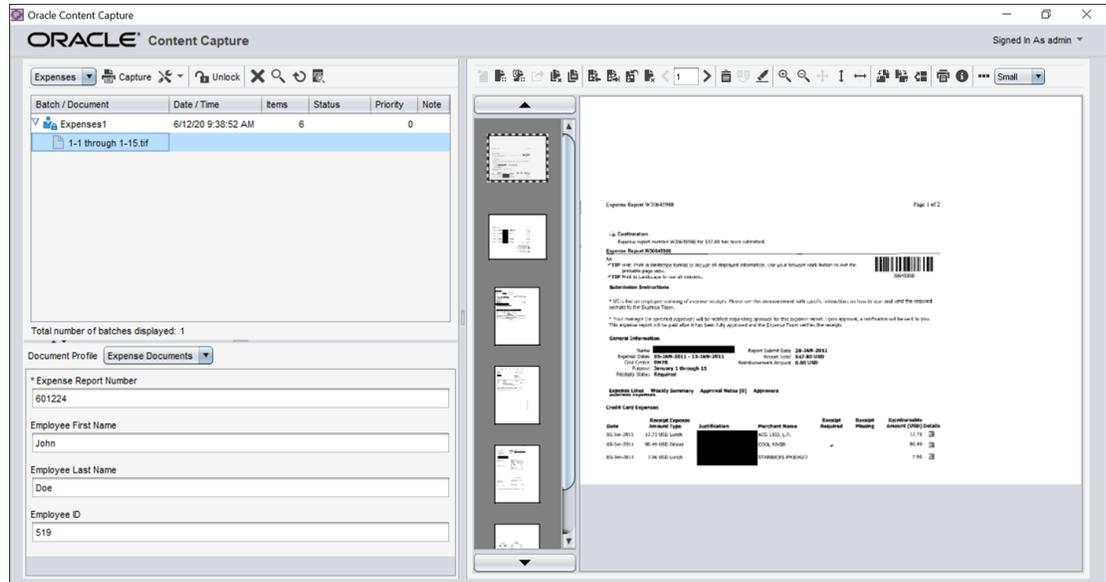
コンテンツ・キャプチャ・クライアント

コンテンツ・キャプチャ・クライアントは、次のタスクを実行するためにローカル・コンピュータにインストールするアプリケーションです:

- 業界標準の **TWAIN** インタフェースを使用してデスクトップ・スキャナや他の **TWAIN** 準拠入力デバイスからスキャンすることにより、ドキュメントの**スキャン**および**インポート**を行います
- **ドキュメントのレビューと編集**
- **ドキュメントの索引付け** (メタデータを割り当てる)
- 追加の処理ができるように、**ドキュメントをリリース**します。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントは **Oracle Content Management Web** インタフェースから**ダウンロード**できます。コンテンツ・キャプチャ・クライアントを起動して **Oracle Content Management** にログインすると、アクセス権を付与されたクライアント・プロファイルを選択できるようになります。クライアント・プロファイルは、バッチ内のドキュメントのスキャン、インポートおよび索引付けのためのすべての構

成設定を定義します。



コンテンツ・キャプチャ・クライアントには、3つの作業領域またはペインがある1つのウィンドウが用意されています:

- バッチ・ペイン** - 左上のバッチ・ペインは固定されていますが、それ以外のペインはバッチ・ペインで選択した内容に応じて変わります。**バッチの管理**はここで行います。バッチ・ペインでバッチを選択すると、右側のペインにその情報が表示され、確認や編集ができます。たとえば、バッチのステータスまたは優先度を変更したり、ノートのリマインダとして挿入したり、他のメンバーに表示できます。バッチ情報の下にロック情報が表示されます。
- ドキュメント・ペイン** - バッチ・ペインでドキュメントまたはドキュメント添付を選択すると、右側にドキュメント・ペインが表示されます。バッチ内のドキュメント、そのサムネイル・イメージ、および上部ツールバーのドキュメント・アクション・アイコンが表示されます。必要に応じて、ドキュメントを**レビュー**および**編集**できます。
- メタデータ・ペイン** - 左下のメタデータ・ペインに、**ドキュメントの索引付け**のためのメタデータ・フィールドが表示されます。メタデータ・ペインが表示されるのは、選択したクライアント・プロファイルに対して索引付けが構成されている場合のみです。

詳細は、[ドキュメントのスキャンとインポート](#)を参照してください。

コンテンツ・キャプチャ・ファイル・インポート・エージェント

一般的なシステム統合モデルでは、ローカル共有ファイル・システムを介して内部サービスからコンテンツ・キャプチャにコンテンツを渡します。しかし、コンテンツ・キャプチャ機能がクラウド環境に移行すると、Oracle Cloudのセキュリティ上の理由からファイル・システム・ベースの統合は不可能になります。コンテンツ・キャプチャ・ファイル・インポート・エージェントは、これらの単純な統合モデルを引き続き提供するように設計されています。

コンテンツ・キャプチャ・ファイル・インポート・エージェントは任意のコンピュータで実行される小さなコマンドライン・アプリケーションで、フォルダやネットワーク・ドライブなどのモニター対象のファイル・システムの場所からコンテンツをインポートするためのソースとして機能します。その場所のコンテンツをモニターしてキャプチャし、プロセス

で定義されたルールに従ってさらに処理およびルーティングするためにインポート・プロセッサにフィードします。

Oracle Content Management Web インタフェースからファイル・インポート・エージェントをダウンロードできます。詳細は、[自動ファイル・インポートの設定](#)を参照してください。

4

ロールおよびセキュリティについて学習

Oracle Content Management の多くの機能へのアクセスは、サービス管理者が各ユーザーに付与するロールおよび権限によって制御されます。コンテンツ・キャプチャ機能にアクセスするには、Oracle Content Management で次のいずれかのロールを持っている必要があります:

- **CECCaptureAdministrator** (プロシージャ・マネージャ用)
- **CECCaptureClient** (キャプチャ・クライアント・ユーザー用)

ロールおよび権限の詳細は、*Oracle Content Management の管理*のロールを参照してください。

コンテンツのキャプチャのコンテキストにおいては、基本的に 3 つのタイプのユーザーが存在します:

- **システム管理者**は、全体的な Oracle Content Management システム内にコンテンツ・キャプチャ機能を構成し、ユーザーまたはグループをコンテンツ・キャプチャ・ロールにマップし、キャプチャ処理をモニターします。
- **プロシージャ・マネージャ**は、コンテンツ・キャプチャのワークフロー([プロシージャ](#))を設計およびカスタマイズします。これは、様々なビジネス・シナリオにおいて物理ドキュメントおよび電子ドキュメントを一括処理するために使用されます。キャプチャのフローには、クライアント・プロファイルを介してアクセスできます。

プロシージャ・マネージャには、自分が作成したプロシージャに対する読取り/書込みアクセス権が自動的に与えられます。プロシージャを追加、編集、コピーおよび削除し、プロファイルおよびプロセッサ・ジョブを構成することができます。他のプロシージャにアクセスするには、そのマネージャが「セキュリティ」タブで他のユーザーにアクセス権を付与する必要があります。

- **ユーザー**は、コンテンツ・キャプチャ・クライアントを使用して Oracle Content Management にドキュメントをスキャンまたはインポートします。クライアント・プロファイルを使用してドキュメントを処理します。たとえば、ドキュメントの再編成と再分類、サポートされている形式への変換、バー・コードの認識や、自動格納先の Oracle Content Management で処理済ドキュメントを検索可能にするための索引付けを行います。ユーザーは、コンテンツ・キャプチャ・クライアントへのサインインおよびアクセスに必要な権限を持っている必要があります。自分にアクセス権が付与されているクライアント・プロファイルのみを表示および選択できます。これらのエンド・ユーザーは、プロシージャ内にバッチ関連コンテンツ(バッチ、ドキュメント、添付およびページを含む)を作成します。

ノート:

プロシージャ・マネージャには通常、プロシージャを構成してクライアントでそれをテストできるように、マネージャ・ロールとユーザー・ロールの両方が割り当てられます。

第 II 部

プロセスの設定

プロセスは、最初のソーシングから最終的な Oracle Content Management へのアップロードまでが定義されたコンテンツ・キャプチャ・ワークフローです。各プロセスは、特定の環境のメタデータ、処理ルール、構成プロファイルおよびバッチ・データを構成するための一元的な場所を提供する完全なコンテンツ・キャプチャ・システムです。

Oracle Content Management では、すべてのコンテンツ・キャプチャのニーズに合わせて任意の数のプロセスを作成できます。プロセスには、ドキュメント・プロファイル、クライアント・プロファイル、コミット・プロファイル、およびそれらに関連するすべての構成が含まれます。組織が必要とする数のクライアント・プロファイル、ドキュメント・プロファイル、およびコミット・プロファイルを含めることができます。複数のプロファイル間で構成を再利用できます。クライアント環境で、ユーザーのロールで可能であれば、ユーザーはクライアント・プロファイルと適切なドキュメント・プロファイルを選択してドキュメント・バッチを処理できます。

プロセスには、クライアント・ユーザーのビジネス・タイプに基づいたメタデータが含まれます。このデータは、顧客 ID、従業員 ID、電話番号、生年月日、またはまったく異なるアイテムのセットです。ドキュメントを PDF、TIFF、JPEG などの形式に変換するようプロセスを構成します。索引付け、フィルタおよび検索のためのバー・コード定義も作成します。

ドキュメント・プロファイルを構成する際、メタデータと添付形式のタイプをドキュメント・プロファイルに関連付けます。インポート・ジョブで、ドキュメント・プロファイルを選択して、インポートしたドキュメントに割り当てることができます。または、ドキュメント・プロファイルを動的に決定するよう認識ジョブを構成できます。バー・コード定義やドキュメント編成設定を構成する際、それらに関連するドキュメント・プロファイルに関連付ける必要もあります。

クライアント・プロファイルでは、クライアント・ユーザーがクライアント環境で実行できる処理とその方法を構成します。また、1 つ以上のドキュメント・プロファイルの関連付けも行います。つまり、ユーザーのジョブには、ドキュメントのキャプチャのみが含まれるものもあれば、ドキュメント・バッチの索引の生成を担うものもあれば、両方を行うものもあります。クライアント・プロファイルで、バッチの接頭辞、バッチの優先度、バッチをフィルタする基準(優先度、ステータス、接頭辞など)も指定します。クライアント・プロファイルの使用を制限するには、それらをユーザーに割り当て、十分な権限を持つユーザーのみがクライアント環境のクライアント・プロファイルにアクセスできるようにします。

コミット・プロファイルでは、Oracle Content Management のコミット・ドライバの設定を構成します。また、コミット操作を 1 つのドキュメント・プロファイルに制限すると、ユーザーはそのドキュメント・プロファイルで指定された基準を満たすドキュメントのみをリポジトリにチェックインできます。

ノート:

コンテンツ・キャプチャ・プロシージャ・ページの構成タブは、**キャプチャ**、**処理**、**コミット**の各ステップを進むデータの流れに対応して並べられています。ただし、プロシージャを構成する場合、最初のステップはすでに定義されている後続のステップにリンクする必要があるため、逆の順序で作業することが最も効率的です。

プロシージャの作成

- [コンテンツ・キャプチャ・プロシージャ・ページについて](#)
- [新規プロシージャの作成](#)
- [プロシージャの管理](#)

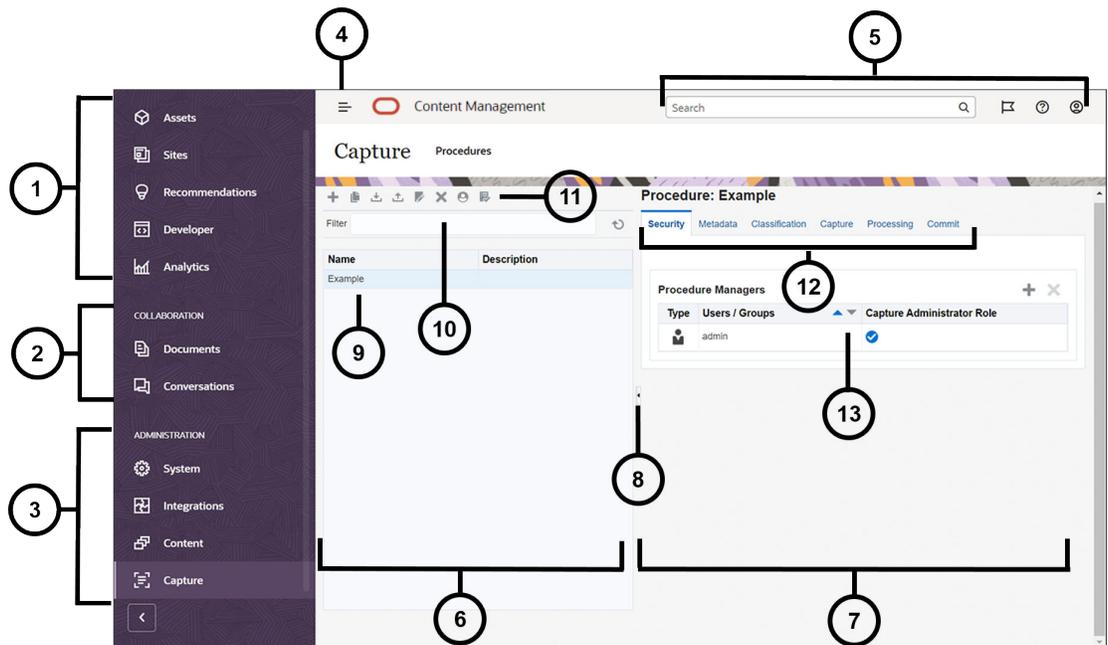
プロシージャの構成

- [プロシージャ・セキュリティの構成](#)
- [メタデータの構成](#)
- [分類の構成](#)
- [キャプチャ設定の構成](#)
- [処理設定の構成](#)
- [コミット・プロファイルの構成](#)

5

コンテンツ・キャプチャ・プロシージャ・ページについて

コンテンツ・キャプチャ・プロシージャ・ページでは、ドキュメント・メタデータおよびクライアント環境でのインポート、索引付け、バー・コードの認識、ドキュメントのグループ化などのタスクの自動化方法を決定するインフラストラクチャを構成します。このページで何ができるかを見てみましょう。



アイテム 説明

- ナビゲーション・パネル**では、Oracle Content Management の機能を切り替えることができます。このパネルに表示されるオプションは、割り当てられているユーザー・ロールによって異なります。たとえば、**アセット**のオプションは、エンタープライズ・ユーザーにのみ表示されます。「ホーム」をクリックすると、最近のアイテム、ドキュメント、ガイド・ツアーへのリンク、およびその他の役に立つリンクを含むページが表示されます。
- 「コラボレーション」セクション**では、ドキュメントおよび会話にアクセスできます。
- 管理権限がある場合、「**管理**」セクションが表示され、システム全体のオプションを設定し、Oracle Content Management を他のサービスと統合し、リポジトリ、ローカライゼーション・ポリシー、およびデジタル・アセット管理関連の他の機能を構成し、**コンテンツ・キャプチャ・プロシージャを設定**できます。
- 「表示」 / 「非表示」** アイコンをクリックして、ナビゲーション・パネルをオープンまたはクローズします。
- ユーザー領域**では、プリファレンスを変更したり、デスクトップおよびモバイル・アプリケーションを検索します。ユーザー・ピクチャをクリックして、デフォルトを変更します。会話からの通知がある場合は、フラグで通知数が示されます。

アイテム	説明
6	ページの左側は プロセスの管理 用で、ここでプロセスを作成、編集、削除、インポートおよびエクスポートします。
7	ページの右側は プロセスの構成 用で、ここで各プロセスを特定のコンテンツ・キャプチャ環境用にカスタマイズします。
8	アイコンをクリックして、ページのプロセス管理側を 表示したり、非表示 にします。
9	プロセス・リスト には、自分が作成したり、アクセス可能なすべてのプロセスが表示されます。
10	「 フィルタ 」フィールドでは、キーワードを指定してリストの プロセスをフィルタ できます。この機能は、プロセスの数が多い場合に有用です。
11	プロセス・ツールバー では、プロセスを作成、編集、コピー、エクスポートおよびインポートします。ツールバーの最後のアイコンを使用すると、スクリーン・リーダーを使用するかどうかを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="483 699 1458 774">•  : クライアント・ユーザーが Oracle Content Management に格納されるコンテンツをキャプチャして処理する方法を構成する新規プロセスを作成します。 <li data-bbox="483 787 1458 863">•  : プロセスをコピー.既存のプロセスに基づいて新規プロセスを作成する場合、このオプションを使用します。 <li data-bbox="483 875 1458 930">•  : テスト環境からプロセスのエクスポートし、本番環境にインポートします。 <li data-bbox="483 942 1458 1018">•  : プロセスをインポートします。テスト環境と本番環境の間でプロセスを移行する場合、この機能を使用します。 <li data-bbox="483 1031 1458 1106">•  : プロセスの編集.プロセスの名前、説明または構成を変更する場合、この機能を使用します。 <li data-bbox="483 1119 1458 1194">•  : プロセスを削除する場合、この機能を使用します。 <li data-bbox="483 1207 1458 1255">• プロセスの検証: プロセスの様々な要素でエラー(ある場合)を診断する場合、この機能を使用します。 <li data-bbox="483 1268 1458 1344">•  : このアクセシビリティ・アイコンをクリックして、スクリーン・リーダーを使用するかどうかを指定します。

アイテム	説明
12	<p>左側でプロセスを選択すると、いくつかの構成タブが使用可能になり、これを使用してプロセス設定を定義します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • セキュリティ・タブで、プロセスへのユーザーのアクセスを構成します。 • メタデータ・タブで、選択リストとその依存選択リストを定義します。これらの選択により、クライアント・ユーザーは、ドキュメントの処理時にメタデータ・プリファレンスを柔軟に設定できます。 • 分類タブで、クライアント・ユーザーがドキュメント・バッチに割り当てるバッチ・ステータスを定義します。また、このタブで、プライマリ・ドキュメントを補足するドキュメントのタイプを定義します。最後に、ユーザーがクライアント環境で処理するドキュメントのメタデータ・フィールドを含むドキュメント・プロファイルを定義できます。 • キャプチャ・タブでは、ユーザーがバッチで表示できる内容、バッチの処理方法、イメージ以外およびイメージ・ドキュメントの処理方法などを規定するクライアント・プロファイルを作成します。このタブでは、ドキュメントを Oracle Content Management にインポートするソースを定義するジョブも作成します。 • 処理タブでは、請求またはクイック検索を可能にするための索引付けの目的でバー・コードを認識するかどうかを指定する認識ジョブを定義します。処理時のドキュメントの編成方法も定義できます。このタブでは、TIFF および PDF への変換ジョブを定義し、イメージおよびイメージ以外のドキュメントの変換および添付の処理の自動化も行います。 • コミット・タブでは、コミット・ドライバ(ドキュメント・フォルダ、アセット・リポジトリまたはビジネス・リポジトリ)を構成し、処理済ドキュメントが Oracle Content Management リポジトリにアップロードされ、格納されるようにします。
13	<p>ここでは、タブの各機能領域のオプションを構成します。ここに表示される内容は、使用している構成タブで行った選択によって異なります。</p>

6

新規プロシージャの作成

プロシージャは、特定の環境に対するメタデータ、構成プロファイルおよび物理データが含まれる完全なコンテンツ・キャプチャ環境です。プロシージャ・マネージャは、クライアント・ユーザーの様々なニーズに対応する複数のプロシージャを作成および保守できます。プロシージャ内に、クライアント・ユーザーがそれぞれ固有の処理を必要とする様々なドキュメント・セットをキャプチャして一括で処理できるように設定を構成します。ユーザーは、これらのドキュメントに適用される様々なビジネス標準に従って各種のビジネス・ドキュメントを処理する必要があります。たとえば、経費精算書を医療費請求書とは異なる方法で処理する必要がある場合があります。クライアント・ユーザーと協力して、ドキュメントをどのように編成するか、ドキュメント・セットに空白ページを含めるかどうか、添付を含めるかどうか、ビジネス処理のためにバー・コードを読み取るかどうか、ドキュメントに索引付けするかどうか、ドキュメントの各バッチをどのようにコミットするかなどを指定します。

ノート:

Oracle Content Management Starter Edition を使用している場合、コンテンツ・キャプチャで作成できるプロシージャは 1 つのみです。複数のプロシージャを作成する場合は、Oracle Content Management Premium Edition にアップグレードする必要があります。詳細は、Starter Edition と Premium Edition を参照してください。

「プロシージャ」ページを使用する最初のプロシージャ・マネージャには、空のリストが表示されます。プロシージャを追加するには:

1. コンテンツ・キャプチャの「プロシージャ」ページで、左側の「プロシージャ」ペイン内の  をクリックします。
2. 「新規プロシージャの作成」ダイアログで、プロシージャの名前を入力し、「OK」をクリックします。

プロシージャ構成のタブが右側に表示されます。「セキュリティ」タブの「プロシージャ・マネージャ」表に、システム管理者がインストールおよび初期構成中に構成したユーザー名が表示されます。プロシージャに対してプロシージャ・マネージャのアクセス権を持っているため、他のマネージャにそのプロシージャへのアクセス権を付与できます。

プロシージャを構成するときは、これらのタブを使用します。プロシージャが開いていない場合、左側のナビゲーション・ペインでそれをクリックすると、右側にその構成ページが開きます。

「プロシージャ」タブ	タスク
セキュリティ	このページで、他のユーザーにプロシージャのアクセス権を付与できます。 プロシージャ・セキュリティの構成 を参照してください。

「プロシージャ」タブ	タスク
メタデータ	このページでは、次のタスクを実行できます： <ul style="list-style-type: none">メタデータ・フィールドの構成ユーザー定義の選択リストの構成依存選択リストの構成
分類	このページでは、次のタスクを実行できます： <ul style="list-style-type: none">バッチ・ステータスの追加、編集または削除添付タイプの追加、編集または削除ドキュメント・プロファイルの構成
キャプチャ	このページでは、次のタスクを実行できます： <ul style="list-style-type: none">クライアント・プロファイルの構成インポート・プロセッサ・ジョブの構成
処理	このページでは、次のタスクを実行できます： <ul style="list-style-type: none">PDF への変換ジョブの構成TIFF への変換ジョブの構成認識プロセッサ・ジョブの構成
コミット	このページでは、コミット・プロファイルを構成できます。

7

プロシージャの管理

「プロシージャ」ページで、プロシージャを作成し、要件が変わった場合にはそれを編集できます。複数のプロシージャを管理する場合は、このページのフィルタ機能を使用すると、コンテキストで簡単に見つけることができます。既存のプロシージャを基にして新規のプロシージャを作成する場合は、コピー機能を使用します。また、エクスポート機能とインポート機能を使用して、プロシージャを別の場所に移動することもできます。

すでにいくつかのプロシージャを作成した場合に実行できる操作は次のとおりです:

- [プロシージャのフィルタ処理](#)
- [プロシージャの編集](#)
- [プロシージャの削除](#)
- [プロシージャのコピー](#)
- [プロシージャの検証](#)
- [プロシージャのエクスポートまたはインポート](#)

プロシージャのフィルタ処理

多数のプロシージャを管理する場合は、フィルタ処理してプロシージャ・リストを制限すると便利ことがあります。フィルタ処理を行うと、必要なときにプロシージャをすばやく簡単に見つけることができます。

プロシージャをフィルタ処理するには:

1. キャプチャ・プロシージャ・ページで、左側のプロシージャ・ペインに移動します。
2. 「**フィルタ**」フィールドに、プロシージャの名前全部を入力するか、ワイルドカードとして%を使用して1つ以上の文字を一致させます。たとえば、**%capture%**と入力すると、名前または説明に **capture** が含まれるプロシージャが表示されます。フィルタでは大文字と小文字が区別されます。

指定したフィルタと一致するプロシージャが、「**フィルタ**」フィールドの下の表に表示されます。

プロシージャの編集

プロシージャを作成した後は、いつでもプロシージャの名前と説明を編集できます。

プロシージャを編集するには:

1. キャプチャ・プロシージャ・ページで、左側のプロシージャ・ペインに移動します。
2. 編集するプロシージャを選択し、 をクリックします。
3. 「**プロシージャの名前および説明の編集**」ダイアログで、プロシージャ名およびプロシージャの説明を変更します。

変更がプロシージャ表に反映されます。
プロシージャが開いたときに右側に表示されるタブで、構成設定を編集できます。

プロシージャの削除

プロシージャを削除すると、そのバッチ・データおよび構成の全部(メタデータ、プロファイルおよびプロセッサ・ジョブを含む)が削除されます。バッチの処理中にプロシージャを削除すると、これらのバッチも削除されます。

プロシージャを削除するには:

1. キャプチャ・プロシージャ・ページで、左側のプロシージャ・ペインに移動します。
2. 削除するプロシージャを選択し、 をクリックします。プロンプトが表示されたら、プロシージャを削除することを確認します。

プロシージャのコピー

あるプロシージャを新規のプロシージャの開始点として使用し、必要に応じて構成を変更する場合、プロシージャをコピーできます。これにより、類似のプロシージャをすばやく設定できます。

プロシージャをコピーするには:

1. キャプチャ・プロシージャ・ページで、左側のプロシージャ・ペインに移動します。
2. コピーするプロシージャを選択し、 をクリックします。
3. 「プロシージャのコピー」ダイアログで、プロシージャの名前と説明を変更します。このプロシージャが左側のプロシージャのリストに表示されます。

プロシージャの検証

プロシージャのツールバーでプロシージャの検証アイコンによって検証を実行すると、プロシージャのエラー(ある場合)を診断できます。

複数のプロシージャは、左側のプロシージャ・ペインで同時に選択することで検証できます。プロシージャを検証するには:

1. 「プロシージャ」ページで、左側のプロシージャ・ペインに移動します。
2. 検証するプロシージャを選択し、ツールバーの アイコンをクリックします。プロシージャの様々な要素に関して検証を実行できます。

「プロシージャの検証の問題」ダイアログの「メッセージ」列に検証の問題が表示されます。検証の例として、適切なリポジトリ・タイプがコミット・プロファイルで選択されているかどうかや、リポジトリおよびプロシージャで構成されているように、コンテンツ・タイプやマッピングが欠落している、アセット・タイプの名前間に文字の不一致があるなどのエラーがインポートされたプロシージャにあるかどうかなどがあります。メッセージが長い場合があるため、完全なメッセージは、メッセージを選択すると、ダイアログの「検証メッセージ」にある表の下に表示されます。

3. 問題を確認した後に、ダイアログを閉じます。

 **ノート:**

パスワードが変更されたばかりの場合(過去 1、2 分)、電子メール検証で有効な電子メールが報告される場合があります。

プロシージャのエクスポートまたはインポート

開発、テスト、本番などの異なる環境間で、プロシージャをエクスポートおよびインポートできます。プロシージャをインポートするときは、その識別子が一意であることを確認してください。

プロシージャをエクスポートおよびインポートするには:

1. キャプチャ・プロシージャ・ページで、左側のプロシージャ・ペインに移動します。
2. エクスポートするプロシージャを選択し、ツールバーの  をクリックします。
プロシージャの XML 構成ファイルがローカル・コンピュータにダウンロードされます。必要な場合、ファイル内のプロシージャ名を変更できます。
3. 他のシステムで、キャプチャ・プロシージャ・ページを開き、ツールバーの  をクリックします。
4. 「**プロシージャのインポート**」ダイアログで、「**ファイルの選択**」をクリックし、インポートするプロシージャの XML ファイルを選択します。
5. 「**名前**」フィールドにわかりやすい名前を入力し、「**説明**」フィールドに説明を入力して、「**処理**」をクリックします。
インポートが完了したというメッセージが表示されます。
6. 「**閉じる**」をクリックします。
プロシージャが、左側のプロシージャ・リストに含まれます。

8

プロシージャ・セキュリティの構成

「セキュリティ」タブで、別のマネージャにプロシージャのアクセス権を付与できます。

プロシージャのセキュリティを構成するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、構成するプロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「セキュリティ」タブをクリックします。
「プロシージャ・マネージャ」表には、自分自身を含め、プロシージャにアクセスできるマネージャがリストされています。「ユーザー/グループ」列をソートするには、列内のいずれかの三角形をクリックします。
チェック・マークは、プロシージャ・マネージャのアクセス・レベルを示します。
3.  をクリックして、「セキュリティ・メンバーの追加」ダイアログを表示します。

「プロシージャ・マネージャ」表で、マネージャを選択して表の  をクリックし、マネージャのアクセス権を削除できます。

4. 下の左側のフィールドで、「グループの検索」または「ユーザーの検索」を選択して、選択したロールに属するメンバーを検索します。
5. オプションで、隣のテキスト・フィールドに名前の一部または全体を入力し、特定のグループまたはユーザー名を検索します。ワイルドカードとして*文字を使用できます。このテキスト・フィールドを空白にするとすべてのメンバーが返されます。「検索」をクリックします。
6. 検索結果から、1つ以上のメンバーを選択([Ctrl]キーを押しながら複数のメンバーを選択)し、「追加」をクリックします。
追加した各メンバーが表に含まれます。

9

メタデータの構成

プロシージャで作成したメタデータ・フィールドは、関連付けたドキュメント・プロファイルを介してコンテンツ・キャプチャ・クライアント環境で使用可能になります。必要な権限を持つクライアント・ユーザーは、キャプチャ・タスクに関連するドキュメント・プロファイルを選択します。また、メタデータと選択リストを使用して、特定のメタデータ・フィールド値を標準化し、データ入力エラーを防ぎます。「メタデータ」タブで、アセット同期およびアセット・ルックアップを構成することもできます。「キャプチャ」タブでクライアント・プロファイルのルックアップを有効にすると、このプロファイルを使用するクライアント・ユーザーは、アセット・ルックアップを活用して、ビジネスに関連するコンテンツを検索できます。

プロシージャでメタデータを構成する場合の処理は次のとおりです:

- [メタデータ・フィールドの構成](#)
- [ユーザー定義の選択リストの構成](#)
- [アセット・タイプ選択リストの構成](#)
- [依存選択リストの構成](#)
- [アセット同期の構成](#)
- [アセット・ルックアップの構成](#)

メタデータ・フィールドの構成

プロシージャのメタデータ・フィールドを定義して、ドキュメントの索引付けおよびバッチの処理時にコンテンツ・キャプチャ・クライアントで使用できるようにします。メタデータ・フィールドは、様々な方法で構成できます。メタデータ・フィールドは必須にすることができます。つまり、ドキュメントを正常にコミットするには、メタデータ・フィールドに入力する必要があります。メタデータ値は、認識プロセッサで読み取ったバー・コードから導出したり、選択リストから選択して自動的に移入することもできます。

メタデータ・フィールドを構成する際のタスクは次のとおりです:

- [メタデータ・フィールドの追加または編集](#)
- [メタデータ・フィールドの削除](#)
- [メタデータ・フィールドの入力マスクの構成](#)
- [メタデータ・フィールドの表示形式の構成](#)
- [メタデータ・フィールドの自動入力の設定](#)
- [正規表現の検証の構成](#)
- [アセット・タイプ選択リストの作成を有効にするためのメタデータ・フィールドの構成](#)

メタデータ・フィールドの追加または編集

メタデータ・フィールドを追加または編集するには:

1. Oracle Content Management Web インタフェースにログインし、左側のナビゲーション・メニューで「**キャプチャ**」(「**管理**」の下)をクリックします。このオプションが表示されない場合、必要なアクセス権限がありません。
2. 左側のプロシージャ・ペインで、構成するプロシージャを選択します。選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
3. プロシージャの「**メタデータ**」タブを開きます。
4. 「**メタデータ・フィールド**」表で  をクリックしてフィールドを追加します。フィールドを編集するには、表でフィールドを選択し、  をクリックします。
5. 「**フィールド名**」フィールドに、メタデータ・フィールドの名前を入力します。
6. 「**データ型**」フィールドで、フィールドのタイプを選択します。「**英数字**」、「**コンテンツ・アイテム参照**」、「**デジタル・アセット参照**」、「**数字**」、「**日付**」または「**浮動小数**」を選択できます。
7. フィールドを必須にするには、「**必須**」チェックボックスを選択します。ドキュメントの必須フィールドには、コミット・プロセッサによってコミットされる値が含まれている必要があります。
8. 必要に応じて他のフィールドに入力します。
 - [入力マスクを構成](#)
 - [表示形式を構成](#)
 - [自動移入を構成](#)
 - [正規表現の検証を構成およびテスト](#)
9. 選択リスト・フィールドで、メタデータ・フィールド用に以前に作成されたソースと選択リストを特定します。[ユーザー定義の選択リストの追加または編集を参照](#)してください。
10. 終了したら、「**発行**」をクリックします。

メタデータ・フィールドの追加後、プロシージャ全体で使用できます。メタデータ・フィールドを編集すると、どこで使用されていても変更されます。

メタデータ・フィールドの削除

メタデータ・フィールドを削除すると、このフィールドが使用されているプロシージャから完全に削除されます。クライアント・プロファイルまたはバッチ・プロセッサで使用されているメタデータ・フィールドを削除すると、バッチ処理の様々なステージでエラーが発生する可能性があります。メタデータ・フィールドを削除する前に、それがコミット・プロファイル内のメタデータ・フィールドにマップされていないことを確認してください。

選択したプロシージャからメタデータ・フィールドを削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. プロシージャの「**メタデータ**」タブを開きます。

- メタデータ・フィールドを削除するには、「メタデータ・フィールド」表からそれを選択し、 をクリックします。
- 「はい」をクリックして、このメタデータ・フィールドを削除することを確認します。メタデータ・フィールドがプロシージャから削除されます。

メタデータ・フィールドの入力マスクの構成

入力マスクとは、ユーザーがメタデータ・フィールドに入力できる内容を制御するフィルタのことです。たとえば、数字は入力できるが英字は入力できないようなマスクを構成できます。アプリケーションは、マスクに準拠しない文字を受け入れません。

入力マスクを構成するには:

- メタデータ・フィールドを追加または編集します。
入力マスクを適用するには、メタデータ・フィールドのデータ型が「英数字」、「数字」または「浮動小数」である必要があります。
- 「メタデータ・フィールド」ページの「入力マスク」フィールドに、ステップの後に、表に示された使用可能なマスク文字のいずれかを入力します。これ以外の文字を含めると、すべてリテラル値として処理されます。
- 「送信」をクリックします。
メタデータ・フィールドの設定が保存され、使用できるようになります。これで、クライアントを介して入力マスクをテストできるようになります。

表 9-1 英数字の入力マスク文字

マスク文字	説明
#	数字を入力する必要があります。
'(一重引用符)	特殊な書式設定文字をスキップするためのエスケープ文字。
U	任意の文字を受け入れて大文字に変換します。
L	任意の文字を受け入れて小文字に変換します。
A	任意の文字または数字を受け入れます。
?	任意の文字を受け入れます。
*	任意の文字を受け入れます。
H	任意の 16 進文字(0-9、a-f または A-F)を受け入れます。

表 9-2 英数字の入力マスクの例

入力マスク	説明	書式の例
###-##-####	社会保障番号	123-45-6789
UU	州	AZ

表 9-3 数字および浮動小数の入カマスク文字

マスク文字	説明
0	数字を入力する必要があります。
#	数字を入力する必要があります。ゼロを値として入力した場合、なしとみなされます。たとえば、12.0 は 12 とみなされます。ただし、12.5 と入力した場合、12.5 とみなされます。
.	小数点または通貨の小数点として含めます。
-	マイナス記号を含めます。
,	グループ化セパレータとして含めます。
;	プラスおよびマイナスのサブパターンを区切るために含めます。

 ノート:

DecimalFormat パターンは、プラスおよびマイナスのサブパターン ("#,##0.00;(#,##0.00)" など) を含みます。各サブパターンには、接頭辞、数値部および接尾辞が含まれます。マイナスのサブパターンはオプションです。ない場合は、プラスのサブパターンにローカライズされたマイナス記号 (ほとんどのロケールでは '-') を付けたものが、マイナスのサブパターンとして使用されます。つまり、"0.00" 単独では、"0.00;-0.00" と同じです。明示的なマイナスのサブパターンがある場合、その役割はマイナスの接頭辞と接尾辞を指定することのみです。桁数、最小桁数、その他の特性はすべてプラスのパターンと同じです。つまり、"#,##0.0#;(#)" は、"#,##0.0#;(#,##0.0#)" とまったく同じ動作を生成します。

ユーザーが 10 進値を入力できるようにするには、少なくとも 1 つの小数 (#.0#) を強制する書式を作成する必要があります。クライアントで、数字の記号を変更するには、まず数字を入力してから [+] または [-] キーを押します。

表 9-4 数字および浮動小数の入カマスクの例

入カマスク	説明	書式の例
#,###.0##	小数值	1,234.567
#,##0.00	通貨	2,500.00

メタデータ・フィールドの表示形式の構成

プロシージャで表示形式を定義すると、クライアントで指定した内容に関係なく、クライアントを使用して入力されたデータがこの形式で表示されます。

メタデータ値の表示を変更する表示形式を設定するには:

1. **メタデータ・フィールドを追加または編集します。**

表示形式を適用するには、メタデータ・フィールドのデータ型が**数字**、**日付**または**浮動小数**である必要があります。

2. 「メタデータ・フィールド」ページの「表示形式」フィールドの隣にある「表示形式の選択」をクリックし、表にリストされているデータ型に対して使用可能な形式から選択し、「送信」をクリックします。

入力形式	データ型	説明
通貨	浮動小数点	システム・ロケール通貨を使用して書式設定された数値。
一般的な日付	日付	標準の日付とそれに続く標準の時間。日付の表示は、システムのロケール設定によって決まります。
短い日付	日付	システムの短い日付書式を使用した日付。日付の表示は、システムのロケール設定によって決まります。
標準の日付	日付	システムの標準の日付書式を使用した日付。日付の表示は、システムのロケール設定によって決まります。
長い日付	日付	システムの長い日付書式を使用した日付。日付の表示は、システムのロケール設定によって決まります。
短い時間	日付	24 時間書式(17:45 など)を使用した時間。
標準の時間	日付	時間と分および AM/PM 表示付きの 12 時間書式の時間。
長い時間	日付	時間、分、秒を含むシステムの長い時間書式を使用した時間。
一般的な数値	数字、浮動小数	桁区切り記号がない数字(7500 など)。
固定数値	数字、浮動小数	小数点区切り文字の左側に少なくとも 1 桁、右側に 2 桁がある数値(7500.16 など)。
標準の数値	数字、浮動小数	小数点区切り文字の左側に少なくとも 1 桁、右側に 2 桁がある桁区切り記号付きの数値(7,500.16 など)。
日付書式	日付	次の日付書式のいずれかを選択します。 yyyy-MM-dd yyyy-MM-dd HH:mm yyyy-MM-dd HH:mm:ss MM-dd-yyyy MM-dd-yyyy HH:mm MM-dd-yyyy HH:mm:ss dd-MM-yyyy dd-MM-yyyy HH:mm dd-MM-yyyy HH:mm:ss MM/dd/yyyy MM/dd/yyyy HH:mm MM/dd/yyyy HH:mm:ss yyyy/MM/dd yyyy/MM/dd HH:mm yyyy/MM/dd HH:mm:ss dd/MM/yyyy dd/MM/yyyy HH:mm dd/MM/yyyy HH:mm:ss

これで、メタデータ・フィールドの設定が保存されます。クライアントでメタデータ・フィールドの表示形式を使用してテストできます。

メタデータ・フィールドの自動入力の設定

特定の値が自動入力されるようにメタデータ・フィールドを設定できます。たとえば、日付フィールドにバッチのスキャン日付を自動入力すると、ユーザーが日付を入力する必要はあ

りません。また、ユーザーが変更できるフィールドにデフォルト値を指定することもできます。

自動入力されるようにメタデータ・フィールドを構成するには:

1. **メタデータ・フィールドを追加または編集します。**
2. 「メタデータ・フィールド」ページの「**自動入力タイプ**」フィールドで、メタデータ・フィールドのタイプを選択します。使用可能な自動入力タイプは、この表に示されたメタデータ・フィールドの選択によって決まります:

自動入力タイプ	データ型	説明
バッチ名	英数字	割り当てられたバッチ名がメタデータ・フィールドに入力されます。
バッチ優先度	英数字、数字、浮動小数	バッチに割り当てられた優先度がメタデータ・フィールドに入力されます。
バッチ・ステータス	英数字	バッチのステータス(ある場合)がメタデータ・フィールドに入力されます。
コンピュータ名	英数字	ドキュメントの作成時に使用したコンピュータ名がメタデータ・フィールドに入力されます。
現在の日付	日付	現在の日付がメタデータ・フィールドに入力されます。
デフォルト値	英数字、数字、日付、浮動小数	「デフォルト値」 フィールドに指定した値がメタデータ・フィールドに入力されます。
ドキュメント・プロファイル	英数字	選択したドキュメントに割り当てられたドキュメント・プロファイル名がメタデータ・フィールドに入力されます。
プロファイル名	英数字	バッチのキャプチャに使用されるクライアント・プロファイルがメタデータ・フィールドに入力されます。
スキャン日付	日付	ドキュメントがキャプチャされた日付がメタデータ・フィールドに入力されます。
ユーザー ID	英数字	ドキュメントの作成時にバッチがロックされたユーザーの ID がメタデータ・フィールドに入力されます。

3. 自動入力タイプとして「**デフォルト値**」を選択した場合は、「**デフォルト値**」フィールドに値を入力して、「**送信**」をクリックします。

これで、メタデータ・フィールドの設定が保存されます。クライアントで自動入力設定を使用し、テストします。

正規表現の検証の構成

メタデータ・フィールドの正規表現は、英数字タイプのフィールドにのみ適用されます。詳細は、次のような正規表現の使用と書式設定に関するドキュメントを参照してください:

<http://docs.oracle.com/javase/tutorial/essential/regex/>

正規表現を構成およびテストするには:

1. **メタデータ・フィールドを追加または編集します。**
2. 「メタデータ・フィールド」ページの「**正規表現の検証**」フィールドに、表現を入力します。
3. 正規表現をテストするには、「**サンプル値**」フィールドにサンプル値を入力し、「**検証**」をクリックします。

「結果」読み取り専用フィールドの横に、「有効」または「無効」の結果が表示されます。

4. 「送信」をクリックします。

これで、メタデータ・フィールドの設定が保存されます。クライアントで、メタデータ・フィールドの正規表現を使用およびテストできます。

アセット・タイプ選択リストの作成を有効にするためのメタデータ・フィールドの構成

アセット・タイプ選択リスト用にメタデータ・フィールドを構成するには:

1. [メタデータ・フィールドを追加または編集します。](#)
2. 「メタデータ・フィールド」ページで、「データ型」ドロップダウン・リストから「英数字」、「コンテンツ・アイテム参照」、「デジタル・アセット参照」、「日付」、「浮動小数」または「数字」を選択します。

データ型	選択リスト・ソース	親選択リスト・フィールド	選択リスト
英数字	アセット・タイプ	無効	英数字、数字、日付および浮動小数型のアセット・タイプ選択リスト
コンテンツ・アイテム参照	デフォルトで選択されるアセット・タイプ。変更できません。	無効	英数字、数字、日付および浮動小数型のコンテンツ・アイテム選択リスト
デジタル・アセット参照	デフォルトで選択されるアセット・タイプ。変更できません。	無効	すべてのデータ型(英数字、数字、日付および浮動小数)のアセット・タイプ選択リスト
日付	アセット・タイプ	無効	日付型のアセット・タイプ選択リスト
浮動小数点	アセット・タイプ	無効	浮動小数型のアセット・タイプ選択リスト
数字	アセット・タイプ	無効	数字型のアセット・タイプ選択リスト

3. 「送信」をクリックします。

メタデータ定義の準備ができました。これで、このメタデータ定義に基づいてアセット・タイプ選択リストを作成できます。

ユーザー定義の選択リストの構成

選択リストを使用すると、特定のメタデータ・フィールド値を標準化し、索引付けのスピードを向上してデータ入力エラーを防止できます。「メタデータ」タブで選択リストを作成し、メタデータ・フィールドまたはプロセッサ・ジョブでそれを選択します。このため、複数の領域で同じ選択リストを使用できます。

ユーザー定義の選択リストを使用して、コンテンツ・キャプチャ・データベースで値を入力および保守できます。選択リスト値をテキスト・ファイルからコンテンツ・キャプチャ・データベースにインポートすることも、選択リスト値をテキスト・ファイルにエクスポートすることもできます。

ユーザー定義の選択リストを構成するときの主要なタスクは次のとおりです:

- [ユーザー定義の選択リストの追加または編集](#)
- [テキスト・ファイルからコンテンツ・キャプチャ選択リストへの値のインポート](#)
- [テキスト・ファイルへのコンテンツ・キャプチャ選択リスト値のエクスポート](#)
- [ユーザー定義選択リストまたはアイテムの削除](#)
- [ユーザー定義の選択リストの使用方法](#)

ユーザー定義の選択リストの追加または編集

プロシージャで構成したユーザー定義の選択リストは Oracle Content Management に格納されます。

たとえば、選択リストを作成して、ユーザーが顧客対応タイプ(**Complaint**、**Satisfaction**、**Suggestion** または **Other**)を選択できるようにすることができます。

1. プロシージャの「**メタデータ**」タブの「**ユーザー定義の選択リスト**」下の表で「**Content Capture**」を選択し、 をクリックします。
2. 「**選択リスト・タイプ**」ページで  をクリックして選択リストを追加するか、選択リストを選択して  をクリックし、編集します。
3. 「**キャプチャ選択リスト**」ページで、「**選択リスト名**」フィールドに名前 (**Correspondence Type** など)を入力し、「**データ型**」フィールドでタイプ (**英数字**、**数字**、**日付** または **浮動小数**)を選択します。

ノート:

メタデータ・フィールドに選択リストの値を表示するには、選択リストにメタデータ・フィールドと同じデータ型がある必要があります。

4. 選択リスト・アイテムを追加するには、「**選択リスト・アイテム**」表で  をクリックします。
5. 「**選択リスト・アイテムのプロパティ**」ページで、「**アイテム値**」フィールドに選択リスト値を入力します。

ある値をユーザーに表示し、別の値をコミットするには、アイテムの「**表示値**」フィールドに別の値を入力します。同じ値をユーザーに表示するには、「**表示値**」フィールドに値を入力せずに「**OK**」をクリックします。選択項目をさらに追加するには、ステップ 4 と 5 を繰り返します。

6. 上下の矢印ボタンまたは昇順または降順の矢印ボタンを使用して、選択リスト・アイテムを選択リストに表示する順序で並べ替え、「**送信**」をクリックします。

新しい選択リストが「**定義された選択リスト**」表に表示されます。選択リストを使用する場合、[ユーザー定義の選択リストの使用方法](#)を参照してください。

メタデータ・フィールドに選択リストを使用する場合、まず [メタデータ・フィールドを追加または編集](#) します。次に:

- a. 「メタデータ・フィールド」ページの「**選択リスト・ソース**」フィールドで「**キャプチャ・ソース**」を選択します。
- b. 「**選択リスト**」フィールドで、作成した選択リストを選択します。

テキスト・ファイルからコンテンツ・キャプチャ選択リストへの値のインポート

UTF-8 テキスト・ファイルからユーザー定義の選択リストに値をインポートできます。UTF-8 テキスト・ファイル内の各選択リスト・アイテム・レコードは、CR (改行)/LF (行送り)で区切られています。テキスト・ファイル内の各レコード行は、選択リスト・アイテムとしてインポートされます。「アイテム値」と「表示値」に異なる値をインポートする場合は、インポートしたレコード行内で値を区切るために TAB 文字を使用することを覚えておいてください。

テキスト・ファイルから選択リストに値をインポートするには:

1. ユーザー定義の選択リストを追加または編集します。
 - a. プロシージャの「**メタデータ**」タブで、「**ユーザー定義の選択リスト**」表から「**Content Capture**」を選択し、 をクリックします。
 - b. 「**定義された選択リスト**」表で、 または  をクリックして、選択リストを追加または編集します。
2. 「**選択リスト・アイテム**」表で、 をクリックします。
3. 「**選択リスト・アイテムのインポート**」ページで、インポートするファイルを見つけて「**開く**」をクリックします。
4. 「**重複のチェック**」フィールドを選択し、重複する値をチェックしてそれを排除し、「**処理**」をクリックします。このオプションを選択すると、大きな選択リストをインポートする場合に時間がかかることに注意してください。

選択リスト・アイテムがインポートされ、発生したエラーとともに「インポート・ステータス」領域に表示されます。選択リスト間の依存関係を定義したり、プロファイルやバッチ・プロセッサ・ジョブでそれを使用したりすることもできます。[ユーザー定義の選択リストの使用法](#)を参照してください。

テキスト・ファイルへのコンテンツ・キャプチャ選択リスト値のエクスポート

ユーザー定義の選択リストをテキスト・ファイルにエクスポートできます。選択した値がデリミタ付きテキスト・ファイルに書き込まれます。

選択リスト値をテキスト・ファイルにエクスポートするには:

1. ユーザー定義の選択リストを編集します。
 - a. プロシージャの「**メタデータ**」タブで、「**ユーザー定義の選択リスト**」表から「**Content Capture**」を選択し、 をクリックします。

- b. 「定義された選択リスト」表で、選択リストを選択し、 をクリックします。
2. コンテンツ・キャプチャ選択リスト・ページで、 をクリックします。export.txt ファイルを開くか保存するかを尋ねられます。保存オプションを選択します。テキスト・ファイルが、指定した場所書き込まれます。

ユーザー定義選択リストまたはアイテムの削除

選択リストを削除すると、選択リストが使用されているクライアント・プロファイルまたはプロセッサで選択リストを使用できなくなります。

ユーザー定義の選択リストまたはアイテムを削除するには:

1. 選択リストを削除するには、「定義された選択リスト」表で選択し、 をクリックしてアクションを確認します。
2. 選択リスト・アイテムを削除するには、「定義された選択リスト」表で選択リストを選択し、 をクリックします。
3. 「選択リスト・アイテム」表でアイテムを選択し、 をクリックして確認し、「送信」をクリックします。

ユーザー定義の選択リストの使用方法

1つ以上のユーザー定義選択リストを作成した後は、次のことができます:

- [依存選択リストの構成](#)の説明に従って、両者間の依存性を定義します。
- この表にリストされたキャプチャ・プロファイルまたはバッチ・プロセッサ・ジョブで、それらを使用します:

コンテンツ・キャプチャ・コンポーネント	選択リスト・タイプ	使用方法
クライアント・プロファイル	選択リスト 依存選択リスト	メタデータ・フィールドで選択リストを使用します。 メタデータ・フィールドの追加または編集 を参照してください。 依存選択リストを作成します。親フィールドで選択した内容によって、子の選択リスト・フィールドに表示される値が決まります。依存性を作成し、クライアント・プロファイルでそれを選択します(依存選択リストの追加または編集 を参照)。
認識プロセッサ	選択リスト	選択リスト値と一致したバー・コード値をメタデータ・フィールドに割り当てます。 バー・コード定義の追加または編集 を参照してください。

アセット・タイプ選択リストの構成

「メタデータ」タブでアセット・タイプ選択リストを作成します。アセット・タイプの選択リストでできることは次のとおりです:

- [アセット・タイプ選択リストの追加または編集](#)

- アセット・タイプ選択リストの削除

アセット・タイプ選択リストの追加または編集

アセット・タイプ選択リストを作成する場合、自分がアクセスできるアセット・タイプおよびリポジトリを選択できます。選択するアセット・タイプは、コンテンツ・キャプチャでサポートされている必要があります。アセット・タイプ選択リストは、依存選択リストの構成の一部ではありません。

1. プロシージャの「**メタデータ**」タブで、**アセット・タイプ選択リスト**表に移動し、アセット・タイプ選択リストを追加する場合は  をクリックし、アセット・タイプ選択リストを編集する場合はそれを選択して  をクリックします。
2. **アセット選択リスト**・ページで、「**選択リスト名**」フィールドに名前(Digital Asset Type など)を入力します。
3. 「**リポジトリ**」ドロップダウン・リストから、選択リストの構成に使用するコンテンツ・アイテムが含まれるリポジトリを選択します。
4. 「**アセット・タイプ**」ドロップダウン・リストから、Oracle Content Management で作成されたアセット・タイプを選択します。
5. 「**アイテム値**」ドロップダウン・リストから、データ値に格納されているアセット・タイプを選択します。これは、コンテンツ・キャプチャでサポートされているフィールド・タイプの1つと一致するアセット・タイプの任意のフィールドにできます。アイテム値として選択したアセット・タイプ・フィールドによって、リストのデータ型(数値、英数字など)が決まります。このため、同じデータ型のコンテンツ・キャプチャ・フィールドのみがその選択リストを参照できます。
6. (オプション) 「**表示値**」ドロップダウン・リストから、ユーザーに選択可能として表示される値を選択します。これは、アイテム値と同じ値にすることができます。また、空白のままにすると、アイテム値と同じであることを示します。
7. (オプション) 「**日付書式の選択**」で、使用可能なオプションから選択します。
8. (オプション) 「**ソート順序**」ドロップダウン・リストから、「**昇順**」または「**降順**」を選択します。
9. 一致するデータをプレビューするには、「**クイック・プレビュー**」表の右上にある  をクリックします。アセット・アイテム数が5個を超える場合、最初の5個のアイテムの一致データが表示されます。
10. 「**送信**」をクリックして、構成を完了します。
新しい選択リストがアセット・タイプ選択リスト表に表示されます。

アセット・タイプ選択リストの削除

アセット・タイプ選択リストを使用する必要がなくなった場合は、クライアント・プロファイルで使用できなくなるように削除できます。

アセット・タイプ選択リストを削除するには:

1. 「**メタデータ**」タブで、「**依存選択リスト**」表から削除する選択リストを選択し、 をクリックします。
2. プロンプトが表示されたら、「**はい**」をクリックして削除を確認します。

依存選択リストの構成

選択リストの依存性では、1つの親フィールドに2つ以上の子選択リストがリンクされ、ユーザーが親フィールドで選択すると、いずれかの子選択リストが表示されます。

依存選択リストの追加または編集の説明に従って、「**メタデータ**」タブで依存選択リストとそれに関連する選択リストを作成し、クライアント・プロファイルで依存選択リストを選択します。このタイプの選択リストの作成を開始する前に、[選択リストの依存性に関する重要なポイント](#)を参照してください。

選択リストの依存性に関する重要なポイント

- ユーザー定義の選択リスト間に選択リストの依存性を作成できます。
- 選択リストの依存性を作成する前に、リンクする予定の選択リストをすべて作成します。少なくとも、親の選択リストと2つ以上の子の選択リストが必要です。
- 子リストの各アイテムは、複数の親アイテムに関連付けることができます。たとえば、*消耗品*は、*家庭用*および*自動車用*サブ製品の子アイテムにできます。
- 複数レベルの依存性(たとえば、曾祖父母、祖父母、親、子の選択リスト)を作成できます。
- クライアント・プロファイルに割り当てることができる選択リストの依存性は1つのみです。複数の親/子依存性は、単一の依存選択リスト定義内で定義する必要があります。

依存選択リストの追加または編集

依存選択リストを追加または編集するには:

1. 「**メタデータ**」タブで、[ユーザー定義の選択リストを作成](#)します。

少なくとも3つの選択リスト(1つの親選択リストと2つ以上の子選択リスト)が必要です。

例:

親または子	選択リスト名	選択肢
親	Products	<ul style="list-style-type: none"> Automotive Household
子	Automotive Subproducts	<ul style="list-style-type: none"> Cars Motorcycles
子	Household Subproducts	<ul style="list-style-type: none"> Bathroom Kitchen

2. 「**メタデータ**」タブで、選択リストを含めるために**メタデータ・フィールド**を作成します。

この例では、親フィールドとして **Products** フィールドを作成し、子として **Subproducts** フィールドを作成しました。

- a. 親フィールドの「**メタデータ・フィールド**」ページで、「**選択リスト・ソース**」を選択します。

- b. 「**選択リスト**」フィールドで、作成した選択リストを選択します。この例では、選択リストとして **Products** を選択しました。
 - c. 子フィールドの「**メタデータ・フィールド**」ページで、「**親選択リスト・フィールド**」を選択します。この例では、親メタデータ・フィールドとして **Products** を選択しました。
 - d. ユーザーがリストから選択せずに値を入力することがないように、「**ロック**」チェック・ボックスを選択し、変更を送信します。
3. 「**分類**」タブで、ステップ 1 で作成したメタデータ・フィールドを使用する **ドキュメント・プロファイル**を作成します。
- この例では、**Products** および **Subproducts** メタデータ・フィールドが含まれる **Products** というドキュメント・プロファイルを作成しました。
4. 「**メタデータ**」タブで、依存選択リストを作成し、「**送信**」をクリックします。
- a. 「**依存選択リスト**」表で、 をクリックして、依存選択リストを作成します。既存の依存選択リストを編集するには、それを選択して  をクリックします。
 - b. 「依存選択リスト」ページで、依存性の名前(**Product/subproduct dependency** など)を入力します。
 - c. 「**定義された依存選択リスト**」表で、親選択リスト・アイテム(**Household**)のフィールドと、ユーザーがそれを選択したときに表示される子リスト(**Household Subproducts**)のフィールドを指定して、1 つ目の依存選択のフィールドを追加します:
 - **親選択リスト・ソース**: Capture Source
 - **親選択リスト**: Products
 - **親選択リスト・アイテム**: Household
 - **子選択リスト・ソース**: Capture Source
 - **子選択リスト**: Household Subproducts
 - d. 別の親選択リスト・アイテム(**Automotive**)と、ユーザーがそれを選択したときに表示される子リスト(**Automotive Subproducts**)を指定して、2 つ目の依存選択のフィールドを追加します。
5. 「**キャプチャ**」タブで、作成したドキュメント・プロファイルおよび選択リストの依存性を使用する **クライアント・プロファイル**を追加または編集します。
- a. 「一般設定」ページで、タイプのプロファイルとして「**2 - キャプチャと索引**」または「**3 - 索引のみ**」を選択し、名前およびバッチ接頭辞を入力します。
 - b. 「ドキュメント索引付け設定」ページで、「**依存選択リスト**」フィールドで作成した依存性を選択し、「**ドキュメント・プロファイル**」フィールドで作成したドキュメント・プロファイルを選択します。
 - c. 「セキュリティ」ページで、クライアント・プロファイルへのログイン・アクセス権をユーザーに付与し、クライアント・プロファイルを保存します。
6. クライアントで、選択リストの依存性をテストします。
- a. クライアントで、作成したクライアント・プロファイルを選択し、バッチをキャプチャします。
 - b. バッチを展開し、ドキュメントを選択します。

- c. メタデータ・ペインで、選択リストの依存性をテストします。

依存選択リストの削除

選択リストの依存性を削除すると、クライアント・プロファイル内で使用できなくなります。関連する選択リストおよびメタデータ・フィールドは影響を受けません。

依存選択リストを削除するには:

1. 「**メタデータ**」タブで、「依存選択リスト」表から削除する依存性を選択し、 をクリックします。
2. プロンプトが表示されたら、「はい」をクリックして削除を確認します。

アセット同期の構成

Oracle Content Management を、コンテンツが保守されている別のデータベースと同期できます。これは、オンプレミス・データベースまたはクラウドベース・データベースです。構成したアセット同期に基づいて、インポート・エージェントによりコンテンツが自動的に同期されます。

アセット同期を構成するには:

1. プロシージャの「**メタデータ**」タブで、「アセット同期」表に移動し、アセット同期を作成する場合は をクリックし、アセット同期を編集する場合はそれを選択して をクリックします。アセット同期を削除するには、 をクリックします。
2. 「アセット同期」ページで、「同期名」フィールドに名前(**Vendor Asset Synchronization** など)を入力します。
3. 「オンライン」チェック・ボックスを選択して、処理中のこのアセットの同期を可能にします。
「メタデータ」タブの「アセット同期」表で「**オンライン/オフライン**」をクリックして、アセット同期をアクティブ化または非アクティブ化できます。
4. 「頻度」フィールドに、**インポート・エージェント**がコンテンツ・アイテムを同期する対象期間を入力します。
5. **ソース・データベース**・セクションで、次のようにします:
 - a. 「**データベース**」ドロップダウン・リストから、コンテンツを保守するデータベースのデータベース・スキーマを選択します。
 - b. 「**表**」ドロップダウン・リストから、同期に使用するデータベース表を選択します。
6. 「**ターゲット・タイプ**」セクションで、次のようにします:
 - a. 「**リポジトリ**」ドロップダウン・リストから、前のステップで選択したデータベースと同期する **Oracle Content Management** リポジトリを選択します。
 - b. 「**アセット・タイプ**」ドロップダウン・リストから、同期するアセット・タイプを選択します。
7. 必要に応じて、「**アセット・フィールド**」と**データ・ソース値**フィールド・マッピングを編集します。これらのフィールドに、前のステップで選択したアセット・タイプおよびデータエース表からの値が表示されます。このセクションで示されて

いるアセット・フィールドは、Oracle Content Management リポジトリで定義されます。データ・ソース値の列は、「ソース・データベース」セクションで選択した表のものです。アセット同期を正常に完了するには、アスタリスク(*)が横にあるこれらのアセット・フィールドをマップする必要があります。これらは必須のアセット・フィールドです。また、表のすべての主キーもマップする必要があります。

 をクリックして「アセット・フィールド・マッピング」ダイアログを開き、必要な変更を行います。関連するデータ・ソース値のみがアセット・フィールドに表示されます。必要に応じて、これらの値を選択できます。

8. 「送信」をクリックして、構成を完了します。

アセット・ルックアップの構成

コンテンツ・キャプチャ・メタデータのアセット・ルックアップを実現する手段として、アセット・タイプ選択リストを活用できます。Oracle Content Management アセットに基づいて、アセット・ルックアップ構成を作成、変更および削除できます。ルックアップ定義は、コンテンツ・キャプチャ・メタデータ・フィールドと、コンテンツ・キャプチャ・メタデータ・フィールドに返される対応するフィールドのリストに基づいて、単一のアセット問合せを提供します。

単一のルックアップ定義は、ルックアップの組合せを必要とする他の複数のプロファイルから参照できます。複数のルックアップを作成してクライアント・プロファイルに関連付けると、デスクトップ・ユーザーが様々な方法でデータを取得できます。ただし、検索フィールドごとに1つのルックアップのみを含めることができます。たとえば、ベンダー名によるルックアップと発注書によるルックアップを持つことはできますが、ベンダー名を使用するルックアップを2つ持つことはできません。これにより、ユーザーに追加のアセット・フィールドが表示されますが、コンテンツ・キャプチャ・メタデータ・フィールドに値は格納されません。

アセット・タイプ・ルックアップを作成するには:

1. プロシージャの「メタデータ」タブでアセット・ルックアップ表に移動し、 をクリックしてアセット・ルックアップを作成するか、アセット・ルックアップを選択して をクリックし、編集します。 をクリックしてアセット・ルックアップを削除できます。
2. 「アセット・ルックアップ」ページで「アセット・ルックアップ名」フィールドに名前 (Vendor Asset Lookup など)を入力します。
3. キャプチャ検索フィールド・ドロップダウン・リストから、アセットの検索に値が使用されるコンテンツ・キャプチャ・フィールドを選択します。このフィールドは、コンテンツ・キャプチャ・メタデータからのものです。
4. 「リポジトリ」ドロップダウン・リストから、選択リストを作成するためのアセット・ルックアップを使用するリポジトリを選択します。
5. 「アセット・タイプ」ドロップダウン・リストから、アセット・タイプを選択します。
6. アセット検索フィールド・ドロップダウン・リストから、タイプを検索するフィールドを選択します。このフィールドは、Oracle Content Management アセット・タイプ定義からのものです。
7. アセット・ルックアップで、クライアント・ユーザーが指定した単語とまったく同じ単語を検索する場合は、**完全一致の実行**チェック・ボックスを選択します。「アセット検索フィールド」で文字列を選択した場合に、「完全一致の実行」チェック・ボックスが有効に

なります。ただし、長い文字列の場合、これは無効になります。「アセット検索フィールド」で日付、数値または浮動小数データ型を選択した場合、完全一致が常に実行されます。

8. 戻り値表で、一致が見つかった場合にアセットから返されるフィールド値を定義します。フィールドは、この表で定義されているのと同じ順序で表示されます。
 - a.  をクリックしてアセット・ルックアップ戻り値ダイアログを表示します。
 をクリックして既存の戻り値を編集したり、 をクリックして削除できます。
 - b. 「キャプチャ・フィールド」ドロップダウン・リストから値を選択します。この値は、コンテンツ・キャプチャ・メタデータからのものです。

 ノート:

「デジタル・アセット参照」タイプのフィールドを選択した場合、直接参照を示すために「参照は検出されたアセットを対象としています」チェック・ボックスが無効になっています。タイプが「コンテンツ・アイテム参照」のフィールドを選択した場合、このチェック・ボックスを選択できます。このチェック・ボックスを選択すると、「アセット・フィールド」が無効になります。

- c. 「デジタル・アセット参照」タイプ以外のタイプのキャプチャ・フィールドを選択した場合、「アセット・フィールド」ドロップダウン・リストから値を選択します。この値は、Oracle Content Management アセット・タイプ定義からのものです。
 - d. 「OK」をクリックして構成を完了します。
クライアント・ユーザーがルックアップを実行すると、アセット・ルックアップ戻り値ダイアログで構成したフィールドがルックアップの結果に表示されます。
9. 「アセット検索フィールド」ドロップダウン・リストで選択した値に基づいて一致するデータをプレビューするには、「クイック・プレビュー」表の右上にある  をクリックします。アセット数が 10 個を超える場合、最初の 10 個のアセットが表示されます。
10. 「送信」をクリックして、構成を完了します。
新しいアセット・ルックアップが、アセット・ルックアップ表に表示されます。

10

分類の構成

「**分類**」タブで、クライアント・ユーザーがドキュメント・バッチに割り当てるバッチ・ステータスを定義します。よく使用されるステータスは、「準備完了」、未完了、「処理済」、「承認済」などです。このタブで、プライマリ・ドキュメントを補足するドキュメントの添付タイプも定義します。また、このタブでドキュメント・プロファイルを構成し、ユーザーがクライアント環境で処理するドキュメントのメタデータ・フィールドにそれを関連付けます。

「**分類**」タブで実行できる操作は次のとおりです：

- バッチ・ステータスの追加、編集または削除
- 添付タイプの追加、編集または削除
- ドキュメント・プロファイルの構成

バッチ・ステータスの追加、編集または削除

バッチ・ステータス機能では、バッチにステータスを割り当てることができます。プロシージャにステータスを追加すると、プロファイルおよびプロセッサ・ジョブでバッチにステータスが割り当てられます。作成後はいつでもステータスを編集できます。バッチ・ステータスに加えた変更はプロシージャ全体に適用されることに注意してください。バッチ・ステータスを削除すると、クライアント・プロファイルやプロセッサで使用したり、ユーザーがバッチに割り当てたりできなくなります。

バッチ・ステータスは次のように使用できます：

- クライアント・プロファイルで、作成時にバッチに割り当てられるデフォルトのステータスを割り当てることができます。[クライアント・プロファイルについて](#)を参照してください。
- クライアント・ユーザーは、使用可能なステータスから選択してバッチ・ステータスを変更したり、ステータスに基づいてバッチを検索したりできます。
- 一部のバッチ・プロセッサは、処理の成功または失敗後にバッチ・ステータスを変更することがあります。
- バッチ・ステータスは、コミット時にメタデータとして出力できます。

バッチ・ステータスを構成するには：

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. プロシージャの「**分類**」タブを開きます。
3. 「**バッチ・ステータス**」表で  をクリックします。
4. **ステータスの追加/編集**ダイアログで、意味のあるステータスの名前を入力し、「**OK**」をクリックします。
新しいステータスが「**バッチ・ステータス**」表に表示されます。

バッチ・ステータスを削除するには、「バッチ・ステータス」表で選択し、 をクリックします。

添付タイプの追加、編集または削除

添付とは、プライマリ・ドキュメントに関連付けられたイメージ・ファイルまたはイメージ以外のファイルのことです。有効な添付タイプのリストを作成できます。クライアント・ユーザーは、添付の作成および表示、添付タイプの変更およびイメージ添付の変更を行えます。

- 添付タイプをドキュメント・プロファイルに割り当てることができます。
ドキュメントがデフォルトのドキュメント・プロファイルに割り当てられている場合、それぞれのプロシージャで定義されているすべての添付タイプをドキュメントに使用できます。
- TIFF 変換プロセッサを使用してイメージ以外の添付をイメージ形式に変換する際、添付の処理を特定の添付タイプに限定できます。また、ドキュメントをマージする際、ターゲット・ドキュメントのドキュメント・プロファイルの添付タイプに一致するソース・ドキュメントの添付のみを含めるように指定できます。
- 認識プロセッサ・ジョブで階層セパレータ・ページ定義を構成する場合、「**添付タイプ**」フィールドを設定してドキュメントが添付であることを示すセパレータ・ページを定義できます。
- 認識処理を構成する際、ドキュメント・プロファイルの添付タイプに一致する添付のみを含めるように指定できます。

添付タイプを構成するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. プロシージャの「**分類**」タブを開きます。
3. 「**添付タイプ**」表で  をクリックします。
4. 「**新規添付タイプ**」ページで、新しい添付タイプの意味のある名前を入力し、オプションで説明を入力します。
5. この添付タイプがドキュメントの処理に必須の場合、「**必須**」チェック・ボックスを選択します。
6. 「**送信**」をクリックします。
新しく作成された添付タイプが「**添付タイプ**」表に表示されます。

添付タイプを削除するには、「**添付タイプ**」表で選択し、 をクリックします。

ドキュメント・プロファイルの構成

ドキュメント・プロファイルには、特定タイプのドキュメントの索引付けに使用するメタデータ・フィールドのセットが含まれます。たとえば、通信、発注書、および顧客契約のドキュメントをキャプチャするように構成されたプロシージャの場合、これらのドキュメント・タイプごとにドキュメント・プロファイルを作成し、それぞれに異なるメタデータ・フィールドのセットを含めます。ユーザーが複数のドキュメント・タイプを含むバッチをスキャンできるようにするには、クライアント・プロファイル

で各ドキュメント・プロファイルを選択します。このようにすると、ユーザーはドキュメントに対応するドキュメント・プロファイルを選択し、それに応じて索引を付けることができます。

ドキュメント・プロファイルでは、ドキュメント・プロファイルに分類されたドキュメントで使用できる添付タイプのセットも指定します。

クライアント・プロファイルで使用するドキュメント・プロファイルを指定する場合、1つ以上のドキュメント・プロファイル、すべてのプロファイル、または**デフォルト**値を選択できます。デフォルトのドキュメント・プロファイルには、プロセス用に定義されたすべてのメタデータ・フィールドと添付タイプが含まれ、トラブルシューティングに役立ちます。

ドキュメント・プロファイルに関連する主なタスクは次のとおりです:

- [ドキュメント・プロファイルの追加または編集](#)
- [ドキュメント・プロファイルの削除](#)
- [ドキュメント・プロファイルの使用](#)

ドキュメント・プロファイルの追加または編集

ドキュメント・プロファイルを追加または編集するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「**分類**」タブを開きます。
3. 「**ドキュメント・プロファイル**」表で  をクリックし、プロファイルを作成します。プロファイルを編集するには、まずプロファイルを選択し、 をクリックします。
4. 「ドキュメント・プロファイル」ページで次のようにして、変更を保存します:
 - a. 「**ドキュメント・プロファイル(タイプ)名**」セクションで、名前と説明を入力します。
 - b. 「**索引付けのために Capture Client に表示されるフィールド**」セクションの「**メタデータ・フィールド**」下の「**使用可能なメタデータ・フィールド**」ボックスでプロファイルに含めるフィールドを選択し、「**選択したメタデータ・フィールド**」ボックスに移動します。索引付けに対応した順序でメタデータ・フィールドを並べ替えます。
 - c. 「**ドキュメント・プロファイルに関連付けられた添付タイプ**」セクションの「**添付タイプ**」下の「**使用可能な添付タイプ**」ボックスでプロファイルに含める添付タイプを選択し、「**選択した添付タイプ**」ボックスに移動します。ユーザーが添付を読み取る順序に添付タイプを並べ替えます。

ドキュメント・プロファイルの削除

クライアント・ユーザーが使用しないドキュメント・プロファイルは削除できます。ドキュメント・プロファイルは削除すると、コンテンツ・キャプチャ・クライアントのメタデータ・ペインに表示されません。

ドキュメント・プロファイルを削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。

2. 「分類」 タブを開きます。
「ドキュメント・プロファイル」 表には、プロシージャに定義されたプロファイルがリストされます。
3. 削除するプロファイルを選択し、 をクリックして削除を確定します。
削除したドキュメント・プロファイルは、「ドキュメント・プロファイル」 表で使用できなくなります。

ドキュメント・プロファイルの使用

索引を付けるドキュメント・タイプごとにドキュメント・プロファイルを作成した後は、メタデータ・フィールドが割り当てられている場所でそれらを選択できます。

表 10-1 コンテンツ・キャプチャ・コンポーネントでのドキュメント・プロファイルの使用

コンテンツ・キャプチャ・コンポーネント 関数	
クライアント・プロファイル	「ドキュメント索引付け設定」 ページで 1 つ以上のドキュメント・プロファイルを選択して、ユーザーがドキュメント・プロファイルを選択し、そのメタデータ・フィールドに入力し、添付タイプを変更できるようにします。 クライアント・プロファイルでのドキュメント・プロファイルの構成 を参照してください。
インポート・プロセッサ	インポートされたドキュメントに索引を付けるためのドキュメント・プロファイルを選択します。 インポート中のメタデータ割当ての構成 を参照してください。
認識プロセッサ	認識されたドキュメントに索引を付けるためのドキュメント・プロファイルを選択します。ドキュメント・プロファイルを動的に決定することもできます。 静的なドキュメント・プロファイルまたは動的に決定されるドキュメント・プロファイルの指定 を参照してください。
コミット・プロファイル	1 つ以上のドキュメント・プロファイルを選択して、コミット・プロファイルで処理するドキュメントを制限します。コミット・プロファイルを実行すると、選択したドキュメント・プロファイルが割り当てられているドキュメントがコミットされます。 ドキュメント・プロファイルに基づくコミット・プロファイルの制限 を参照してください。

キャプチャ設定の構成

「**キャプチャ**」タブで、クライアント・ユーザーのドキュメント・キャプチャを自動化するようにクライアント・プロファイルを構成します。クライアント・プロファイルで、プロシージャの他のタブで構成する他のすべての設定を関連付けます。クライアント・ユーザーの様々なビジネス要件を満たすために、プロシージャで複数のクライアント・プロファイルを作成できます。このタブでは、ドキュメントのインポート方法および編成方法も構成します。また、再編成されたドキュメントでの電子メールの添付の使用方法。

「**キャプチャ**」タブでできることは次のとおりです:

- [クライアント・プロファイルの構成](#)
- [インポート・プロセッサ・ジョブの構成](#)

クライアント・プロファイルの構成

クライアント・プロファイルには、コンテンツ・キャプチャ・クライアントでドキュメントをスキャンしたり、インポートしたり、索引付けする際にエンドユーザーが選択する設定が含まれています。クライアント・プロファイルにより、バッチでのドキュメントの作成および分割方法、メタデータ・フィールドが使用可能かどうか、およびバッチをリリースした後に行われる処理が制御されます。プロシージャ要素を使用してクライアント・プロファイルを作成します。

次のトピックを参照して、クライアント・プロファイルについて、またその構成方法を理解します:

- [クライアント・プロファイルについて](#)
- [クライアント・プロファイルの追加または編集](#)
- [クライアント・プロファイルのタイプの構成](#)
- [ユーザーに表示されるバッチ・リストのフィルタ](#)
- [イメージのキャプチャと格納の構成](#)
- [空白ページの検出の構成](#)
- [イメージ以外のファイル・キャプチャ設定の構成](#)
- [ドキュメント作成の構成](#)
- [セパレータ・シート使用の構成](#)
- [クライアント・プロファイルでの依存選択リストの使用](#)
- [クライアント・プロファイルでのアセット・ルックアップの有効化](#)
- [クライアント・プロファイルでのドキュメント・プロファイルの構成](#)
- [クライアント・プロファイルへのセキュリティ・アクセスの付与または削除](#)
- [クライアント・プロファイルの後処理の構成](#)
- [リリース・プロセスの追加、編集または削除](#)

クライアント・プロファイルについて

ユーザーには、ドキュメントのキャプチャのみを行うユーザーも、ドキュメント・バッチの索引の生成を担当するユーザーも、両方を行うユーザーもいます。これらの要件に従ってクライアント・プロファイルを構成します。クライアント・プロファイルで、バッチの接頭辞、バッチの優先度、バッチをフィルタする基準(優先度、ステータス、接頭辞など)を指定します。クライアント・プロファイルの使用を制限するには、それらをユーザーに割り当て、十分な権限を持つユーザーのみがクライアント環境のクライアント・プロファイルにアクセスできるようにします。また、1つ以上のドキュメント・プロファイルの各クライアント・プロファイルへの関連付けも行います。

クライアント・プロファイルを構成するには、プロファイルのページで設定を特定します。

表 11-1 クライアント・プロファイル構成

ページ	主な構成
一般設定	<p>次のような主なプロファイル設定を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ユーザーがクライアント・プロファイルを使用してキャプチャ(スキャンまたはインポート)するか、ドキュメントをキャプチャして索引を付けるか、ドキュメントの索引付けのみを行うか(クライアント・プロファイルのタイプの構成を参照)。 クライアント・ユーザーに表示するクライアント・プロファイル名。 このクライアント・プロファイルでキャプチャされるバッチの名前の付け方。 このプロファイルを使用して作成されるバッチのデフォルト・ステータス。
バッチ・フィルタ設定	<p>オプションで、バッチの表示をフィルタします。このクライアント・プロファイルが選択されている場合にバッチ・ペインのリストでユーザーに表示するバッチとそのリスト方法(ユーザーに表示されるバッチ・リストのフィルタを参照)。</p>
イメージ設定	<p>イメージの色と画質の設定を指定し、空白ページを検出し、インポートされたイメージ以外のファイルを処理します。このタブは、「一般設定」ページで「プロファイル・タイプ」フィールドが「1- キャプチャのみ」または「2- キャプチャと索引」に設定されている場合にのみ使用できます。たとえば、次のような指定をします:</p> <ul style="list-style-type: none"> このクライアント・プロファイルでキャプチャされたイメージの書式設定方法。イメージのキャプチャと格納の構成を参照してください。 キャプチャ時の空白ページの検出方法。空白ページの検出の構成を参照してください。 イメージ以外のドキュメントがインポートされるかどうかとその方法。イメージ以外のファイル・キャプチャ設定の構成を参照してください。

表 11-1 (続き) クライアント・プロファイル構成

ページ	主な構成
ドキュメント索引付け設定	<p>必要に応じてドキュメントの分割、依存選択リストおよびドキュメント・プロファイルのオプションを構成します。このタブは、「一般設定」ページで「プロファイル・タイプ」フィールドが「2- キャプチャと索引」または「3- 索引のみ」に設定されている場合にのみ使用できます。たとえば、次のような指定をします:</p> <ul style="list-style-type: none"> バッチ内でのドキュメントの作成方法(ドキュメント作成の構成)および分割方法(セパレータ・シート使用の構成)。 セパレータ・シートの検出方法(セパレータ・シート使用の構成)。 依存選択リスト(クライアント・プロファイルでの依存選択リストの使用を参照)。 アセット・ルックアップ(クライアント・プロファイルでのアセット・ルックアップの有効化を参照) メタデータ・フィールドに入力したり、ドキュメントの添付タイプを選択する場合にユーザーが使用できるドキュメント・プロファイル(メタデータ・フィールドおよび添付タイプのセット)(クライアント・プロファイルでのドキュメント・プロファイルの構成を参照)。
セキュリティ	<p>以前に割り当てられたルールに基づいて、クライアント・ユーザーのクライアント・プロファイルへのアクセス権を付与または削除します(プロシージャ・セキュリティの構成を参照)。</p>
後処理	<p>バッチをリリースする場合にユーザーが使用できるリリース・プロセスを定義します(クライアント・プロファイルの後処理の構成を参照)。</p>
サマリー	<p>クライアント・プロファイルに対して選択した設定を確認します。</p>

クライアント・プロファイルの追加または編集

「**キャプチャ**」タブで新しいクライアント・プロファイルを追加したり、既存のものを編集したりできます。

- ユーザーがプロファイルを使用してバッチのキャプチャを開始した後は、クライアント・プロファイルに大きな変更を加えないことをお勧めします。かわりに、クライアント・プロファイルを索引付けのみのプロファイルに変更します。これにより、ユーザーは既存のバッチに索引を付けてリリースできますが、追加のバッチをキャプチャすることはできません。

クライアント・プロファイルをさらに広範囲に変更するには、本番プロファイルのコピーを作成して、新しいプロファイルの本番環境で使用する準備ができるまで安全に変更できるようにします。

- 変更時は、クライアント・プロファイルを定期的に保存します。クライアントを実行して、プロファイルの変更を確認およびテストします。クライアント・プロファイル、そのメタデータ・フィールドまたはドキュメント・ファイルの編集後、サインアウトしてクライアントに再度サインインし、プロシージャの変更がクライアントに反映されていることを確認します。

クライアント・プロファイルを追加または編集するには:

- 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
- プロシージャの「**キャプチャ**」タブを開きます。

3. 「クライアント・プロファイル」表で  をクリックするか、プロファイルを選択して  をクリックします。

別の同一のプロファイルを作成するには、 をクリックして既存のクライアント・プロファイルをコピーし、必要に応じて変更します。

4. クライアント・プロファイルの各ページで、該当する設定を選択します([クライアント・プロファイルについて](#)の表を参照してください)。
5. 「送信」をクリックし、プロファイルを保存して閉じます。

クライアント・プロファイルの非アクティブ化または削除

クライアント・プロファイルをアクティブ化したり非アクティブ化して、クライアント・ユーザーがプロファイルにアクセスしたり、アクセスできなくなったりできます。デフォルトでは、クライアント・プロファイルはアクティブ(オンライン)です。クライアント・プロファイルをオフラインにして、トラブルシューティングしたり、プロファイルを削除する前に段階的に廃止したりできます。プロファイルを削除する前に、一定期間非アクティブにすることを検討してください。

クライアント・プロファイルを削除しても、以前にプロファイルを使用してキャプチャしたバッチには影響しません。ユーザーには、バッチ・フィルタの設定に関係なく、ロックされているすべてのバッチが表示されるため、ユーザーは別のクライアント・プロファイルを選択して、削除されたクライアント・プロファイルを使用して作成したバッチを引き続き表示、編集、およびリリースできます。

クライアント・プロファイルを非アクティブ化または削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「キャプチャ」タブを開きます。
3. 「クライアント・プロファイル」表で、まずアクティブ化してから削除するプロファイルを選択します。
4.  をクリックしてプロファイルを非アクティブにします。
「キャプチャ」タブで「オンライン/オフライン」をクリックし、クライアント・プロファイルをアクティブにしたり、非アクティブにできます。
5. 非アクティブ化したプロファイルを選択して、 をクリックします。プロンプトが表示されたら、このプロファイルを削除することを確認します。

クライアント・プロファイルのタイプの構成

選択したクライアント・プロファイル・タイプによって、ユーザーがどのようにプロファイルを使用するか、またドキュメントをキャプチャしてメタデータ値を入力するかどうかが決まります。また、プロファイル・タイプによって、ドキュメントがバッチ内に作成される方法も影響を受けます。

クライアント・プロファイル・タイプを構成するには:

1. クライアント・プロファイルを追加または編集し、「**一般設定**」ページを選択します。
2. 「**プロファイル・タイプ**」フィールドで、次のプロファイル・タイプのうち 1 つを選択します: **キャプチャのみ**、**キャプチャと索引**または**索引のみ**。
3. 「**送信**」をクリックして、クライアント・プロファイルを保存します。

キャプチャのみ

ユーザーがドキュメントを索引付けせずにスキャンまたはインポートする場合は、「**1 - キャプチャのみ**」プロファイル・タイプを選択します。このタイプは一般的に、認識プロセッサが後処理ステップで後から索引付けするバッチに対して使用します。ユーザーが「キャプチャのみ」プロファイルを選択した場合、クライアント・ウィンドウにメタデータ・ペインは表示されません。

- ユーザーがバッチをスキャンすると、クライアントは、スキャナにロードされたすべての印刷物をスキャンし、単一のドキュメントを作成します。クライアント・ユーザーは、「**新規ドキュメントの作成**」オプションを使用して、単一のドキュメントを複数のドキュメントに分割できます。また、認識プロセッサなどのバッチ・プロセッサがドキュメントの分割を実行することもできます。
- ユーザーがバッチをインポートするときに選択したインポート・オプションによって、単一のドキュメントが作成されるか複数のドキュメントが作成されるかが決まります。
- クライアント・ユーザーはドキュメントを索引付けできませんが、「**新規ドキュメントの作成**」オプションを使用してドキュメントを分割することはできます。
- 「キャプチャのみ」プロファイルを使用する場合、索引付けとドキュメント作成のオプションは適用されません。「**ドキュメント索引付け設定**」ページの設定は使用できません。

キャプチャと索引

ユーザーがドキュメントをキャプチャして索引を付ける場合、「**2 - キャプチャと索引**」プロファイル・タイプを選択します。ユーザーが「キャプチャと索引」プロファイルを選択すると、バッチを開いたときにメタデータ・ペインがクライアント・ウィンドウに表示されます。

- ユーザーが「キャプチャと索引」プロファイルを使用してバッチをスキャンする場合、**ドキュメント作成の構成**で説明されているように、「**ドキュメント索引付け設定**」ページで選択された**ドキュメント作成オプション**によってドキュメントの作成方法が決まります。たとえば、ドキュメント作成オプションが「**1 ページ(片面)**」の場合、各ページのキャプチャ後、新しいドキュメントが作成されます。ユーザーは「**新規ドキュメントの作成**」オプションを使用してドキュメントを分割したり、空白ページ・セパレータ・シートを使用してバッチ内のドキュメントを自動的に分割したり、定義できます。
- ユーザーが「キャプチャと索引」プロファイルを使用してバッチをインポートする場合、選択したインポート・オプションによって単一ドキュメントが作成されるか、複数ドキュメントが作成されるかが決まります。ユーザーは、「**新規ドキュメントの作成**」オプションを使用してバッチ内のドキュメントを分割できます。

索引のみ

ユーザーが以前にキャプチャされたバッチからのドキュメントの索引付けを行う場合は、「**3 - 索引のみ**」プロファイル・タイプを選択します。たとえば、高速の本番スキャナを使用して作成されたバッチを、索引付けを行う複数のユーザーがクライアントを使用して処理できます。ユーザーが「索引のみ」プロファイルを選択すると、クライアント・ウィンドウにメタデータ・ペインが表示されますが、バッチ・ペインのキャプチャ・オプションは非表示になるため、ユーザーはスキャンまたはインポートによりページをバッチできなくなります。

次のような場合は、「索引のみ」プロファイルを作成します:

- バッチをスキャンするユーザーと索引付けするユーザーが異なるグループに属する場合
- 索引付けを行うユーザーが索引付けを完了または検証する場合
- バッチの修正が必要であるが、索引付けを行うユーザーにスキャナへのアクセス権がない場合

ユーザーに表示されるバッチ・リストのフィルタ

ユーザーがクライアントのバッチ・ペインのリストで表示およびアクセスできるバッチを定義するための様々なオプションがあります。たとえば、ユーザーがプロセス内の任意のバッチを表示できるようにしたり、ユーザーが自分のワークステーションで作成し、特定の接頭辞が付き、エラーを含むバッチにバッチ・リストを制限するようクライアント・プロファイルを構成できます。

次のガイドラインでは、バッチ・ペインでユーザーに表示されるバッチについて説明します:

- ユーザーにロックされているバッチは常にリストされます。ユーザーがクライアント・プリファレンスで表示する最大数の制限を設定している場合は、すべてが表示されるとはかぎりません。
- ロック解除されたバッチまたは他のユーザーにロックされたバッチが表示されるかどうかは、クライアント・プロファイルのバッチ・フィルタ設定によって異なります。たとえば、バッチ・リストを、特定の接頭辞付きのバッチ、特定の状態(エラーまたは処理中など)のバッチ、あるいは選択したステータスまたは優先度のバッチに制限できます。
- ユーザーは、検索オプションを使用してクライアントのバッチ・リストをさらにフィルタできます。たとえば、バッチ・リストをフィルタして、優先度の高いバッチまたは古いバッチのみなど、制限されたバッチ・セットを表示したり、エラーが発生した 1 つ以上のドキュメントを含むバッチを検索できます。

クライアント・ウィンドウでユーザーにバッチを表示するには:

1. [クライアント・プロファイルを追加または編集](#)し、「**バッチ・フィルタ設定**」ページを選択します。
2. ページ設定で、表示するバッチのリストを制限するフィルタ設定を指定し、変更を保存します。次のガイドラインおよび次の表にリストされたフィルタの説明に従います。
 - **AND 条件はフィルタ間に適用されます。**この場合、ユーザーには、選択したすべてのフィルタを満たす(AND 条件)バッチのみが表示されます。バッチのステータスおよび優先度を指定した場合、そのバッチ・ステータスおよび優先度のバッチのみが表示されます。
 - **OR 条件はフィルタ内に適用されます。**この場合、ユーザーには、選択したフィルタのいずれかを満たす(OR 条件)バッチが表示されます。「**優先度**」フィールドで 1、2 および 3 を選択した場合、優先度 1、2 または 3 が割り当てられているバッチが表示されます。

表 11-2 バッチ・フィルタ

フィルタ	使用例
追加のバッチ接頭辞	<p>ユーザーには、他のフィルタ条件を満たし、選択したプロファイルのバッチ接頭辞で作成されたバッチが常に表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> プロファイルのバッチ接頭辞に一致するバッチを表示するには、ここでバッチ接頭辞を再入力します。 プロファイル自体の接頭辞に加えて他の接頭辞を持つバッチも表示するには、プロファイルの接頭辞を含めるようにここにリストします。;(セミコロン)を入力して接頭辞を区切ります。 このフィールドを空白のままにすると、接頭辞に関係なく、そのプロセス内の任意のプロファイルで作成されたバッチがユーザーに表示されます。
処理の状態	<p>選択した 1 つ以上の処理の状態のバッチに表示を制限します。処理の状態は内部システム状態で、再定義できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「準備完了」 状態を使用して、ロック解除され、ユーザーが選択して使用する準備ができたバッチを表示します。たとえば、この状態を使用して、索引付けするユーザーにロック解除された索引のみのタイプのバッチを表示します。 「ロック」 状態を使用して、任意のユーザーにロックされたバッチを表示します。 「エラー」 状態を使用して、エラーが発生した 1 つ以上のドキュメントを含むバッチを表示します。たとえば、この状態を使用して、適任のユーザーによる修正が必要なバッチを表示します。 「処理中」 状態を使用して、いずれかのバッチ・プロセッサによって現在処理中のバッチが表示されます。
バッチ・ステータス	<p>「分類」 タブで作成された 1 つ以上のバッチ・ステータスを持つバッチに表示を制限します。たとえば、「再スキャン」 または 「レビューが必要」 バッチ・ステータスを選択して、適任のユーザーに注意が必要なバッチを表示します。</p>
優先度	<p>1 つ以上の優先度のあるバッチに表示を制限します。たとえば、優先度 10 を選択して、ユーザーにすぐに注意を払う必要のあるバッチを表示します。</p>
バッチ表示	<p>ユーザーおよび場所によって表示を制限します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ユーザーとワークステーション」 を選択して、現在のユーザーが自分の現在のワークステーションでキャプチャしたバッチのみを表示します。たとえば、他のユーザーのバッチを開いてはいけないビジネス・ユーザーの場合にこの設定を選択します。 「ユーザー」 を選択して、現在のユーザーが 1 つ以上のワークステーションでキャプチャしたバッチを表示します。たとえば、各ユーザーがスキャンと索引付けを担当する一般的なシナリオでは、すべてのユーザーが 1 つのスキャン・ワークステーションに移動してログインし、バッチをスキャンしてから、自分のワークステーションに移動して索引を付けます。 「すべてのユーザー」 (デフォルト) を選択して、キャプチャしたワークステーションやユーザーに関係なく、バッチをユーザーに表示します。
経過日数	<p>「開始」 および 「終了」 フィールドに数値を入力して、指定した日数が経過したバッチを表示します。たとえば、7 日から 45 日経過したバッチを表示します。</p>

表 11-2 (続き) バッチ・フィルタ

フィルタ	使用例
プライマリ・ソート、セカンダリ・ソート	<p>バッチのソート方法を指定し、昇順または降順を指定します。次のプライマリ・ソートおよびセカンダリ・ソートの基準を指定できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • バッチ名 • バッチ・アイテム数 • バッチ日付 • バッチ優先度 • バッチ・ステータス <p>たとえば、優先度が最も高いものが一番上に表示され、優先度が同じ場合は最も古い日付のものが最初に表示されるようにバッチをソートします。</p>

 **ノート:**

この設定ではクライアント・プロファイルのデフォルト・ソート順序を指定し、ユーザーはバッチが表示された後にソート順序を変更できます。

イメージのキャプチャと格納の構成

ユーザーがコンテンツ・キャプチャ・クライアントでドキュメントをキャプチャする場合、イメージ設定は次の 2 つのソースから取得されます:

- このトピックで説明する **クライアント・プロファイル設定**。これらの設定は、クライアント・プロファイルを使用してキャプチャされるすべてのバッチに適用されます。場合によっては、ユーザーはこれらの設定をオーバーライドできます。
- 選択したスキャナに固有で、ユーザーが選択する **スキャナ設定**。ユーザーは、バッチ・ペインで「**キャプチャ設定**」をクリックした後、これらの設定を選択します。選択すると、これらの設定がクライアント・プロファイルとともに保存されます。

クライアント・プロファイルでイメージおよびイメージ以外のキャプチャの設定を構成するには:

1. **クライアント・プロファイルを追加または編集**をクリックして「**イメージ設定**」ページを選択します。
2. イメージ設定を構成します。
 - a. 「**デフォルトの色**」フィールドで、画質とイメージ・サイズに関する考慮事項のバランスを取って、デフォルトの色(「**モノクロ**」、「**グレースケール**」または「**色**」)を指定します。

フィールドを「**<未指定>**」に設定されたままにする場合、スキャナで選択されている色(クライアント・ユーザーによる選択またはスキャナのデフォルト設定)が使用されます。

「**デフォルトのオーバーライド禁止**」フィールドを選択し、クライアント・ユーザーがスキャナの色の変更できないようにします。すべてのスキャナでこの設定が尊重されるわけではありません。

- b. 「**デフォルト DPI**」フィールドで、画質とイメージ・サイズに関する考慮事項のバランスを取って、デフォルト DPI (**100、150、200、240、300、400** または **600**)を指定します。

フィールドを「<未指定>」に設定されたままにする場合、スキャナで選択されている DPI(クライアント・ユーザーによる選択またはスキャナのデフォルト設定)が使用されます。

「**デフォルトのオーバーライド禁止**」フィールドを選択し、ユーザーがクライアントのスキャナ設定でイメージの解像度を変更できないようにします。すべてのスキャナでこの設定が尊重されるわけではありません。

- c. 「**空白ページのバイトしきい値**」フィールドで、オプションで**空白ページの検出を構成**します。
- d. デフォルトのイメージの明度とコントラストを指定するには、「**デフォルトの明度とコントラストを適用する**」フィールドを選択し、スライダを動かして値を上下に調節します。クライアント・ユーザーは、スキャナ固有の設定ウィンドウで許可されている場合、これらの設定をオーバーライドできる場合があります。

ノート:

イメージの結果は、スキャナのモデルによって異なります。したがって、同じスキャナ・モデルがクライアント・プロファイルで使用されている場合、デフォルトの明度とコントラストを適用すると、最も効果的です。

- 3. **イメージ以外の設定を構成**。
- 4. 「**送信**」をクリックして、クライアント・プロファイルを保存します。

空白ページの検出の構成

ユーザーがキャプチャしたイメージ・ドキュメントには空白ページが含まれている場合があります。コンテンツ・キャプチャを構成して、バッチから自動的に空白ページを削除できます。これを行うには、空白ページの検出方法を指定する必要があります。つまり、しきい値のファイル・サイズを指定し、このしきい値以下のサイズのイメージは空白ページと見なされ、削除されるようにする必要があります。

セパレータ・シートの構成と空白ページの検出の違いについては、[セパレータ・シート使用の構成](#)を参照してください。

空白ページの検出を構成するには:

- 1. **クライアント・プロファイルを追加または編集**する際、「**イメージ設定**」ページを選択します。
- 2. 「**空白ページのバイトしきい値**」フィールドで、ファイル・サイズの値(バイト)を入力します。ユーザーは、クライアントの「**プリファレンス**」ウィンドウで「**ページの削除前にスキャンされる最小バイト数**」フィールドに数値を入力してこのしきい値の設定をオーバーライドできます。

白黒(200 x 200 DPI イメージ)の場合、推奨される値は **1500** です。通常、この設定で、コンテンツ・キャプチャは空白ページとテキストが少量のページを区別できます。

- 3. 「**送信**」をクリックして、クライアント・プロファイルを保存します。

イメージ以外のファイル・キャプチャ設定の構成

スキャンされた紙のドキュメントまたはインポートされたイメージ・ファイルは、コンテンツ・キャプチャでイメージ・ドキュメントに変換されます。ただし、ユーザーが、Microsoft Word や PDF ドキュメントなどのイメージ以外のファイルをインポートする場合、クライアント・プロファイルのイメージ以外のファイルの設定で処理方法が決まります。

クライアント・プロファイルでイメージ以外のファイルの処理を構成するには:

1. **クライアント・プロファイルを追加または編集** をクリックして「**イメージ設定**」ページを選択します。
2. 「**イメージ・ファイル以外のインポート・アクション**」フィールドで、ユーザーがイメージ以外のファイルのインポートを選択した場合のアクションを選択します。
 - **インポートしない:** 選択すると、イメージ以外のファイルはインポートできず、バッチは作成されないというメッセージがユーザーに表示されます。
 - **ネイティブ形式でインポート:** 選択すると、イメージ以外のファイルは元の形式でキャプチャされます。ユーザーはイメージ以外のドキュメントに索引を付けることはできますが、個々のページを編集することはできません。
 - **イメージ形式に変換:** 選択すると、イメージ以外のファイルは、このページで選択されたイメージ以外の変換設定を使用してイメージに変換されます。

3. 必要に応じて、クライアント・ユーザーに表示するページの最大数を「**イメージ・ファイル以外のプレビュー・ページ制限**」フィールドに指定します。

この設定は、クライアントのパフォーマンスを最大化するのに便利です。これはネイティブ形式で格納されたイメージ以外のドキュメントにのみ適用されます。デフォルトは 25 ページです。プレビューするページの最大数の指定をスキップするには 0 を指定します。

4. 必要に応じて、「**イメージ以外の変換**」フィールドの設定を完了します。

これらの設定は、ステップ 2 で「**イメージ形式に変換**」が選択されている場合に使用できます。これらを使用して、ファイルの変換時にイメージに使用する色、JPEG 画質および DPI 解像度を指定できます。
5. 「**送信**」をクリックして、クライアント・プロファイルを保存します。

ドキュメント作成の構成

クライアント・プロファイルを構成する場合、バッチ内のドキュメントの作成方法を必ず指定してください。たとえば、片面または両面のドキュメントなど、固定ページ数でドキュメントはキャプチャされますか。1つのドキュメントの終わりと次のドキュメントの始まりを示すセパレータ・シートが使用されますか。または、ユーザーは、バッチの内容に基づいてドキュメントを作成する方法を指定するように求められますか。

クライアント・プロファイルでドキュメントの作成オプションを設定するには:

1. **クライアント・プロファイルを追加または編集** し、「**ドキュメント索引付け設定**」ページを選択します。

 **ノート:**

ドキュメントの作成オプションは、キャプチャのみのプロファイルに適用されません。[キャプチャのみ](#)を参照してください。

2. 「ドキュメント作成オプション」フィールドで、次のいずれかのオプションを選択して変更を保存します:

- **1 ページ(片面):** このオプションは 1 ページのドキュメントを作成し、通常は片面ドキュメントで使用されます。ユーザーがバッチをスキャンすると、クライアントはスキャンした各イメージをページとして独自のドキュメントに挿入します。

スキャナの片面/両面設定によって、ページの片面をスキャンするか、両面をスキャンするかが決まります。プロファイルが「1 ページ(片面)」に設定されている場合、クライアントは、スキャナの設定が片面か両面かに関係なく、1 ページのドキュメントを作成します。

- **2 ページ(両面):** このオプションは 2 ページのドキュメントを作成し、通常、両面のフォームなどの両面ドキュメントで使用されます。ユーザーがバッチをスキャンすると、クライアントはスキャンした 2 つのイメージを各ドキュメントに挿入します。

スキャナの片面/両面設定によって、ページの片面をスキャンするか、両面をスキャンするかが決まります。プロファイルが「2 ページ(両面)」に設定されている場合、クライアントは、スキャナの設定が片面か両面かに関係なく、2 ページのドキュメントを作成します。

- **可変ページ数:** このオプションでは、可変ページ数のドキュメントを作成します。
 - ユーザーがドキュメント間にセパレータ・シートを挿入し、セパレータ・シートを使用するようプロファイルが構成されている場合、クライアントは、セパレータ・シートを検出するまで、すべてのページをスキャンして同じドキュメントにします。セパレータ・シートの検出後は、新しいドキュメントを開始し、次のセパレータ・シートまですべてのページをスキャンします。コンテンツ・キャプチャ・クライアントは、セパレータ・シートのページを破棄し、すべてのドキュメントを 1 つのバッチに配置します。「[セパレータ・シートのバイトしきい値](#)」フィールドで、[セパレータ・シート使用の構成](#)で説明されているように、セパレータ・シートの検出方法を構成します。
 - ユーザーがドキュメント間にセパレータ・シートを挿入しない場合、クライアントは、スキャナですべてのページをスキャンして、バッチ内の 1 つのドキュメントにします。スキャン後、ユーザーは、「[新規ドキュメントの作成](#)」オプションを使用して、ドキュメントを定義できます。
- **ユーザーに確認:** このオプションでは、スキャンを開始するたびに「ドキュメント作成オプション」ダイアログを表示し、バッチ内でのドキュメントの作成方法を尋ねます。ユーザーは、固定ページ数(1 ページまたは 2 ページ)または可変ページ数を選択できます。

セパレータ・シート使用の構成

セパレータ・ページを使用してドキュメントを区切る条件を決定するクライアント・プロファイルを構成できます。ファイル・サイズが指定したバイトしきい値以下であるイメージには、新規のドキュメントが作成され、セパレータ・シートが削除されます。

セパレータ・シートが検出されるようにクライアント・プロファイルを構成するには:

1. クライアント・プロファイルを追加または編集し、「ドキュメント索引付け設定」ページを選択します。

セパレータ・シートを検出するには、「プロファイル・タイプ」フィールドが「2-キャプチャと索引」に設定され、「ドキュメント作成オプション」フィールドが「可変ページ数」または「ユーザーに確認」のいずれかに設定されている必要があります。これらのフィールドで他の設定が選択されている場合、「セパレータ・シートのバイトしきい値」フィールドの設定は有効になりません。

さらに、「ドキュメント作成オプション」フィールドで「ユーザーに確認」を選択した場合、このセパレータ・シート・フィールドで指定したセパレータ・シートのしきい値をクライアント・ユーザーがオーバーライドできます。

2. ページ設定の「セパレータ・シートのバイトしきい値」フィールドで、値を指定します。

白黒(200 x 200 DPI イメージ)の場合、推奨されるバイト値は 1500 です。この設定では、空白のセパレータ・ページと少量のテキストを含むページは通常は区別されます。

「空白ページのバイトしきい値」フィールドでも、空白ページを検出するためのしきい値を設定できます。ただし、その場合、検出された空白ページは削除されるため、セパレータ・シートとしては処理されません。

ノート:

両方のフィールドに 0 以外の値を指定した場合、「セパレータ・シートのバイトしきい値」フィールドのみが使用されます。「空白ページのバイトしきい値」フィールドは無視されます。空白ページの削除の詳細は、[空白ページの検出の構成](#)を参照してください。

3. 「送信」をクリックして、クライアント・プロファイルを保存します。

クライアント・プロファイルでの依存選択リストの使用

依存選択リストには、親フィールドにリンクされた 2 つ以上の子選択リストが含まれています。ユーザーが親フィールドで選択を行うと、そのうちの 1 つが表示されます。メタデータ・フィールド定義を介してクライアント・プロファイルに複数の選択リストを適用できますが、依存選択リスト定義は 1 つのみです。

クライアント・プロファイルで依存選択リストを使用するには:

1. 「メタデータ」タブで、[2 つ以上の選択リストを作成](#)し、それらにリンクする[依存選択リスト](#)を作成します。
2. 「キャプチャ」タブで、[クライアント・プロファイルを追加または編集](#)します。
3. 「ドキュメント索引付け設定」ページの「[依存選択リスト](#)」フィールドで、ステップ 1 で作成した依存選択リストを選択します。
4. 「送信」をクリックして、クライアント・プロファイルを保存します。

クライアントで、ユーザーが使用するよう[に依存選択リストをテスト](#)します。

クライアント・プロファイルでのアセット・ルックアップの有効化

クライアント・プロファイルでアセット・ルックアップを有効にできるようにするには、まず「メタデータ」タブで[アセット・ルックアップを作成](#)します。

クライアント・プロファイルでアセット・ルックアップを有効にするには:

1. 「**キャプチャ**」タブで、[クライアント・プロファイルを追加または編集](#)します。
2. 「**ドキュメント索引付け設定**」ページで[アセット・ルックアップ表](#)に移動し、をクリックします。
3. **アセット・ルックアップの有効化**ダイアログで、**アセット・ルックアップ**・ドロップダウン・リストから「**メタデータ**」タブで作成したルックアップを選択します。
4. **返されるアセットの上限**ボックスに、ルックアップ時に返されるアセットの数を指定する数値を入力します。デフォルト値は「10」です。
5. 必要に応じて、**常にアセットを表示**チェック・ボックスを選択します。
6. 「**OK**」をクリックして構成を完了します。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントで、ユーザーが使用するよう[にアセット・ルックアップをテスト](#)します。

クライアント・プロファイルでのドキュメント・プロファイルの構成

ドキュメント・プロファイルによって、特定タイプのドキュメントの索引付けに使用できるメタデータ・フィールドのセットと、ドキュメントに使用可能な添付タイプのセットが指定されます。クライアント・プロファイルを構成するときは、索引付けする、またはプロファイルでキャプチャと索引付けの両方を行うすべてのタイプのドキュメントに対してドキュメント・プロファイルを選択します。

[ドキュメント・プロファイルの追加または編集](#)を参照してください。

クライアント・プロファイルでドキュメント・プロファイルを構成するには:

1. [クライアント・プロファイルを追加または編集](#)し、「**ドキュメント索引付け設定**」ページを選択します。

このページにアクセスするには、「**一般設定**」ページの「**プロファイル・タイプ**」フィールドで索引付けオプション(「**2 - キャプチャと索引**」または「**3 - 索引のみ**」)を選択する必要があります。
2. ページ設定で、「**ドキュメント・プロファイル**」フィールドに入力します。
 - リストされた 1 つ以上のドキュメント・プロファイルを選択します。
 - 「**すべて**」を選択すると、定義されたすべてのドキュメント・プロファイルがユーザーが選択できるようになります。
 - 「**デフォルト**」を選択すると、プロシージャに定義されているすべてのメタデータ・フィールドおよび添付タイプが単一のプロファイル内で使用可能になります。このオプションはトラブルシューティングに役立ちます。
3. 「**送信**」をクリックして、クライアント・プロファイルを保存します。

クライアント・プロファイルへのセキュリティ・アクセスの付与または削除

コンテンツ・キャプチャでは、次のクライアント・セキュリティ・レイヤーが提供されます:

- システム管理者は、適切なユーザー・ロール(CECCaptureClient)を割り当てて、ユーザーがコンテンツ・キャプチャ・クライアントにサインインできるようにする必要があります。
- プロシージャ・マネージャには *プロシージャ・マネージャ* およびユーザー・ロールが付与され、「プロシージャ」ページにアクセスして構成したり、コンテンツ・キャプチャ・クライアントにアクセスして構成をテストできます。
- 特定のクライアント・プロファイルを表示したり、アクセスするために、プロシージャ・マネージャはユーザーにプロファイルへのセキュリティ・アクセスを割り当てます。

コンテンツ・キャプチャ・ユーザーにクライアント・プロファイルへのセキュリティ・アクセスを付与するには:

1. **クライアント・プロファイルを追加または編集し、「セキュリティ」** ページを選択します。

「クライアント・プロファイル・ユーザー」表に、クライアント・プロファイルにアクセスできるユーザーおよびグループがリストされます。ユーザー・グループを

選択して  をクリックし、ユーザー・グループを削除できます。クライアント・プロファイルへのアクセス権をユーザーまたはグループから削除すると、プロファイルは、新しいバッチをキャプチャするためのコンテンツ・キャプチャ・クライアントの「**クライアント・プロファイル**」フィールドに表示されなくなります。ただし、ユーザーは、別のクライアント・プロファイルが選択されているプロファイルでキャプチャされたバッチに引き続きアクセスできる場合があります。

2. クライアント・プロファイル・ユーザーを追加するには、「**クライアント・プロファイル・ユーザー**」表で  をクリックします。
3. 「**セキュリティ・メンバーの追加**」ダイアログで、1人以上のユーザーまたはグループを検索し、追加します。このテキスト・フィールドでは、特定のメンバー名を検索します。「*」文字をグループ名またはユーザー名のワイルドカードとして使用できます。
4. 選択したセキュリティ・メンバーを追加して「**送信**」をクリックし、クライアント・プロファイルを保存します。

追加したユーザーとしてクライアントにログインします。クライアント・プロファイルがオンラインの場合、「**クライアント・プロファイル**」フィールドに表示されます。

クライアント・プロファイルの後処理の構成

クライアント・ユーザーは、バッチで作業した後、バッチのロックを解除するか、リリース・プロセスを介してリリースします。バッチの次のステップは、リリース・プロセスを使用して指定した後処理構成によって異なります。バッチは、プロシージャに定義されたアクティブなコミット・プロファイルに基づいてコミット処理されます。または、[TIFF への変換ジョブへのバッチ・フロー](#)、[PDF への変換ジョブへのバッチ・](#)

フロー、認識プロセッサ・ジョブへのバッチ・フロー、アセット・ルックアップ・ジョブへのバッチ・フローまたは XML 変換ジョブへのバッチ・フローなどのさらなる処理のためにキューに入れられます。

クライアント・プロファイルの後処理を構成するには:

1. クライアント・プロファイルを追加または編集し、「後処理」ページを選択します。
2. 「使用可能なリリース・プロセス」表で、リリース・プロセスを追加または編集します。
3. 「送信」をクリックして、クライアント・プロファイルを保存します。

リリース・プロセスの追加、編集または削除

リリース・プロセスを追加、編集または削除するには:

1. クライアント・プロファイルを追加または編集し、「後処理」ページを選択します。
2. 「使用可能なリリース・プロセス」表で、 をクリックし、リリース・プロセスを追加します。表でリリース・プロセスを選択して  または  をクリックし、編集したり、削除することもできます。
3. 「リリース・プロセス設定」ダイアログで次のようにして「OK」をクリックします:
 - a. リリース・プロセスの名前および説明を入力します。この名前は、選択したリリース・プロセスとして Oracle Content Capture Client 内に表示されます。
 - b. 「バッチ・プロセッサ」フィールドで、ユーザーがこのクライアント・プロファイルでキャプチャされたバッチをリリースした後の次のステップを指定します。次のうちから選択できます:
 - **コミット・プロセッサ:** 最終コミット(出力)を行うために、バッチをこのプロセッサに送信する場合に選択します。たとえば、ユーザーがバッチを取得して完全に索引付けした後に、このステップを選択できます。
 - **認識プロセッサ:** バー・コード認識を行うために、バッチをこのプロセッサに送信する場合に選択します。たとえば、バーコード認識によって自動的に索引付けするために、スキャンはされているが索引付けされていないバッチを送信する場合があります。
 - **TIFF への変換:** ユーザーがインポートしたイメージ以外のドキュメントをイメージ形式に変換するために、バッチをこのプロセッサに送信する場合に選択します。
 - **PDF への変換:** ドキュメントを PDF に変換するために、バッチをこのプロセッサに送信する場合に選択します。
 - **アセット・ルックアップ・プロセッサ:** アセット・ルックアップを有効にするために、バッチをこのプロセッサに送信する場合に選択します。
 - **XML 変換プロセッサ:** このプロセッサにバッチを送信して XML ドキュメントの XML 変換を有効にする場合に変換します。
 - c. 次のステップとして TIFF/PDF への変換または認識処理を指定した場合は、「バッチ・プロセッサ・ジョブ」フィールドで実行する変換ジョブまたは認識ジョブを選択します。
 - d. オプションで、「デフォルト」フィールドを選択し、このリリース・プロセスをクライアント・プロファイルのデフォルトのリリース・プロセスとして指定します。

インポート・プロセッサ・ジョブの構成

インポート・プロセッサ機能を使用すると、電子メール、ネットワーク・フォルダ、またはリスト・ファイルからコンテンツ・キャプチャ・プロシージャへのドキュメントの一括インポートを自動化できます。

インポート処理およびドキュメントの一括インポートを自動化するように構成する方法について学習するには、次を参照します:

- [インポート処理について](#)
- [インポート・プロセッサ・ジョブの追加または編集](#)
- [インポート・プロセッサ・ジョブの非アクティブ化または削除](#)
- [インポート・プロセッサ・ジョブでの空白ページ検出の構成](#)
- [電子メール・メッセージおよび電子メール添付のインポートの構成](#)
- [電子メール・インポート用の Google Mail \(OAuth\) の設定](#)
- [リスト・ファイル・インポートの構成](#)
- [リスト・ファイル・インポート時の添付のインポート](#)
- [フォルダからのファイル・インポートの構成](#)
- [インポート中のメタデータ割当ての構成](#)
- [インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成](#)

インポート処理について

インポート・プロセッサでは、電子メール、ネットワーク・フォルダ、またはリスト・ファイルから Oracle Content Management へのドキュメント(イメージおよびイメージ以外)の一括インポートを自動化できます。

主なインポート・プロセッサ・ジョブ設定

インポート・プロセッサによるイメージやその他の電子ドキュメントのコンテンツ・キャプチャへの自動インポートを、多機能デバイス、サードパーティ・ソフトウェアを使用してスキャンされるイメージ、電子メールの添付として送信されるドキュメントなどのアプリケーションに適用できます。

インポートするファイルに応じて、次のインポート・プロセッサ・ジョブを作成できます:

- **電子メール・ソース:** 電子メール・ソース・プロセッサ・ジョブでは、インポート・プロセッサは、受信電子メール・メッセージに添付されたファイルをコンテンツ・キャプチャにインポートします。また、電子メールの本文や電子メール・メッセージ全体をインポートすることもできます。
- **フォルダ・ソース:** フォルダ・ソース・プロセッサ・ジョブでは、インポート・プロセッサはインポート・フォルダをモニターし、指定したファイル・マスクで検出されたすべてのファイルをインポートします。
- **リスト・ファイル・ソース:** インポート・プロセッサはインポート・フォルダをモニターし、インポートする各ファイル、インポートする 0 個以上の添付ファイル、

さらにオプションでファイルに割り当てられるメタデータ値を識別するレコードを含むリスト(テキスト)ファイルを読み取ります。

インポート処理に関する重要なポイント

- キューに入れられたバッチを処理する他のバッチ・プロセッサとは異なり、インポート・プロセッサは、指定された頻度(30 秒ごとから 1 日 1 回の範囲)でポーリングし、インポートするファイルを指定されたソースで検索し、見つかった場合は処理を開始します。
- 「**インポート・ソース設定**」 ページで、選択したソース(電子メールまたはフォルダ)に固有の次のような設定を構成します:
 - 電子メール・ソースの場合、モニターする電子メール・アカウント、およびインポートする電子メール・メッセージや添付を指定できます。
 - リスト・ファイル・ジョブの場合、フォルダおよび読み取るリスト・ファイルを特定できます。
 - フォルダ・インポート・ジョブの場合、インポートするフォルダおよびファイル・タイプを特定できます。

インポート・プロセッサ・ジョブの追加または編集

- インポート・プロセッサ・ジョブのプロシージャ要素がオンラインになっている間は、大きな変更を加えないでください。たとえば、ジョブで使用されるメタデータ・フィールドを変更または削除すると、バッチ内のデータがジョブの設定と一致なくなるためにエラーが発生します。
- プロセッサ・ジョブ設定を編集する場合は、クライアントを実行して、インポートされたバッチを表示します。クライアントで、バッチ・リストをリフレッシュして、新しくインポートされたバッチを確認する必要があります。

インポート・プロセッサ・ジョブを追加または編集するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. プロシージャの「**キャプチャ**」タブを開きます。
3. 「**インポート・プロセッサ・ジョブ**」表で、 をクリックして、新規のジョブを作成します。既存のジョブを編集するには、ジョブを選択して  をクリックします。

また、インポート・プロセッサ・ジョブを選択して  をクリックし、プロンプトが表示されたら新規の名前を入力して、インポート・プロセッサ・ジョブをコピーすることもできます。ジョブをコピーすると、すばやく複製および変更できます。

4. 「一般設定」ページで設定を選択します。
 - a. 「**インポート・ジョブ名**」フィールドに名前を入力し、「**バッチ接頭辞**」フィールドに接頭辞を入力します。インポートされたバッチは、この接頭辞の後に、新しいバッチが生成されるたびに 1 ずつ増える数字が付けられた名前になります。
 - b. 「**インポート・ソース**」フィールドで、インポートされるファイルのソースを指定します: **電子メール・ソース**、**フォルダ・ソース**または**リスト・ファイル・ソース**。
 選択したソースによって、「インポート・ソース設定」ページに表示される設定が決まります。

- c. **フォルダ・ソース**または**リスト・ファイル・ソース**の場合は、「**インポート頻度**」フィールドで、インポート・プロセッサ・ジョブでインポート対象のファイルがチェックされる間隔を指定します。選択できる値は、「30 秒ごと」、「1 分ごと」、「5 分ごと」、「15 分ごと」、「30 分ごと」、「1 時間ごと」または「毎日」です。「毎日」を指定した場合は、表示される**時間**フィールドと「**分**」フィールドで時間を指定します。
 - d. ページの他の設定に値を入力します(バッチの作成時にバッチに割り当てるデフォルトのバッチ・ステータスまたは優先度を指定するなど)。
5. 「**イメージ設定**」ページで、インポートされたイメージ・ファイルの書式設定と検証の方法に関連する設定を完了します。
- a. イメージ・ファイルを保存して、インポート・プロセッサがイメージ処理を実行せずにイメージをインポートできるようにする場合は、「**イメージ・ファイルを保存します**」オプションを選択します。このオプションを選択すると、このページの他のすべてのオプションが自動的に無効になります。保存されたイメージ・ファイル・ドキュメントの編集(ページの追加、ページの削除、ページの移動など)は不可能になります。
 - b. 「**イメージのダウンサンプル**」フィールドで、イメージの変換方法として、イメージ形式を保持する(**なし**)か、色をグレースケールに変換する(**色を 8 ビット・グレースケールにダウンサンプル**)か、あるいは白黒に変換する(**色またはグレースケールを白黒にダウンサンプル**)かを指定します。
 - c. 「**JPEG イメージの品質**」フィールドで、0 から 99 までの値を指定します(99 が最高品質で、85 がデフォルト設定)。このフィールドは、白黒のイメージには適用されません。
 - d. 「**イメージ検証に失敗した場合**」フィールドで、イメージ・ページで解凍検証に失敗した場合の処理を指定します:
 - **バッチに失敗しました:** バッチ全体がエラー状態になり、コンテンツ・キャプチャ・クライアントに送信されます。
 - **ファイルを分離します:** 失敗したドキュメントのみが含まれる新しいバッチを作成します。失敗していない他のドキュメントは正常に処理されます。
 - **バッチの削除:** このオプションは、「一般設定」ページでインポート・ソースとして**電子メール・ソース**を選択した場合に使用可能になります。
 - **ファイルのスキップ:** このオプションは、「一般設定」ページでインポート・ソースとして**電子メール・ソース**を選択した場合に使用可能になります。
 - e. **白黒の空白ページのバイトしきい値**フィールドと**カラーまたはグレースケールの空白ページのバイトしきい値**フィールドに、ファイル・サイズ値(バイト)を入力します。サイズがしきい値以下のイメージは空白ページとみなされ、削除されます。

 **ノート:**

白黒(200 x 200 DPI イメージ)の場合、推奨される値は 1500 です。この設定では、空白のページと少量のテキストを含むページは通常は区別されます。

6. 「ドキュメント・プロファイル」ページで、インポートされたドキュメントへのメタデータの割当てに関連する設定を構成します。 [インポート中のメタデータ割当ての構成](#)を参照してください。
7. 「インポート・ソース設定」ページで、ソースに固有の設定を構成します。
 - 電子メール・ソース・ジョブについては、 [電子メール・メッセージおよび電子メール添付のインポートの構成](#)を参照してください。
 - フォルダ・ソース・ジョブについては、 [フォルダからのファイル・インポートの構成](#)を参照してください。
8. 「後処理」ページで、インポート処理の完了後に実行する処理を指定します。 [インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成](#)を参照してください。
9. 「インポート・ジョブのサマリー」ページの設定を確認し、「送信」をクリックします。

これで、作成したインポート・プロセッサ・ジョブをテストし、頻度を「30 秒ごと」に設定し、フォルダまたは電子メール・アカウントを監視して処理アクティビティを表示できるようになります。

インポート・プロセッサ・ジョブの非アクティブ化または削除

インポート・ジョブを削除すると、インポート・プロセッサは指定された頻度でファイルをモニターしなくなります。インポート・ジョブがオンラインの場合、ジョブの「一般設定」ページの「**インポート頻度**」フィールドで指定された間隔で実行されます。ジョブの実行を一時的に停止(オフラインにする)したり、非アクティブ化されたジョブを変更して再度実行できます。

インポート・プロセッサ・ジョブを非アクティブ化または削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「**キャプチャ**」タブを開きます。
3. 「**インポート・プロセッサ・ジョブ**」表で、まず非アクティブ化するジョブを選択し、 をクリックします。
「一般設定」ページで「**オンライン**」フィールドを選択解除したり、選択して、インポート・プロセッサ・ジョブを非アクティブにしたり、アクティブにすることもできます。
4. 非アクティブ化したジョブを選択して、 をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「はい」をクリックしてこのインポート・プロセッサ・ジョブを削除することを確認します。

インポート・プロセッサ・ジョブでの空白ページ検出の構成

多くの場合、ユーザーは空白ページを含むイメージ・ドキュメントをインポートします。空白ページを自動的に検出してドキュメントから削除するようにコンテンツ・キャプチャを構成できます。これを行うには、サイズがしきい値以下のイメージが空白ページとみなされるように、しきい値ファイル・サイズを指定するだけです。

空白ページの検出を構成するには:

1. インポート・プロセッサ・ジョブを追加または編集し、「イメージ設定」ページを選択します。
2. 白黒の空白ページのバイトしきい値フィールドとカラーまたはグレースケールの空白ページのバイトしきい値フィールドに、ファイル・サイズ値(バイト)を入力します。これらのフィールドは、インポートされるイメージ・ファイルにのみ適用され、イメージ以外のファイルには適用されません。空白のイメージを保存する必要がある場合は、かわりに「イメージ・ファイルを保存します」オプションを選択します。
3. 「送信」をクリックして、インポート・プロセッサ・ジョブを保存します。

クライアントでこの構成の結果を確認できます。空白のイメージは有効なイメージとして後処理されます。

電子メール・メッセージおよび電子メール添付のインポートの構成

インポート・プロセッサは、受信電子メール・メッセージに添付されているファイルを、件名や本文テキストなどの電子メール・メッセージ要素とともにコンテンツ・キャプチャにインポートします。インポートされた各電子メール・メッセージはバッチになり、添付、メッセージ本文や電子メール・メッセージ全体などの電子メール要素はバッチ内の個別のドキュメントとして作成されます。

関連項目: [モニター対象電子メール・アカウントからのファイルのキャプチャ](#)

電子メール・インポート・プロセッサ・ジョブの設定を構成するには:

1. インポート・プロセッサ・ジョブを追加、編集またはコピーするには、「一般設定」ページの「インポート・ソース」フィールドで電子メール・ソースを選択します。
2. メール・インポートを構成するには、「インポート・ソース設定」ページを選択します。
3. 「電子メール・アカウント」タブで、インポート・プロセッサ・ジョブの接続先の電子メール・サーバーを構成します。

接続プロトコル	使用可能なオプション	値
標準 IMAP 電子メール・サーバー	標準 IMAP 電子メール・サーバー	DNS 名または IP アドレスを入力します。たとえば、 <code>emailserver.example.com</code> です。この電子メール・サーバーは、TLS 1.2 以上をサポートし、ポート 993 を介した接続を受け入れる必要があります。
Microsoft Exchange Web Services	交換サービス・タイプ: Basic 認証。電子メール・アカウント資格証明のみ。	Microsoft Exchange Web サービスの URL を次の形式で入力します: <code>https://<hostname>/ews/exchange.asmx</code> 。たとえば、 <code>https://outlook.office365.com/ews/exchange.asmx</code> です。

接続プロトコル	使用可能なオプション	値
Microsoft Exchange Web Services	交換サービス・タイプ: OAuth。電子メール・アカウント資格証明と Exchange Online キー	<ul style="list-style-type: none"> • 「Microsoft Email Exchange サービス URL」フィールド: 使用する Exchange Web サービスの URL を次の形式で入力します: https:// <hostname>/ews/ exchange.asmx。たとえば、https:// outlook.office365.com/ews/ exchange.asmx です。 • 「アプリケーション・クライアント ID」、「アプリケーション・クライアント・シークレット」および「アプリケーション・テナント ID」: クライアント ID、クライアント・シークレットおよびテナント ID の値を取得するには、Azure ポータルを使用して新しいアプリケーションを登録します。詳細は、『Register an application with the Microsoft identity platform』を参照してください。 • 「アプリケーション範囲」の EWS.AccessAsUser.All: 必要な値を入力します。 • ユーザー・アカウントを追加し、その他のジョブ設定を構成します。
Google Mail (OAuth)	Google Mail (OAuth)	電子メール・インポート用の Google Mail (OAuth) の設定を参照してください

4. ジョブでメッセージをチェックする電子メール・アカウントを構成します:
 - a. 「処理する電子メール・アカウント」表で  をクリックします。「電子メール・アカウントの追加/編集」ダイアログで、電子メール・アドレスおよびパスワードを入力し、ジョブが電子メール・アカウントにアクセスできるようにします。
 - b. 「検証」をクリックし、指定したアカウント情報を使用してコンテンツ・キャプチャが電子メール・サーバーに接続できることを確認します。必要に応じて、追加の電子メール・アカウントを含めます。
5. 「メッセージ・フィルタ」タブで、電子メール・メッセージや添付を検索する場所と方法を指定します。
 - a. 「処理するフォルダ」フィールドに、指定した電子メール・アカウントで検索する 1 つ以上のフォルダを入力します。デフォルト値はサーバーの受信ボックスです。複

数のフォルダを指定するには、フォルダを; (セミコロン)で区切ります。サブフォルダを指定するには、メール・サーバーに適用可能なパス・デリミタ(/ (スラッシュ)など)を folder/subfolder の形式で含めます。

- b. メッセージ・フィルタがジョブに適用されていないかぎり、デフォルトでコンテンツ・キャプチャは、指定されたフォルダ内のすべての電子メールを処理します。オプションで、「**メッセージ・フィルタ**」表で、検索する電子メール要素ごとに「**有効**」フィールドを選択し、「**フィールドの内容**」フィールドに検索する文字を入力します。

たとえば、件名またはメッセージ本文に *payment* という語を含む電子メールを検索するには、両方の検索フィールドに「**有効**」を選択し、「**フィールドの内容**」の各エントリに *payment* を含めて、「**OR**」検索演算子を選択します。
 - c. 「**検索演算子**」フィールドで、指定したメッセージ・フィルタに使用する検索演算子を選択します: 「**AND**」(デフォルト)を選択すると、すべての検索基準に一致した場合にのみインポートされ、「**OR**」を選択すると、いずれかの検索基準が一致した場合にインポートされます。
6. 「**処理**」タブで、電子メール・メッセージおよびその添付を処理する方法を指定します。含める情報を指定し、電子メール優先度に基づいて、バッチに割り当てる優先度を指定します。
- a. 「**電子メール・メッセージ・オプション**」で、メッセージ本文ファイルをインポートするかどうかを指定します。そのインポート形式(テキストまたは EML)と、添付が存在しない場合にそれを含めるかどうか、および電子メール・メッセージ全体(添付を含む)を EML ファイルとしてインポートするかどうかを指定します。
 - b. 「**これらのマスクと一致する添付を含める**」フィールドで、ファイル・マスクに基づいて添付ファイルを指定します。複数のファイル・マスクはカンマまたはセミコロンで区切って入力できます。たとえば、すべての PDF ファイル (*.pdf)を含めることができます。
 - c. 「**これらのマスクと一致する添付を除外する**」フィールドで、ファイル・マスクに基づいて除外する添付ファイルを指定します。複数のファイル・マスクはカンマまたはセミコロンで区切って入力できます。
 - d. オプションで、「**これらのマスクと一致する添付を含める**」フィールドおよび「**これらのマスクと一致する添付を除外する**」フィールドで指定したマスクと添付が一致していない場合に、電子メールを常に後処理するには、「**添付がマスクと一致しない場合は、常に後処理する**」を選択します。このフィールドが有効になっており、指定したマスクと添付が一致していない場合、電子メールのインポートは失敗したとみなされ、「**後処理**」タブの「**インポートの失敗時**」フィールドで指定した設定に従って後処理されます。

 **ノート:**

マスクと添付が一致しない場合に常に後処理するフィールドは、「**メッセージ本文ファイルのインポート**」フィールドおよび「**添付が存在しない場合に含める**」フィールドの両方が有効になっている場合に無効になります。

- e. 「**ドキュメントの順序付け**」で、電子メール・メッセージからの要素(メッセージ本文や添付など)をインポート済バッチ内でドキュメントとして並べる順序を指定します。

- f. 「**バッチ・ノートに含める**」で、メッセージ要素(「**受信日時**」、「**送信元アドレス**」、「**送信先アドレス**」、「**件名**」、「**メッセージ本文**」など)を選択します。
 - g. 「**バッチ優先度**」で、電子メールの優先度(「低」、「中」、「高」)に基づいて、新規の各バッチに優先度を割り当てます。たとえば、コンテンツ・キャプチャで優先度の高い電子メールにバッチ優先度 8 を割り当てる場合は、「**高**」フィールドに 8 を入力します。優先度が割り当てられていない電子メールは中優先度とみなされます。
7. 「**後処理**」タブで、インポートが成功または失敗した後の電子メール・メッセージに実行する処理を指定します。メッセージを削除して電子メール・アカウント内の指定のフォルダに移動したり、インポートが失敗した場合にはメッセージが削除されないように設定することができます。たとえば、ジョブを定期的に行う場合は、正常にインポートされた電子メールを指定のフォルダに移動して、再度インポートされないようにします。
 8. **インポート・プロセッサ・ジョブの追加または編集**の説明に従って、他のインポート・プロセッサ・ジョブ・ページに入力します。

これで、電子メール・インポート・ジョブをテストできます。インポート・プロセッサによって、構成した電子メール・アカウントのメッセージがチェックされ、フォルダ内で一致する電子メールが検索されます。一致する電子メールが見つかったら、インポート・プロセッサによって、電子メール・メッセージからインポートするドキュメントごとにコンテンツ・キャプチャ・バッチおよびドキュメントが作成されます。オプションで、インポート・プロセッサによりメタデータ・フィールドに電子メール・メタデータが入力され、正常にインポートされたメッセージが削除されるか、フォルダに移動されます。

コンテンツ・キャプチャによって、「**電子メール・アカウント**」タブで構成した電子メール・アカウントから電子メールが定期的にフェッチされます。ただし、特定の時間に電子メール・インポートをトリガーする場合は、「**インポート・プロセッサ・ジョブ**」表で電子メール・インポート・ジョブを選択し、 アイコンをクリックします。電子メール・インポート・ジョブがオフラインの場合、このアイコンは無効になります。

リスト・ファイル・インポートの構成

リスト・ファイル・インポート・ジョブでは、インポート・プロセッサはインポート・フォルダをモニターし、リスト・ファイルに一致するものを探します。リスト・ファイルに示されたドキュメント・ファイル、メタデータ値、および添付をインポートします。

コンピュータで**ファイル・インポート・エージェント**が稼働していることを確認します。

リスト・ファイル・インポート・プロセッサ・ジョブの設定を構成するには:

1. リスト・ファイルを生成します。
リスト・ファイルは、インポートするファイルの名前とその場所を示す区切り記号付きデータのレコードが含まれたテキスト・ファイルです。各レコードには、ドキュメントに割り当てたり、データベース・ファイルと照合したりするためのメタデータ値を含めることもできます。リスト・ファイルには、ドキュメントにインポートする 1 つ以上の添付レコードを含めることもできます。[リスト・ファイル・インポート時の添付のインポート](#)を参照してください。
2. **インポート・プロセッサ・ジョブ**を追加、編集またはコピーし、「一般設定」ページの「**インポート・ソース**」フィールドで「**リスト・ファイル・ソース**」を選択します。
3. 「一般設定」ページで、「**デフォルトのロケール**」、「**エンコーディング**」および「**デフォルトの日付書式**」フィールドに入力します。

これらのフィールドにより、インポート・プロセッサはロケールに基づいてリスト・ファイルを正しく読み取ることができます。

4. 「ドキュメント・プロファイル」ページで、キャプチャ・メタデータ・フィールドをリスト・ファイル値にマップし、**フィールド 1** から **フィールド n** のメタデータ属性を使用してリスト・ファイル内のフィールド位置を識別します。**インポート中のメタデータ割当ての構成**の説明のように、システム・レベルのフィールドをマップすることもできます。

たとえば、**Customer ID** メタデータ・フィールドをリスト・ファイルの各レコードの最初のフィールドにマップするには、「**メタデータ・フィールド・マッピング**」

表で **Customer ID** フィールドを選択して  をクリックし、「メタデータ・フィールド・マッピング」ダイアログの「**メタデータ属性**」フィールドで「**フィールド 1**」を選択します。

5. 「インポート・ソース設定」ページで設定を完了します。
 - a. 「**ファイル・マスク**」フィールドで、拡張子を入力してインポートするファイルのタイプを指定します。すべてのファイルをインポートする場合は、*.*を指定します。複数のマスクはセミコロン(;)文字で区切ります。
 - b. 指定したフォルダ内のサブフォルダからリスト・ファイルをモニターおよびインポートするには、「**サブフォルダの処理**」フィールドを選択します。
 - c. 「**新規バッチの作成**」オプションから、リスト・ファイルまたはインポート対象のフォルダごとに新しいバッチを作成するかどうかを指定します。フォルダごとにバッチを作成する場合、サブフォルダの処理ごとに新しいバッチが作成されます。
 - d. 「**フィールド・デリミタ**」フィールドで、リスト・ファイル内のフィールドの区切り方を指定します。リスト・ファイル・メタデータに使用されない区切り文字を使用します。
たとえば、|(パイプ)、,(カンマ)または~(チルダ)を入力します。
 - e. 「**ドキュメントごとの最大フィールド数**」フィールドで、メタデータ・フィールドにマップするリスト・ファイル内のフィールドの最大数を指定します。
 - f. 「**ドキュメント・ファイルのフィールド位置**」フィールドで、ドキュメント・ファイルの名前と場所のリスト・ファイル・フィールドの位置を入力します。たとえば、リスト・ファイルの各レコードの最初のフィールドでドキュメント・ファイルのパスと名前を識別する場合、1 と入力します。

ノート:

指定したドキュメント・ファイルのフィールドの位置にインポートするファイルのパスが含まれていない場合、ファイルは処理しているリスト・ファイルと同じフォルダにあるものと見なされます。

- g. 「**リスト・ファイルの後処理**」フィールドで、ジョブが定期的に行われる場合にリスト・ファイルが再度インポートされないように、インポート後にリスト・ファイルを変更する方法を指定します。つまり、リスト・ファイル名を変更して、ジョブに指定された**ファイル・マスク**と一致しないようにする必要があります。削除したり、拡張子を変更したり、接頭辞を追加したりできます。
- h. 「**ドキュメント・ファイルの後処理**」フィールドで、インポートの成功後、指定した場所からドキュメント・ファイルとその添付を削除するかどうかを指定します。

6. インポート・プロセッサ・ジョブの追加または編集の説明に従って、他のインポート・プロセッサ・ジョブのページを完了します。
7. リスト・ファイル・インポート・ジョブをテストします。

指定された頻度でジョブがアクティブ化されると、インポート・プロセッサは、指定されたファイル・マスクに一致するリスト・ファイルがないかフォルダをチェックし、リスト・ファイルで識別されたドキュメント・ファイルとその添付をインポートし、オプションでメタデータ・フィールドにリスト・ファイル・データを移入してリスト・ファイルを削除または名前変更します。

リスト・ファイル・インポート時の添付のインポート

リスト・ファイルの処理時に、インポート・プロセッサによってドキュメント・ファイル、メタデータ値、およびリスト・ファイル内で指定された添付がインポートされます。リスト・ファイル内の添付を定義する形式は次のとおりです：

```
@Attachment[delimiter][Attachment Type][delimiter][Attachment File]
```

または

```
@Support[delimiter][Attachment Type][delimiter][Attachment File]
```

@Attachment コマンドの使用をお勧めします。

インポート・プロセッサは、ある添付レコードを処理するときに、その前のレコードで指定されたドキュメントの添付をインポートします。したがって、添付がリスト・ファイルの最初のレコードとして指定されていない必要があります。添付を最初のレコードとして指定すると、エラーが発生します。

例 11-1 例:

```
Doc1.TIF|Corp 1|Invoice
@Attachment|PO|PO1.TIF
Doc2.TIF|Corp 2|Invoice
```

前述の例では、PO1.TIF が Doc1.TIF ドキュメントのドキュメント添付としてインポートされます。1つのドキュメントに対して複数の添付レコードを指定できます。

例 11-2 例:

```
Doc1.TIF|Corp 1|Invoice
@Attachment|PO|PO1.TIF
@Attachment|Contract|Contract1.PDF
@Attachment|Contract|Amendment1.PDF
Doc2.TIF|Corp 2|Invoice
```

添付ファイルが複数ページ TIFF の場合、各ページが別個のバッチ・アイテムとしてインポートされて 1つの添付にアSEMBルされます。

フォルダからのファイル・インポートの構成

フォルダ・インポート・ジョブでは、インポート・プロセッサがインポート・フォルダを監視し、指定されたファイル・マスクを使用して見つかったすべてのファイルをインポートします。

コンピュータでファイル・インポート・エージェントが稼働していることを確認します。

フォルダ・インポート・プロセッサ・ジョブ設定を構成するには:

1. **インポート・プロセッサ・ジョブを追加、編集またはコピー**し、「一般設定」ページの「**インポート・ソース**」フィールドで**フォルダ・ソース**を選択します。
2. 「インポート・ソース設定」ページで、設定を構成します。
 - a. 「**ファイル・マスク**」フィールドで、拡張子(*.tif や*.pdf など)を入力して、インポートするファイルのタイプを指定します。すべてのファイルをインポートする場合は、*.*を指定します。複数のマスクはセミコロン(;)文字で区切ります。
 - b. プロセッサをインポートして、このフォルダ内のサブフォルダからのファイルを監視およびインポートする場合は、「**サブフォルダの処理**」フィールドを選択します。
 - c. 「**新規バッチの作成**」フィールドで、インポートされた各ファイルまたはインポートされた各フォルダとともに新規バッチを作成するかどうかを指定します。各フォルダにバッチが作成されるとき、フォルダのサブフォルダに対してもバッチが作成されます。
 「**フォルダごと**」オプションを選択すると、「**バッチ当たりのインポートされる最大ファイル数**」が有効になります。500 を超えない数を入力してください。
 - d. 「**準備完了ファイル**」フィールドに、オプションで、フォルダの処理前にフォルダ(および該当する場合は各サブフォルダ)に存在している必要があるファイル名を入力します。このオプションは、準備完了ファイルが見つかるまでフォルダの処理を遅延させます。処理が完了すると、準備完了ファイルは削除されます。
 - e. 「**ファイルの処理順序**」の各フィールドで、プライマリおよびセカンダリのソート・タイプ、およびインポート・フォルダ内のファイルの処理順序を指定します。ソート・タイプのオプションは、「**なし**」(ソート・タイプなし)、「**ファイル名**」、「**ファイル拡張子**」または「**ファイル変更日**」であり、ソート順序のオプションは、「**昇順**」または「**降順**」です。
 - f. 「**ファイルの後処理**」の各フィールドで、ジョブが定期的に行われる場合にファイルが再びインポートされないように、インポート後のファイルの変更方法を指定します。このためには、ジョブに指定されている「**ファイル・マスク**」と一致しなくなるようにファイル名を変更する必要があります。ファイルを削除したり、ファイル拡張子を変更したり、接頭辞をファイルに追加することができます。「**空の場合、処理されたサブフォルダを削除**」フィールドを選択して、処理されたサブフォルダのクリーン・アップを実行することもできます。
3. **他のインポート・プロセッサ・ジョブ・ページ**に入力します。
4. フォルダ・インポート・ジョブをテストして、選択した頻度でジョブがアクティブ化されることを確認します。

インポート・プロセッサによって、フォルダ内のファイル・マスクと一致するファイルがチェックされます。一致するものが見つかった場合、そのファイルがインポートされて新規のバッチが作成され、メタデータ・フィールドに値が入力されて、指定したファイルが削除または名前変更されます。

インポート中のメタデータ割当ての構成

「ドキュメント・プロファイル」ページで、インポート処理時にインポート・ジョブの値をコンテンツ・キャプチャ・メタデータ・フィールドにマップする方法を構成できます。

インポート時のメタデータ割当てを構成するには:

1. インポート・プロセッサ・ジョブで「ドキュメント・プロファイル」ページを選択します。
2. 「**デフォルトのドキュメント・プロファイル**」フィールドで、インポートしたドキュメントに割り当てるドキュメント・プロファイルを指定します。選択したプロファイルによって、ドキュメントが分類されます。たとえば、ユーザーがクライアントでバッチを開くと、このドキュメント・プロファイルが選択されます。
3. 「**メタデータ・フィールド・マッピング**」表で、コンテンツ・キャプチャ・メタデータ・フィールドを選択したインポート・ソースに固有の値にマップします。
「メタデータ・フィールド」列で、移入するキャプチャ・フィールドを選択し、「**編集**」をクリックします。選択したデフォルトのドキュメント・プロファイルに関係なく、プロセス内のすべてのメタデータ・フィールドがマッピングに使用可能です。
4. 「**メタデータ・フィールド・マッピング**」ダイアログで設定を完了します。
 - a. 「**メタデータ属性**」フィールドでインポート・ソースのメタデータ値を選択します。デフォルト値を移入するには、このフィールドで「**デフォルト値**」を選択し、「**デフォルト値**」フィールドに値を指定します。
 - b. フォルダ・インポート・ジョブで、次の表にリストされているフォルダ、ファイルまたはパスに関連する属性を選択します:

システム属性	インポートされるファイルのパスなどの値(/import/expenses/20200426/ Customer1.pdf)
ファイル名	Customer1.pdf
ベース・ファイル名	Customer1
ファイル拡張子	pdf
フォルダ・パス	/import/expenses/20200426
フォルダ名	20200426
完全ファイル・パス	/import/expenses/20200426/Customer1.pdf
ファイル変更日時	ファイル変更日時 - システム値
インポート・エージェントのホスト名	ファイル・インポート・エージェントがインストールされたコンピュータのホスト名。

- c. 電子メール・インポート・ジョブで、次の表にリストされている電子メール・メッセージに関連する属性を選択します:

システム属性	説明
送信元の名前	送信元アドレスの別名
送信元アドレス	送信者の電子メール・アドレス

システム属性	説明
返信先の名前	メッセージの返信先の名前
返信先アドレス	メッセージの返信先アドレス
受信者名	メッセージの受信者名のコレクション
受信者アドレス	メッセージの受信者アドレスのコレクション
フォルダ	メッセージの取得元のフォルダ名
受信日	メッセージが受信された日時
送信日	メッセージが最初に送信された日時
件名	メッセージの件名
電子メール重要度	メッセージの低、通常、高の優先度の値
メッセージ ID	メッセージの一意の ID

- d. 任意のインポート・ジョブで、次の表にリストされている一般的なシステム属性を選択します:

システム属性	説明
インポート日時	バッチがインポートされた日時
インポート・ジョブ名	インポート・プロセッサ・ジョブに割り当てられた名前
デフォルト値	指定されたとおりに割り当てられたデフォルト値

5. 必要に応じて、「**メタデータ・フィールド・マッピング**」表の他のメタデータ・フィールドをマップします。

インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成

後処理設定を使用すると、インポート処理でバッチが完了した後に実行する処理を制御できます。

インポート・プロセッサ・ジョブの後処理を構成するには:

1. **インポート・プロセッサ・ジョブ**を追加または編集し、「後処理」ページを選択します。
2. 「**バッチ・プロセッサ**」フィールドで、次のステップ(バッチの作成とインポート処理の完了後に実行する処理)を選択します。「なし」を選択すると、クライアントはバッチをすぐに使用できるようになります。
3. 「**バッチ・プロセッサ・ジョブ**」フィールドで、実行する認識ジョブ、TIFF/PDF への変換ジョブ、アセット・ルックアップ・ジョブまたは XML 変換ジョブを選択します。ここでこれを選択できるのは、前のステップで認識プロセッサ、変換プロセッサ、アセット・ルックアップ・プロセッサまたは XML 変換プロセッサを選択した場合のみです。
4. 「送信」をクリックして変更を保存します。

電子メール・インポート用の Google Mail (OAuth) の設定

Google Mail OAuth を使用して受信電子メール・メッセージに添付されているファイルを件名や本文テキストなどの電子メール・メッセージ要素とともにコンテンツ・キャプチャにインポートするようにインポート・プロセッサを構成できます。インポートされた各電子メール・メッセージはバッチになり、添付、メッセージ本文や電子メール・メッセージ全体などの電子メール要素はバッチ内の個別のドキュメントとして作成されます。

Google (OAuth) 電子メール・インポートを設定するために必要なことは次のとおりです:

- [Google Mail アプリケーションの作成用のリダイレクト URL の取得](#)
- [電子メール・インポート用の Google Mail アプリケーションの構成](#)
- [キャプチャ電子メール・インポートのための Google メール OAuth](#)

Google Mail アプリケーションの作成用のリダイレクト URL の取得

Google Mail アプリケーションを構成できるようにするには、接続先の Oracle Content Management インスタンスのコンテンツ・キャプチャ・ホスト名および認可 URL 詳細が必要です。

リダイレクト URL を取得するには:

1. 管理者として Oracle Content Management にサインインし、コンテンツ・キャプチャに移動します。
2. プロシージャを開いて「**キャプチャ**」タブに移動します。
3. 「**インポート・プロセッサ・ジョブ**」表で、 をクリックして、新規のジョブを作成します。
4. 「一般設定」ページで次のようにします:
 - a. 「**インポート・ジョブ名**」フィールドに名前を入力し、「**バッチ接頭辞**」フィールドに接頭辞を入力します。インポートされたバッチは、この接頭辞の後に、新しいバッチが生成されるたびに 1 ずつ増える数字が付けられた名前になります。
 - b. 「**インポート・ソース**」フィールドで、**電子メール・ソース**を選択していることを確認します。
5. 「インポート・ソース設定」ページの「**接続プロトコル**」セクションで、「**Google Mail (OAuth)**」を選択します。
リダイレクト URL が表示されます。形式が `https://<hostname>.<domainname>.com:<port>/capture/admin/faces/completeAuthorization` の URL をコピーします。URL にポートが含まれている場合も含まれていない場合があります。ポートがない場合、URL の形式は `https://<hostname>.<domainname>.com/capture/admin/faces/completeAuthorization` になります

 ノート:

入力内容を送信したり、このページから移動したりしないでください。Google Mail アプリケーションを作成し、クライアント ID およびクライアント・シークレットを取得した後に、このページに戻り、[Google mail OAuth を構成](#)する必要があります。これらを「クライアント ID」および「クライアント・シークレット」フィールドに入力するためです。

電子メール・インポート用の Google Mail アプリケーションの構成

Google Mail アプリケーションを構成するには:

1. 別のブラウザ・ウィンドウで [Google API コンソール](#) に移動します。
2. Google 開発者コンソールですでに作成している場合、「**Manage resources**」ページにプロジェクトのリストが表示されます。まだ行っていない場合、次を実行します:
 - a. 「**CREATE PROJECT**」をクリックします。
 - b. **プロジェクト名**を入力します。
 - c. コンソールでプロジェクトを容易に識別できるようにするには、「**EDIT**」をクリックしてわかりやすい ID を入力して、「**Project ID**」を編集します。
 - d. 組織のリソースまたはフォルダを定義している場合、場所を選択する必要があります。そうでない場合、デフォルトを受け入れ、「**CREATE**」をクリックします。
プロジェクトが作成され、コンソールのプロジェクト・リストにリダイレクトされます。
3. 左上隅で  をクリックし、「**APIs & Services**」、「**Dashboard**」の順に選択します。

 ノート:

最近作成したプロジェクトのダッシュボードが表示されない場合、左上隅のドロップダウン・リストからプロジェクトを選択します。

4. 左側のサイドバーで、「**Library**」をクリックして「**API Library**」ページに移動します。次に、「**Gmail API**」ライブラリを検索し、これを有効にします。
5. 左上隅で  をクリックし、「**APIs & Services**」、「**OAuth consent screen**」の順に選択します。OAuth 承諾画面でターゲット・ユーザーを選択して、「**CREATE**」をクリックします。
6. アプリケーション登録の編集ページで、「**OAuth consent screen**」タブで次のようにします:
 - 「**App name**」フィールドで、製品名(Gmail App など)を入力します。
 - 「**User support email**」ドロップダウン・リストで、ユーザー・サポート用の電子メール・アドレスを選択します。

- 「Developer contact information」セクションにスクロール・ダウンし、「Email addresses」フィールドに電子メール・アドレスを入力します。
 - 「SAVE AND CONTINUE」をクリックします。
7. 「Scopes」タブで、次のようにします:
- a. 「ADD OR REMOVE SCOPES」をクリックします。
 - b. 「Update selected scopes」セクションで、次の Gmail API スコープのチェック・ボックスを選択するか、「Manually add scopes」ボックスにこれらのスコープを手動で入力して、「ADD TO TABLE」をクリックします次に、「UPDATE」をクリックします。
 - <https://www.googleapis.com/auth/userinfo.email>
 - <https://www.googleapis.com/auth/gmail.modify>
 - <https://www.googleapis.com/auth/userinfo.profile>
 - c. 「SAVE AND CONTINUE」をクリックします。
「Scopes」タブで、userinfo.email および userinfo.profile スコープが「Your non-sensitive scopes」セクションに表示され、gmail.modify スコープが「Your restricted scopes」セクションに表示されます。
8. 「Test users」タブで、「SAVE AND CONTINUE」をクリックします。
9. 「Summary」タブで、設定内容を確認し、「BACK TO DASHBOARD」をクリックします。
10. 「Testing」セクションの「Publishing Status」で「PUBLISH APP」をクリックし、「Push to production?」ダイアログで「CONFIRM」をクリックしてアプリケーションを公開します。
11. 左側のバーで「Credentials」をクリックして、次を実行します:
- a. 「Credentials」ページで「CREATE CREDENTIALS」をクリックして、「OAuth client ID」を選択します。
 - b. 「Application type」ドロップダウン・リストで「Web application」を選択します。
 - c. Gmail OAuth App Client など、クライアントに名前を付けます。
 - d. 「Authorized redirect URIs」で「ADD URI」をクリックして、「Content Capture」プロセスでコピーしたリダイレクト URL を貼り付けます。
 - e. 「Authorized JavaScript origins」で「ADD URI」をクリックしてリダイレクト URL を貼り付けますが、ドメインの後または URI にポートが含まれている場合はポートの後のすべてを削除します。
 - f. 「CREATE」をクリックします。
クライアント ID およびクライアント・シークレット値が「OAuth client created」ダイアログに表示されます。これらの値をメモして「OK」をクリックします。
- Oracle Content Management のコンテンツ・キャプチャに戻り、移動した場所から開始します。すなわち、クライアント ID およびシークレットの入力から開始し、[Google mail OAuth](#) を構成します。

キャプチャ電子メール・インポートのための Google メール OAuth

Google メール OAuth の電子メール・インポート・プロセッサ・ジョブ設定を構成するには:

1. キャプチャ・プロシージャに戻り、**移動した場所から開始**します。
2. 「**電子メール・アカウント**」タブで「**Google Mail (OAuth)**」接続プロトコルを作成しました。「**クライアント ID**」および「**クライアント・シークレット**」フィールドで **Google Mail アプリケーション**を構成したときにコピーしたクライアント ID およびシークレットを入力します。
3. 「**処理する電子メール・アカウント**」表で、 をクリックします。
4. 電子メール・プロセッサ・ジョブに電子メール・アカウントへのアクセス権を付与するには、**Google** メールサインイン・ページで、使用する電子メール ID の電子メール・アドレスとパスワードを入力します。
5. 「**許可**」をクリックして、選択した内容を確認します。
電子メール ID が、「**処理する電子メール・アカウント**」表の「**電子メール・アドレス**」列の下に表示されます。そのステータスは「**検証済**」になっているはずですが。ここまでに実行したステップを使用して、この表に別の **Google** メール ID を追加できます。電子メール ID を削除するには、表でその行を選択し、 をクリックします。
6. 「**メッセージ・フィルタ**」タブで、電子メール・メッセージや添付を検索する場所と方法を指定します。
 - a. 「**処理するフォルダ**」フィールドに、指定した電子メール・アカウントで検索する 1 つ以上のフォルダを入力します。デフォルト値はサーバーの受信ボックスです。複数のフォルダを指定するには、フォルダを; (セミコロン)で区切ります。サブフォルダを指定するには、メール・サーバーに適用可能なパス・デリミタ(/ (スラッシュ))などを **folder/subfolder** の形式で含めます。
 - b. メッセージ・フィルタがジョブに適用されていないかぎり、デフォルトでコンテンツ・キャプチャは、指定されたフォルダ内のすべての電子メールを処理します。オプションで、「**メッセージ・フィルタ**」表で、検索する電子メール要素ごとに「**有効**」フィールドを選択し、「**フィールドの内容**」フィールドに検索する文字を入力します。
たとえば、件名またはメッセージ本文に *payment* という語を含む電子メールを検索するには、両方の検索フィールドに「**有効**」を選択し、「**フィールドの内容**」の各エントリに **payment** を含めて、「**OR**」検索演算子を選択します。
 - c. 「**検索演算子**」フィールドで、指定したメッセージ・フィルタに使用する検索演算子を選択します: 「**AND**」(デフォルト)を選択すると、すべての検索基準に一致した場合にのみインポートされ、「**OR**」を選択すると、いずれかの検索基準が一致した場合にインポートされます。
7. 「**処理**」タブで、電子メール・メッセージおよびその添付を処理する方法を指定します。含める情報を指定し、電子メール優先度に基づいて、バッチに割り当てる優先度を指定します。
 - a. 「**電子メール・メッセージ・オプション**」で、メッセージ本文ファイルをインポートするかどうかを指定します。そのインポート形式(テキストまたは EML)と、添付が存在しない場合にそれを含めるかどうか、および電子メール・メッセージ全体(添付を含む)を EML ファイルとしてインポートするかどうかを指定します。
 - b. 「**これらのマスクと一致する添付を含める**」フィールドで、ファイル・マスクに基づいて添付ファイルを指定します。複数のファイル・マスクはカンマまた

はセミコロンで区切って入力できます。たとえば、すべての PDF ファイル(*.pdf)を含めることができます。

- c. 「これらのマスクと一致する添付を除外する」フィールドで、ファイル・マスクに基づいて除外する添付ファイルを指定します。複数のファイル・マスクはカンマまたはセミコロンで区切って入力できます。
- d. オプションで、「添付がマスクと一致しない場合は、常に後処理する」、「これらのマスクと一致する添付を含める」および「これらのマスクと一致する添付を除外する」を選択します。このフィールドが有効になっており、指定したマスクと添付が一致していない場合、電子メールのインポートは失敗したとみなされ、「後処理」タブの「インポートの失敗時」フィールドで指定した設定に従って後処理されます。

 ノート:

マスクと添付が一致しない場合に常に後処理するフィールドは、「メッセージ本文ファイルのインポート」フィールドおよび「添付が存在しない場合を含める」フィールドの両方が有効になっている場合に無効になります。

- e. 「ドキュメントの順序付け」で、電子メール・メッセージからの要素(メッセージ本文や添付など)をインポート済バッチ内でドキュメントとして並べる順序を指定します。
 - f. 「バッチ・ノートに含める」で、メッセージ要素(「受信日時」、「送信元アドレス」、「送信先アドレス」、「件名」、「メッセージ本文」など)を選択します。
 - g. 「バッチ優先度」で、電子メールの優先度(「低」、「中」、「高」)に基づいて、新規の各バッチに優先度を割り当てます。たとえば、コンテンツ・キャプチャで優先度の高い電子メールにバッチ優先度 8 を割り当てる場合は、「高」フィールドに 8 を入力します。優先度が割り当てられていない電子メールは中優先度とみなされます。
8. 「後処理」タブで、インポートが成功または失敗した後の電子メール・メッセージに実行する処理を指定します。メッセージを削除して電子メール・アカウント内の指定のフォルダに移動したり、インポートが失敗した場合にはメッセージが削除されないように設定することができます。たとえば、ジョブを定期的に行う場合は、正常にインポートされた電子メールを指定のフォルダに移動して、再度インポートされないようにします。
9. **インポート・プロセッサ・ジョブの追加または編集**の説明に従って、他のインポート・プロセッサ・ジョブ・ページに入力します。

これで、電子メール・インポート・ジョブをテストできます。インポート・プロセッサによって、構成した電子メール・アカウントのメッセージがチェックされ、フォルダ内で一致する電子メールが検索されます。一致する電子メールが見つかったら、インポート・プロセッサによって、電子メール・メッセージからインポートするドキュメントごとにコンテンツ・キャプチャ・バッチおよびドキュメントが作成されます。オプションで、インポート・プロセッサによりメタデータ・フィールドに電子メール・メタデータが入力され、正常にインポートされたメッセージが削除されるか、フォルダに移動されます。

コンテンツ・キャプチャによって、「電子メール・アカウント」タブで構成した電子メール・アカウントから電子メールが定期的にフェッチされます。ただし、特定の時間に電子メール・インポートをトリガーする場合は、「インポート・プロセッサ・ジョブ」表で電子メール・インポート・ジョブを選択し、 アイコンをクリックします。電子メール・インポート・ジョブがオフラインの場合、このアイコンは無効になります。

12

処理設定の構成

「**処理**」タブで、請求などの業務目的や、ドキュメントを検索しやすくする索引付けのために、ドキュメントのバー・コードを認識する必要があるかどうかを構成できます。このタブでは、インポートされたドキュメントを編成するための各種オプションを設定します。また、アセット・ルックアップ・ジョブもここで構成します。このタブで、イメージおよびイメージ以外のドキュメントの変換方法や添付の処理方法が自動的に決定されるように、PDF および TIFF への変換ジョブを構成します。また、「**分類**」タブで作成したドキュメント・プロファイルを変換ジョブ、認識ジョブおよびアセット・ルックアップ・ジョブに関連付けます。

「**処理**」タブで実行するタスクは次のとおりです：

- [認識プロセッサ・ジョブの構成](#)
- [PDF への変換ジョブの構成](#)
- [TIFF への変換ジョブの構成](#)
- [アセット・ルックアップ・ジョブの構成](#)
- [XML 変換ジョブの構成](#)

認識プロセッサ・ジョブの構成

認識プロセッサを使用すると、プロシージャでイメージ・ドキュメントのバー・コードの認識、ドキュメントの分割および索引付けを自動化できます。

認識処理について、また認識ジョブの構成方法および管理方法について学習するには、次を参照してください：

- [認識処理について](#)
- [一般的な認識プロセッサ・ジョブ設定の構成](#)
- [ドキュメント編成に基づいたジョブの構成](#)
- [バー・コード、パッチ・コードおよびセパレータ・ページ定義の構成](#)
- [静的なドキュメント・プロファイルまたは動的に決定されるドキュメント・プロファイルの指定](#)
- [メタデータ・フィールドの自動入力の指定](#)

認識処理について

認識プロセッサは、様々なドキュメントのシナリオと構成に対応するように設計されています。一般的な認識処理のシナリオは次のとおりです：

1. 認識ジョブは、クライアント・ユーザーがドキュメントを含んだ大規模なバッチをスキャンしてリリースした後の後処理として実行されます。
2. 認識ジョブは、バッチ内の各ページのバー・コードやパッチ・コードを検出します。

3. 選択されたジョブのドキュメント編成方法に基づいて、認識プロセッサはバッチのページを個々のドキュメントに分割します。
4. 認識ジョブは、バー・コード値、デフォルト値、または値をドキュメント・メタデータ・フィールドに適用することにより、ドキュメントに索引を付けます。
5. 認識処理後の後処理ステップとして、バッチはコミット・プロセッサにリリースされます。

認識プロセスの基礎となる主な概念は次のとおりです:

- [ドキュメント編成方法](#)
- [その他のキー認識プロセッサ・ジョブ設定](#)

ドキュメント編成方法

ドキュメントを編成するために認識プロセッサが必要とするのは、バッチに単一のイメージ形式のドキュメントが含まれていることです(その単一ドキュメントが実際には複数のドキュメントで構成されている場合もあります)。バッチの処理時、認識プロセッサは、選択されたドキュメント編成方法に従ってバッチを論理ドキュメントに編成します。たとえば、各ドキュメントに固定数のページが含まれるように指定したり、ドキュメントの間にセパレータ・ページが含まれるように指定したりできます。

ドキュメントがすでに分割されており、バー・コード認識のみが必要なバッチの場合、ドキュメントの編成をスキップするように認識ジョブを構成できます。認識ジョブの「ドキュメント編成」ページでドキュメントの編成方法を指定します。次のいずれかの方法を選択できます:

- [ドキュメントごとの固定ページ数 \(固定数のページを含むドキュメント用のジョブの構成\)](#)
- [各ページで同じバー・コード値 \(各ページで同じバー・コード値を持つドキュメント用のジョブの構成\)](#)
- [セパレータ・ページ \(ドキュメント間にセパレータ・ページがあるバッチ用のジョブの構成\)](#)
- [階層セパレータ・ページ \(階層セパレータのあるドキュメントにジョブを構成\)](#)
- [なし: ドキュメント編成を実行しない \(ドキュメントの編成を必要としないバッチ用のジョブの構成\)](#)

その他のキー認識プロセッサ・ジョブ設定

[ドキュメント編成方法](#)の他に、次の主要な相互関連認識ジョブ設定を使用すると、認識プロセッサで自動的にバー・コード認識、ドキュメント区切りおよび索引を実行できます:

- [バー・コードとパッチ・コードを検出および識別するための設定](#)
- [ドキュメントを区切るための設定](#)
- [添付を処理するための設定](#)
- [ドキュメントを分類するための設定](#)
- [メタデータ値を割り当てるための設定](#)
- [認識処理後の後処理設定](#)

バー・コードとパッチ・コードを検出および識別するための設定

認識ジョブを作成するときに、認識プロセッサがバー・コードを検出および識別する方法を指定できます:

- 「バー・コード認識」ページでは、デフォルトで「**ユニバーサル・デコーダ**」が選択されています。検出するバー・コード、バー・コードに固有の他の設定、およびパッチ・コード検出を指定します。認識プロセッサはすべてのページを検索して、ジョブで検出するように設定されたバー・コードを認識します。このページでは、次のオプションを使用できます:

表 12-1 ユニバーサル・デコーダのオプション

オプション	説明
1 次元コード	認識プロセッサで検索する 1 次元バー・コード・シンボルのリストから選択します。 選択できる 1 次元コードは次のとおりです: <ul style="list-style-type: none"> - Code 128 - Code 39
2 次元コード	認識プロセッサで検索する 2 次元バー・コード・シンボルを選択します。 選択できる 2 次元コードは次のとおりです: <ul style="list-style-type: none"> - PDF417 - QR コード
イメージ当たりのバー・コードの最大数	イメージ当たりのバー・コードの最大数を 0 から 10 までの範囲で指定します。この設定で指定された値が検出された場合、または値を超えた場合、デコーダはイメージの処理を停止します。この設定は、システムのパフォーマンスを最適化するのに役立ちます。 デフォルトでは、このオプションは 1 に設定されています。
バー・コードの最小の高さ	イメージに存在できるバー・コードの最小の高さを 0.2 から 3 までの範囲で指定します。 デフォルトでは、このオプションは 0.5 インチに設定されています。 この設定は、1 次元バー・コードにのみ適用されます。 この設定は、斜め方向のバー・コードを認識するのに役立ちます。
メジャーの単位	「バー・コードの最小高さ」の設定と「バー・コード最大幅」の設定の単位をドロップダウン・リストから選択します。使用可能なオプションは、「インチ」および「cm」です。小数精度は 3 です。
バー・コードの最大の幅	イメージに存在できるバー・コードの最大の幅を、「バー・コードの最小高さ」から 10 までの範囲で指定します。 デフォルトでは、このオプションは 2 インチに設定されています。 この設定は、1 次元バー・コードにのみ適用されます。 この設定は、斜め方向のバー・コードを認識するのに役立ちます。
バー・コードの最小文字数	処理時に考慮されるバー・コードの最小文字数を 1 から 1000 までの範囲で指定します。 デフォルトでは、このオプションは 1 に設定されています。

- ドキュメントに一定数のページを含むことを指定する場合は、ドキュメント当たりのページ数も指定する必要があります。ジョブでこの数に達すると、新規のドキュメントが識別され、バッチ内の次のドキュメントのカウントが再開されます。セパレータは必要ありません。
- ドキュメントの各ページに同じバー・コード値を含むことを指定する場合は、区切りに使用するバー・コード定義を指定する必要があります。異なるバー・コード値を含むバー・コード定義がジョブで見つかると、新規のドキュメントが作成されます。セパレータは必要ありません。
- セパレータ・ページに基づいてドキュメントを編成することを指定する場合は、単独セパレータまたは階層セパレータのいずれであっても、バー・コードやパッチ・コードのセパレータ・ルールを指定する必要があります。
- ドキュメント編成を実行しないことを指定した場合、前のドキュメント区切りが保持されます。特定の非定型的な構成においては、オプションでセパレータを使用できます。

添付を処理するための設定

「ドキュメント処理」ページで使用可能なオプションを使用して、作成したドキュメントにソース・ドキュメントの添付を含めるかどうか、および含める方法を指定できます。「ソース・ドキュメントの添付」フィールドで使用可能な次のオプションから選択できます:

- 作成したドキュメントにソース・ドキュメントのすべての添付を含める場合は、「**すべての添付を作成されたドキュメントに含める**」(デフォルト)オプションを選択します。
- ドキュメント・プロファイルで指定された添付タイプと一致するソース・ドキュメントのすべての添付を含める場合は、「**一致するドキュメント・プロファイル添付タイプの添付を含める**」オプションを選択します。
- 作成したドキュメントにソース・ドキュメントの添付を含めない場合は、「**添付を含めない**」オプションを選択します。

ノート:

「ドキュメント編成」ページで「**なし: ドキュメント編成を実行しない**」オプションを選択している場合、「ドキュメント処理」ページで「ソース・ドキュメントの添付」フィールドは使用できません。

ドキュメントを分類するための設定

ドキュメントを処理するとき、認識プロセッサは、ドキュメントの索引付けに使用可能なメタデータ・フィールドを識別するために使用するドキュメント・プロファイルを決定します。「ドキュメント・プロファイル」ページで、認識ジョブでドキュメントの処理時にドキュメント・プロファイルをドキュメントに割り当てる方法を指定します。[静的なドキュメント・プロファイルまたは動的に決定されるドキュメント・プロファイルの指定](#)を参照してください。選択したドキュメント編成方法によって、ドキュメント・プロファイルの割当てオプションが影響を受けます。次のようなドキュメント・プロファイル割当てを選択できます:

- 静的:** 「**デフォルトのドキュメント・プロファイル**」フィールドに入力します。
「**動的に決定しない**」フィールドが選択されている場合、または動的に決定される一致するドキュメント・プロファイルが見つからなかった場合は、認識ジョブでデフォルトのドキュメント・プロファイルが使用されます。

- **動的に決定:** ドキュメント編成に応じて、バー・コードまたはセパレータ・ページ値に基づいて決定されます。

メタデータ値を割り当てるための設定

「フィールド」ページでメタデータ値を割り当てるように認識ジョブを構成したり、バー・コード値、バッチ名、デフォルト値、スキャン日付、または索引日付のいずれかの値を自動移入するようプロシージャのメタデータ・フィールドを構成できます。

認識処理後の後処理設定

「後処理」ページで使用可能な設定を適用して、認識処理の完了後に実行する処理を指定できます:

- システム・エラーが発生していない場合、次のバッチ・プロセッサを指定し、該当する場合は、実行するジョブも指定します。たとえば、次のステップとしてコミット・プロセッサを設定します。また、後処理アクションに「なし」を指定することもできます。「なし」を選択した場合は、クライアントがバッチを処理する必要があります。たとえば、クライアントがバッチの正確性をレビューし、そのバッチをコミット・プロセッサにリリースする場合などです。)また、認識処理が正常に完了した後に、電子メール通知を送信し、バッチ名、ステータスおよび優先度を変更することもできます。
- 1 つ以上のシステム・エラーが発生した場合、次のバッチ・プロセッサを指定し、該当する場合は、実行するジョブも指定します。「なし」を選択すると、バッチが索引付けのためにクライアント・ユーザーにリリースされます。また、認識処理のシステム・エラーが発生したときに、電子メール通知を送信し、バッチ名、ステータスおよび優先度を変更して適切な担当者に通知することもできます。

一般的な認識プロセッサ・ジョブ設定の構成

これらは、認識プロセッサ・ジョブの使用時に実行する一般的なタスクです。(特定のタイプの認識ジョブの構成の詳細は、[ドキュメント編成に基づいたジョブの構成](#)を参照してください。)

- [認識ジョブの追加または編集](#)
- [認識ジョブの非アクティブ化または削除](#)
- [認識プロセッサ・ジョブの後処理および監視の構成](#)
- [認識プロセッサ・ジョブへのバッチ・フローの構成](#)

認識ジョブの追加または編集

認識ジョブを追加または編集するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。
3. 「認識プロセッサ・ジョブ」表で、 をクリックして、ジョブを作成します。ジョブを編集するには、それを選択して  をクリックします。

また、認識ジョブをコピーするには、それを選択して  をクリックし、プロンプトが表示されたら新規の名前を入力します。ジョブをコピーすると、すばやく複製および変更できます。

4. 「一般設定」 ページで、ジョブの名前を入力します。
5. 「バー・コード認識」 ページで、バー・コード認識に固有の設定を指定し、認識ジョブで検出するバー・コード・タイプ(シンボル)を識別します。
バー・コード・シンボルを使用すると、パフォーマンスが向上し、処理を妨げる可能性のある不明なバー・コードが検出されるリスクが減ります。
6. 「バー・コード定義」 ページで、バー・コード定義を追加します。
バックグラウンド情報については、[バー・コードとパッチ・コードを検出および識別するための設定](#)を参照してください。ステップについては、[バー・コード定義の追加または編集](#)を参照してください。
7. 「ドキュメント編成」 ページで、バッチ内のドキュメントの構成方法を指定します。
[ドキュメント編成方法](#)を参照してください。
8. 「ドキュメント・プロファイル」 ページで、ドキュメント・プロファイルを指定するか、ドキュメント・プロファイルが動的に決定されるように構成します。表示される設定は、選択したドキュメント編成方法に基づいています。デフォルトのドキュメント・プロファイルを選択する必要があります。
バックグラウンド情報については、[ドキュメントを分類するための設定](#)を参照してください。ステップについては、[静的なドキュメント・プロファイルまたは動的に決定されるドキュメント・プロファイルの指定](#)を参照してください。
9. 「ドキュメント処理」 ページで、ドキュメントの区切りおよび処理の方法を指定します。使用可能な設定は、選択したドキュメント編成方法に基づいています。ドキュメントを単独セパレータまたは階層セパレータで区切る場合は、バー・コードまたはパッチ・コードのセパレータ・ルールを構成します。
バックグラウンド情報については、[ドキュメントを区切るための設定](#)を参照してください。ステップについては、[セパレータ・ページ定義の構成](#)を参照してください。
このページでは、「ドキュメント編成」 ページでドキュメント編成方法を選択した場合に添付を含めるかどうかも指定できます。[添付を処理するための設定](#)を参照してください。
10. 「フィールド」 ページで、ドキュメントごとに、[メタデータ・フィールドに自動入力されるようにバー・コードまたは他の値を設定](#)します。
11. 「後処理」 ページで、認識処理の完了後に実行する処理を指定します。
[TIFF への変換ジョブの後処理および監視の構成](#)を参照してください。
12. 「サマリー」 ページの設定を確認し、「**送信**」 をクリックします。
13. [バッチが認識プロセッサ・ジョブへ送られる方法を構成](#)します。
14. 認識プロセッサ・ジョブをテストします。

認識ジョブの非アクティブ化または削除

認識ジョブを削除すると、このジョブが後処理ステップとして設定されているバッチにこのジョブは使用できなくなります。認識ジョブを削除する前に、オフラインにして予期しない問題を解決することをお勧めします。オンラインの認識ジョブは、クライアント・プロファイルまたはプロセッサ・ジョブの「後処理」 ページで選択されている場合に実行されます。

ジョブの実行を一時的に停止(オフラインにする)したり、非アクティブ化されたジョブを変更して再度実行できます。

認識ジョブを非アクティブ化または削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。
3. 「認識プロセッサ・ジョブ」表で、まず非アクティブ化するジョブを選択し、 をクリックします。
認識ジョブを非アクティブにしたり、アクティブにするには、「一般設定」ページで「オンライン」フィールドを選択したり、選択解除して、ジョブを非アクティブにしたり、アクティブにすることもできます。
4. 「認識プロセッサ・ジョブ」表で、非アクティブ化したジョブを選択し、 をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「はい」をクリックしてこの認識ジョブを削除することを確認します。

認識プロセッサ・ジョブの後処理および監視の構成

認識ジョブの後処理オプションを使用すると、処理の完了後に実行する処理を指定できます。このプロシージャ内に構成する設定は、成功したバッチと失敗したバッチとで別々に指定します。

後処理設定を構成するには:

1. 認識プロセッサ・ジョブを追加または編集します。
2. 「後処理」ページをクリックして、成功した処理(システム・エラーなし)および失敗した処理(1 つ以上のシステム・エラー)に対する処理オプションを表示します。
3. 「バッチ・プロセッサ」フィールドと「バッチ・プロセッサ・ジョブ」フィールドで、認識処理の完了後に実行する処理ステップ(ある場合)を指定します。「なし」、コミット・プロセッサ、認識プロセッサ、TIFF への変換、PDF への変換、アセット・ルックアップ・プロセッサまたは XML 変換プロセッサから選択できます。認識プロセッサまたは TIFF に変換/PDF に変換を選択した場合は、プロセッサ・ジョブを指定します。
たとえば、システム・エラーのないバッチをコミット・プロセッサに送信します。システム・エラーのあるバッチに対して「なし」を指定してから、クライアントで追加の処理ができるように、そのバッチ・ステータスまたは接頭辞を変更することができます。
4. 電子メール・アドレスのフィールドに、オプションで、処理が正常に完了または失敗した後に電子メールを送信する宛先のアドレスを入力します。認識プロセッサ・ジョブを構成およびテストしている間は、システム・エラーの発生時に自分に電子メール通知が送信されるように設定してください。また、その後で管理者に処理エラーが自動的に通知されるようにしてください。
5. 残りの各フィールドで、処理済のバッチを変更する方法を指定します。
 - 接頭辞を追加することにより、バッチの名前を変更します。たとえば、失敗したバッチは、フォローアップのために接頭辞 **ERR** を付けた名前に変更します。

- バッチ・ステータスまたは優先度を変更します。たとえば、システム・エラーのあるバッチのステータスを変更してから、バッチ・フィルタリングをこのステータスに設定したクライアント・プロファイルを作成すると、適格なユーザーが、エラーの発生したバッチを手動で編集して完了できるようになります。

6. 「送信」をクリックして、ジョブを保存します。

認識プロセッサ・ジョブへのバッチ・フローの構成

認識ジョブを実行するには、処理のためにジョブに送られるようにバッチを構成する必要があります。これを行うには、クライアント・プロファイルまたは他のプロセッサ・ジョブ内で認識プロセッサ・ジョブを後処理ステップとして指定します。

- クライアント・プロファイルからバッチ・フローを構成する場合は、[クライアント・プロファイルの後処理の構成](#)を参照してください。
- インポート・プロセッサ・ジョブからバッチ・フローを構成する場合は、[インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成](#)を参照してください。
- PDF または TIFF への変換ジョブからバッチ・フローを構成するには、[PDF への変換ジョブへのバッチ・フローの構成](#)および [TIFF への変換ジョブへのバッチ・フローの構成](#)を参照してください。

たとえば、ドキュメントをバッチにスキャンしてから認識処理用にリリースするためのクライアント・プロファイルを作成します。また、まず電子メール・メッセージとその PDF 添付をインポートしてから、それをイメージ形式に変換するために変換プロセッサに送信し、最終的に認識処理のためにドキュメントを送信するインポート・プロセッサ・ジョブを作成することもできます。

ドキュメント編成のスキップを計画していないかぎり、認識プロセッサではバッチに単一のイメージ形式ドキュメントが含まれていることが期待されます([ドキュメント編成方法を参照](#))。

ドキュメント編成に基づいたジョブの構成

様々な編成タイプの認識ジョブを構成する方法は次のとおりです:

- [固定数のページを含むドキュメント用のジョブの構成](#)
- [各ページで同じバー・コード値を持つドキュメント用のジョブの構成](#)
- [ドキュメント間にセパレータ・ページがあるバッチ用のジョブの構成](#)
- [階層セパレータのあるドキュメントにジョブを構成](#)
- [ドキュメントの編成を必要としないバッチ用のジョブの構成](#)

固定数のページを含むドキュメント用のジョブの構成

このドキュメント編成方法では、バッチには固定ページ数のドキュメントが含まれます。ジョブの「ドキュメント処理」ページで、ドキュメントごとのページ数と、バー・コードを読み取るドキュメント内のページ数を指定します。

この編成方法の例は次のとおりです:

- 各ページにバー・コードが存在し、各ページが一意的ドキュメントを表す 1 ページのドキュメント。この例では、各ページにバー・コードが含まれている必要があります、(バー・コ

ードが見つからないか認識されない)ページ 3 は手動でデータを入力する必要があります。

- 両面モードでスキャンされたページの表と裏などの 2 ページのドキュメント。通常、ドキュメントの最初のページにバー・コードが含まれていますが、ページの裏側が最初に誤ってスキャンされた場合、2 ページ目にバー・コードが含まれます。
- 固定数のページで構成される フォーム・ドキュメント。たとえば、組織のビジネス契約が常に 5 ページで構成される場合などです。ページ数が不明な場合、または添付がドキュメントでスキャンされる場合は、[セパレータ・ページ方法を使用](#)する必要があります。

固定数のページを含むドキュメントの認識ジョブを構成するには:

1. 「**処理**」タブで、[認識プロセッサ・ジョブを追加または編集](#)します。
2. 「ドキュメント編成」ページで「**ドキュメントごとの固定ページ数**」方法を選択します。
3. 「バー・コード認識」ページで、バー・コードが認識されるように構成します。
4. 「バー・コード定義」ページで、[バー・コードの検出方法を構成](#)します。
5. 「ドキュメント・プロファイル」ページで、「**デフォルトのドキュメント・プロファイル**」フィールドで以前に作成したドキュメント・プロファイル([ドキュメント・プロファイルの追加または編集](#))を選択し、認識ジョブに適用するメタデータ・フィールドのグループを指定します。選択したバー・コードを使用して、[ドキュメント・プロファイルを動的に決定](#)できます。
6. 「ドキュメント処理」ページで、「ドキュメント編成」ページで編成が設定された「**ドキュメントごとの固定ページ数**」ジョブに固有の設定を完了します。
 - a. 「**ドキュメントごとのページ数**」フィールドに、各ドキュメントに含める固定ページ数を入力します。
 - b. 「**バー・コードを読み取るドキュメントごとのページ数**」フィールドに数値を指定します。
この設定は、各ドキュメントの指定された最初からのページ数でバー・コード認識を実行することにより、パフォーマンスを最適化します。たとえば、バー・コードが 10 ページ中の 3 ページ目にある場合は、3 を指定して、各ドキュメントの最初の 3 ページでバー・コードが認識されるようにします。また、このフィールドを使用して、それより後のドキュメント・ページの競合するバー・コードが無視されるようにすることもできます。
 - c. 「**ドキュメント内で 1 つのバー・コードに複数の値が見つかった場合**」フィールドでアクション(最初に見つかった値を使用、バー・コード値を上書き、バー・コード値をクリア)を指定します。
 - d. 作成したドキュメントに[ソース・ドキュメントの添付を含める方法](#)を指定します。
7. 「フィールド」ページで[メタデータ割当て設定を構成](#)します。
8. 「**送信**」をクリックし、認識ジョブの機能をテストします。

各ページで同じバー・コード値を持つドキュメント用のジョブの構成

このドキュメント編成方法では、バッチは複数のページ・ドキュメントで構成され、1つのドキュメントの各ページに同じバー・コード値が含まれます。したがって、ページ間のバー・コード値の変化は、新しいドキュメントの始まりを示します。たとえば、顧客契約書には、各ページに顧客 ID バー・コードが含まれています。

ジョブの「ドキュメント処理」ページで、ジョブがドキュメントの区切りを決定するために使用するバー・コードとドキュメント当たりの最大ページ数を指定します。

各ページに同じバー・コード値を持つドキュメント用にジョブを構成するには:

1. 「処理」タブで、[認識プロセッサ・ジョブ](#)を追加または編集します。
2. 「ドキュメント編成」ページで、「[各ページに同じバー・コード値](#)」編成を選択します。
3. 「バー・コード認識」ページで、バー・コードが認識されるように構成します。
4. 「バー・コード定義」ページで、[バー・コードの検出方法を構成](#)します。少なくとも、ドキュメントの分割を決定する[バー・コードの定義を作成](#)します。
5. 「ドキュメント・プロファイル」ページで、「[デフォルトのドキュメント・プロファイル](#)」フィールドで以前に作成したドキュメント・プロファイル([ドキュメント・プロファイルの追加または編集](#))を選択し、認識ジョブに適用するメタデータ・フィールドのグループを指定します。選択したバー・コードを使用して、[ドキュメント・プロファイルを動的に決定](#)できます。
6. 「ドキュメント処理」ページで、選択したドキュメント編成(各ページに同じバー・コード値)に固有の設定を完了します。
 - a. 「[ドキュメント区切りを決定するバー・コード](#)」フィールドで、ステップ 4 で作成したバー・コード定義を選択します。
 - b. 「[ドキュメントごとの最大ページ数](#)」フィールドに数値を指定して、ドキュメントで許可されるページ数を制限します。これはオプションのフィールドです。ドキュメント当たりの最大ページ数の指定をスキップするには、0 を指定します。
 - c. 「[処理オプション](#)」フィールドで、オプションで「[オプティミスティック・バー・コード検出](#)」機能を有効にします。バー・コードが読み取れないか、ページに存在せず、この機能がアクティブな場合、認識プロセッサは前のページと次のページの値を比較し、それに応じて値を割り当てます。
たとえば、3 ページのバッチに、バー・コード A が指定された 1 ページ目、バー・コードがない 2 ページ目およびバー・コード A が指定された 3 ページ目があるとします。オプティミスティック・バー・コード検出機能が有効な場合、認識プロセッサは 3 つのページすべてを同じドキュメントにグループ化します。有効でない場合、1 ページ目と 3 ページ目は 1 つのドキュメントにグループ化され、2 ページ目は除外されます。
 - d. 「[ドキュメント内で 1 つのバー・コードに複数の値が見つかった場合](#)」フィールドでアクション(最初に見つかった値を使用、バー・コード値を上書き、バー・コード値をクリア)を指定します。
 - e. 作成したドキュメントに[ソース・ドキュメントの添付を含める方法](#)を指定します。
7. 「フィールド」ページで[メタデータ割当て設定を構成](#)します。
8. 「送信」をクリックし、認識ジョブの機能をテストします。

ドキュメント間にセパレータ・ページがあるバッチ用のジョブの構成

ドキュメント編成方法として「セパレータ・ページ」が選択されている場合、バッチは、ドキュメント・セパレータ・ページで区切られた複数ページ・ドキュメントで構成されます。(ドキュメント・セパレータの階層レベル用のドキュメントの編成については、[階層セパレータのあるドキュメントにジョブを構成](#)で説明されています。)この編成タイプを使用する場合:

- セパレータ・ページは、新しいドキュメントの始まりを示します。セパレータ・ページは、ドキュメントに保持したり、ドキュメントから削除できます。
- セパレータ・ページには、新しいドキュメントを示すバー・コードやバッチ・コードを含めることができます。
- セパレータ・ページの検出方法を規定したルールを作成します。たとえば、ドキュメントの分割が行われるのは、指定したバー・コードまたはバッチ・コードのいずれかが検出されたときか、両方を検出する必要があるかを構成します。[セパレータ・ページ定義の構成](#)を参照してください。

ドキュメント間にセパレータ・ページがあるバッチ用にジョブを構成するには:

- 「処理」タブで、[認識プロセッサ・ジョブを追加または編集](#)します。
- 「ドキュメント編成」ページで「セパレータ・ページ」方法を選択します。(この方法は、デフォルトのドキュメント編成です。)
- 「バー・コード認識」ページで、バー・コード記号が認識されるように構成します。
- 「バー・コード定義」ページで、処理するドキュメントのバー・コード設定を構成します。セパレータ・ページ・バー・コードや、ドキュメント・プロファイルまたはメタデータ値を提供する可能性のあるその他のバー・コードを含む、すべてのバー・コードを構成します。
- 「ドキュメント・プロファイル」ページで、「デフォルトのドキュメント・プロファイル」フィールドで以前に作成したドキュメント・プロファイル([ドキュメント・プロファイルの追加または編集](#))を選択し、認識ジョブに適用するメタデータ・フィールドのグループを指定します。選択したバー・コードを使用して、[ドキュメント・プロファイルを動的に決定](#)できます。
- 「ドキュメント処理」ページで、選択したドキュメント編成(セパレータ・ページ)に固有の設定を完了します。
 - 「構成」をクリックしてセパレータ・ページを構成します。
 - 「ドキュメントごとの最大ページ数」フィールドに数値を指定して、ドキュメントで許可されるページ数を制限します。これはオプションのフィールドです。ドキュメント当たりの最大ページ数の指定をスキップするには、0を指定します。

このフィールドは、欠落しているセパレータ・ページまたは認識に失敗したセパレータ・ページの検出に役立ちます。認識プロセッサがこの数に達すると、最後の有効なドキュメントと検出された次のセパレータ・シートの間にあるイメージが手動による索引付けのためにバッチ内に残ります。たとえば、ジョブのバッチ内にある各ドキュメントが 25 ページを超えないことがわかっている場合は、この数を入力して、ドキュメント・セパレータ・ページが検出されないか、欠落している場合に、複数のドキュメントが結合されないようにします。

- c. 「ドキュメント内で1つのバー・コードに複数の値が見つかった場合」フィールドでアクション(最初に見つかった値を使用、バー・コード値を上書き、バー・コード値をクリア)を指定します。
 - d. 作成したドキュメントにソース・ドキュメントの添付を含める方法を指定します。
7. 「送信」をクリックし、認識ジョブの機能をテストします。

階層セパレータのあるドキュメントにジョブを構成

認識プロセッサの階層セパレータ機能を使用すると、レベルの階層内でドキュメントを処理および編成できます。たとえば、フォルダ・レベルとドキュメント・レベルの2レベルの階層を使用すると、次のフォルダ・レベルのセパレータ・ページが検出されるまで、ドキュメントは高い方のレベルのフォルダ・メタデータ値を継承します。

階層セパレータは、フォルダや箱に保管している大量のドキュメントをデジタル化するバック・ファイル変換の構成に特に役立ちます。サードパーティ・アプリケーションで、必要な階層セパレータ・ページを生成できます。作成者はこれを挿入して、大量のドキュメント、フォルダや箱をスキャンおよび認識処理する準備をします。

ノート:

- ドキュメント・セパレータが検出されたが、メタデータ値が取得されなかった場合、誤ったメタデータ値がドキュメントに誤って適用されるのを防ぐために、該当するレベル以下ですべてのメタデータ値がクリアされます。
- 階層セパレータ・ページの場合、最上位のセパレータ・ページがドキュメントの最初のページである必要があります。下位のセパレータ・ページを最初のページにすることはできませんが、2ページ目にはできる場合とできない場合があります。

ドキュメントを編成するために階層セパレータを使用したバッチ用のジョブを構成するには:

1. 「処理」タブで、認識プロセッサ・ジョブを追加または編集します。
2. 「ドキュメント編成」ページで「階層セパレータ・ページ」方法を選択します。
3. 「バー・コード認識」ページで、バー・コードが認識されるように構成します。
4. 「バー・コード定義」ページで、処理するドキュメントのバー・コード設定を構成します。セパレータ・ページや、ドキュメント・プロファイルまたはメタデータ値を提供するその他のバー・コードを含む、すべてのバー・コードを構成します。
5. 「ドキュメント・プロファイル」ページで、「デフォルトのドキュメント・プロファイル」フィールドで以前に作成したドキュメント・プロファイル(ドキュメント・プロファイルの追加または編集)を選択し、認識ジョブに適用するメタデータ・フィールドのグループを指定します。以前に作成したバー・コードまたはページ区切り定義を使用してドキュメント・プロファイルを動的に決定できます。
6. 「ドキュメント処理」ページで、階層セパレータ・ジョブに固有の設定を完了します。
 - a. 「ドキュメント内で1つのバー・コードに複数の値が見つかった場合」フィールドでアクション(最初に見つかった値を使用、バー・コード値を上書き、バー・コード値をクリア)を指定します。

- b. 「ドキュメント階層セパレータ・ページ」表で、[階層セパレータ・ページを構成](#)します。
 - c. ステップ 5 で定義したセパレータ・ページを使用してドキュメント・プロファイルを動的に決定することを選択した場合、ページ・セパレータ定義をドキュメント・プロファイルにマッピングするための「**ドキュメント・プロファイル**」列が「ドキュメント階層セパレータ・ページ」表に表示されます。
 - d. 作成したドキュメントに[ソース・ドキュメントの添付を含める方法](#)を指定します。
7. 「フィールド」ページで[メタデータ割当て設定を構成](#)します。
 8. 「送信」をクリックし、認識ジョブの機能をテストします。

ドキュメントの編成を必要としないバッチ用のジョブの構成

バッチがすでにドキュメントに編成されている場合、ドキュメントの編成プロセスをスキップしてバー・コードの認識およびドキュメントの索引付けに進むことができます。

- この方法で処理されたバッチはすでにドキュメントに分割されています。たとえば、バッチ内の各ドキュメントが電子メールの添付を表す、インポート・プロセッサで作成されるバッチにこのオプションを選択します。
- 他の編成方法とは異なり、この方法で処理されたバッチにはイメージ・ドキュメントとイメージ以外のドキュメントが含まれることがあります。認識プロセッサがバー・コードやパッチ・コードを読み取るには、ドキュメントはイメージ形式である必要があるため、検出されたイメージ以外のドキュメントは影響を受けません。

ドキュメントの編成を必要としないバッチ用にジョブを構成するには:

1. 「処理」タブで、[認識プロセッサ・ジョブを追加または編集](#)します。
2. 「ドキュメント編成」ページで「**なし: ドキュメント編成を実行しない**」方法を選択します。
3. 「バー・コード認識」ページで、バー・コードが認識されるように構成します。
4. 「バー・コード定義」ページで、[ドキュメントのバー・コード設定を構成](#)します。
5. 「ドキュメント・プロファイル」ページで、「**デフォルトのドキュメント・プロファイル**」フィールドで以前に作成したドキュメント・プロファイル([ドキュメント・プロファイルの追加または編集](#))を選択し、認識ジョブに適用するメタデータ・フィールドのグループを指定します。選択したバー・コードを使用して、[ドキュメント・プロファイルを動的に決定](#)できます。
6. 「ドキュメント処理」ページで、ドキュメント編成なしのジョブに固有の設定を完了します。
 - a. オプションで、「**構成**」をクリックして[セパレータ・ページ定義を設定](#)します。

ノート:

このタイプのジョブのセパレータを検出する目的は、セパレータをドキュメントから削除することです。

- b. 「**バー・コードを読み取るドキュメントごとのページ数**」フィールドに数値を指定します。すべてのドキュメント・ページでバー・コード認識を実行するには、**0**を指定します。
この設定は、各ドキュメントの指定された最初からのページ数でバー・コード認識を実行することにより、パフォーマンスを最適化します。たとえば、バー・コードが 10 ページ中の 3 ページ目にある場合は、**3**を指定して、各ドキュメントの最初の 3 ページでバー・コードが認識されるようにします。また、このフィールドを使用して、それより後のドキュメント・ページの競合するバー・コードが無視されるようにすることもできます。
 - c. 「**ドキュメント内で 1 つのバー・コードに複数の値が見つかった場合**」フィールドでアクション(最初に見つかった値を使用、バー・コード値を上書き、バー・コード値をクリア)を指定します。
7. 「フィールド」ページで**メタデータ割当て設定を構成**します。
 8. 「**送信**」をクリックし、認識ジョブの機能をテストします。

バー・コード、パッチ・コードおよびセパレータ・ページ定義の構成

ジョブ全体でバー・コード定義を使用できます。ページ区切りのパッチ・コードを定義できます。区切りページ定義ルールを作成することにより、パッチ・コード検出とバー・コードを組み合わせることができます。

認識処理ジョブのバー・コードとセパレータ・ページの定義を構成する方法は次のとおりです:

- [バー・コード定義の追加または編集](#)
- [セパレータ・ページ定義の構成](#)
- [階層セパレータ・ページ定義の構成](#)

セパレータ・ページ定義の構成

[ドキュメントを区切るための設定](#)で説明されているように、セパレータ・ページを使用してドキュメントを編成する場合は、セパレータの検出方法と使用方法を定義する 1 つ以上のルールを構成する必要があります。次の手順に従って、セパレータ・ページを構成します。階層セパレータ・ページ定義を構成する場合は、[セパレータ・ページ定義の構成](#)を参照してください。

セパレータ・ページ定義を構成するには:

1. プロシージャで、「**セパレータ・ページ**」または「**なし: ドキュメント編成を実行しない**」のドキュメント編成方法で認識プロセッサ・ジョブを作成します。
2. 「ドキュメント処理」ページの「**セパレータ・ページ**」の隣にある「**構成**」をクリックして、表示される「**セパレータ・ページ定義**」ダイアログで 1 つ以上のルールを指定することで、セパレータ・ページを定義または編集します:
 - a. 「**名前**」フィールドに、セパレータ・ページ定義の名前を入力します。オプションで、「**セパレータ・ページの削除**」フィールドを選択してドキュメントからセパレータ・ページを削除します。選択解除すると(デフォルト)、セパレータ・ページがドキュメントに含まれます。

- b. 「ルール」表で  をクリックします。ルールを編集するには、ルールを選択して  をクリックします。
- c. 「セパレータ・ページ・ルール」ページでルールを作成します。
 - i. 「ルール名」フィールドに名前を入力します。
 - ii. 新しいドキュメントの始まりを示すには、パッチ・コード(I、II、III、IV、VI または T)または以前に作成したバー・コード定義、あるいはその両方を選択します。
 - iii. パッチ・コードとバー・コードの両方を指定した場合、または複数のバー・コード定義を指定した場合は、「演算子」フィールドで「OR」または「AND」を選択して、あるページがセパレータとして識別されるために、そのページで 1 つ検出される必要があるか、それともすべて検出される必要があるかを指定します。

 ノート:

ルール内で *And* または *Or* 条件を指定する以外に、「ルール」表の「演算子」フィールドで「AND」または「OR」を選択してルール間に *And* または *Or* 条件を指定します。

- iv. 空白ページをセパレータとみなす場合は、「空白ページをセパレータとして処理」チェック・ボックスを選択します。このオプションは、AND 演算子を選択した場合には使用できません。
- v. 「OK」をクリックします。
- d. 前のステップを繰り返して、「ルール」表に追加ルールを作成します。
- e. 「送信」をクリックしてセパレータ・ページ定義を保存し、「セパレータ・ページ定義」に戻ります。
セパレータ・ページ・ルールを削除するには、「ルール」表でルールを選択して  をクリックします。

 ノート:

セパレータ・ページ定義を削除するには、「構成」の隣にある「削除」をクリックします。

3. ページが空白とみなされるようにページのバイトを設定するには、「空白ページのバイトしきい値」フィールドに値を入力します。たとえば、このフィールドに 16000 と入力すると、16000 バイト以下のページは空白ページとみなされます。
4. キャプチャ・クライアント環境でドキュメントを処理するときに空白ページを削除する場合は、「空白ページの削除」チェック・ボックスを選択します。

 ノート:

「空白ページのバイトしきい値」フィールドと「空白ページの削除」チェック・ボックスは相互依存しています。そのため、空白ページのバイトしきい値を設定しても、削除する空白ページを設定しないと、定義されたバイトのページは削除されません。同様に、「空白ページの削除」チェック・ボックスを選択しても、空白ページのバイトしきい値を設定しないと、ページは削除されません。

5. 「送信」をクリックして、ジョブを保存します。

バー・コード定義の追加または編集

バー・コード定義は、文字の長さなどの検証ルールによってバー・コードを識別します。バー・コードが認識されると、バー・コード値のデータ特性を考査する定義の検証ルールに基づいて、バー・コード定義に割り当てられます。バー・コード定義を定義すると、ページ区切り、メタデータ・フィールドの自動移入、ドキュメント・プロファイルの割当てなど、認識ジョブ全体でバー・コード定義を使用できます。(バー・コード定義は、認識プロセッサ・ジョブ間で共有されません。)

バー・コード定義を追加または編集するには:

1. 認識ジョブを追加または編集。
2. 「バー・コード定義」ページの「バー・コード定義」表で  をクリックします。
3. 「バー・コード定義」ダイアログで、バー・コード定義の名前を入力します。
4. 「検証ルール」フィールドで、認識プロセッサでのバー・コードの検証方法を指定します。

表 12-2 検証ルールのタイプ

検証ルールのタイプ	説明	例
なし	検証を指定しません。	このオプションは通常、スクリプトによるバー・コード定義の値の移入を許可する場合に使用します。
長さ	バー・コード値の長さが定義と一致するバー・コード値をマップします。 長さには、スタート、ストップ、チェック・デジットなどの一意的バー・コード・シンボルは含まれません(含まれていない場合)。	3 文字の長さの値に一致させるには、次のように入力します: 3
マスク	有効な値(数字やアルファベット文字など)を制御するフィルタを指定します。	123-45-6789 などの ID 番号と一致させるには、次のように入力します: ###-##-#### 使用可能なマスク文字は、 入力マスク文字表 にリストされています。

表 12-2 (続き) 検証ルールタイプ

検証ルールタイプ	説明	例
正規表現	受け入れる値を定義する正規表現を指定します。	a、b または c と一致させるには、次のように入力します: [abc] 詳細は、次のような正規表現の使用および書式設定に関するドキュメントを参照してください: http://docs.oracle.com/javase/tutorial/essential/regex/
選択リスト	バー・コード値が、指定した選択リストに含まれる値と一致する必要があります。	ジョブには、ドキュメント・タイプを識別するバー・コード付きのドキュメントが含まれています。ドキュメント・タイプの選択リストには、住宅ローンの申込み、信用報告書、信用照会などの値が含まれています。読み取られて選択リスト値と一致したバー・コード値は、指定したバー・コード定義に割り当てられます。

ルールを選択すると、追加の値フィールドが表示されます(「長さ」タイプの検証の場合の「長さ」、「マスク」タイプの検証の場合の「マスク」、「正規表現」検証の場合の「正規表現」、「選択リスト」検証の場合の「選択リスト」フィールド)。

5. 「検証ルール」フィールドの下で、選択した検証ルールに対する検証値を指定します。

入力マスクを指定する場合、表示された「マスク」フィールドにバー・コード値を表すマスクを入力します。値が指定したマスクの要件を満たす場合、認識されたバー・コードがこのバー・コード定義に割り当てられます。

 **ノート:**

文字の長さが同じ 2 つのバー・コードなど、競合するバー・コード定義を構成しないでください。必要に応じて、ビジネス・ロジックを使用してバー・コードを割り当てるスクリプトの使用を検討してください。

表 12-3 入力マスク文字

マスク	マスクの正規表現への変換	説明
?	.(ピリオド)	任意の 1 文字と一致するようにする場合に使用します。
#	\d	任意の 1 つの数字と一致するようにする場合に使用します。 ID 番号(例: 123-45-6789)が指定されたドキュメントが含まれているジョブの場合、マスクは####?##?#### になります。

表 12-3 (続き) 入力マスク文字

マスク	マスクの正規表現への変換	説明
*	*	ゼロ、1 または複数の文字と一致するようにする場合に使用します。
[abc]	[abc]	指定された 1 つ以上の文字のグループの中から任意の 1 文字が一致するようにします。必ず大カッコ([]) を含めてください。 <i>claim</i> など、特定のバー・コードを検索する場合、書式は[c][l][a][i][m]です。
[!abc]	[^abc]	指定された文字ではない、任意の 1 文字と一致するようにします。機能は、感嘆符の指定を除いて[abc]と同じですが、一致するのは、[abc]で指定された文字を除く任意の文字が検出された場合です。
[a-zA-Z]	[a-zA-Z]	文字の範囲を指定する場合にハイフン(-)を使用します。文字の範囲は昇順([Z-A])ではなく、[A-Z]で指定する必要があります。たとえば、[A-Z]は A から Z の範囲にある文字が検出された場合に一致します。

- 「OK」をクリックします。
定義が「バー・コード定義」表にリストされます。
- ステップ 2 から 6 までを繰り返して、追加のバー・コード定義を作成します。

階層セパレータ・ページ定義の構成

ドキュメントを区切るための設定で説明されているように、階層セパレータを使用してドキュメントを編成するように選択した場合、パッチ・コードやバー・コードを検出するセパレータ・ページ定義を、階層レベルごとに構成する必要があります。(単独単一レベル・セパレータ・ジョブに対して、または編成ジョブがない場合にドキュメント区切りを構成するには、[セパレータ・ページ定義の構成](#)を参照してください。)

階層セパレータ・ジョブにページ区切りを構成するには:

- プロシージャで、階層セパレータ・ページ・ジョブを追加または編集します。[階層セパレータのあるドキュメントにジョブを構成](#)を参照してください。
- 「ドキュメント処理」ページの「ドキュメント階層セパレータ・ページ」表で  をクリックして、階層セパレータ・ページ定義を追加します。定義を編集するには、それを選択して  をクリックします。
- 「セパレータ・ページ定義」ダイアログで、階層レベルの 1 つに対して定義を作成します。
 - 「名前」フィールドに、セパレータ・ページ定義の名前を入力します。
 - オプションで、「セパレータ・ページの削除」フィールドを選択して、ドキュメントまたは添付からセパレータ・ページを削除します。選択解除されている場合(デフォルト)、セパレータ・ページはドキュメントまたは添付に含まれます。
- 「添付タイプ」フィールドで、定義済の添付タイプのリストから添付タイプを選択して、添付に含めるセパレータ・ページを定義します。「ドキュメント・プロファイル」フィールドを使用できるのは、「ドキュメント・プロファイル」ページの「動的ドキュメント・プロファイル・オプション」フィールドで「セパレータ・ページを使用して動的に決定する」オプションを選択した場合のみです。「ドキュメント・プロファイル」フィールドで

ドキュメント・プロファイルを選択した場合、「添付タイプ」フィールドは「なし」に設定されます。添付タイプのセパレータ・ページは、最下位の階層レベルでのみ定義可能です。

5. セパレータ・ページ定義のルールを追加または編集します。
 - a. 「ルール」表で  をクリックします。
 - b. ルールを編集するには、それを選択して  をクリックします。
6. 「セパレータ・ページ・ルール」ダイアログで、ルールを定義します。
 - a. 「ルール名」フィールドに名前を入力します。
 - b. 新規のドキュメントまたは添付の開始を指定するには、パッチ・コード(I、II、III、IV、VI または T)、以前に作成したバー・コード定義、あるいはその両方を選択します。
 - c. パッチ・コードとバー・コードの両方を指定した場合、または複数のバー・コード定義を指定した場合は、「演算子」フィールドで「OR」または「AND」を選択して、あるページがセパレータとして識別されるために、そのページで 1 つ検出される必要があるか、それともすべて検出される必要があるかを指定します。
 - d. 「OK」をクリックします。
7. ステップ 5 と 6 を繰り返して、ページ・セパレータの追加ルールを作成します。
 - a. ルール内に「AND」または「OR」を指定するだけでなく、「ルール」表の「演算子」フィールドで「AND」または「OR」を選択することにより、ルール間に AND または OR 条件を指定します。たとえば、ルール 1 とルール 2 のそれぞれで 2 つの一致方法(パッチ・コードかバー・コードのいずれか)が提供されているが、セパレータ検出でこの両方のルールの一致が必要な場合があります。
 - b. セパレータ・ルールを削除するには、「ルール」表でそれを選択して、 をクリックします。
 - c. 「送信」をクリックして、セパレータ・ページ定義を保存します。
作成したセパレータ・ページ定義が、「ドキュメント階層セパレータ・ページ」表にリストされます。
8. ステップ 2 から 7 までを繰り返して、追加のページ・セパレータ定義を作成します。
 - 定義を削除するには、表でそれを選択して、 をクリックします。
 - 「上へ」または「下へ」をクリックして、バッチ内でのセパレータ・ページの編成状況を正しく反映するように、選択した定義を階層内で移動します。
9. 「送信」をクリックして、ジョブを保存します。

静的なドキュメント・プロファイルまたは動的に決定されるドキュメント・プロファイルの指定

認識ジョブを構成して、ドキュメントの索引付けに使用できるメタデータ・フィールドを識別するドキュメント・プロファイルを決定できます。

バックグラウンド情報については、[ドキュメントを分類するための設定](#)を参照してください。

静的または動的に決定されるドキュメント・プロファイルを指定するには:

1. 選択したプロシージャで [認識プロセッサ・ジョブ](#) を作成します。
2. 「ドキュメント・プロファイル」 ページを選択して設定を指定します。
3. 「デフォルトのドキュメント・プロファイル」 フィールドで、プロファイルを指定します。
「動的に決定しない」 フィールドが選択されている場合、または動的に決定される一致するドキュメント・プロファイルが見つからなかった場合は、認識ジョブでデフォルトのドキュメント・プロファイルが使用されます。
4. 「動的ドキュメント・プロファイル・オプション」 フィールドで、ドキュメント・プロファイルを動的に決定するかどうかとその方法を指定します。ドキュメント・プロファイルは次の方法で決定できます:
 - 「動的に決定しない」 を選択し、「デフォルトのドキュメント・プロファイル」 フィールドでプロファイルを選択して、静的なドキュメント・プロファイルを指定します。
 - 「バー・コードを使用して動的に決定する」 を選択してステップ 5 を完了し、バー・コード定義を使用して動的に決定します。
 - 「セパレータ・ページを使用して動的に決定する」 を選択してステップ 6 を完了し、セパレータ・ページ定義を使用して動的に決定します。このオプションは、ドキュメントの編成方法として「階層セパレータ・ページ」が選択されている場合にのみ使用できます。
5. ステップ 4 で「バー・コードを使用して動的に決定する」を選択した場合、構成を完了します。
 - a. 「バー・コード」 フィールドで、表でマップされてドキュメント・プロファイルを決めるために値が使用されるバー・コード定義を選択します。
 - b. 「ドキュメント・プロファイルとバー・コード値のマッピング」 表で、有効なバー・コード値と使用するドキュメント・プロファイルをマッピングします。
「編集」 をクリックします。「ドキュメント・プロファイルとバー・コード値のマッピング」 ダイアログで、バー・コード値が単一の値と一致する必要があるか、指定された選択リスト内の任意の項目と一致する必要があるかを指定します。単一の値と一致する場合、その値を指定します。選択リストの任意の項目と一致する場合、選択リスト・ソースと選択リストを指定します。
必要に応じて、表で追加のドキュメント・プロファイルをバー・コード値にマップします。
6. ステップ 4 で「セパレータ・ページを使用して動的に決定する」を選択した場合、次のように構成を完了します:
 - a. 「ドキュメント処理」 ページをクリックします。
「ドキュメント・プロファイル」 列が「ドキュメント階層セパレータ・ページ」 表に表示されます。

- b. 表で  または  をクリックします。
 - c. 「セパレータ・ページ定義」ダイアログの「ドキュメント・プロファイル」フィールドで階層セパレータ・ページのプロファイルを選択します。「添付タイプ」フィールドで添付タイプを選択すると、このフィールドは「なし」に設定され、無効になります。
 - d. ステップ 6b および 6c を繰り返して、ドキュメント・プロファイルを階層セパレータ・ページ定義に割り当てます。
7. 「送信」をクリックして、ジョブを保存します。

メタデータ・フィールドの自動入力指定

認識処理中、バー・コード値、バッチ名、デフォルト値、索引日付またはスキャン日付を使用して、メタデータ・フィールドに自動入力できます。

自動入力を構成するには:

1. 選択したプロシージャで、[認識プロセッサ・ジョブを作成](#)します。
2. 「フィールド」ページをクリックします。プロシージャに定義されたメタデータ・フィールドを示す表が表示されます。
3. 自動入力するフィールドを選択し、 をクリックします。
4. 認識ジョブの編集ダイアログの「自動入力値」フィールドで、自動入力方法を選択します。
5. バー・コード値またはデフォルト値を自動移入する場合は、表示される追加のフィールドにバー・コードまたはデフォルト値を指定し、「OK」をクリックします。
6. ステップ 3 から 5 までを繰り返して、自動入力する追加のフィールドを構成します。
7. 「送信」をクリックして、ジョブを保存します。

PDF への変換ジョブの構成

PDF への変換ジョブを作成することで、「PDF」オプションを使用してドキュメントを PDF に変換したり、「[検索可能な PDF](#)」オプションを使用してイメージ・ドキュメントを検索可能な PDF に変換したりできます。

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。
3. 「PDF への変換ジョブ」表で  をクリックするか、既存のジョブを編集する場合は  をクリックします。

また、変換ジョブをコピーするには、それを選択して  をクリックし、プロンプトが表示されたら新規の名前を入力します。ジョブをコピーすると、すばやく複製および変更できます。

4. 「ドキュメントの選択」 ページで、次のようにします:
 - a. 「**ジョブ詳細**」 セクションで:
 - ジョブの名前と説明を入力します。
 - 「**出力 PDF フォーマット**」 ドロップダウン・リストから:
 - 生成される PDF ドキュメント・タイプをソース・ドキュメントのコンテンツ・タイプと同じにする必要がある場合は、「**PDF**」を選択します。たとえば、ソースがイメージのセットの場合、イメージを含む PDF が生成されます。一方、テキスト PDF は、Word ドキュメントから作成されます。
 - PDF コンテンツが検索可能な場合、「**検索可能な PDF**」を選択します。このオプションを選択すると、光学文字認識(OCR)を適用する必要があるコンテンツ言語を選択できる「**PDF 設定**」タブが有効になります。「**PDF - 検索可能設定 - 光学文字認識**」表で、各チェック・ボックスを選択すると、必須の言語を選択できます。複数の言語を選択した場合、OCR は「**選択した言語**」の下の表の右側にある言語の順序で適用されます。この順序は、チェック・ボックスの選択の順序によって決定されます。言語を選択しない場合、「**英語**」チェック・ボックスがデフォルトで選択されているため、OCR は英語のコンテンツにのみ適用されます。
 - b. 「**ドキュメント変換**」 セクションで:
 - 「**ドキュメントの変換**」 チェック・ボックスを選択します。
 - 特定のドキュメント・プロファイルのドキュメントを処理するには、「**ドキュメント・プロファイルに制限**」フィールドにリストされた 1 つ以上のドキュメント・プロファイルを選択し、すべての定義済ドキュメント・プロファイルのドキュメントを処理する場合は、「**すべて**」を選択します。
 - c. 「**添付タイプとしてオリジナルを保持**」 ドロップダウン・リストで、元のドキュメントを保持するタイプを選択します。
 - d. 「**添付変換**」 セクションで、次のようにします:
 - 「**添付変換**」 チェック・ボックスを選択します。
 - 特定の添付タイプの添付を処理する場合は、「**添付タイプに制限**」フィールドにリストされた 1 つ以上の添付タイプを選択し、すべての定義済添付タイプの添付を処理する場合は、「**すべて**」を選択します。
 - 「**添付タイプとしてオリジナルを保持**」ドロップダウン・リストで、元の添付を保持するタイプを選択します。
5. 「後処理」 ページで、ドキュメントの変換処理の完了後、成功かどうかに応じて行う処理を指定します。

[PDF への変換ジョブの後処理および監視の構成](#)を参照してください。
6. 「**サマリー**」 ページの設定を確認して「**送信**」をクリックし、ジョブを保存します。
7. ドキュメントを PDF に変換するためのバッチのフローを構成します。[PDF への変換ジョブへのバッチ・フローの構成](#)を参照してください。
8. 作成した PDF への変換ジョブをテストします。

PDF への変換ジョブの後処理および監視の構成

変換ジョブの後処理オプションを使用して、処理の完了後に実行する処理を指定します。

変換ジョブの後処理および監視を構成するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「プロセッサ」タブを開きます。
3. 「PDF への変換ジョブ」表で、PDF への変換ジョブを追加または編集します。
4. 「後処理」ページをクリックして、成功した処理(システム・エラーなし)および失敗した処理(1 つ以上のシステム・エラー)に対する処理オプションを表示します。次のステップは、システム・エラーがない場合とシステム・エラーがある場合の両方の項に適用されます。
5. 「バッチ・プロセッサ」フィールドと「バッチ・プロセッサ・ジョブ」フィールドで、ドキュメント変換処理の完了後に実行する処理ステップ(ある場合)を指定します。「なし」、コミット・プロセッサ、認識プロセッサ、TIFF への変換、PDF への変換、アセット・ルックアップ・プロセッサまたは XML 変換プロセッサから選択できます。認識プロセッサまたは TIFF に変換/PDF に変換を選択した場合は、プロセッサ・ジョブを指定します。

たとえば、システム・エラーのないバッチをコミット・プロセッサに送信します。システム・エラーのあるバッチに対して「なし」を指定してから、クライアントで追加の処理ができるように、そのバッチ・ステータスまたは接頭辞を変更することができます。
6. 電子メール・アドレスのフィールドに、オプションで、処理が正常に完了または失敗した後に電子メールを送信する宛先のアドレスを入力します。変換プロセッサ・ジョブを構成およびテストしている間は、システム・エラーの発生時に自分に電子メール通知が送信され、後で管理者に処理エラーが自動的に通知されるように設定してください。
7. 残りの各フィールドで、処理済のバッチを変更する方法を指定します。
 - 接頭辞を追加することにより、バッチの名前を変更します。たとえば、失敗したバッチは、フォローアップのために接頭辞 **ERR** を付けた名前に変更します。
 - バッチ・ステータスまたは優先度を変更します。たとえば、システム・エラーのあるバッチのステータスを変更してから、バッチ・フィルタリングをこのステータスに設定したクライアント・プロファイルを作成すると、適格なユーザーが、エラーの発生したバッチを手動で編集して完了できるようになります。
8. 「送信」をクリックして、ジョブを保存します。

PDF への変換ジョブへのバッチ・フローの構成

PDF への変換ジョブを実行するには、処理のためにジョブに送られるバッチを構成する必要があります。これを行うには、クライアント・プロファイルまたは他のプロセッサ・ジョブ内で PDF への変換を後処理ステップとして設定します。

バッチ・フローは次のものから構成できます:

- クライアント・プロファイル(クライアント・プロファイルの後処理の構成を参照)。
- インポート・プロセッサ・ジョブ(インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成を参照)。
- 認識プロセッサ・ジョブ(認識プロセッサ・ジョブの後処理および監視の構成を参照)。

PDF への変換ジョブの非アクティブ化または削除

PDF への変換ジョブを削除すると、このジョブが後処理ステップとして設定されているバッチにこのジョブは使用できなくなります。後処理に指定されたジョブが使用できない場合は、バッチにエラーが発生します。ジョブを削除する前にしばらくの間オフラインに変更して、その削除に伴う予期しない問題を解決できるようにしておくのが望ましい場合もあります。オンラインの変換ジョブは、クライアント・プロファイルまたはプロセッサ・ジョブの「後処理」ページで選択されている場合に実行されます。ジョブを一時的に停止(オフラインに)したり、非アクティブ化されたジョブを再実行するように変更することができます。

PDF への変換ジョブを非アクティブ化または削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。
3. ジョブを非アクティブ化するには、「PDF への変換ジョブ」表で選択し、 をクリックします。
「ドキュメントの選択」ページで「オンライン」フィールドを選択したり、選択解除して、PDF への変換ジョブを非アクティブにしたり、アクティブにすることもできます。
4. 非アクティブ化したジョブを「PDF への変換ジョブ」表で選択し、 をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「はい」をクリックして、この変換ジョブを削除することを確認します。

TIFF への変換ジョブの構成

TIFF への変換ジョブを作成することにより、イメージ以外のファイルを白黒またはカラーのファイルに変換できます。

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。
3. TIFF への変換ジョブ表で、 をクリックするか、既存のジョブを編集する場合は  をクリックします。

また、変換ジョブをコピーするには、それを選択して  をクリックし、プロンプトが表示されたら新規の名前を入力します。ジョブをコピーすると、すばやく複製および変更できます。
4. 「ドキュメントの選択」ページで、次のようにします:

- a. 「**ジョブ詳細**」セクションで、ジョブの名前と説明を入力します。
- b. 「**ドキュメント変換**」セクションで、次のようにします:
 - 「**ドキュメントの変換**」チェック・ボックスを選択します。
 - 「**変換するドキュメント**」で、すべてのイメージ以外のドキュメントを処理するか、指定したファイル名フィルタと一致するドキュメントのみを処理するかを選択します。ワイルドカード文字としてアスタリスク(*)を入力し、複数のフィルタはカンマまたはセミコロンで区切ることができます。
 - 特定のドキュメント・プロファイルのドキュメントを処理するには、「**ドキュメント・プロファイルに制限**」フィールドにリストされた 1 つ以上のドキュメント・プロファイルを選択し、すべての定義済ドキュメント・プロファイルのドキュメントを処理する場合は、「**すべて**」を選択します。
- c. 「**添付変換**」セクションで、次のようにします:
 - 「**添付変換**」チェック・ボックスを選択します。
 - 「**変換する添付**」フィールドで、すべてのイメージ以外のドキュメント添付を処理するか、指定したファイル名フィルタと一致する添付のみを処理するかを選択します。ワイルドカード文字としてアスタリスク(*)を入力し、複数のフィルタはカンマまたはセミコロンで区切ることができます。
 - 特定の添付タイプの添付を処理する場合は、「**添付タイプに制限**」フィールドにリストされた 1 つ以上の添付タイプを選択し、すべての定義済添付タイプの添付を処理する場合は、「**すべて**」を選択します。
5. 「出力形式」ページで、イメージ以外のドキュメントを白黒(デフォルト)またはカラーに変換するように選択します。「色」を選択した場合、「**イメージの品質**」フィールドでイメージの品質を指定し、「**DPI**」フィールドで解像度を指定します。
 「**イメージ設定**」の「**空白ページのバイトしきい値**」フィールドに、ファイル・サイズ値(バイト)を入力します。サイズがしきい値以下のイメージは空白ページとみなされ、削除されます。また、「**変換中に使用可能な用紙の最大サイズ**」フィールドにも値を指定します。
6. 「PDF 変換エンジン」ページで、変換エンジンを選択します。[PDF 変換エンジンの構成](#)を参照してください。
7. 「ドキュメント・マージ・オプション」ページで、設定を完了します。
[ドキュメントのマージ方法とメタデータの割当て方法の指定](#)を参照してください。
8. 「後処理」ページで、変換処理の成否に応じて完了後に実行する処理を指定します。
[TIFF への変換ジョブの後処理および監視の構成](#)を参照してください。
9. 「サマリー」ページの設定を確認し、「**送信**」をクリックしてジョブを保存します。
10. バッチがドキュメントの TIFF への変換に送られる方法を構成します。[TIFF への変換ジョブへのバッチ・フローの構成](#)を参照してください。
11. 作成した TIFF への変換ジョブをテストします。

TIFF 変換ジョブでの空白ページの検出の構成

イメージ以外のドキュメントがイメージに変換される際に空白ページを自動的に検出して削除するようコンテンツ・キャプチャを構成します。コンテンツ・キャプチャで

これを実現するには、空白ページと見なされるイメージのしきい値のファイル・サイズを指定する必要があります。

空白ページの検出を構成するには:

1. **TIFF 変換ジョブを追加または編集**する際、「出力形式」ページを選択します。
2. 「**イメージ設定**」下の「**空白ページのバイトしきい値**」フィールドで、空白ページを検出するためのファイル・サイズの値(バイト)を入力します。0 を指定すると、空白のページは含まれ、削除されません。
3. 「**送信**」をクリックし、変換ジョブを保存します。

ドキュメントのマージ方法とメタデータの割当て方法の指定

TIFF 変換プロセッサを使用すると、変換処理中にドキュメントをバッチにマージする方法と、ドキュメントのマージ時にメタデータ値を割り当てる方法を指定できます。マージおよびメタデータ割当てのオプションは、一般的なドキュメント変換シナリオに対応しています。

たとえば、インポート・プロセッサは、PDF 添付の電子メール・メッセージをインポートしてから、それを変換のために送信します。電子メール・メッセージは添付された各 PDF ドキュメントに共通であり、それぞれの処理や索引付けで重要になる場合があるため、ソース・ドキュメント(この場合は電子メール・メッセージ)を他のすべてのターゲット・ドキュメント(PDF)とマージするドキュメント・マージ・オプションの 1 つを選択します。

ドキュメントのマージ方法とメタデータの割当て方法を指定するには:

1. **TIFF への変換ジョブを追加または編集**し、「ドキュメント・マージ・オプション」ページを選択します。このタブを使用して、次の項目を指定します。
 - ドキュメントをバッチ内にマージするかどうか、およびその方法。
 - 単一のドキュメントを他のすべてのドキュメントとマージする場合、このドキュメントを格納する場所。
 - どのドキュメントのメタデータ値を新しく結合したドキュメントに割り当てるか。
 - マージ中にソース・ドキュメントの添付を含めるかどうか。含める場合、その方法。
2. **バッチ・マージ・オプション**を選択します:
 - **ドキュメントをマージしない:** バッチがすでにドキュメントに編成されている場合、またはドキュメントをマージせずに変換する場合は、このオプション(デフォルト)を選択します。このオプションを選択すると、タブの他のすべてのフィールドが無効になります。
 - **すべてのドキュメントをマージ:** バッチ内のすべてのドキュメントを単一のドキュメントにマージする場合は、このオプションを選択します。バッチ内の最初のドキュメントがターゲット・ドキュメントとみなされ、他のすべてのドキュメントはソース・ドキュメントとみなされてそれに追加されます。
 - **最初のドキュメントをその他のすべてのドキュメントとマージ:** バッチ内の最初のドキュメントを他のすべてのドキュメントとマージする場合は、このオプションを選択します。最初のドキュメントがソース・ドキュメントとみなされ、「**ソース・ドキュメント・ページの配置**」設定に基づいてターゲット・ドキュメントの先頭または末尾に追加されます。
 - **最後のドキュメントをその他のすべてのドキュメントとマージ:** バッチ内の最後のドキュメントを他のすべてのドキュメントとマージする場合は、このオプションを選択します。最後のドキュメントがソース・ドキュメントとみなされ、「**ソース・ドキュ**

メント・ページの配置」設定に基づいてターゲット・ドキュメントの先頭または末尾に追加されます。

3. 前のステップで、「**最初のドキュメントをその他のすべてのドキュメントとマージ**」または「**最後のドキュメントをその他のすべてのドキュメントとマージ**」を選択した場合は、「**ソース・ドキュメント・ページの配置**」フィールドが有効になります。ソース・ドキュメントをターゲット・ドキュメントの先頭か末尾のどちらに追加するかを指定します。
4. メタデータ値をマージ済ドキュメントに適用するかどうかを指定します。次のうちから選択できます:
 - **ソース・ドキュメントのメタデータ値の適用:** ソース・ドキュメントのメタデータ値をターゲット・ドキュメントに適用する場合は、このオプションを選択します。各ソース・ドキュメントにメタデータ値がある場合は、最後に処理されたメタデータ値がターゲット・メタデータ値になります。
 - **ターゲット・ドキュメントのメタデータ値の上書き許可:** このオプションを選択すると、ソース・ドキュメントのメタデータ値でターゲット・ドキュメントのメタデータ値をオーバーライドできます。

これらのフィールドはすべて同時に選択できます。これらはデフォルトでは選択解除されています。最初または最後のドキュメントをマージするときのデフォルト動作は、ターゲット・ドキュメントのメタデータ値を適用することです。すべてのドキュメントをマージするときのデフォルト動作は、最初のドキュメントの(ターゲットの)メタデータ値を適用することです。

5. 「**ソース添付**」フィールドで、ソース・ドキュメントの添付を含めるかどうかを指定します。すべての添付を含めるか、ドキュメント・プロファイル添付タイプと一致する添付を含めるか。

「**バッチ・マージ・オプション**」フィールドで「**すべてのドキュメントをマージ**」を選択した場合、バッチ内の最初のドキュメントを含むすべてのドキュメントがソース・ドキュメントとみなされます。

PDF 変換エンジンの構成

「PDF 変換エンジン」ページでは、Oracle Outside In または Artifex Ghostscript を選択してドキュメントを変換できます。

PDF 変換エンジンを選択するには:

1. **TIFF への変換ジョブを追加または編集**し、「PDF 変換エンジン」ページを選択します。
2. 「**PDF 変換エンジン**」セクションで、デフォルトの選択は**標準: Oracle Outside In**です。または、**代替: Artifex Ghostscript**を選択できます。
3. 「**ファイル名フィルタ**」フィールドに 1 つ以上のファイル名フィルタを入力し、特定のファイル名に処理を制限します。デフォルトでは、このフィールドは*.*に設定されています(すべてのファイルが処理されます)。

TIFF への変換ジョブへのバッチ・フローの構成

TIFF への変換ジョブを実行するには、このジョブに進んで処理が行われるようにバッチを構成する必要があります。これを行うには、クライアント・プロファイルまたは他のプロセッサ・ジョブで変換プロセッサ・ジョブを後処理ステップとして設定します。

バッチ・フローは次のものから構成できます:

- クライアント・プロファイル(クライアント・プロファイルの後処理の構成を参照)。
- インポート・プロセッサ・ジョブ(インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成を参照)。
- 認識プロセッサ・ジョブ(認識プロセッサ・ジョブの後処理および監視の構成を参照)。

たとえば、電子メール・メッセージとその PDF 添付をインポートして変換プロセッサに送信し、イメージに変換するインポート・プロセッサ・ジョブを作成します。これらのイメージは、バー・コード認識のために認識プロセッサ・ジョブに送信されます。

TIFF への変換ジョブの後処理および監視の構成

TIFF への変換ジョブの後処理オプションを使用して、処理が成功かどうかに応じた、完了後の処理を指定します。

変換ジョブの後処理および監視を構成するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「プロセッサ」タブを開きます。
3. 「TIFF への変換ジョブ」表で、TIFF への変換ジョブを追加または編集します。
4. 「後処理」ページをクリックして、成功した処理(システム・エラーなし)および失敗した処理(1 つ以上のシステム・エラー)に対する処理オプションを表示します。次のステップは、システム・エラーがない場合とシステム・エラーがある場合の両方の項に適用されます。
5. 「バッチ・プロセッサ」フィールドと「バッチ・プロセッサ・ジョブ」フィールドで、ドキュメント変換処理の完了後に実行する処理ステップ(ある場合)を指定します。「なし」、コミット・プロセッサ、認識プロセッサ、TIFF への変換、PDF への変換、アセット・ロックアップ・プロセッサまたは XML 変換プロセッサから選択できます。認識プロセッサまたは TIFF に変換/PDF に変換を選択した場合は、プロセッサ・ジョブを指定します。
たとえば、システム・エラーのないバッチをコミット・プロセッサに送信します。システム・エラーのあるバッチには「なし」を指定し、バッチ・ステータスまたは接頭辞を変更して、クライアントでさらに処理が行われるようにします。
6. 「電子メール・アドレス」フィールドに、オプションで、処理の完了後に成功または失敗の通知を送信するアドレスを入力します。変換プロセッサ・ジョブを構成およびテストしている間は、システム・エラーの発生時に自分に電子メール通知が送信され、後で管理者に処理エラーが自動的に通知されるように設定してください。
7. 残りの各フィールドで、処理済のバッチを変更する方法を指定します。
 - 接頭辞を追加することにより、バッチの名前を変更します。たとえば、失敗したバッチは、フォローアップのために接頭辞 **ERR** を付けた名前に変更します。
 - バッチ・ステータスまたは優先度を変更します。たとえば、システム・エラーのあるバッチのステータスを変更してから、バッチ・フィルタリングをこのステータスに設定したクライアント・プロファイルを作成すると、適格なユーザーが、エラーの発生したバッチを手動で編集して完了できるようになります。
8. 「送信」をクリックして、ジョブを保存します。

TIFF への変換ジョブの非アクティブ化または削除

TIFF への変換ジョブを削除すると、バッチに対する後処理ステップとして設定されているそのジョブは使用できなくなります。後処理に指定されたジョブが使用できない場合は、バッチにエラーが発生します。ジョブを削除する前にしばらくの間オフラインに変更して、その削除に伴う予期しない問題を解決できるようにしておくのが望ましい場合もあります。TIFF へのオンライン変換ジョブは、クライアント・プロファイルまたはプロセッサ・ジョブの「後処理」ページでそれが選択されている場合に実行されます。ジョブを一時的に停止(オフラインに)したり、非アクティブ化されたジョブを再実行するように変更することができます。

変換ジョブを非アクティブ化または削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。
3. ジョブを非アクティブ化するには、「TIFF への変換ジョブ」表でそれを選択し、 をクリックします。
また、「ドキュメントの選択」ページの「オンライン」フィールドを選択または選択解除して、変換ジョブを非アクティブ化またはアクティブ化することもできます。
4. 「TIFF への変換ジョブ」表で非アクティブ化されたジョブを選択し、 をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「はい」をクリックして、この変換ジョブを削除することを確認します。

アセット・ルックアップ・ジョブの構成

ルックアップを正常に完了したドキュメントは、バッチ内の他のドキュメントが成功かどうかに関係なく、バッチ内で更新されます。バッチは、その中のすべてのドキュメントが正常に検索された場合にのみ先に進みます。失敗したバッチが修復のためにコンテンツ・キャプチャ・クライアントに送られると、バッチ内の任意のドキュメントのメタデータが更新される可能性があります。バッチがコンテンツ・キャプチャ・クライアントから再リリースされると、ドキュメントのバッチ全体が再度検索されます。

「メタデータ」タブでアセット・ルックアップを作成した後、「処理」タブでアセット・ルックアップ・ジョブを構成して、必要なドキュメント・プロファイルに含めることができます。アセット・ルックアップは、ドキュメント・プロファイルがクライアント・プロファイルに含まれ、クライアント・プロファイルがコミット・プロファイルに含まれた後にのみクライアント・ユーザーが使用できるようになります。

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。

3. **アセット・ルックアップ・ジョブ**表で  をクリックするか、既存のジョブを編集する場合は  をクリックします。

アセット・ルックアップ・ジョブを選択して  をクリックし、プロンプトが表示されたら新しい名前を入力することで、アセット・ルックアップ・ジョブをコピーすることもできます。ジョブをコピーすると、すばやく複製および変更できます。
4. 「**ドキュメントの選択**」 ページで:
 - a. 「**ドキュメントの選択**」 セクションで次のようにします:
 - ジョブの名前と説明を入力します。
 - 特定のドキュメント・プロファイルのアセット・ルックアップ・ジョブを処理するには、「**ドキュメント・プロファイルに制限**」フィールドにリストされているドキュメント・プロファイルを 1 つ以上選択するか、「**すべて**」を選択して、定義されているすべてのドキュメント・プロファイルのドキュメントを処理します。
 - b. **ルックアップの実行**セクションで次のようにして「**次**」をクリックします:
 - **アセット・ルックアップ**・ドロップダウン・リストから、アセット・ルックアップ・ジョブを選択します。
 - 「**複数のレコードが見つかった場合**」セクションで、1 つ目のレコードをクライアント・ユーザーに表示するか、レコードを表示しないかを選択します。後者を選択した場合、処理ジョブは失敗します。クライアント・ユーザーは、必要に応じてコンテンツ・キャプチャ・クライアントでドキュメントを参照できます。
 - 必要に応じて、**ルックアップの成功が必要**チェック・ボックスを選択します。
5. 「**後処理**」 ページで、アセット・ルックアップ・ジョブの完了後の処理を次に基づいて指定します:
 - システム・エラーなしの状況は、前のページのすべての基準が満たされた場合です。成功したルックアップはコミットに進むことができます。
 - システム・エラーとは、レコードが見つからない、見つかったレコードが多すぎるなど、ルックアップが失敗した場合のことです。失敗したルックアップの場合、バッチは修復のためにコンテンツ・キャプチャ・クライアントに戻ります。

[アセット・ルックアップ・ジョブの後処理とモニタリングの構成](#)を参照してください
6. 「**サマリー**」 ページの設定を確認して「**送信**」をクリックし、ジョブを保存します。
7. バッチのアセット・ルックアップ・ジョブへの進め方を構成します。[アセット・ルックアップ・ジョブへのバッチ・フローの構成](#)を参照してください。
8. 作成したアセット・ルックアップ・ジョブをテストします。

アセット・ルックアップ・ジョブの後処理とモニタリングの構成

アセット・ルックアップ・ジョブの後処理オプションを使用して、処理の完了後の処理を指定します。

アセット・ルックアップ・ジョブの後処理およびモニタリングを構成するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。

選択したプロセスの構成ページが右側に表示されます。

2. 「**プロセッサ**」タブを開きます。
3. **アセット・ルックアップ・ジョブ**表で**アセット・ルックアップ・ジョブ**を追加または編集します。
4. 「**後処理**」ページをクリックして、成功した処理(システム・エラーなし)および失敗した処理(1つ以上のシステム・エラー)に対する処理オプションを表示します。次のステップは、**システム・エラーがない場合**と**システム・エラーがある場合**の両方の項に適用されます。
5. 「**バッチ・プロセッサ**」および「**バッチ・プロセッサ・ジョブ**」フィールドで、アセット・ルックアップ・ジョブの完了後の処理ステップがある場合、処理ステップを指定します。「なし」、**コミット・プロセッサ**、**認識プロセッサ**、**TIFF への変換**、**PDF への変換**、**アセット・ルックアップ・プロセッサ**または**XML 変換プロセッサ**から選択できます。
6. 電子メール・アドレスのフィールドに、オプションで、処理が正常に完了または失敗した後に電子メールを送信する宛先のアドレスを入力します。アセット・ルックアップ・プロセッサ・ジョブの構成およびテストの際、システム・エラー時に電子メール通知を受信し、後で管理者に処理エラーを自動的に警告するように設定することができます。
7. 残りの各フィールドで、処理済のバッチを変更する方法を指定します。
 - 接頭辞を追加することにより、バッチの名前を変更します。たとえば、失敗したバッチは、フォローアップのために接頭辞 **ERR** を付けた名前に変更します。
 - バッチ・ステータスまたは優先度を変更します。たとえば、システム・エラーのあるバッチのステータスを変更してから、バッチ・フィルタリングをこのステータスに設定したクライアント・プロファイルを作成すると、適格なユーザーが、エラーの発生したバッチを手動で編集して完了できるようになります。
8. 「**送信**」をクリックして、ジョブを保存します。

アセット・ルックアップ・ジョブへのバッチ・フローの構成

アセット・ルックアップ・ジョブを実行するには、処理のためにジョブに送られるようにバッチを構成する必要があります。これを行うには、クライアント・プロファイルでアセット・ルックアップ・ジョブを後処理ステップとして設定します。

バッチ・フローは次のものから構成できます：

- クライアント・プロファイル([クライアント・プロファイルの後処理の構成を参照](#))。
- インポート・プロセッサ・ジョブ([インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成を参照](#))。
- 認識プロセッサ・ジョブ([認識プロセッサ・ジョブの後処理および監視の構成を参照](#))。
- PDF への変換ジョブ([PDF への変換ジョブの後処理および監視の構成を参照](#))。
- TIFF への変換ジョブ([TIFF への変換ジョブの後処理および監視の構成を参照](#))。

アセット・ルックアップ・ジョブの非アクティブ化または削除

アセット・ルックアップ・ジョブを削除すると、このジョブが後処理ステップとして設定されているバッチにこのジョブは使用できなくなります。後処理に指定されたジョブが使用できない場合は、バッチにエラーが発生します。ジョブを削除する前にしばらくの間オフラインに変更して、その削除に伴う予期しない問題を解決できるようにしておくのが望ましい場合もあります。オンラインのアセット・ルックアップ・ジョブは、クライアント・プロファイルまたはプロセッサ・ジョブの「後処理」ページで選択されている場合に実行されます。ジョブを一時的に停止(オフラインに)したり、非アクティブ化されたジョブを再実行するように変更することができます。

アセット・ルックアップ・ジョブを非アクティブ化または削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。
3. ジョブを非アクティブ化するには、**アセット・ルックアップ・ジョブ**表で選択し、をクリックします。
「ドキュメントの選択」ページで「オンライン」フィールドを選択したり、選択解除して、アセット・ルックアップ・ジョブを非アクティブにしたり、アクティブにすることもできます。
4. 非アクティブ化したジョブを**アセット・ルックアップ・ジョブ**表で選択し、をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「はい」をクリックしてこのジョブを削除することを確認します。

XML 変換ジョブの構成

XML 変換ジョブを作成して XML ファイルを目的の出力に変換し、XML からキャプチャ・メタデータ・フィールドの値を割り当てることができます。これを実行するには、XSLT プロセッサ定義のサポート済組合せを構成し、カスタム XSLT ファイルを指定します。さらに、XPath 式をキャプチャ・メタデータ・フィールドにマップできます。変換済の XML ファイルをサードパーティ・アプリケーションで使用して、他のパーティのビジネス・ニーズにあわせることができます。

ノート:

Oracle Content Management Starter Edition では XML 変換ジョブを作成できません。この機能を使用するには、Oracle Content Management Premium Edition にアップグレードする必要があります。詳細は、Starter Edition と Premium Edition を参照してください。

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。

選択したプロセスの構成ページが右側に表示されます。

2. 「処理」タブを開きます。

3. 「XML 変換ジョブ」表で  をクリックするか、既存のジョブを編集する場合は  をクリックします。

また、XML 変換ジョブを選択して  をクリックし、プロンプトが表示されたら新規の名前を入力して、XML 変換ジョブをコピーすることもできます。ジョブをコピーすると、すばやく複製および変更できます。

4. 「ドキュメントの選択」ページで:

a. 「ドキュメントの選択」セクションで次のようにします:

- ジョブの名前と説明を入力します。
- 特定のドキュメント・プロファイルの XML 変換ジョブを処理するには、「ドキュメント・プロファイルに制限」フィールドにリストされているドキュメント・プロファイルを 1 つ以上選択するか、「すべて」を選択して、定義されているすべてのドキュメント・プロファイルのドキュメントを処理します。

b. 変換の出力先ドロップダウン・リストで適切なオプションを選択します:

- **ドキュメント:** 元のドキュメントを変換の結果に置き換えます。必要に応じて、ドキュメント・プロファイルを変更することもできます。
- **ドキュメント、コピーの保持:** 元のコピーを保持します。このオプションを選択した場合、ドキュメント・プロファイルを選択することもできます。ただし、**添付タイプの保持**ドロップダウン・リストから添付タイプを選択する必要があります。
- **添付:** 変換の結果を添付として格納します。「新規添付タイプ」ドロップダウン・リストから添付タイプを選択する必要があります。
- **キャプチャ・フィールド:** 「キャプチャ」フィールドに変換の結果を格納します。「キャプチャ・フィールド」ドロップダウン・リストから「テキスト・フィールド」を選択する必要があります。

c. 「添付の選択」セクションで、次のようにします:

- i. 前のステップで行った選択に適用可能であれば、「添付の処理」チェック・ボックスを選択します。
- ii. 使用可能な添付タイプにチェック・ボックスを選択して、必要な添付タイプに制限します。これらのすべての選択することもできます。
- iii. 変換出力宛先を選択します:
 - **添付:** 添付タイプを変更するオプションがあります。
 - **添付、コピーの保持:** 添付タイプを選択するオプションがあります。ただし、**添付タイプの保持**ドロップダウン・リストから添付タイプを選択する必要があります。
 - **キャプチャ・フィールド:** 「テキスト・フィールド」または「XML フィールド」を選択する必要があります。

5. 「変換」ページの「変換定義」で次のようにします:

- a. **XML 変換の実行**チェック・ボックスがまだ選択されていない場合、これを選択して、このページでフィールド値を編集できるようにします。このチェック・ボックスの選択を解除すると、編集は無効になりますが、最後にフィールドに保存した値は保持されます。XML 変換が不要の場合、このチェック・ボックスの選択を解除できます。
- b. 「**変換エンジン**」セクションで次のようにします:
 - 互換性のある「**XSLT バージョン**」、「**プロセッサ**」および「**プロセッサ・バージョン**」を選択します。システムのデフォルトを選択するか、Xalan と互換性のある使用可能な XSLT バージョンおよび Saxon-HE プロセッサとそのバージョンから選択します。
 - XML、HTML、JSON、テキストなどの「**出力ファイルの拡張子**」を指定します。

 **ノート:**

出力ファイルの拡張子が XML でない場合、「フィールド・マッピング」ページが無効になります。

- c. 変換を実行するには、「**XML スタイルシート**」セクションで XSLT をアップロードまたは入力します。
- d. XSLT に含めたパラメータは、「パラメータ」表で定義されている必要があります。これを行うには:
 - i. 「**パラメータ**」表で  をクリックします。
 - ii. **XSLT パラメータの追加**ダイアログで、パラメータ名を追加し、これに値を割り当てます。テキスト値を追加するか、パラメータ用にメタデータ値を組み立てます。
 - iii. ステップ i と ii を繰り返し、必要なパラメータを定義します。

 **ノート:**

XSLT で定義されているパラメータに値を割り当てていない場合、または XSLT に存在しないパラメータに値を割り当てている場合、XML 変換ジョブを保存できず、変換ジョブを保存しようとしたときに通知されません。

- e. 「**変換テスト**」セクションで、変換済 XML をアップロードおよびテストし、適切に生成されていることを確認し、「**次**」をクリックします。このセクションの右側の上部で「**プレビュー**」をクリックして、このセクションでコンテンツをプレビューすることもできます。
6. 「**フィールド・マッピング**」ページで、ユーザーが XML ドキュメントから値を抽出できるように、特定の要素または属性へのナビゲーションを定義します:
 - a. **XPath フィールド・マッピングの実行** Perform XPath Field Mapping チェック・ボックスを選択して、「XPath フィールド・マッピング」表を編集できるようにします。このチェック・ボックスの選択を解除した場合、表は編集できなくなります。ただし、最後に保存した値は保持されます。
 - b. 次のステップで選択する解析フォーマットが厳密に準拠している必要がある場合、**解析エラーのバッチの失敗**チェック・ボックスを選択します。

- c. 「XPath フィールド・マッピング」表の右上で、 をクリックします
 - d. 「XPath フィールド・マッピングの編集」ダイアログで次のようにします:
 - i. 「XPath 式」フィールドで選択済メタデータのデータ・フィールドに XPath 式を指定して、解析フォーマットを選択します。
XPath 式は、存在する場合に変換の出力で評価されます。変換を実行しない場合、XPath 式はドキュメントまたは添付で評価されます。
 - ii. 日付解析フォーマット・ドロップダウン・リストで、解析フォーマットを選択します。「キャプチャ」フィールドが数値の場合、かわりに**数値解析フォーマット**・ドロップダウン・リストが表示されます。必要に応じて、カスタム解析フォーマットをドロップダウン・リストで選択できます。
 - iii. 「OK」をクリックします。
「XPath フィールド・マッピング」表の「XPath 式」列に追加した値が選択したフォーマットで日付に解析されます。
 - e. 「OK」をクリックします。
7. 「後処理」ページで、XML 変換ジョブの完了後の処理を次に基づいて指定します:
- システム・エラーなしの状況は、前のページのすべての基準が満たされた場合です。成功した変換はコミットに進むことができます。
 - システム・エラーとは、レコードが見つからない、見つかったレコードが多すぎるなど、変換が失敗した場合のことです。失敗した変換の場合、バッチは修復のためにコンテンツ・キャプチャ・クライアントに戻ります。
- [XML 変換ジョブの後処理とモニタリングの構成](#)を参照してください
8. 「サマリー」ページの設定を確認して「送信」をクリックし、ジョブを保存します。
 9. バッチの XML 変換ジョブへの進め方を構成します。[XML 変換ジョブへのバッチ・フローの構成](#)を参照してください。
 10. 作成した XML 変換ジョブをテストします。

XML 変換ジョブの後処理とモニタリングの構成

XML 変換ジョブの後処理オプションを使用して、処理の完了後の処理を指定します。

XML 変換ジョブの後処理およびモニタリングを構成するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「プロセッサ」タブを開きます。
3. 「XML 変換ジョブ」表で、[XML 変換ジョブを追加または編集](#)します。
4. 「後処理」ページをクリックして、成功した処理(システム・エラーなし)および失敗した処理(1 つ以上のシステム・エラー)に対する処理オプションを表示します。
次のステップは、**システム・エラーがない場合**と**システム・エラーがある場合**の両方の項に適用されます。
5. 「バッチ・プロセッサ」および「バッチ・プロセッサ・ジョブ」フィールドで、XML 変換ジョブの完了後の処理ステップがある場合、処理ステップを指定します。「なし」、**コミット・プロセッサ**、**認識プロセッサ**、**TIFF への変換**、**PDF への変換**、

アセット・ルックアップ・プロセッサまたは **XML 変換プロセッサ**から選択できます。

6. 電子メール・アドレスのフィールドに、オプションで、処理が正常に完了または失敗した後に電子メールを送信する宛先のアドレスを入力します。XML 変換ジョブの構成およびテストの際、システム・エラー時に電子メール通知を受信し、後で管理者に処理エラーを自動的に警告するように設定することができます。
7. 残りの各フィールドで、処理済のバッチを変更する方法を指定します。
 - 接頭辞を追加することにより、バッチの名前を変更します。たとえば、失敗したバッチは、フォローアップのために接頭辞 **ERR** を付けた名前に変更します。
 - バッチ・ステータスまたは優先度を変更します。たとえば、システム・エラーのあるバッチのステータスを変更してから、バッチ・フィルタリングをこのステータスに設定したクライアント・プロファイルを作成すると、適格なユーザーが、エラーの発生したバッチを手動で編集して完了できるようになります。
8. 「送信」をクリックして、ジョブを保存します。

XML 変換ジョブへのバッチ・フローの構成

XML 変換ジョブを実行するには、処理のためにジョブに送られるようにバッチを構成する必要があります。これを行うには、クライアント・プロファイルで XML 変換ジョブを後処理ステップとして設定します。

バッチ・フローは次のものから構成できます:

- クライアント・プロファイル([クライアント・プロファイルの後処理の構成](#)を参照)。
- インポート・プロセッサ・ジョブ([インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成](#)を参照)。
- 認識プロセッサ・ジョブ([認識プロセッサ・ジョブの後処理および監視の構成](#)を参照)。
- PDF への変換ジョブ([PDF への変換ジョブの後処理および監視の構成](#)を参照)。
- TIFF への変換ジョブ([TIFF への変換ジョブの後処理および監視の構成](#)を参照)。
- アセット・ルックアップ・ジョブ([アセット・ルックアップ・ジョブの後処理とモニタリングの構成](#)を参照)。

XML 変換ジョブの非アクティブ化または削除

XML 変換ジョブを削除すると、このジョブが後処理ステップとして設定されているバッチにこのジョブは使用できなくなります。後処理に指定されたジョブが使用できない場合は、バッチにエラーが発生します。ジョブを削除する前にしばらくの間オフラインに変更して、その削除に伴う予期しない問題を解決できるようにしておくのが望ましい場合もあります。オンライン XML 変換ジョブは、クライアント・プロファイルまたはプロセッサ・ジョブの「後処理」ページで選択されている場合に実行されます。ジョブを一時的に停止(オフラインに)したり、非アクティブ化されたジョブを再実行するように変更することができます。

XML 変換ジョブを非アクティブ化または削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「処理」タブを開きます。

3. ジョブを非アクティブ化するには、「XML 変換ジョブ」表で選択し、 をクリックします。
「ドキュメントの選択」ページで「オンライン」フィールドを選択したり、選択解除して、XML 変換ジョブを非アクティブにしたり、アクティブにすることもできます。
4. 非アクティブ化したジョブを「XML 変換ジョブ」表で選択し、 をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「はい」をクリックしてこのジョブを削除することを確認します。

コミット・プロファイルの構成

コミット・プロファイルで、ドキュメント・フォルダ、アセット・リポジトリおよびビジネス・リポジトリのタイプのコミット・ドライバを構成できます。また、ドキュメント・プロファイルへのコミットを制限して、ユーザーがドキュメント・プロファイルで指定された条件を満たすドキュメントのみをリポジトリにチェックインできるようにすることもできます。バッチが正常にコミットされたら、プロセスから完全に削除されます。

コミット処理とは何か、およびコミット・プロファイルを構成する方法について学習するには、次を参照してください:

- [コミット処理について](#)
- [コミット・プロファイルの追加または編集](#)
- [コミット・プロファイルのアクティブ化と並替え](#)
- [コミット・プロファイルの非アクティブ化または削除](#)
- [ドキュメント・プロファイルに基づくコミット・プロファイルの制限](#)
- [エージェントまたはビジネス・リポジトリのコミット・ドライバ設定の構成](#)
- [ドキュメント・フォルダのコミット・ドライバ設定の構成](#)
- [コミット・プロセッサへのバッチ・フローの構成](#)

コミット処理について

コンテンツ・キャプチャ機能を使用すると、ドキュメントおよびアセットを Oracle Content Management にコミットできます。「コミット」タブで、Oracle Content Management のコミット・ドライバ設定を構成するコミット・プロファイルを作成します。また、コミット操作を1つのドキュメント・プロファイルに制限すると、ユーザーはそのドキュメント・プロファイルで指定された基準を満たすドキュメントのみをリポジトリにチェックインできます。

ノート:

ファイルを Oracle Content Management にコミットまたはチェックインするたびに、新しいバージョンのファイルがリポジトリ内に作成されます。ファイルをコミットするときにファイル名を一意的な名前にする場合は、コミット・プロファイルの「ドキュメント・ファイル・ネーミング」タブで使用可能なオプションを使用してください。

ドキュメント・フォルダ、アセット・リポジトリおよびビジネス・リポジトリのコミット・ドライバについて

Oracle Content Management でコンテンツをドキュメントとしてコミットする必要がある場合は、ドキュメント・フォルダ・コミット・ドライバを利用できます。ただし、コンテンツを様々なタイプのアセット(Oracle Content Management でサポートされており、リポジトリ

用に構成されているアセット・タイプ)としてチェックインする必要がある場合は、代わりにアセット・リポジトリ・ドライバを使用してください。**Oracle Content Management** リポジトリでデジタル・アセット・タイプが構成されている場合は、このドライバを使用できます。このため、コンテンツ・タイプはオプションですが、リポジトリにはデジタル・アセット・タイプが含まれている必要があります。ただし、コンテンツ・アセットのみを格納し、ローカリゼーション、公開および配信にしない場合、ビジネス・リポジトリ・ドライバを選択します。

Oracle Content Management におけるデジタル・アセット・タイプおよびコンテンツ・タイプの意味は次のとおりです:

デジタル・アセット・タイプ: **Oracle Content Management** には、いくつかの即時利用可能なデジタル・アセット・タイプ(ファイル、イメージおよびビデオ)が含まれます。たとえば、イメージには、カメラからの EXIF 情報(日付、時刻、場所、解像度など)、システム設定(アセット作成日、最終更新日、ステータス、バージョンなど)およびカスタム・メタデータが含まれる場合があります。各イメージの著作権、許可される用途、および連絡先情報を収集することが必要な場合があります。デジタル・アセットは、**Web** サイト、マーケティング資料、電子メール・キャンペーン、オンライン・ストア、ブログといった、様々な方法および様々なコンテキストで使用されます。デジタル・アセットは、コンテンツ・モデリングおよび公開に使用されることが多いため、コンテンツのコラボレーション、共有および同期を目的とした通常のドキュメントとは異なります。

コンテンツ・タイプ: コンテンツ・タイプは、コンテンツ・アイテムに含める情報を指定するために使用されるフレームワークです。また、コンテンツ・タイプにはレイアウトを関連付けることができます。これによって、表示形式と、その特定のレイアウトで使用される情報が決まります。たとえば、従業員の連絡先リストには情報のサブセットのみが表示され、**Web** サイト上の別の場所には従業員のピクチャ、ロケーションおよび役職が表示されるようにすることができます。コンテンツ・タイプを使用してコンテンツ・アイテムを作成すると、様々なレイアウトでそれがどのように表示されるかをプレビューできます。

イメージおよびイメージ以外のドキュメントについて

イメージ・ドキュメントの出力形式

- イメージ・ファイルは保存することも、TIFF または PDF 形式に変換することもできます。
- 保存されないイメージ・ファイルは、新しい形式で **Oracle Content Management** にコミットされます。
- イメージ以外のファイルおよび保存されたイメージは、そのままの形式でリポジトリにコミットされます。

イメージ以外のドキュメントのコミット

イメージ以外のドキュメントは、Microsoft Word、Microsoft Excel、PDF、EML ドキュメントなどのファイルです。イメージ以外のファイルのネイティブ形式を保持するようにコミット・プロファイルを構成できます。コミット時に、イメージ以外のドキュメントはイメージ・ドキュメントとは異なる方法で処理されます:

- イメージ以外のドキュメントはそのネイティブ形式のまま保持され、TIFF または PDF 形式に変換されることはありません。

- イメージ以外のドキュメントがオンラインの適用可能なすべてのコミット・プロファイルによって正常にコミットされると、イメージ・ドキュメントと同じようにプロシージャから削除されます。

コミット処理中のコミット・プロファイルの適用について

コミット処理に到達したバッチは、プロシージャに定義されている 1 つ以上のコミット・プロファイルにより処理される準備ができています。バッチは均一である(たとえば、同じドキュメント・プロファイルを使用するすべてのイメージ・ドキュメントで構成される)場合も、多様である(たとえば、異なるドキュメント・プロファイルに割り当てられたイメージ・ドキュメントおよびイメージ以外のドキュメントで構成される)場合もあります。いずれの場合も、バッチのコミットは次の一般的なプロセスに従います:

1. バッチがコミットに到達するためには、クライアント・プロファイルまたはプロセッサ・ジョブ内でコミット・プロセッサが後処理ステップとして選択されている必要があります。
2. プロシージャに定義されているすべてのコミット・プロファイルが、次のルールに従って、バッチに対して実行されます:
 - a. コミット・プロファイルは、プロシージャの「**コミット**」タブで指定した順序に従って 1 つずつ実行されます。
 - b. コミット・プロファイルは**オンライン**になっている必要があります。プロファイルを**オフライン**に変更すると、プロシージャのコミット処理におけるその使用が非アクティブ化されます。
 - c. コミット・プロファイルは、コミット・プロファイルに割り当てられたドキュメント・プロファイルと一致しないドキュメント・プロファイルが割り当てられたドキュメントの処理をスキップします。[ドキュメント・プロファイルに基づくコミット・プロファイルの制限](#)を参照してください。
 - d. コンテンツ・キャプチャは、各ドキュメントを処理するとき、必要なメタデータ・フィールドが入力されていることを確認します。必須のフィールドに値が含まれていない場合、ドキュメントにエラーが発生します。
 - e. エラーが発生した場合、コミット処理はドキュメントをスキップするか、コミット・プロファイルをスキップするか、またはコミット処理を取り消します。
3. コンテンツ・キャプチャによってバッチ内のドキュメントがコミットされます。
 - a. コンテンツ・キャプチャではバッチ内のすべてのドキュメントのコミットが続行され、すべてのコミット・プロファイルの実行が完了するか、エラーが発生してコミット・プロセス全体が取り消されるまで、このプロセスが繰り返されます。
 - b. バッチ内に残っているドキュメントがなくなると、コンテンツ・キャプチャによりバッチが削除されます。

ドキュメントのコミットに失敗した場合、そのドキュメントはバッチ内に残り、エラーが生成されます。
4. すべての適用可能なコミット・プロファイルによってドキュメントが正常にコミットされたら、コンテンツ・キャプチャによってドキュメントのファイルおよび関連するメタデータがバッチから削除されます。

コミット・エラー処理について

バッチのコミット中にエラーが発生したときに実行する処理を指定するには、コミット・プロファイルのエラー処理オプションを使用します。エラーが発生した場合、次のように処理できます:

- 次のドキュメントにスキップ
このオプションでは、現在のドキュメントのコミットをスキップし、バッチ内の次のドキュメントのコミットを開始します。
- 次のコミット・プロファイルにスキップ
このオプションでは、現在のコミット・プロファイルの実行を停止し、次のコミット・プロファイル(指定されている場合)の処理を開始します。
- コミットを取り消す
このオプションでは、他のコミット・プロファイルを含むコミット・プロセス全体の実行を停止します。

コミット中、コミット・プロファイルによりドキュメント/添付が正常にコミットされたかどうかを示すレコードが保守されます。コミット・プロファイルによってドキュメント/添付がコミットされる時、そのドキュメント/添付がすでに正常にコミットされているかどうかを確認するチェックが実行されます。されている場合、ドキュメント/添付のコミットが再試行されることはありません。

エラー設定に関係なく、エラーが解決されて正常にコミットされるまで、エラーが発生したすべてのドキュメントはバッチに残ります。

コミット後に残ったドキュメントについて

すべてのコミット・プロファイルの実行後に、コミットされていないドキュメントがバッチ内に残っている場合、バッチ・ロックがクリアされ、バッチはコンテンツ・キャプチャ・クライアントで開くことができるように準備完了状態になります。

コミット・プロファイルの追加または編集

コミット・プロファイルを追加または編集するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「コミット」タブを開きます。
3. 「コミット・プロファイル」表で  をクリックするか、コミット・プロファイルを選択して  をクリックします。

コミット・プロファイルを選択して  をクリックし、プロンプトが表示されたら新しい名前を入力することで、コミット・プロファイルをコピーすることもできます。コミット・プロファイルをコピーすると、コミット・プロファイルを簡単に複製して変更できます。

4. 「一般設定」ページで設定を完了します。
 - a. 「コミット・プロファイル名」フィールドに名前を入力します。
 - b. 「オンライン」フィールドが選択されていることを確認します。オンラインの場合、プロシージャのバッチがコミット・プロセッサによって処理されるたびに、コミット・プロファイルが実行されます。
 - c. 「宛先」フィールドで、「ドキュメント・フォルダ」、「アセット・リポジトリ」または「ビジネス・リポジトリ」を選択します。

- Oracle Content Management でコンテンツをドキュメントとしてコミットする必要がある場合は、「ドキュメント・フォルダ」を選択できます。
 - コンテンツを様々なタイプのアセット(Oracle Content Management でサポートされており、リポジトリ用に構成されている)としてチェックインする必要がある場合は、「アセット・リポジトリ」を選択します。
 - コンテンツ・アセットのみを格納し、ローカリゼーション、公開および配信にしない場合、「ビジネス・リポジトリ」を選択します。
- d. 「エラー処理ポリシー」フィールドで、コミットされるバッチ内の 1 つ以上のドキュメントでエラーが発生した場合の処理を指定します。コミット処理についてのコミット・エラー処理を参照してください。
 - e. 「コミットをドキュメント・プロファイルに制限」フィールドで、1 つ以上のドキュメント・プロファイルを選択して、コミット・プロファイルをそれらのドキュメント・プロファイルが割り当てられたドキュメントのみに制限します。ドキュメント・プロファイルに基づくコミット・プロファイルの制限を参照してください。

ノート:

このフィールドは「ドキュメント・フォルダ」宛先についてのみ使用可能です。

- f. デフォルト日付形式およびデフォルト・ロケールを選択します。
5. 「コミット・ドライバ設定」ページで、ドライバ固有の設定を完了します。ドキュメント・フォルダのコミット・ドライバ設定の構成を参照してください。
 6. 「後処理」ページで、システム・エラーの報告先の電子メール・アドレスを入力します。
 7. 「送信」をクリックし、コミット・プロファイルを保存します。
 8. バッチのコミット処理への進め方を構成します。コミット・プロセッサへのバッチ・フローの構成を参照してください。
 9. コミット・プロファイルをアクティブ化し、実行順序を指定します。
すべてのオンライン・コミット・プロファイルが、「コミット」タブにリストされた順序で処理されます。コミット・プロファイルのアクティブ化と並替えを参照してください。
 10. バッチをコミットして(たとえば、クライアントから)、コミット・プロファイルをテストします。コミット・プロファイルで指定されたリポジトリまたは場所でドキュメントを検索して表示します。

コミット・プロファイルのアクティブ化と並替え

コミット・プロファイルは、関連付けられているプロシージャからコミットされるすべてのバッチに適用されます。クライアント・プロファイルまたは他のプロセッサ・ジョブでコミット・プロセッサを後処理ステップとして指定した場合、すべてのオンライン・コミット・プロファイルが「コミット」タブにリストされた順序で処理を開始します。いくつかの方法でそれらの処理を制限できます:

- 次に説明するようにコミット・プロファイルをオフラインに変更し、一時的に非アクティブ化します。
- コミット・プロファイルで、選択したドキュメント・プロファイルのいずれかに割り当てられたドキュメントにコミットを制限できます。これによって、ドキュメントに割り当て

られたドキュメント・プロファイルに基づいて、様々なタイプのドキュメントを別のコンテンツ管理システムにコミットできます。[ドキュメント・プロファイルに基づくコミット・プロファイルの制限](#)を参照してください。

コミット・プロファイルの処理をアクティブ化し、並べ替えるには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「コミット」タブを開きます。
3. コミット・プロファイルをアクティブ化するには、「コミット・プロファイル」表でコミット・プロファイルを選択し、をクリックします。
アクティブなコミット・プロファイルは「ステータス」列に「オンライン」と表示され、非アクティブなコミット・プロファイルは「オフライン」と表示されます。
4. 必要に応じて、上下のボタンを使用してコミット・プロファイルを並べ替えます。

ノート:

エラーが発生したドキュメントは、エラーが解決されて再びコミットされるまでバッチに残ります。

コミット・プロファイルの非アクティブ化または削除

コミット・プロファイルを削除すると、コミット処理が後処理ステップとして設定されているバッチにそのコミット・プロファイルは使用できなくなります。コミット・プロファイルを削除する前にしばらくの間オフラインに変更して、その削除に伴う予期しない問題を解決できるようにしておくことをお勧めします。

コミット・プロファイルを非アクティブ化または削除するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「コミット」タブを開きます。
3. コミット・プロファイルを非アクティブ化するには、「コミット・プロファイル」表でコミット・プロファイルを選択し、をクリックします
4. 「コミット・プロファイル」表で、非アクティブ化したプロファイルを選択して  をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、「はい」をクリックしてこのコミット・プロファイルを削除することを確認します。

ドキュメント・プロファイルに基づくコミット・プロファイルの制限

最終の後処理ステップであるコミット処理にバッチが到達すると、コミット・プロセッサは、「コミット」タブに指定されている順序に従って、すべてのオンライン・コミット・プロファイルを通じてコミット処理を実行します。ただし、コミット・プロファイルを、指定されたドキュメント・プロファイルに割り当てられたドキュメントのみの処理に制限することで、コミット・プロファイルがドキュメントを処理しないようにすることができます。

ドキュメント・プロファイルに基づいてコミット・プロファイルの実行を制限するには:

1. 左側のプロシージャ・ペインで、プロシージャを選択します。
選択したプロシージャの構成ページが右側に表示されます。
2. 「コミット」タブを開きます。
3. 「コミット・プロファイル」表で、コミット・プロファイルを選択して  をクリックします。
4. 「一般設定」ページの「コミットをドキュメント・プロファイルに制限」フィールドで、1つ以上のドキュメント・プロファイルを選択し、選択したドキュメント・プロファイルが割り当てられたドキュメントのみをコミットします。

エージェントまたはビジネス・リポジトリのコミット・ドライバ設定の構成

コンテンツ・リポジトリ内で、コンテンツ・アセットは、それが属するワークフローの一部となり、相応に処理されます。Oracle Content Management で様々なタイプのアセットを作成および管理する方法の詳細は、*Oracle Content Management* でのアセットの管理のアセット・タイプの管理を参照してください。たとえば、請求書コンテンツ・タイプの処理では、自動化されたワークフローを使用できます。最初に請求書が「買掛金」基準を満たすかどうかチェックされて、請求書が次のアクション(請求書の拒否または承認など)のためにルーティングされ、その後、修正や支払のリクエストが行われます。

エージェント・リポジトリまたはビジネス・リポジトリのコミット・ドライバ設定を構成するには:

1. コミット・プロファイルを作成します。
2. 「一般設定」ページの「宛先」フィールドで、次からいずれかを選択します:
 - コンテンツをアセットとしてコミットする場合は、宛先として「アセット・リポジトリ」を選択します。
 - コンテンツ・アセットのみを格納し、ローカリゼーション、公開および配信用にしない場合、「ビジネス・リポジトリ」を宛先として選択します。
3. 「コミット・ドライバ設定」ページで、リポジトリおよびコンテンツ・タイプを選択し、アセットをリポジトリ用のコンテンツ・タイプにマップします。「リポジトリ」タブで、次のようにします:
 - a. 「リポジトリ」ドロップダウン・リストから、コンテンツ・アセットをコミットするリポジトリを選択します。選択内容は、前のステップで選択したリポジトリのタイプ

にあわせる必要があります。必ず、1 つ以上のデジタル・アセット・タイプを含むリポジトリを選択してください。

- b. 作成する親コンテンツ・アイテムをコンテンツ・リポジトリ内のフィールドにマップしない場合は、このステップをスキップできます。ただし、親コンテンツ・タイプを選択すると、「親コンテンツ・アイテム」タブがメタデータ・マッピングのために有効になります。「親コンテンツ・アイテム」ドロップダウン・リストから、コミットするコンテンツ・アセットを表すタイプを選択します。
4. 「アセット」タブでは、アセットをカスタム・デジタル・アセット・タイプ、自動アセット・タイプ、およびその他の使用可能なタイプにマップし、それに名前を付けることもできます。
 - a. アセット・タイプを使用してアセットをマップするには、「アセット・タイプへのドキュメントと添付のマッピング」表の右上にある  をクリックします。「アセット・タイプ・マッピングの追加」ダイアログが表示されます。
 - b. 「キャプチャ・オブジェクト」ドロップダウン・リストから、タイプを割り当てるアセットを選択します。
 - c. 「アセット・タイプ」ドロップダウン・リストから、使用可能なタイプから適切なものを選択します。アセット・タイプを選択すると、「アセット・フィールド」列に入力されます。
 - d. アセット・フィールドをマップするには、それを選択して、表の右上にある  をクリックします。次に、「アセット・タイプ・フィールド・マッピング」ダイアログで、使用可能なフィールドから選択し、「OK」をクリックします。

ノート:

「テキスト」または「大きいテキスト」のアセット・タイプ・フィールドは、キャプチャ・メタデータの複合値にマップできます。編集アイコンをクリックすると、アセットの名前を指定するダイアログと同じ外観の、別のダイアログが開きます。このダイアログで、いくつかの文字で区切られた複数のキャプチャ・メタデータ・フィールドを選択できます。

アセットごとに、これらのステップを繰り返します。

5. 「親コンテンツ・アイテム」タブは、「コミット・ドライバ設定」ページの「リポジトリ」タブで親コンテンツ・タイプを選択した場合にのみ有効になります。このタブでは、アセット・リポジトリにコミットするドキュメントのキャプチャ・メタデータ・フィールドを「親コンテンツ・アイテム」フィールドにマップできます。「コミット・ドライバ設定」ページの「親コンテンツ・アイテム」タブで、次のようにします:
 - a. 「コンテンツ・タイプ・フィールド・マッピング」表で、親コンテンツ・タイプ・フィールドを選択し、 をクリックします。

 ノート:

「テキスト」または「大きいテキスト」の親コンテンツ・タイプ・フィールドは、キャプチャ・メタデータの複合値にマップできます。編集アイコンをクリックすると、アセットの名前を指定するダイアログと同じ外観の、別のダイアログが開きます。このダイアログで、いくつかの文字で区切られた複数のキャプチャ・メタデータ・フィールドを選択できます。

- b. 「」 マッピングの編集ダイアログで必要な選択を行い、「OK」をクリックします。
「コンテンツ・タイプ・フィールド・マッピング」表の「キャプチャ・ソース」列に変更内容が表示されます。
6. 「送信」をクリックします。
コミット・ドライバが構成されます。

ドキュメント・フォルダのコミット・ドライバ設定の構成

ドキュメント・フォルダ・コミット・ドライバ設定を構成するには:

1. コミット・プロファイルを作成します。
2. 「一般設定」ページの「宛先」フィールドで「ドキュメント・フォルダ」を選択します。
3. 「コミット・ドライバ設定」ページを選択します。
4. 「ドキュメント・フォルダ」タブで、ドキュメントのコミット先を指定します:
 - 「親フォルダ」セクションで「フォルダの選択...」をクリックして「親フォルダの選択」ダイアログを表示します。「親フォルダの選択」セクションには、コミット・プロファイルに指定された親フォルダがない場合はユーザーのホーム・フォルダが表示され、それ以外の場合は選択した親フォルダが表示されます。すべてのドキュメントをコミットするフォルダを選択して「OK」をクリックします。選択した親フォルダの名前が「名前」フィールドに表示され、親フォルダの対応する一意の ID が「ID」フィールドに表示されます。オプションで、「フォルダのクリア」をクリックして現在の選択をクリアし、新しい Oracle Content Management フォルダを選択します。
 - オプションで、「サブフォルダ作成」セクションで「フィールド値を使用してサブフォルダを作成」オプションを選択して、親フォルダ内に動的に作成され、メタデータ・フィールド値を使用して名前が付けられるサブフォルダにドキュメント・ファイルを格納します。「使用可能なフィールド」リストから含めるメタデータ・フィールドを選択し、「選択したフィールド」リストに移動します。各メタデータ・フィールドはサブフォルダを表し、メタデータ・フィールドの順序はサブフォルダの階層を示します。
「フォルダ名が無効な文字で構成されている場合」フィールドで「無効な文字の削除」オプションまたは「ドキュメント・コミットの取消」オプションを選択して、サブフォルダ名に無効な文字が検出された場合のコンテンツ・キャプチャの処理を指定します。

 ノート:

- Oracle Content Management でサブフォルダを作成する場合、既存のフォルダ名の検出で大文字と小文字は区別されません。
- サブフォルダの作成に使用されるメタデータ・フィールドの値が空白で、その後に空白以外のサブフォルダがある場合、ドキュメントのコミットは中止され、サブフォルダのパスが無効であることを示すエラー・メッセージが表示されます。
- サブフォルダの作成に使用されるメタデータ・フィールドの値が空白で、その後に空白以外のサブフォルダがない場合、ドキュメントは最初の空白のサブフォルダの親フォルダに格納されます。

次に例を示します:

メタデータ・フィールドが `CustName="Corp 1",CorrespondenceType="AP",OrderNumber=NULL` の場合、ドキュメントは `<Parent Folder>\Corp 1\AP` に格納されます。

メタデータ・フィールドが `CustName="Corp 1",CorrespondenceType=NULL,OrderNumber=NULL` の場合、ドキュメントは `<Parent Folder>\Corp 1` に格納されます。

メタデータ・フィールドが `CustName=NULL,CorrespondenceType=NULL,OrderNumber=NULL` の場合、ドキュメントは `<Parent Folder>\` に格納されます。

5. 「ドキュメント・ファイル・ネーミング」タブで、ドキュメント・ファイルとドキュメント添付ファイルの名前の付け方を指定します。
 - オプションで、「**イメージ以外のファイルに元のファイル名を使用**」フィールドを選択し、元のファイル名を使用してイメージ以外のファイルに名前を付けます。
 - オプションで、「**メタデータ・フィールド値に基づいてドキュメント・ファイルに名前を付ける**」フィールドを選択して、選択した 1 つ以上のメタデータ・フィールドの値に基づいてファイルに名前を付けます。このフィールドを選択しない場合、コンテンツ・キャプチャでは、内部バッチ ID、アンダースコアおよび数字の識別子を含むデフォルト・ネーミング・スキームを使用して、ファイルに名前が付けられます。「**使用可能なフィールド**」リストから含めるメタデータ・フィールドを選択し、「**選択したフィールド**」リストに移動します。
 - 「**選択したフィールド**」リストで、メタデータ・フィールドを並べ替えます。フィールドの順序はドキュメント・ファイルのネーミングに影響します。
 - 「**フィールド・デリミタ**」フィールドで、メタデータ・フィールド値間に使用するフィールド・デリミタを指定します。
 - 「**ファイル名が無効な文字で構成されている場合**」フィールドで「**無効な文字の削除**」オプションまたは「**ドキュメント・コミットの取消**」オプションを選択して、ドキュメント・ファイル名に無効な文字が検出された場合のコンテンツ・キャプチャの処理を指定します。
6. 「メタデータ」タブで「**ドキュメント・メタデータ・コレクション**」ドロップダウン・リストからコレクションを選択します。次に、**キャプチャ・フィールド**を**メタデータ・コレクション・フィールド**にマップし、マップしたフィールドのデータ型が一致することを確認します。**メタデータ・コレクション・フィールド**を選択し、



をクリックしてマップ先の**キャプチャ**・フィールドを選択します。このステップを繰り返し、追加のフィールドをマップします。

7. オプションで、「**オプション**」タブの「**ドキュメント添付オプション**」フィールドで、ドキュメントの添付を含めるかどうかとその方法を指定します:
 - ドキュメントを **Oracle Content Management** にコミットする際、添付をドキュメントから除外する場合、「**添付の除外**」オプションを選択します。
 - ドキュメントを **Oracle Content Management** にコミットする際、添付タイプに基づいてサブフォルダに添付を含める場合、「**添付タイプごとにサブフォルダを含める**」オプションを選択します。

ノート:

添付ごとに、サブフォルダがプライマリ・ドキュメントの **Oracle Content Management** フォルダに作成されます(サブフォルダがまだ存在しない場合)。ドキュメント添付の添付タイプ名を使用して、サブフォルダに名前が付けられます。添付に添付タイプ名がない場合、サブフォルダ名は Attachments です。

コミット・プロセッサへのバッチ・フローの構成

バッチをコミットするには、[コミット処理についてのコミット処理中のコミット・プロファイルの適用](#)で説明されているように、クライアント・プロファイルまたはバッチ・プロセッサ・ジョブがコミット・プロセッサに進むように構成する必要があります。これを行うには、クライアント・プロファイルまたは他のプロセッサ・ジョブでコミット・プロセッサを後処理ステップとして設定します。次のフロー元からのバッチ・フローを構成するには:

- クライアント・プロファイルの場合、[クライアント・プロファイルの後処理の構成](#)を参照してください。
- インポート・プロセッサ・ジョブの場合、[インポート・プロセッサ・ジョブの後処理の構成](#)を参照してください。
- 変換プロセッサ・ジョブの場合、[PDF への変換ジョブの後処理および監視の構成](#)および [TIFF への変換ジョブの後処理および監視の構成](#)を参照してください。
- 認識プロセッサ・ジョブの場合、[認識プロセッサ・ジョブの後処理および監視の構成](#)を参照してください。
- アセット・ルックアップ・プロセッサ・ジョブの場合、[アセット・ルックアップ・ジョブの後処理とモニタリングの構成](#)を参照してください。
- XML 変換ジョブの場合、[XML 変換ジョブの後処理とモニタリングの構成](#)を参照してください。

第III部

ドキュメントのスキャンとインポート

ローカル・コンピュータにインストールされたソフトウェアであるコンテンツ・キャプチャ・クライアントを使用して、ハードコピー(印刷)および電子ドキュメントをスキャンしてインポートします。Oracle Content Management Web インタフェースからソフトウェア・インストーラをダウンロードできます。まだの場合は、キャプチャ・クライアント環境を構成するプロセス・マネージャとバッチ処理のニーズについて話し合い、目標を効率的かつ迅速に達成できるようにします。プロセス・マネージャは、ドキュメントをキャプチャするか、ドキュメントに索引を付けるか、あるいは両方を行うようにクライアント環境を構成します。職務要件に基づいて、これらのドキュメントを変換、索引付け、および再編成できます。ドキュメント間に空白ページを挿入できます。ビジネスでバー・コード処理が必要で、それをサポートするようにドキュメント・プロファイルが構成されている場合、イメージ・ドキュメントのバー・コードはすべて自動的にキャプチャされ、それらが属するビジネス・レコードに関連付けられます。また、ドキュメントには、バー・コード番号を含む事前定義されたメタデータに基づいて索引も付けられ、Oracle Content Management で簡単に検索できます。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントで行う主なタスクは次のとおりです:

- [コンテンツ・キャプチャ・クライアントの設定](#)
- [コンテンツ・キャプチャ・クライアントについて](#)
- [コンテンツ・キャプチャ・クライアント機能の理解](#)
- [ハードコピー・ドキュメントのスキャン](#)
- [電子ドキュメントのインポート](#)
- [ドキュメントのレビューと編集](#)
- [メタデータによるドキュメントの索引付け](#)
- [バッチの管理](#)

コンテンツ・キャプチャ・クライアントの設定

自動処理のためにイメージおよびイメージ以外の電子および物理ドキュメントをコンテンツ・キャプチャにスキャンおよびインポートする場合、コンテンツ・キャプチャ・クライアントが必要です。まず、**Oracle Content Management Web** インタフェースからローカル・コンピュータにクライアント・インストーラをダウンロードし、インストーラを実行します。コンピュータにインストールしたコンテンツ・キャプチャ・クライアントにアクセスするには、クライアント URL、ユーザー名およびパスワードが必要です。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントを設定するために行う主なタスクは次のとおりです:

- [始める前に](#)
- [コンテンツ・キャプチャ・クライアントのダウンロード](#)
- [コンテンツ・キャプチャ・クライアントのインストール](#)
- [コンテンツ・キャプチャ・クライアントの起動](#)

始める前に

Oracle Content Management のログイン情報は控えておいてください。これは、受信したようこそ電子メールに記載されています。情報を控えていない場合、または忘れてしまった場合は、Oracle Content Management システム管理者に連絡してください。

システム要件

コンテンツ・キャプチャ・クライアントは、JDK/JRE 8 がサポートされている Microsoft Windows オペレーティング・システム・バージョンでサポートされている Java アプリケーションです。[Oracle JDK 8 および JRE 8 の動作保証済システム構成](#)を参照してください。必要な Java ライブラリは、コンテンツ・キャプチャ・クライアントとともにパッケージに含まれています。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントのダウンロード

コンテンツ・キャプチャ・クライアントをダウンロードするには:

1. Oracle Content Management Web インタフェースにログインします。
2. 右上にあるプロファイル・メニューから「**アプリケーションのダウンロード**」を選択します。
3. 「**アプリケーションのダウンロード**」ページで「**キャプチャ**」をクリックし、「**Windows用にダウンロード**」をクリックして Oracle Content Capture Client インストーラ・ファイルをダウンロードします。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントのインストール

コンテンツ・キャプチャ・クライアントをインストールするには:

1. ローカル・コンピュータで、コンテンツ・キャプチャ・クライアント・インストーラをダウンロードしたディレクトリに移動します。
2. インストーラ・ファイルをダブルクリックして、インストールを開始します。
インストールが完了すると、Oracle Content Capture Client のショートカット・アイコンがデスクトップに表示されます。クライアントには、プログラム・メニューからもアクセスできます。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントの起動

コンテンツ・キャプチャ・クライアントを起動するには:

1. 「**プログラム**」メニューに移動し、「**Oracle**」を選択して「**Oracle Content Capture Client**」をクリックします。デスクトップのショートカット・アイコンからクライアントを起動することもできます。
2. 「**Oracle Content Capture**」ダイアログの「**サーバー**」フィールドに、接続先の Oracle Content Management インスタンスの URL を入力します。
3. ネットワーク・プロキシを介して接続するには、「**ネットワーク・プロキシ経由で接続**」チェック・ボックスを選択します。このオプションを使用すると、プロキシ・サーバーが認証を必要としない場合に、コンテンツ・キャプチャ・クライアントがシステム構成のプロキシ設定を使用できるようになります。
4. 「**OK**」をクリックします。
5. 「**ログイン**」ダイアログで、ユーザー名とパスワードを入力して「**OK**」をクリックします。

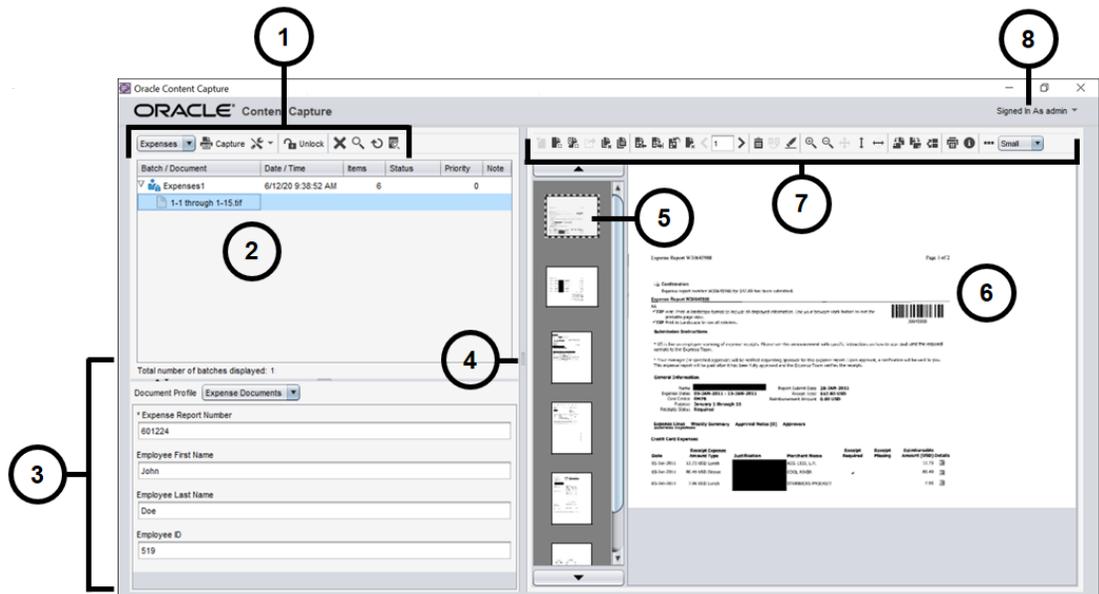
Oracle Content Capture Client ウィンドウが起動します。

[コンテンツ・キャプチャ・クライアントについて](#)を参照してください。

15

コンテンツ・キャプチャ・クライアントについて

ドキュメントのスキャンおよびインポートは、コンテンツ・キャプチャ・クライアントで行います。また、ドキュメントの索引付けおよび再編成もここで実行できます。コンテンツ・キャプチャ・クライアントの外観および実行できる操作について説明します。



アイテム 説明

- 1 **バッチ・タスク・バー**では、バッチ、ドキュメントおよび添付を選択できます。タスク・バーのアイコンを使用すると、クライアント・プロファイルの選択、ドキュメントのキャプチャ、キャプチャ設定の変更、バッチのロックまたはロック解除などのアクションを実行できます。詳細は、[コンテンツ・キャプチャ・クライアント機能の理解](#)を参照してください。
- 2 **バッチのリスト**が、バッチ内のドキュメントおよび添付とともに表示されます。バッチ・ペインでバッチを選択すると、右側のペインにバッチ情報が表示され、確認や編集ができます。
- 3 選択したドキュメントの**プロパティ**(経費精算書番号、従業員の氏名、従業員 ID など)が表示されます。これらのプロパティは、**Oracle Content Management** リポジトリ内でドキュメントを検索しやすくするための索引付けで使用されるメタデータとなります。
- 4 左側または右側の**サイズ変更ハンドル**をドラッグして、操作しているドキュメントの表示サイズを拡大または縮小します。
- 5 選択したドキュメントのページの**サムネイル**が表示されます。
- 6 ドキュメント内の選択したページが**全体表示**されます。

アイテム	説明
7	<p>ドキュメント・タスク・バーには、次のタスクを実行するためのいくつかのアイコンが用意されています:</p> <ul style="list-style-type: none">ドキュメントの作成、表示、複製および削除特定のページへの移動、ページの挿入、追加、置換および削除メタデータ値のコピー、貼付けおよびクリア選択したドキュメントのページ表示と拡大レベルの変更選択したページを回転選択したページを印刷選択したドキュメントのファイル情報の表示 <p>詳細は、コンテンツ・キャプチャ・クライアント機能の理解を参照してください。</p>
8	<p>このユーザー・メニューを使用すると、スキャナ・プリファレンスの構成、他のクライアント・プリファレンスの構成、ヘルプやソフトウェア・バージョン情報へのアクセス、およびアプリケーションの終了を行うことができます。</p>

コンテンツ・キャプチャ・クライアント機能の理解

コンテンツ・キャプチャ・クライアントには、3つの作業領域またはペインがある1つのウィンドウが用意されています。これらのペインで、バッチ、ドキュメント、添付およびページを操作します。

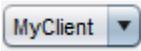
バッチ・ペイン

左上のバッチ・ペインは固定されていますが、それ以外のペインはバッチ・ペインのツリーで選択した内容に応じて変わります。選択した内容が、バッチおよびそのドキュメントの階層リストにリストされます。

バッチ・ペインを使用して、バッチ、ドキュメントおよび添付を選択したり、ツリーの上にあるバッチ・タスク・バー・アイコンをクリックしてバッチに対するアクションを実行します。バッチ・ペインでバッチを選択すると、右側のペインにバッチ情報が表示され、確認や編集ができます。たとえば、バッチのステータスまたは優先度を変更したり、ノートのリマインダとして挿入したり、他のメンバーに表示できます。バッチ情報の下にロック情報が表示されます。

ノート:

[F1]を押して、コンテンツ・キャプチャ・クライアントに関するヘルプ・トピックにアクセスします。

タスク	バッチ・ペインのアイコン	ショートカット
バッチのスキャンまたはインポート時に、設定を適用するプロファイルを選択します。		
バッチを作成、更新またはリリースする際には、常にクライアント・プロファイルを選択する必要があります。		
ドキュメントのスキャンまたはインポートを開始します。		F9
キャプチャ設定を変更します:		[Ctrl]+[S] (設定) [Ctrl]+[Alt]+[S] (ソース)
<ul style="list-style-type: none"> 選択したスキャナまたはインポート・ソースの設定を変更するには、その左側(「キャプチャ設定」)をクリックします。 キャプチャ・ソースとしてスキャナまたはインポート・ソースを選択するには、右側(「キャプチャ・ソース」)の三角形をクリックします。 		

タスク	バッチ・ペインのアイコン	ショートカット
<p>選択した 1 つ以上のバッチをロック解除して、そのデータを Oracle Content Management と同期します。</p> <p>リリース・プロセスを選択した後、バッチをリリース します。</p> <p>「ロック解除」か「リリース」のいずれかが表示されます。「ロック解除」と「リリース」を切り替えるには、一方のアイコンの横にある三角形をクリックします。</p>	 	<p>F10 (ロック解除/リリース)</p> <p>[Ctrl]+[Alt]+[R] (リリース・プロセスの選択)</p>
<p>選択した 1 つ以上のバッチを、そのドキュメントおよびメタデータも含めて完全に削除します。</p>		
<p>バッチの検索基準を指定し、バッチ・リストをフィルタ処理 します。</p> <p>バッチ名、作成日、ステータス、優先度または処理状態に基づいて検索できます。</p>		F7
<p>フィールドでアセット・ルックアップを実行します。</p>		[Ctrl]+[L]
<p>バッチの最新の変更が反映されるように、バッチのリストを再ロードします。</p>		F5
<p>バッチ内で、表示されたメタデータ・フィールドが「検索」フィールドの基準と一致するドキュメントを検索 します。</p>		[Ctrl]+[F]
<p>バッチ内で、表示されたメタデータ・フィールドが「検索」フィールドの基準と一致する前または次のドキュメントを検索 します。</p>		<p>[Shift]+[F3]</p> <p>F3</p>

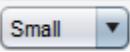
ドキュメント・ペイン

バッチ・ペインでドキュメントまたはその添付を選択すると、右側のドキュメント・ペインにすべてのドキュメントおよびそのサムネイル・イメージが表示され、上部のツールバーでドキュメント・オプションが使用可能になります。ドキュメント・ペインでは、選択したドキュメントをレビューおよび編集します。ドキュメント・ページのスクロール可能なサムネイル表示を含む、バッチ内のドキュメントの詳細が表示されます:

- 選択したサムネイル・ページは付近に完全なページ・ビューとしても表示されるため、ページを入念にレビューでき、必要な場合はさらに拡大できます。点線のアウトラインは、選択されたサムネイルを示します。
- ページの間にある淡色のバーは、1 つのドキュメントの終了と次のドキュメントの開始を示します。
- イメージ・ドキュメントからサムネイルをドラッグ・アンド・ドロップして、ドキュメント内またはドキュメント間のページを移動できます。ただし、イメージ以外のドキュメントに含まれるページは移動できません。
- サムネイルのツールチップには、ドキュメントの各ページのページ番号が表示されます。

ペイン上部のツールバー・アイコンを使用して、ドキュメントまたはそのページに変更を加えることができます。キーボード・ショートカットを使用するには、ドキュメントが選択されている必要があります。

タスク	ドキュメント・ペインのアイコン	ショートカット
バッチに 新規ドキュメント をキャプチャします。		
現在のページおよびその下にある次のドキュメントまでのすべてのページを使用して、 ドキュメントを分割 します。		[Ctrl]+[E]
選択したドキュメントを削除 します。 <ul style="list-style-type: none"> 選択したドキュメントを削除して、前のドキュメントの最後にそのページを追加します。(選択したドキュメントがバッチ内の最初のドキュメントである場合、ドキュメントを削除するオプションのみ表示されます。)ドキュメントを削除すると、そのメタデータ値も削除されることに注意してください。 選択したドキュメントを、そのすべてのページも含めて、バッチから削除します。 		[Ctrl]+[Alt]+[D]
ドキュメントへの 新規の添付 をキャプチャします。		
現在のページおよびその下にあるすべてのページを使用して、 添付を分割 します。このアイコンは、ドキュメント添付でページ 2 以上を選択した場合に使用できます。		[Ctrl]+[E]
バッチから、 選択した添付 を削除し、そのページも削除します。		[Ctrl]+[Alt]+[D]
選択したドキュメントを複製 するか、選択したページを複製します。		[Ctrl]+[U]
現在のドキュメントの 特定のページに移動 します。		<ul style="list-style-type: none"> [Ctrl]+[G] (テキスト・フィールドの場合) [Ctrl]+[P] (前のページに移動) [Ctrl]+[N] (次のページに移動)
前または次のドキュメントに移動します。		<ul style="list-style-type: none"> [CTRL]+[ALT]+[P] (前のドキュメントに移動) [CTRL]+[ALT]+[N] (次のドキュメントに移動)
選択したページの前にページを挿入 します。		
<ul style="list-style-type: none"> スキャンする場合は、フィーダの単一ページをスキャンするか、すべてのページをスキャンするかを尋ねるプロンプトが表示されます。 インポートする場合は、インポートするファイルを指定するためのプロンプトが表示されます。 		
前または次のドキュメント・アクション		[Ctrl]+[P]および[Ctrl]+[N]
バッチに追加するページを スキャン または インポート します(ページの追加)。		[Ctrl]+[Alt]+[A]
<ul style="list-style-type: none"> スキャンする場合は、フィーダの単一ページをスキャンするか、すべてのページをスキャンするかを尋ねるプロンプトが表示されます。 インポートする場合は、インポートするファイルを指定するためのプロンプトが表示されます。 		

タスク	ドキュメント・ペインのアイコン	ショートカット
選択したページを削除するか、(選択したページおよびリンクされたページを含む)すべてのページを削除し、スキャンまたはインポートするページでそのページを置換します。または、選択した 1 つ以上のページを削除します。		[Ctrl]+[D] (1 つ以上のページを削除)
ネイティブ・アプリケーションでイメージ以外のドキュメント/添付を表示します。		
選択したドキュメントからメタデータ値をコピーします。		[Ctrl]+[Shift]+[C]
現在のドキュメントに、別のドキュメントからコピーしたメタデータ値を貼り付けます。 <ul style="list-style-type: none"> メタデータ値のコピー/貼付けは、ドキュメントが同じバッチに属している場合にのみ許可されます。 貼付けは、ドキュメント・プロファイルがソース・ドキュメントのドキュメント・プロファイルと一致するドキュメントでのみサポートされています。 コピーした値を複数のドキュメントに貼り付けることができます。 両方のドキュメントがデフォルトのドキュメント・プロファイルを持つ場合は、一方のドキュメントのメタデータ値をもう一方のドキュメントにコピーします。 		[Ctrl]+[Shift]+[V]
選択したドキュメントのメタデータ値をクリアします。		[Ctrl]+[Shift]+[D]
拡大レベルを増加および減少させます。繰り返しクリックすると、さらにズームインおよびズームアウトします。	 	[Ctrl]+[I] [Ctrl]+[O]
ページ全体がウィンドウに収まるように、ページ表示を変更します。		[Ctrl]+[W]
高さ全体または幅全体がウィンドウに収まるように、ページ表示を変更します。	 	
左または右に 90 度、選択したページを回転します。ページは最終回転済として保存されます(イメージにのみ適用)。	 	[Ctrl]+[R] (右に回転)
上下 180 度、選択したページを回転します。ページは最終回転済として保存されます(イメージにのみ適用)。		
選択したプリンタに選択したページを印刷します。		
選択したドキュメントのファイル情報を表示します。		
縦方向および横方向にサムネイル表示を切り替えます。		
小、中、大のいずれかの表示を使用してサムネイルを表示します。		

メタデータ・ペイン

左下のペイン(メタデータ・ペイン)には、ドキュメントを索引付けするためのメタデータ・フィールドが表示されます。メタデータ・ペインを使用して、メタデータ値を完成することでドキュメントを索引付けします。

- メタデータ・ペインは、選択したクライアント・プロファイルに索引付けが含まれていて、バッチ・ペインまたはドキュメント・ペインでドキュメントが選択されている場合に表示されます。
- メタデータ・フィールドに入力した値は、選択したドキュメントのすべてのページに適用されます。メタデータ・フィールドでは、標準入力が確実に行われるように、入力マスクや特別な書式設定の数値または日付フィールドまたは選択リストを使用できます。アスタリスクは、必須メタデータ・フィールドであることを示します。
- 「**ドキュメント・プロファイル**」フィールドでは、選択したドキュメントに対して入力するメタデータ・フィールド・セットを指定します。
たとえば、顧客ドキュメントのバッチには、通信文および顧客契約のドキュメント・プロファイルを含めることができます。索引付けの際は、通信文ドキュメントが出現するたびに通信文ドキュメント・プロファイルを選択してそのフィールドを完成し、契約ドキュメントが出現するたびに顧客契約ドキュメント・プロファイルを選択します。
- キーボード・ショートカットを使用してメタデータ・フィールド間を移動する場合、次のメタデータ・フィールドに移動するには[Tab]、前のメタデータ・フィールドに移動するには[Shift]+[Tab]を押してください。
- 「**添付タイプ**」フィールドでは、選択した添付の添付タイプを変更します。このフィールドは、キャプチャのみのプロファイルでは使用できません。

バッチ情報ペイン

左側のバッチ・ペインでバッチを選択すると、右側のペインにバッチ情報が表示されます。バッチ情報では、バッチに関するノートを追加または編集したり、バッチのステータスや優先度を変更することができます。また、バッチを作成したユーザー名および作成日と最終変更日を表示できます。

バッチ情報ペインの下に、バッチのロック情報が表示されます。「**情報の取得**」をクリックすると、バッチをロックしたユーザー名およびワークステーション名が表示されます。

ハードコピー・ドキュメントのスキャン

コンテンツ・キャプチャ・クライアントで、TWAIN 準拠のデバイスを使用して紙のドキュメントをスキャンしたり、電子ファイルをインポートします。クライアント・プロファイルでスキャンおよびインポートの要件を設定します。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントは、イメージおよびイメージ以外のドキュメントに対応しています。ドキュメントをスキャンすると、複数ページ・イメージ・ドキュメントが作成されます。ドキュメント・ペインで、各ページを個々に表示したり、編集できます(ページの移動や回転など)。1つのドキュメントがどこで終了し、次のドキュメントがどこから始まるかを確認することもできます。選択したクライアント・プロファイルによって、バッチ内でのドキュメントの作成方法および分割方法が決まります。ドキュメントの作成オプションを選択するか、コンテンツ・キャプチャで自動的に作成することを許可するように求められます。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントで処理するためにドキュメントをスキャンする際に行う主なタスクは次のとおりです:

- [スキャナの設定](#)
- [スキャン・プリファレンスの構成](#)
- [ドキュメントのスキャン](#)

スキャナの設定

スキャナの電源がオンになっていることを確認します。一部のスキャナでは、コンピュータの電源をオンにする前にスキャナの電源を入れる必要があります。

スキャナを設定するには:

1. 使用するクライアント・プロファイルを決定します。必要に応じて、バッチの構造に基づいて、どのクライアント・プロファイルをバッチのスキャンに使用するかをプロシージャ・マネージャに尋ねます。クライアント・プロファイルによってバッチ内のドキュメントが作成される方法を理解しておく必要があります。
2. 必要に応じて、ドキュメントの間にセパレータ・シートを挿入して、ドキュメントをスキャン用のバッチに編成します。たとえば、片面のクライアント・プロファイルで使用するには、片面のドキュメントを1つのバッチに編成します。
3. スキャンするには、TWAIN 準拠のスキャナをシステムで使用できる必要があります。バッチ・ペインで「**キャプチャ設定/キャプチャ・ソース**」の右側をクリックします([Ctrl]+[Alt]+[S])。

三角形をクリックすると、1つ以上のキャプチャ・ソースが表示されます。選択したキャプチャ・ソース(スキャナまたはインポート・ソース)の横にチェック・マークが表示されます。

4. 複数のスキャナ・ソースがリストされる場合は、使用するスキャナ・ソースを選択します。スキャンせずにインポートするには、**インポート・ソース**を選択します。

5. キャプチャ設定はクライアント・プロファイルとともに保存されるので、クライアント・プロファイルごとに異なるスキャナ設定を構成できます。「**プリファレンス**」で追加のスキャナ・オプションを設定できることに注意してください。
 - a. 必要に応じて、設定を適用するスキャナ・ソースを選択します。[Ctrl]+[Alt]+[S]を押してスキャナを選択します。
 - b. バッチ・ペインで「**キャプチャ設定/キャプチャ・ソース**」の左側をクリックします([Ctrl]+[S])。
 - c. スキャナの設定を選択します。詳細は、スキャナに付属しているマニュアルを参照してください。クライアント・プロファイルの設定によっては、色および解像度に関する設定が無効になっている場合があります。

スキャン・プリファレンスの構成

「キャプチャ設定/キャプチャ・ソース」を使用して構成したスキャナ設定に加えて、「**プリファレンス**」の設定で追加のスキャン・オプションを設定できます。

スキャン・プリファレンスを構成するには:

1. ウィンドウの右上隅にあるドロップダウン・リストの矢印をクリックして、「**プリファレンス**」を選択します。
2. 「**プリファレンス**」ダイアログで、オプションで「**スキャンを続行して現行バッチに取り込むかをユーザーに確認**」フィールドを選択します。

選択すると、最初のスキャン後に、現在のバッチへのスキャンを続行するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。このオプションを使用すると、一時停止して、自動ドキュメント・フィーダに用紙を追加挿入できます。この機能は、1 ページずつバッチにスキャンするときにも便利です。

3. 必要に応じて、「**ファイル・モード転送の禁止**」フィールドを選択します。

ファイル・モード転送は、メモリー・バッファ単位で転送するのではなく、イメージ・ファイルをディスクに書き込むように TWAIN 準拠のドライバに指示し、スキャン効率が大幅に向上するため、望ましいアプローチです。ただし、ファイル転送モードでは、特定のスキャナ・ドライバでスキャンの問題が発生する可能性があります。このフィールドを必要に応じて選択し、ファイル転送モードをオフにします。
4. オプションで、「**スキャン後にバッチを自動レビュー/自動索引付け**」フィールドを選択解除し、右側のペインにプロパティを表示します。
5. 「**ページの削除前にスキャンされる最小バイト数**」フィールドで、空白ページを検出および削除する方法を指定します(オプション)。

このフィールドには、それを下回るとページが空白と見なされて削除されるバイト数を設定します。この値が 0 の場合は、クライアント・プロファイルで構成された値が、空白ページの検出に使用されます。

6. 「**保存**」をクリックします。

ドキュメントのスキャン

スキャンを開始する前に、コンテンツ・キャプチャ・アプリケーションで適切なクライアント・プロファイルが選択されていることと、スキャナに必要な設定がされており、フィーダ・トレイに用紙が支給されていることを確認してください。

ドキュメントをスキャンするには:

1. 次のいずれかを行います。

- a. スキャナを使用してドキュメントをスキャンするには、クライアント・プロファイルを選択して、コンテンツ・キャプチャ・クライアント・ウィンドウのバッチ・ペインで  Capture をクリックします。
- b. ビジネス・アプリケーションを使用してスキャンする場合は、アプリケーションで、提供されたアイコンまたはボタンをクリックしてドキュメントをキャプチャします。クライアント・プロファイル設定に応じて、コンテンツ・キャプチャで即時にスキャンが開始されるか、インポートまたはスキャンを開始するファイルの選択を求めるプロンプトが表示されます。
- c. セパレータ・ページにより分割されたドキュメントを含むバッチをスキャンするには、ドキュメントの間に空白のシートを挿入し、 Capture をクリックします。このプロファイルは、ドキュメント作成オプションの選択を求めるプロンプトを表示するように設定するか、可変ページ数のドキュメントを作成するように設定する必要があります。

2. クライアント・プロファイルの設定によっては、「**キャプチャ**」をクリックすると、「ドキュメント作成オプション」ウィンドウが表示されて、ドキュメントの作成方法の指定を求めるプロンプトが表示される場合があります。

- a. バッチの各ドキュメントの内容を指定します。次のうちから選択できます:
 - **1 ページ(片面)**: すべてのドキュメントが片面の場合はこのオプションを選択します。
 - **2 ページ(両面)**: すべてのドキュメントが両面の場合はこのオプションを選択します。
 - **可変ページ数**: セパレータ・シートを使用してドキュメントを定義している場合、またはドキュメントがすべて片面でもすべて両面でもない場合は、このオプションを選択します。
- b. 「OK」をクリックします。

選択したドキュメント作成オプションに基づいて、バッチがスキャンおよび作成されます。

「**可変ページ数**」を選択したが、セパレータ・シートを挿入していない場合は、単一のドキュメントが作成されます。ドキュメント・ペインで  を使用して、バッチ内にドキュメント区切りを作成します。

3. 必要に応じて、ドキュメントのレビュー、編集および索引付けを行います。メタデータ・フィールドにはすでに値が含まれている場合があります。

4. 追加のバッチをキャプチャするには、バッチ・ペインで  Capture をクリックします。

5. 「バッチ」ペインで 1 つ以上のバッチを選択して  をクリックすることにより、バッチをリリースします。あるいは、「バッチ」ペインで 1 つ以上のバッチを右クリックして「バッチのリリース」を選択し、構成されたリリース・プロセス・オプションの 1 つを選択します。これらのオプションは、「バッチ」ペインでバッチ内の 1 つ以上のドキュメントを選択した場合にも使用可能になります。

電子ドキュメントのインポート

クライアント・プロファイルで許可されている場合は、複数ページの TIFF ファイルなどのイメージ・ドキュメントや、Microsoft Word ファイルなどのイメージ以外のドキュメントをインポートできます。

イメージ以外のドキュメントをインポートする場合、コンテンツ・キャプチャはクライアント・プロファイル設定を使用して次のいずれかを行います：

- ファイルが複数ページのイメージ・ドキュメントに(スキャンしたかのように)変換されます。ドキュメント・ペインに、各イメージのサムネイルが表示されます。個々のページを選択および編集できます(ページの移動や回転など)。
- ファイルがインポートされ、ネイティブ形式で保持されます。ドキュメント・ペインには、イメージ以外の各ページのサムネイルが、クライアント・プロファイルに設定されている最大数まで表示されます。ドキュメントは索引付けできますが、ページは編集できません。
- ファイルのインポートが回避され、エラー・メッセージが表示されます。複数のイメージ以外のファイルをインポート用に選択し、すべてのインポート・ファイルに対して1つのドキュメントを作成するよう指定した場合、コンテンツ・キャプチャ・クライアントで、選択が無効であることを示すエラー・メッセージが表示されます。

複数のファイルを選択した場合は、インポートのたびに、バッチにドキュメントを作成する方法を指定します。つまり、すべてのインポート・ファイルに対して1つのドキュメントを作成するか、インポート・ファイルごとに1つのドキュメントを作成するかです。複数のイメージ以外のファイルを1つのドキュメントにインポートすることはできません。

ノート:

モニター対象のファイル・フォルダまたは電子メール・アカウントからの電子ドキュメントの自動キャプチャを設定することもできます。詳細は、[ファイル・インポート・エージェントの設定](#)を参照してください。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントにドキュメントをインポートする際に行う主なタスクは次のとおりです：

1. [インポート・ソースおよびインポートの設定](#)
2. [ドキュメントのインポート](#)

インポート・ソースおよびインポートの設定

キャプチャ・ソースとしてインポートを指定するには：

1. バッチ・ペインで、「**キャプチャ設定**」/「**キャプチャ・ソース**」の右側をクリックして「**インポート・ソース**」を選択し、「**キャプチャ**」をクリックしてファイルのインポートを開始します。

2. 「**インポート・ディレクトリ**」フィールドで、インポートで選択するファイルが存在する場所を指定します。
3. 特定のタイプのファイルをインポートするには、「**ファイル・タイプ**」フィールドでタイプを選択します。
4. 「**ローテーション設定**」フィールドで、回転の角度(**0**、**90**、**180** または **270**)を選択します。指定されたとおりにイメージがインポート時に回転されます。
5. イメージが正常にインポートされた後にインポート・ディレクトリから削除するには、「**インポート後にソース・ファイルを削除**」フィールドを選択します。
6. 「**OK**」をクリックして設定を保存します。

ドキュメントのインポート

イメージ・ファイル(複数ページの TIFF など)やイメージ以外のファイル(Microsoft Word ファイルや PDF ファイルなど)をコンテンツ・キャプチャにインポートできます。イメージ以外のファイルをインポートする場合、選択したクライアント・プロファイルによって、ファイルがイメージ形式に変換されるか、ネイティブ形式でインポートされるか、インポートされないかが決まります。

コンテンツ・キャプチャ・クライアントで希望のクライアント・プロファイルが選択されていることを確認します。

ドキュメントをインポートするには:

1. 必要に応じて、次のいずれかを行います:
 - a. 必要に応じて、コンテンツ・キャプチャ・クライアントで  の右側をクリックして「**インポート・ソース**」を選択し、スキャンではなくインポートを指定して  **Capture** をクリックします。
 - b. ビジネス・アプリケーションで、ビジネス・レコード・ページの「**インポート**」をクリックします。
2. 「**インポート**」ダイアログで、ドキュメントを作成する方法(複数ファイルから 1 つのドキュメントまたはファイルごとに 1 つのドキュメント)を指定して「**OK**」をクリックします。
3. 「**インポートするファイルの選択**」ダイアログで、インポートする 1 つ以上のファイルを選択し、「**OK**」をクリックします。

インポートされたファイルを含む新しいバッチがバッチ・ペインで選択されます。
4. 必要に応じて、ドキュメントのレビュー、編集および索引付けを行います。メタデータ・フィールドにはすでに値が含まれている場合があります。
5. さらにバッチをキャプチャするには、バッチ・ペインで  **Capture** をクリックします。
6. バッチ・ペインで 1 つ以上のバッチを選択し、 をクリックしてバッチをリリースします。

ドキュメントのレビューと編集

ドキュメントを本番レベルで使用しているか小規模バッチ・レベルで使用しているかに関係なく、ドキュメントのレビュー、調整および再編成が必要になることがほとんどです。コンテンツ・キャプチャ・クライアントのドキュメント・タスク・バーには、ドキュメントを索引付け、追加処理、または **Oracle Content Management** リポジトリにコミットする前にレビューおよび更新する機能が用意されています。

ドキュメントのレビューおよび編集時に実行できる操作は次のとおりです:

- ドキュメントを作成、表示、複製および削除します。
- 特定のページに移動し、ページを挿入、追加、置換および削除します。
- メタデータ値をコピー、貼付けおよびクリアします。
- 拡大レベルを増減します。
- 高さ全体および幅全体がウィンドウに収まるようにページ表示を変更します。
- イメージを左および右に **90** 度回転します。
- 選択したページを上下 **180** 度回転します。
- 選択したページを選択したプリンタに出力します。
- 選択したドキュメントのファイル情報を表示します。

手順の情報については、次を参照してください:

- [ドキュメントおよびページのレビュー](#)
- [ドキュメントおよびページの編集](#)
- [ドキュメントの作成と削除](#)
- [添付の作成および削除](#)
- [ページの追加、置換および削除](#)

ドキュメントおよびページのレビュー

キャプチャ後のドキュメントのレビューと索引付けを行うことができます。ドキュメントで作業するときは、コンテンツを表示するためのズームインとズームアウト、追加のサムネイルを表示するためのサムネイル表示のサイズ変更や再配置、特定のページへの移動やその印刷、ドキュメントの検索、ドキュメントの添付の表示などを行う必要があります。ドキュメント・タスク・バーに、これらのアクションをすばやく実行するためのアイコンが用意されています。

- [ドキュメントの自動レビューおよび索引付けの無効化](#)
- [選択したページのズームインとズームアウト](#)
- [サムネイル表示のサイズ変更または再配置](#)
- [特定のページへの移動](#)

- ページの印刷
- 関連付けられたアプリケーションでのドキュメントまたは添付の表示
- ファイル情報の表示
- ドキュメントの検索

ドキュメントの自動レビューおよび索引付けの無効化

バッチをスキャンまたはインポートした後は、デフォルトでドキュメント・ペインが表示されます。選択したバッチの最初のドキュメント内の最初のページが表示されます。かわりに右側のペインにプロパティが表示されるようにプリファレンスを設定できます。これを行うには、ドキュメントの自動レビューおよび索引付けを無効化します。

ドキュメントの自動レビューおよび索引付けを無効化するには:

1. Oracle Content Capture Client ウィンドウの右上隅にあるドロップダウン・リストの矢印をクリックして、「**プリファレンス**」を選択します。
「プリファレンス」ダイアログが表示されます。
2. 「**スキャン後にバッチを自動レビュー/自動索引付け**」フィールドを選択解除します。

選択したページのズームインとズームアウト

、、、、 を使用し、ビューアのイメージを拡大または縮小してイメージ品質を調べます。これらの設定はバッチで保存されません。バッチを開くと、そのイメージは常に  サイズで表示されます。

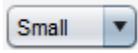
- ドキュメント・ペインで、 をクリックすると、イメージが拡大されます。 をクリックすると、イメージが縮小されます。
- ズームする別の方法は、マウスの左ボタンを使用してイメージ上の四角形の領域をクリックしてドラッグします(ラバーバンド・ズーム)。
- 高さ全体がウィンドウに収まるようにページ表示を変更する場合は、 をクリックします。
- 幅全体がウィンドウに収まるようにページ表示を変更する場合は、 をクリックします。
- いつでも、 をクリックすると、ビューアにイメージ全体が表示されます。

サムネイル表示のサイズ変更または再配置

スクロール可能なサムネイル・バーを縦(デフォルト)または横に表示できます。ペインのサイズを変更するには、ペイン・セパレータをクリックしてドラッグします。

サムネイル表示のサイズ変更または再配置後、後続のセッション用に新しい設定が保存されます。

サムネイル表示をサイズ変更または再配置するには:

1. ドキュメント・ペインのツールバーで  を選択します。
2. 「小」、「中」または「大」を選択すると、新しい選択を反映するようにサムネイル・サイズが変更されます。
3. 必要に応じて、 をクリックして、表示を横のサムネイルまたは縦のサムネイルに切り替えます。

特定のページへの移動



テキスト・ボックス(または、キーボード・ショートカット [Ctrl]+[G])を使用して特定のページに移動します。

- ドキュメント・ペインで、**ページに移動** テキスト・ボックスにページ番号を入力し、現在のドキュメントの特定のページに移動します。キーボード・ショートカット ([Ctrl]+[G]) を使用して、クライアント・アプリケーション内の任意の場所から **ページに移動** テキスト・ボックスにフォーカスを移します。

ヒント:

ページのページ番号を表示するには、ページのサムネイルにカーソルを合せてツールチップを表示します。ツールチップに、その特定のページのページ番号が表示されます。

- **<** をクリック(または、キーボード・ショートカット [Ctrl]+[P] を使用)して、現在のドキュメントの前のページに移動します。
- **>** をクリック(または、キーボード・ショートカット [Ctrl]+[N] を使用)して、現在のドキュメントの次のページに移動します。

ページの印刷

スキャンまたはインポートしたページを印刷するには:

1. 「ドキュメント」ペインで、印刷するページをそのサムネイルを選択することによって選択します。
イメージ・ドキュメントの複数のページを印刷するには、そのサムネイルを選択します。
2.  をクリックします。
3. 「印刷」ダイアログで、必要に応じたプリンタを選択して設定を構成します。
ページが印刷されます。

関連付けられたアプリケーションでのドキュメントまたは添付の表示

関連付けられたアプリケーションでイメージ以外のドキュメントまたはイメー以外の添付を表示するには、次のいずれかを実行します。

- ドキュメントまたは添付を右クリックし、コンテキスト・メニューから「**関連付けられたアプリケーションでドキュメントを表示**」を選択します。
- バッチ・ペインでドキュメントまたは添付を選択し、ドキュメント・ペインのツールバーから  をクリックします。

ファイル情報の表示

バッチ・ペインでドキュメントまたは添付を選択し、ドキュメント・ペインのツールバーから  をクリックして、ドキュメントまたは添付に関する情報を表示します。イメージ・ドキュメントまたはイメージ添付の場合、ドキュメント・ペインでページを選択してページに関する情報を表示します。「ファイル情報」ページが表示され、ファイルまたはページに関する次の詳細情報がリストされます:

表 19-1 ファイル情報

プロパティ	説明
システム ID	このグループの下にリストされる属性: <ul style="list-style-type: none"> プロシージャ プロシージャ ID バッチ名 バッチ ID ドキュメント ID 添付 ID アイテム ID ノート: 「ドキュメント ID」属性はドキュメントに対してのみ表示され、「添付 ID」属性は添付に対してのみ表示されます。
ファイル	このグループの下にリストされる属性: <ul style="list-style-type: none"> システム・ファイル・タイプ ファイル名 元のファイル名 ファイルの場所 サイズ 更新日 ノート: 「元のファイル名」属性が表示されるのは、イメージ以外のファイルのみです。

表 19-1 (続き) ファイル情報

プロパティ	説明
イメージ	<p>このグループの下にリストされる属性:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 書式 • 作成者 • 圧縮 • カラー・ビット深度 • 幅 • 高さ • 解像度 - 水平 • 解像度 - 垂直 • 光度解釈 • サンプル当たりのビット数 • 承認 • バー・コード • MICR • バッチ・コード <p>ノート: 「イメージ」プロパティ・グループが表示されるのは、イメージ・ファイルのみです。「作成者」、「光度解釈」および「サンプル当たりのビット数」の各属性が表示されるのは、TIFF イメージのみです。</p> <p>「承認」、「バー・コード」、「MICR」および「バッチ・コード」属性は、値を含む場合のみ表示されます。</p>
Tiff タグ	<p>タグ番号とタグ値が表示されます。このプロパティが表示されるのは、TIFF イメージ・ファイルのみです。</p>

ファイル属性のセット全体を Windows クリップボードにコピーするには、「ファイル情報」ウィンドウで「クリップボードにコピー」をクリックします。

ドキュメントの検索

表示されたメタデータ・フィールドが「検索」フィールドの条件と一致するドキュメントをバッチ内で検索するには:

1. バッチ・ペインでドキュメントを選択してバッチ・ペインのツールバーから  をクリックするか、ドキュメントを右クリックしてコンテキスト・メニューから「ドキュメントの検索」を選択します。「ドキュメントの検索」オプションが用意された水平ツールバーは、メタデータ・ペインの上のバッチ・ペインに表示されます。
2. 「検索」フィールドに、検索する値を入力します。この検索では大文字と小文字が区別されます。
3. 「オプション」ドロップダウン・リストで、次のオプションの 1 つを選択します。
 - **空白の必須フィールド:** 入力が必要な空白フィールドを検出する場合。
 - **ワイルドカードを使用:** 「検索」フィールドでワイルドカード文字を指定する場合。任意の 1 文字を照合するには、ワイルドカードとして「?」を使用します。0 (ゼロ)文字以上の文字列を照合するには、ワイルドカードとして「*」を使用します。
4. 検索を開始するには、「検索」フィールドで[Enter]キーを押すか、「次を検索」または「前を検索」をクリックします。現在のメタデータ・フィールドの次のメタデータ・フィールドで、検索を開始します。

5. 検索値が見つかったドキュメントが表示されます。ドキュメントが見つからない場合、「ドキュメントが見つかりません」というメッセージが表示されます。
オプションで、「前を検索」または「次を検索」アイコンをクリックすれば、引き続き検索できます。「検索」ツールバーを閉じるには、「検索ツールバーのクローズ」アイコンをクリックします。

ドキュメントおよびページの編集

イメージをスキャンまたはインポートした後、画質を改善できます。さらに、ページの移動、複製、または切り取り/貼付けを行うことで、ドキュメントを再編成できます。ドキュメント内のページを回転および反転することもできます。異なるドキュメントを組み合わせる場合、あるドキュメントのメタデータを別のドキュメントにコピーしたり、一部のドキュメントのメタデータをクリアしたりすることができます。

ドキュメントのタスク・バーには、次のタスクを実行するための機能が用意されています:

- イメージの品質の向上
- 別のドキュメントへのページの移動
- ドキュメントの 1 つ以上のページの複製
- ページの回転またはフリップ
- メタデータ値のコピーと貼付け
- ドキュメントのメタデータ値のクリア
- ページの切り取り/コピーとイメージ・ドキュメントでの貼付け

イメージの品質の向上

多くのスキャナは、ノイズの削除および動的しきい値などの機能を使用して、白黒イメージの品質を向上する機能があります。白黒でスキャンするときはイメージの品質を最適化するために、スキャナのドキュメントを確認してください。

イメージの品質を向上させるには:

1. スキャナのマニュアルに記載されているように、スキャナが最良の状態で作動していることを確認してください(たとえば、スキャナのガラスがきれいであることを確認してください)。
2. バッチ・ペインで、の左側をクリックし、使用可能なスキャナ設定を調整します(たとえば、スキャンの明度とコントラストを調整します)。クライアント・プロファイルによって、一部のスキャナ設定(DPI 解像度や色など)の変更が禁止される場合があることに注意してください。
3. 必要な場合は、プロシージャ・マネージャに連絡して、クライアント・プロファイルのスキャナ設定(DPI、明度とコントラストなど)の調整をリクエストしてください。

別のドキュメントへのページの移動

ページをドキュメント内で移動または別のドキュメントに移動するには、ページのサムネイルを新しい位置にドラッグ・アンド・ドロップします。

ノート: ドキュメント内に残っているページを別のドキュメントにドラッグすると、そのドキュメントは自動的に削除されます。

ドキュメントの 1 つ以上のページの複製

ドキュメントの 1 つ以上のページを新しいドキュメントに複製するには:

1. イメージ・ドキュメントの 1 ページ以上を選択して、ドキュメント・ペインのツールバーから  をクリックするか、ドキュメントを右クリックしてコンテキスト・メニューから「複製」を選択します。
「複製」ダイアログが表示されます。
2. 「選択済ページ」オプションを選択します。
3. 「印刷部数」フィールドで、作成する部数を指定します。デフォルト値は 1、最大値は 10 です。
4. 複製ドキュメントで、ソース・ドキュメントと同じドキュメント・プロファイルおよびメタデータ値を使用する場合は、「メタデータ値の保持」フィールドを選択します。
5. 「OK」をクリックします。

選択したページを使用して新規作成された複製ドキュメントは、バッチ/ドキュメント・リスト・ツリー内でソース・ドキュメントの直後に挿入されます。

ページの回転またはフリップ

ページを回転またはフリップするには:

1. **ドキュメント・ペイン**で、回転またはフリップする 1 つ以上のページのサムネイルを選択します。
複数のサムネイルの場合は **[Ctrl]** キーを押しながら選択します。バッチ全体を上下逆にスキャンした場合は、次のステップで説明されているように、**[Ctrl]+[A]** を押してすべてのページを選択してから「フリップ」オプションを選択します。
2. 回転ボタンの 1 つをクリックします。ページを回転またはフリップすると、ページはその方法でバッチ内に保存されます。
 - イメージを反時計回りに 90 度回転するには、 をクリックします。
 - イメージを時計回りに 90 度回転するには、 をクリックします。
 - イメージを 180 度回転するには、 をクリックします。

メタデータ値のコピーと貼付け

ドキュメントからメタデータ値をコピーして、(同じバッチ内の)ドキュメント・プロファイルが一致する別のドキュメントに貼り付けることができます。

メタデータ値をコピーして貼り付けるには:

1. メタデータ値のコピー元のドキュメントを(バッチから)選択します。

- ドキュメント・ペインのツールバーでをクリックするか、キーボード・ショートカット([Ctrl]+[Shift]+[C])を使用します。メタデータ値がコピーされます。
- コピーしたメタデータ値の貼付け先の(同じバッチ内の)ドキュメント・プロファイルが一致するターゲット・ドキュメントを選択します。
- ドキュメント・ペインのツールバーでをクリックするか、キーボード・ショートカット([Ctrl]+[Shift]+[V])を使用します。コピーしたメタデータ値が貼り付けられます。

ノート:

- ドキュメントが同じバッチに属する場合のみ、メタデータ値をコピーおよび貼付けできます。
- ドキュメント・プロファイルが(メタデータ値のコピー元の)ソース・ドキュメントのドキュメント・プロファイルと一致する場合、または(メタデータ値のコピー先の)ターゲット・ドキュメントが**デフォルト・ドキュメント・プロファイル**を使用する場合のみ、メタデータ値をドキュメントに貼り付けることができます。アイコンおよびキーボード・ショートカット([Ctrl]+[Shift]+[V])は、貼付けアクションがサポートされている場合のみ有効になります。
- コピーした値を複数のドキュメントに貼り付けることができます。
- デフォルト・ドキュメント・プロファイル**のドキュメントからメタデータ値をコピーする場合、コピーした値は、**デフォルト・ドキュメント・プロファイル**のドキュメントにのみ貼り付けることができます。

ドキュメントのメタデータ値のクリア

ドキュメント内のメタデータ値は、「**メタデータ値のクリア**」アイコンまたはキーボード・ショートカット([Ctrl]+[Shift]+[D])を使用してクリアできます。

ドキュメント内のメタデータ値をクリアするには:

- ドキュメントをバッチから選択します。
- ドキュメント・ペインのツールバーでをクリックするか、キーボード・ショートカット([Ctrl]+[Shift]+[D])を使用します。「**メタデータ値のクリア**」ダイアログで、「はい」をクリックして確認します。選択したドキュメントのすべてのメタデータ値がクリアされます。

ノート:

このオプションは、すべてのメタデータ値をリセットしてすべてのフィールドに新しい値を入力する場合に有用です。

ページの切取り/コピーとイメージ・ドキュメントでの貼付け

ページを切り取るか、コピーして、同じイメージ・ドキュメント内または同じバッチに属するイメージ・ドキュメントに貼り付けることができます。

ページを切り取るか、コピーして貼り付けるには:

1. 「ドキュメント」ペインでドキュメントを選択し、1 つ以上のページのサムネイルを選択して切り取るか、コピーします。

ノート:

- イメージ・ドキュメントからページを切り取るか、コピーして、同じイメージ・ドキュメント内または同じバッチに属するイメージ・ドキュメントに貼り付けることができます。イメージ以外のドキュメントからページを切取り/コピーしたり、イメージ以外のドキュメントにページを貼り付けることはできません。
- 複数のサムネイルの場合は[Ctrl]キーを押しながら選択します。
- 1 つ以上のページをコピーした場合、複数回貼り付けることができますが、1 つ以上のページを切り取った場合、貼り付けることができるのは 1 回のみです。

2. 選択したサムネイルを右クリックし、右クリック・メニューから「切取り」または「コピー」を選択します。
3. ページを貼り付ける前または後にページのサムネイルを右クリックし、右クリック・メニューから「前に貼付け」または「後に貼付け」を選択します。
ページが貼り付けられます。

ドキュメントの作成と削除

ドキュメントをインポートした後、一部のドキュメントをコンテキストごとに分割できます。または、ドキュメント間の区切りを削除して、いくつかのドキュメントを結合することもできます。状況によっては、特定のドキュメントを削除したり、別のセットで使用できるように複製したりする必要がある場合があります。ドキュメントのタスク・バーで、次のアクションを実行できます。

- [ドキュメントのキャプチャ](#)
- [ドキュメントの分割](#)
- [ドキュメント区切りの削除](#)
- [ドキュメントとそのページの削除](#)
- [ドキュメントの複製](#)

ドキュメントのキャプチャ

ドキュメント・ペインのタスク・バーの「ドキュメントのキャプチャ」アイコン  またはバッチ・ペインのコンテキスト・メニュー・オプションを使用してバッチにドキュメントを追加できます。

ドキュメントを追加するには:

1. 必要に応じて、**[Ctrl]+[Alt]+[S]**を押してキャプチャ・ソースを設定します。スキャンの場合は、ページをスキャナにセットします。
2. **バッチ・ペイン**で、ドキュメントの追加先のバッチを右クリックし、「**ドキュメントのキャプチャ**」を選択します。

または、ドキュメント・ペインのツールバーで  をクリックします。

3. 次のいずれかを行います。
 - スキャナ以外のソースからインポートする場合は、「**インポートするファイルの選択**」ダイアログで必要なドキュメントを選択し、「**OK**」をクリックします。「**インポート**」ダイアログで「**すべてのインポート・ファイルに対して1つのドキュメントを作成**」または「**インポート・ファイルごとに1つのドキュメントを作成**」を選択し、「**OK**」をクリックします。
 - スキャンの場合は、「**キャプチャ**」ダイアログで「**1ページのスキャン**」または「**すべてのページのスキャン**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

ドキュメントがバッチに追加されます。

ドキュメントの分割

ドキュメントを分割するには:

1. 新しいドキュメントを開始するページを選択します。
2. 「**ドキュメント**」ペインのツールバーで、 をクリックします。

現在のページから次のドキュメントまでのすべてのページを含む新しいドキュメントが作成されます。

ドキュメント区切りの削除

ドキュメント区切りを削除して、選択したドキュメントのページを前のドキュメントに追加するには:

1. 前のドキュメントとマージするドキュメントを選択します。

バッチの最初のドキュメントを選択すると、前のドキュメントがないので、そのドキュメントを削除するプロンプトが表示されます。
2.  をクリックします。
3. プロンプトが表示されたら、区切りを削除するオプションを選択して「**OK**」をクリックします。

ドキュメントが前のドキュメントにマージされます。

ドキュメントとそのページの削除

ドキュメントとそのページを削除するには:

1. 削除するドキュメントを選択します。
バッチ・ペインでドキュメントを選択するか、ドキュメント・ペインでドキュメントのサムネイルのいずれかを選択できます。
2. **ドキュメント**・ペインのツールバーで  をクリックします。
3. プロンプトが表示されたら、ドキュメントを削除するオプションを選択して「OK」をクリックします。

ドキュメントの複製

ドキュメントを複製するには:

1. 「**バッチ**」ペインでドキュメントを選択して「**ドキュメント**」ペインのツールバーで  をクリックするか、ドキュメントを右クリックしてコンテキスト・メニューから「**複製**」を選択します。
「複製」ダイアログが表示されます。
2. 「**現在のドキュメント**」オプションを選択します。
3. 「**印刷部数**」フィールドで、作成する部数を指定します。デフォルト値は 1、最大値は 10 です。
4. 複製ドキュメントで、選択したソース・ドキュメントと同じドキュメント・プロファイルおよびメタデータ値を使用する場合は、「**メタデータ値の保持**」フィールドを選択します。
5. 「**OK**」をクリックします。

新規作成された複製ドキュメントは、バッチ/ドキュメント・リスト・ツリー内で現在選択されているソース・ドキュメントの直後に挿入されます。

添付の作成および削除

ページを添付として追加したり、添付を分割して追加の添付を作成します。添付を削除することもできます。ドキュメント・タスク・バーに、次のタスクを完了するための機能が用意されています:

- [添付のキャプチャ](#)
- [添付の分割](#)
- [添付とそのページの削除](#)

添付のキャプチャ

ページをスキャンまたはファイルをインポートすることにより、新規の添付をドキュメントに追加できます。

新規の添付を追加するには:

1. 必要に応じて、**[Ctrl]+[Alt]+[S]**を押してキャプチャ・ソースを設定します。スキャンの場合は、ページをスキャナにセットします。
2. 「**バッチ**」ペインで、添付を追加するドキュメントを右クリックして「**添付のキャプチャ**」を選択します。または、「ドキュメント」ペインのツールバーで、をクリックすることもできます。
3. 次のいずれかを行います。
 - スキャナ以外のソースからインポートする場合は、「**インポートするファイルの選択**」ダイアログで必要なドキュメントを選択し、「**OK**」をクリックします。「**インポート**」ダイアログで、「**すべてのインポート・ファイルに対して 1 つの添付を作成**」または「**インポート・ファイルごとに 1 つの添付を作成**」を選択し、「**OK**」をクリックします。
 - スキャンの場合は、「**キャプチャ**」ダイアログで「**1 ページのスキャン**」または「**すべてのページのスキャン**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

添付が追加されます。

添付の分割

添付を分割するには:

1. ソース添付で、新規の添付を作成するページを選択します。
2. 「**ドキュメント**」ペインのツールバーで、をクリックします。

現在のページからその下にあるすべてのページを含む新規添付が作成され、「バッチ」ペインのソース添付の下にリストされます。

ノート:

このタスクは、イメージ添付にのみ実行できます。

添付とそのページの削除

添付とそのページを削除するには:

1. **バッチ**・ペインで削除する添付を選択するか、**ドキュメント**・ペインでいずれかのサムネイルを選択します。
2. **ドキュメント**・ペインのツールバーでをクリックします。
3. 選択した添付とそのページをすべて削除する場合は、「**はい**」をクリックします。

ページの追加、置換および削除

ドキュメントを再編成する際、ページを挿入、追加、置換、および削除できます。個々のページを編集できるのは、イメージ・ドキュメントまたはイメージ添付のみです。イメージ以外のドキュメントまたはイメージ以外の添付を編集する場合、個々のページを編集するためのドキュメント・タスク・バー・オプションは無効になります。

- [ページの挿入](#)

- ページの追加
- ページの置換
- ページの削除

ページの挿入

ページをスキャンまたはファイルをインポートすることにより、ページをイメージ・ドキュメントまたはイメージ添付に追加できます。

ページを挿入するには:

1. 必要に応じて、**[Ctrl]+[Alt]+[S]**を押してキャプチャ・ソースを設定します。スキャンの場合は、ページをスキャナにセットします。
2. ページをドキュメントまたは添付の最初のページの前に挿入するには、「**バッチ**」ペインでドキュメントまたは添付を右クリックして、「**ページの挿入**」を選択します。

ページをアクティブなドキュメントまたは添付の選択したページの前に挿入するには、

「**ドキュメント**」ペインのツールバーで  をクリックします。

3. 次のいずれかを行います。
 - スキャナ以外のソースからインポートする場合は、「**インポートするファイルの選択**」ダイアログで必要なドキュメントを選択し、「**OK**」をクリックします。
 - スキャンの場合は、「**キャプチャ**」ダイアログで「**1 ページのスキャン**」または「**すべてのページのスキャン**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

ページまたはファイルが挿入されます。

ページの追加

ページをスキャンしたり、ファイルをインポートしてイメージ・ドキュメントまたはイメージ添付にページを追加できます。

ドキュメントにページを追加するには:

1. 必要に応じて、**[Ctrl]+[Alt]+[S]**を押してキャプチャ・ソースを設定します。スキャンの場合は、ページをスキャナにセットします。
2. ドキュメントまたは添付の最後のページの後にページを追加するには、**バッチ**・ペインでドキュメントまたは添付を右クリックし、コンテキスト・メニューから「**ページの追加**」を選択します。

アクティブなドキュメントまたは添付の選択したページの後にページを追加するには、**ド**

キュメント・ペインのツールバーで  をクリックします。

3. 次のいずれかを行います。
 - スキャナ以外のソースからインポートする場合は、「**インポートするファイルの選択**」ダイアログで必要なドキュメントを選択し、「**OK**」をクリックします。
 - スキャンの場合は、「**キャプチャ**」ダイアログで「**1 ページのスキャン**」または「**すべてのページのスキャン**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

ページが追加されます。

ページの置換

スキャン中に問題が発生し、ページの半分のみがスキャンされたときは、イメージ・ドキュメントまたはイメージ添付のページを置換する場合があります。

ページを置換するには:

1. 必要に応じて、**[Ctrl]+[Alt]+[S]**を押してキャプチャ・ソースを設定します。スキャンの場合は、置換するページをスキャナにセットします。
2. 「ドキュメント」ペインで、置換するページのサムネイルを選択します。
3. 「ドキュメント」ペインのツールバーで、をクリックします。「はい」をクリックし、選択したページを削除して、スキャンまたはインポートしているページで置換することを確認します。インポートの場合は、選択したページを置換するファイルを選択します。削除しようとするページと重複するページがある場合は、「ページの置換」ダイアログで、選択したページのみを置換するか、(選択したページおよびリンクされたページを含む)すべてのページを置換するかを選択します。ページを、スキャンまたはインポートしているページで置換します。インポートの場合は、ページを置換するファイルを選択します。

ノート:

- ドキュメント内のページを複製すると、複製したページは互いにリンクされ、また元のソース・ページにもリンクされます。このため、このような(互いにリンクされた)ページを置換しようとする場合は、選択したページのみを置換するか、(選択したページおよびリンクされたページを含む)すべてのページを置換するかを選択します。
- 「ページの置換」ダイアログに、選択したページにリンクされたページの数が表示されます。すべてのページを置換する場合は「すべて」をクリックし、選択したページのみを置換する場合は「選択済」をクリックします。ページの置換を取り消す場合は、「取消」をクリックします。

ページの削除

イメージ・ドキュメントまたはイメージ添付内の 1 つ以上のページを削除するには:

1. 「ドキュメント」ペインで、削除するページのサムネイルを選択します。

ノート:

- 削除できるのは、イメージ・ドキュメント内の 1 つ以上のページのみです。
- 複数のサムネイルの場合は**[Ctrl]**キーを押しながら選択します。

2.  をクリックするか、選択したサムネイルを右クリックしてコンテキスト・メニューから「削除」を選択します。「ページの削除」ダイアログで、「はい」をクリックして確認します。

選択したページがドキュメントから削除されます。

ドキュメントの索引付け

ドキュメントのすべてのページで同じメタデータ値が共有されるため、ドキュメントの1つのページに索引付けすると、ドキュメントのすべてのページが索引付けされます。ドキュメント・ペインでは、バッチ内のドキュメントが淡色のバーで分割表示されます。バッチ・ペインでは、それぞれのバッチの下にドキュメントがリストされます。選択したクライアント・プロファイルが索引付け用に構成されている場合、バッチ・ペインでドキュメントを選択すると左下のペインにメタデータ・フィールドが表示されます。読みやすくするために、「プリファレンス」ダイアログでメタデータ・フィールドのフォント・サイズを調整できます。

標準入力が高確率に行われるように、メタデータ・フィールドでは入力マスクまたは入力書式設定、選択リストあるいはデータベース参照を使用できます。

メタデータ・フィールドで**入力マスク(フィルタ)**を使用すると、メタデータ・フィールドに入力できる内容が制御されます。たとえば、マスクを使用すると、フィールドに数字は入力できるがアルファベット文字は入力できなかつたり、入力が4文字に制限されたりします。マスクに準拠しない文字を入力すると、ビープ音が鳴り、アプリケーションで受け入れられません。たとえば、**請求書番号**という名前のメタデータ・フィールドでは、入力を7桁の数字に制限する入力マスクを使用できます。

メタデータ・フィールドでは、**形式**を使用して、一定の方法で入力内容を表示できます。別のメタデータ・フィールドに移動すると、表示形式に適合するようにデータ表示が必要に応じて変更されます。たとえば、日付フィールドの入力が標準日付書式の表示に変更されます。メタデータ値は変更されないことに注意してください。

選択リスト・フィールドには、選択できる値のリストが表示されます。クライアント・プロファイルの設定によっては、選択リストで値を選択せずに入力できる場合もあります。選択リストのフィールドに依存性を設定できます。その場合は、1つの選択リスト・フィールド(親)の選択内容によって、依存選択リスト・フィールド(子)に表示される選択肢が決まります。

ここで実行できる操作は次のとおりです:

- [メタデータによるドキュメントの索引付け](#)
- [アセット・ルックアップ値によるドキュメントの索引付け](#)

メタデータによるドキュメントの索引付け

メタデータでドキュメントに索引を付けるには:

1. **バッチ**・ペインまたは**ドキュメント**・ペインのサムネイル・ページでドキュメントを選択します。

左下のペインにメタデータ・ペインが表示されます。一部のメタデータ・フィールドには、自動入力された値がすでに含まれている場合があります。

2. 「**ドキュメント**・**プロファイル**」フィールドで、索引付けするドキュメントのタイプに一致するドキュメント・プロファイルを選択します。

たとえば、顧客注文ドキュメントの索引付けを行う場合は、顧客番号、顧客名および注文のメタデータ・フィールドを持つドキュメント・プロファイルを選択できます。

3. 必須メタデータ・フィールドを完成させます。

4. ステップ 1 から 3 を繰り返してバッチ内の各ドキュメントの索引付けを行います。

アセット・ルックアップ値によるドキュメントの索引付け

1. メタデータ・ペインで、アセット・ルックアップが構成されたメタデータ・フィールドにカーソルを置きます。
選択したメタデータ・フィールドでアセット検索を実行できる場合は、「**アセット・ルックアップ**」ボタンがアクティブになります。
2. 一致させる値を入力します。(数値フィールドには正確な値が必要です)
クライアント・プロファイルでサポートされている場合は、一致させる値の最初の数文字のみ入力できる場合があります。たとえば、「**Company**」フィールドの名前が **New** で始まるレコードを検索するには、**New** を「**Company**」というメタデータ・フィールドに入力します。ただし、部分的な値を入力すると戻されるレコードが多くなり、参照結果の表示に長時間かかる場合があります。
3. 「**アセット・ルックアップ**」をクリックします。
複数のレコードが見つかった場合、アセット・ルックアップの結果ダイアログが表示されます。単一レコードの場合は、結果のリストは表示されず、値は 1 つ以上のフィールドに自動的に入力されます。
4. ルックアップ結果で、一致するレコードを選択し、「**選択**」をクリックして、リポジトリの値をメタデータ・フィールドに移入します。(レコードをダブルクリックしても選択できます。)

21

バッチの管理

バッチには、スキャンされたイメージ、ページおよび電子ドキュメントが含まれます。これらを論理的に編成してリポジトリに格納できます。ドキュメントをスキャンまたはインポートした後は、その索引付け、編集およびリリースを実行できます。

バッチを作成すると、クライアント・プロファイルの接頭辞(SCAN、IMPORT など)に内部の順序番号が続く形式で自動的に名前が付けられます。

- スキャンまたはインポートしてバッチを作成するか、バッチを開く(展開する)と、バッチが自分に自動的にロックされます。

ノート:

バッチがユーザーにロックされ、そのユーザーがバッチをロック解除できなくなった場合、コンテンツ・キャプチャ管理者が追加処理のためにこれらのバッチをロック解除できます。

- 定義されたリリース・プロセスがない場合に、バッチをロック解除すると、ドキュメントとメタデータが **Oracle Content Management** リポジトリに送信され、ロック解除されます。
- 使用可能なリリース・プロセスを選択してバッチをリリースした場合、バッチで実行される次のアクションは、選択したリリース・プロセスによって異なります。バッチ・リリース中に、バッチ名の上にある進行状況バーが右に移動して、リリースの進行状況が示されます。バッチ・リリースがバックグラウンドで続行されている間、他のバッチを選択して作業できます。
- リリース後、クライアント・プロファイルの設定に応じてバッチで次のアクションが実行されます。バッチは、後処理ステップ(バー・コード認識、ドキュメント(PDF/TIFF)変換、**Oracle Content Management** リポジトリへのコミットなど)に移動する場合があります。また、ロックが解除されて、他のユーザーがロックおよび編集できるようになる場合もあります。たとえば、スキャン・オペレータがバッチを作成、レビューおよび編集した後に索引オペレータにリリースし、索引オペレータが後処理のためにバッチを選択、索引付けおよびリリースする場合があります。

自分が管理するバッチに対して実行できる操作は次のとおりです:

- [バッチ情報の変更](#)
- [バッチのリリース](#)
- [バッチの検索またはリストのフィルタ処理](#)
- [バッチ処理エラー](#)
- [バッチ・エラーの検索](#)

バッチ情報の変更

バッチには、クライアント・プロファイルでデフォルトの優先度とステータスが割り当てられている場合があります。これには 0 から 10 までの優先度番号(10 が最高)を割り当てることができます。また、使用可能なステータス・オプションから、ステータスをバッチに添付することもできます。同様に、バッチにノートのリマインダとして添付したり、そのバッチで作業する可能性がある他のユーザーに注意を促したりできます。たとえば、バッチ内の指定したドキュメントから、あるページが欠落していることを示すノートを入力する場合があります。

バッチ情報を変更するには:

1. **バッチ**・ペインで、バッチを選択します。

バッチ情報が右側のペインに表示されます。バッチが自分に対してロックされている場合は、「**優先度**」、「**ステータス**」および「**バッチ・ノート**」フィールドを編集できます。
2. 必要に応じて、次の操作を実行します。
 - a. 「**優先度**」フィールドで、0 から 10 までの範囲で新しい優先度番号を選択します。
 - b. 「**ステータス**」フィールドで、新しいステータスを選択します。
 - c. 「**バッチ・ノート**」フィールドで、テキストを入力、変更または削除します。
3. 「**適用**」をクリックします。

変更内容がバッチ・ペイン・リストに表示されます。

バッチのリリース

クライアント・プロファイルには、複数のリリース・プロセスを含めることができます。バッチをリリースするには、必要なリリース・プロセスをリストから選択します。

バッチをリリースするには:

1. **バッチ**・ペインで、1 つ以上のバッチを選択します。
2. クライアント・プロファイルに複数のプロセスが含まれている場合、の右側にあるドロップダウン・リストからリリース・プロセスを選択してをクリックします。または、**バッチ**・ペインで 1 つ以上のバッチを右クリックして「**バッチのリリース**」を選択し、構成されている**リリース・プロセス・オプション**のいずれかを選択します。これらのオプションは、「バッチ」ペインでバッチ内の 1 つ以上のドキュメントを選択した場合にも使用可能になります。

バッチ名の上にバーが表示され、バーが右に移動して、リリースの進行状況が示されます。リリース中に、他のバッチおよびドキュメントを選択してそれらで作業できます。

ノート:

「**バッチの自動リフレッシュ**」クライアント・プリファレンスが有効な場合、リリースしたバッチは定期的にはリフレッシュされます。

3. オプションで、「**バッチ・リストのリフレッシュ**」をクリックし、バッチの最新の状態を表示します。リリースが完了すると、次のいずれかが発生します。
 - バッチ・ペインにバッチが表示されなくなります(コミットの成功後など)。
 - バッチ・アイコンに処理インジケータが表示され、さらに処理が行われていることが示されます。
 - バッチ・アイコンにエラー・インジケータが表示され、そのドキュメントの 1 つ以上でエラーが発生したことが示されます。

バッチの検索またはリストのフィルタ処理

名前、日付、ステータス、優先度、および状態でバッチを検索できます。フィルタ済リストには、検索結果に加えて、自分にロックされているバッチが常に含まれます。

バッチを検索するには:

1. **バッチ・ペイン**で🔍をクリックします。
2. 「**バッチ検索条件**」ダイアログで、表にリストされた条件を使用してバッチを検索する方法を指定します。

複数の検索オプションを指定できます。検索フィールド内の値は 1 つのみが一致する必要がありますが、バッチを見つけるためには、指定されたすべての検索フィールドが一致する必要があることに注意してください。たとえば、「**ステータス**」フィールドで緊急を選択し、「**優先度**」フィールドで「8」、「9」および「10」を選択した場合、緊急ステータスでかつ優先度が「8」、「9」または「10」のバッチは見つかります。一方、緊急ステータスで優先度「0」のバッチや、ステータスがなくて優先度「8」、「9」または「10」のバッチは見つかりません。

表 21-1 バッチ検索条件

検索条件	説明
バッチ名	検索するバッチ名を入力します。名前的一部分を指定して、その後に 1 つ以上の文字と一致する%を指定することができます。たとえば、Batch%と入力すると、 <i>Batch15</i> および <i>Batches214</i> という名前のバッチと一致します。
開始日/終了日	日付フィールドに隣接するカレンダー・ボタンをクリックし、開始日と終了日を選択して、日付範囲内に作成されたバッチを検索します。
ステータス	1 つ以上のステータスを選択して、割り当てられたステータスでバッチを検索します。選択したステータスのいずれかが割り当てられたバッチと一致します。
優先度	1 つ以上の優先度を選択して、割り当てられた優先度でバッチを検索します。選択した優先度のいずれかが割り当てられたバッチと一致します。
バッチの状態	1 つ以上の状態を選択して、システムで割り当てられた状態によってバッチを検索します。選択した状態のいずれかが割り当てられたバッチと一致します。使用可能なバッチの状態は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • 準備完了: バッチはロックされておらず、エラーも発生していません • ロック: バッチはユーザーによってロックされています • エラー: バッチ内の 1 つ以上のドキュメントでエラーが発生しました • 処理中: プロセッサまたはプロセッサ・ジョブがバッチを現在処理中です

3. 「OK」をクリックします。

フィルタ済の検索結果がバッチ・ペインに表示されます。バッチ・フィルタの設定に関係なく、自分にロックされたバッチは常にバッチ・ペインに表示されること、リフレッシュしても削除するまではバッチのフィルタ処理が残ることを覚えておいてください。

検索フィルタを削除するには:

1. **バッチ・ペイン**で「**検索**」をクリックします。
2. 「**バッチ検索条件**」ダイアログで、「**条件のクリア**」をクリックし、「**OK**」をクリックします。

バッチ・ペインでは、検索条件によるリストのフィルタ処理は行われなくなります。

バッチ処理エラー

場合によっては、バッチを処理してリリースしたときに、エラーが発生することがあります。一般的なエラーは、表示されたエラーの説明に基づいて解決できることがあります。それ以外の場合は、プロシージャ・マネージャに連絡して、表示されたバッチ名とエラーを伝える必要がある場合があります。

バッチの作業中のエラー

関連付けられたアプリケーションでイメージ以外のドキュメントを表示するときに、関連付けられたアプリケーションでドキュメントを開こうとしてエラーが発生した場合、クライアントには次のメッセージが表示されます: *関連付けられたアプリケーションでドキュメントを開けませんでした。このドキュメント・タイプにアプリケーションが関連付けられていない可能性があります。*

バッチのリリース後のエラー

- バッチのリリース後にそのバッチでエラーが発生した場合(後処理ステップ時など)、そのバッチがロックされた状態で「バッチ」ペインに表示されることがあります。(後処理によって、バッチの名前が変更されている場合があることに注意してください。)ドキュメント・エラー・アイコンを右クリックし、メニューから「**バッチ・エラーの表示**」を選択すると、エラーの詳細を表示できます。
- 各ドキュメントのすべての必須メタデータ・フィールドに入力せずにバッチをリリースした場合、後処理ステップとしてバッチをコミットするようにコンテンツ・キャプチャが設定されていると、エラーが発生します。通常はすべてのドキュメントがコミットされて、バッチから削除されます。ただし、エラーを含むドキュメントはバッチ内に残ります。エラーを解決するには、バッチを開いて、すべてのドキュメントのすべての必須メタデータ・フィールド(該当する名前の左側にアスタリスク(*)が表示されます)を完成して、バッチをもう一度リリースします。

バッチ・エラーの検索

バッチ内のドキュメントに関連するエラーを確認するには:

1. **バッチ・ペイン**で、バッチにエラーがあることを示す警告サインが付いたバッチを右クリックします。
2. コンテキスト・メニューから「**バッチ・エラーの表示**」を選択します。

「バッチ処理エラー」ダイアログが表示されます。

3. 「**バッチ処理エラー**」ダイアログで、各行を選択して、ドキュメントに関連するエラーを表示します。
エラー・メッセージが「**メッセージ**」ボックスに表示されます。
4. エラーを確認したら、「**閉じる**」をクリックします。

第 IV 部

自動ファイル・インポートの設定

「プロシージャ」ページのプロシージャについて使用可能な「**キャプチャ**」タブ下で、電子メール、フォルダおよびリスト・フォルダを介した自動ファイル・インポートを設定できます。自動インポートを設定するには、ソース(電子メール、フォルダおよびファイル)を構成できるインポート・プロセッサ・ジョブを作成します。

- [監視対象ファイル・フォルダからのファイルのキャプチャ](#)
- [モニター対象電子メール・アカウントからのファイルのキャプチャ](#)

監視対象ファイル・フォルダからのファイルのキャプチャ

インポート・プロセッサが通常のユーザー操作なしで処理するファイルについてフォルダを監視するインポート・ジョブを、コンピュータ上で構成できます。ファイル・ソースは、電子メール・アドレス、フォルダ、リスト・ファイルなどです。「プロシージャ」ページの「キャプチャ」タブで、プロシージャ内に[インポート・ジョブを構成](#)します。フォルダおよびリスト・ファイルのインポート・ジョブの場合、ファイル・インポート・エージェントがインストールされ、ドキュメントが存在するネットワーク・フォルダにアクセスできるコンピュータ上で稼働している必要があります。

- [監視対象ファイル・フォルダの理解](#)
- [ファイル・インポート・エージェントの設定](#)

監視対象ファイル・フォルダの理解

コンピュータ上の監視対象フォルダから、ファイルを自動的にインポートおよびキャプチャできます。インポート・ジョブを作成するとき、任意のフォルダを監視対象フォルダとして指定できます。その後は、インポート・プロセッサによってそのフォルダが監視され、すべてのファイルが処理されます。また、インポート・ジョブを作成して、インポート対象のファイルが示されたリスト(テキスト)ファイルにメタデータとともに読み取るようインポート・プロセッサに指示することもできます。

ある組織の従業員が、多機能デバイスで経費精算書をスキャンして、それを会社のネットワーク・フォルダに格納するというシナリオを考えてみます。この場合、経費精算書フォルダが存在するコンピュータ上に、ソース・タイプとしてフォルダを使用するインポート・ジョブおよびファイル・インポート・エージェントが必要です。スキャンされるドキュメントの量が多い場合は、そのネットワーク・フォルダにアクセスできる複数のコンピュータ上にファイル・インポート・エージェントを設定できます。このため、スキャンされるドキュメントが複数のサブフォルダに存在し、異なるマシン上で稼働している複数のファイル・インポート・エージェント・インスタンスが各サブフォルダを同時に処理することが可能です。インポート・プロセッサは、フォルダ・インポート・ジョブを介して定期的にこのフォルダを監視し、ファイル・インポート・エージェントを介して新規のファイルをフェッチしてバッチに変換します。

フォルダ・ソース・インポート・ジョブを作成するとき、インポート・ジョブで監視するファイル・タイプ(「TIFF」、「PDF」または「すべてのファイル」)を指定できます。また、各ファイルを個別のバッチにするか、あるいはバッチに1つまたは複数のタイプのすべてのファイルを含めるかを指定することもできます。1つのバッチには最大500ファイルを含めることができます。また、インポート・プロセッサには、特定タイプのファイルの処理順序を指定できるという柔軟性もあります。ソース・ファイルは、処理の完了後に削除するように選択できます。フォルダ・インポート・ジョブを構成するには、[フォルダからのファイル・インポートの構成](#)のステップに従います。

また、インポート・ジョブを作成すると、インポート・プロセッサがそれを介してフォルダをモニターし、コンテンツ・キャプチャにインポートする必要があるもの(ファイル、添付ファイル、ファイルに割り当てるオプションのメタデータ値)を識別するレコードが含まれたリスト(テキスト)ファイルを読み取ることができます。リスト・ファイル・インポート・ジョブ

を構成するには、[リスト・ファイル・インポートの構成](#)のステップに従います。インポート・ジョブを構成した後は、[ファイル・インポート・エージェントを設定](#)する必要があります。

ノート:

ファイル・インポート・エージェントは、[リスト・ファイル・ジョブ](#)の処理中にクラッシュしたり、接続を失うことがあります。エージェントがデフォルト期間の 60 分以内にリカバリできない場合は、以前にアップロードされたファイルが強制的にリリースされ、サーバー上で完了としてマークされます。エージェントは引き続き、[リスト・ファイル・ジョブ](#)に残っているアイテムを処理するか、フォルダ内の残りのファイルを新規のアップロードとして処理します。

ファイル・インポート・エージェントの設定

ファイル・インポート・エージェントは任意のコンピュータで実行されるコマンドライン・アプリケーションで、フォルダやネットワーク・ドライブなどのモニター対象のファイル・システムの場所からコンテンツをインポートするためのソースとして機能します。その場所のコンテンツをモニターしてキャプチャし、プロセスで定義されたルールに従ってさらに処理およびルーティングするためにインポート・プロセスにフィードします。

ソースがモニター対象のフォルダ([モニター対象電子メール・アカウントではない](#))の場合のみ、ファイル・インポート・エージェントをローカル・コンピュータにインストールして実行する必要があります。キャプチャ・コマンドライン・ユーティリティを使用すると、サーバーの登録、インポート・ジョブの構成とそのリストを行うことができます。

ファイル・インポート・エージェントの設定は、次のステップで構成されます:

1. [ファイル・インポート・エージェントのダウンロードとインストール](#)
2. [ファイル・インポート・エージェント用の Oracle Identity Cloud Service \(IDCS\) アプリケーションの作成](#)
3. [Oracle Content Management のファイル・インポート・エージェントへの登録](#)
4. [キャプチャ・コマンドライン・ユーティリティの使用](#)

ファイル・インポート・エージェントのダウンロードとインストール

モニター対象のフォルダからファイルをインポートする前に、ファイル・インポート・エージェントをローカル・コンピュータにインストールする必要があります。

システム要件

ファイル・インポート・エージェントは、Oracle JDK バージョン 8u251 またはこのアプリケーションのインストール時に使用可能な最新バージョンを必要とする Java アプリケーションです。ファイル・インポート・エージェントは、Windows、Linux、および Mac に対応しています([Oracle JDK 8 および JRE 8 の動作保証済システム構成](#)を参照してください)。

ファイル・インポート・エージェントをダウンロードしてインストールするには:

1. Oracle Content Management Web インタフェースにログインし、左側のナビゲーション・パネルで「**キャプチャ**」(「**管理**」の下)をクリックします。このオプションが表示されない場合、必要なアクセス権限がありません。
2. コンテンツ・キャプチャ・プロシージャ・ページで、「**ダウンロード**」の下の「**Oracle Content Capture ファイル・インポート・エージェント**」をクリックし、capture-agent.zip ファイルをローカル・コンピュータにダウンロードします。
3. ZIP ファイルを展開します。
4. <agent directory>\bin を PATH に追加する必要があります。エージェント・ディレクトリは、capture-agent.zip が展開されたフォルダです。また、CAPTURE_HOME 環境変数を展開したディレクトリに設定し、\$CAPTURE_HOME\bin を PATH に追加することもできます。

Mac の場合:

```
sudo ln -s <agent directory>/bin/capture /usr/local/bin/capture
```

Windows の場合:

SystemPropertiesAdvanced.exe ファイルを実行し、**環境変数**を編集して、<agent directory>\bin を PATH 変数に追加します。

5. 環境変数として、または<agent directory>/conf/agent.properties ファイル内で CAPTURE_JAVA_HOME 変数を有効な JDK の場所に設定します。

ファイル・インポート・エージェント用の Oracle Identity Cloud Service (IDCS)アプリケーションの作成

ファイル・インポート・エージェントは、Oracle Content Management と対話して、インポート・ジョブ構成を取得し、ファイルをアップロードします。そのために、RESTful Web サービスを起動します。API は OAuth によって保護されるため、ファイル・インポート・エージェントには OAuth トークンが必要です。IDCS アプリケーションを使用すると、ファイル・インポート・エージェントがこれらのトークンを生成できます。

IDCS アプリケーションを作成するには:

1. **マイ・サービス**・ダッシュボードにログインします。
2. 「**Identity Cloud**」をクリックします。
3. サービス・インスタンス URL をコピーします。この URL を使用して、Oracle Content Management インスタンスにアクセスできます。つまり、これを使用して、インストールしたサーバーを登録します。
4. Identity Cloud Service コンソールで、「**ナビゲーション・ドロワー**」を展開し、「**アプリケーション**」をクリックします。
5. 「**追加**」をクリックします。
6. 「**アプリケーションの追加**」ページで、「**機密アプリケーション**」をクリックします。
7. **機密アプリケーションの追加**ウィンドウの「**アプリケーション詳細**」ペインで、アプリケーションの名前を入力し、「**次**」をクリックします。
8. 「**このアプリケーションをクライアントとして今すぐ構成します**」を選択します。

9. 「認可」で、「リソース所有者」および「JWT アサーション」を選択します。
 10. 「トークン発行ポリシー」で、「認可されたリソース」に「すべて」を選択し、「次」をクリックします。
 11. 「リソース」タブで、デフォルト値を受け入れて「次」をクリックします。
 12. 「Web 層ポリシー」タブで、デフォルト値を受け入れて「次」をクリックします。
 13. 「認可」タブで、デフォルト値をクリックし、「次」をクリックします。
 14. 「終了」をクリックします。
「クライアント ID」および「クライアント・シークレット」をコピーします。サーバーをキャプチャ・コマンドライン・ユーティリティに登録するときに、これらが必要になります。
 15. 「構成」タブで、「クライアント構成」を展開します。
 16. 「トークン発行ポリシー」セクションまでスクロールし、「スコープの追加」をクリックします。
 17. 「スコープの選択」ダイアログで、Oracle Content Management インスタンスを見つけて「>」をクリックします。
 18. URL が/urn:opc:...のスコープを選択し、「追加」をクリックします。
 19. スコープ URL をコピーします。サーバーをキャプチャ・コマンドライン・ユーティリティに登録するときに、これが必要になります。
 20. 「保存」をクリックしてから、「アクティブ化」をクリックします。
- IDCS アプリケーションが作成されました。次に進んで、サーバーをキャプチャ・コマンドライン・ユーティリティに登録できるようになります。

Oracle Content Management のファイル・インポート・エージェントへの登録

キャプチャ・コマンドライン・ユーティリティが、Oracle Content Management インスタンスに関してどのようなインポート・ジョブが構成されているかを認識し、ファイルをこのインスタンスにアップロードできるように、Oracle Content Management インスタンスをこのユーティリティに登録する必要があります。

Oracle Content Management を登録するには:

1. ファイル・インポート・エージェントをダウンロードしてインストールします(まだコンピュータにインストールしていない場合)。
2. Windows、Linux または Mac オペレーティング・システムで、次のコマンドを実行します:

```
$ capture register-server <NAME> --endpoint https://<oracle content management instance name>.oraclecloud.com -u username -p 'password' --idcsurl https://<server name>.identity.oraclecloud.com/oauth2/v1/token --clientid sampleid --clientsecret sample-secret --scope https://<server name>:<port number>/urn:opc:cec:all
```

- Oracle Content Management インスタンス URL: <oracle content management instance name>.oraclecloud.com

- Oracle Content Management インスタンス URL のユーザー名およびパスワード。

ノート:

セキュリティの脅威を軽減するために、必要なプロシージャに対するコンテンツ・キャプチャ・ロールまたは権限のみを割り当てたファイル・インポート・エージェント固有のユーザーを作成することを考慮してください。

- アイデンティティ・サービス・インスタンス URL: `https://<server name>.identity.oraclecloud.com/oauth2/v1/token` (IDCS アプリケーションの作成時点でその値をコピーしています。)
 - クライアント ID: `sampleid` (IDCS アプリケーションの作成時点でその値をコピーしています。)
 - クライアント・シークレット: `sample-secret` (IDCS アプリケーションの作成時点でその値をコピーしています。)
 - スコープ URL: `https://<server name>:<port number>/urn:opc:cec:all` (IDCS アプリケーションの作成時点でその値をコピーしています。)
3. コマンドを実行してインポート・ジョブをリストすることにより、接続をテストします:

```
$ capture list-import-jobs
```

指定した Oracle Content Management インスタンスに対してコンテンツ・キャプチャ・プロシージャ内に構成されたすべてのフォルダおよびファイル・リスト・インポート・ジョブのリストが表示されます。

Oracle Content Management を登録し、インポート・ジョブを構成した後は、[フォルダからのファイル・インポートを構成](#)するか、[リスト・ファイル・インポートを構成](#)します。

キャプチャ・コマンドライン・ユーティリティの使用

`capture` コマンドライン・ユーティリティを使用すると、ドキュメントを Oracle Content Management リポジトリにインポートできるようにファイル・インポート・エージェントを構成できます。ファイル・インポート・エージェントを使用および管理するためのコマンドが用意されています。

```
-----
capture
-----
usage : capture <command> [options]
Run capture <command> -h' to get the detailed help for the command.
Commands:
capture create-encryption-key <file>          Create an encryption key to encrypt/
decrypt password for servers.                  [alias:   cek]
capture register-server <name>                Registers a CEC
server
[alias:   rs]
capture list-servers                          Lists registered
servers
[alias:   ls]
```

```

capture list-import-jobs          Lists all Import Jobs from
server                            [alias:
lij]
capture configure-import-job      Configures import job. Set
Import Folder path. Enable or disable. [alias:
cij]
capture trigger-import-job        Forces import job
processing.
[alias: tij]
capture refresh-config            Refresh configuration from
server.                            [alias:
rc]
capture list-procedures           Displays capture
procedures.
[alias: lp]
capture register-database <name> Registers external
database.
[alias: rd]
capture deregister-database       Deregister previously
registered database.
[alias: dd]
capture list-databases            Displays registered databases
and tables.                        [alias:
ld]
capture register-table            Registers tables in a
database.
[alias: rt]
capture deregister-table          Deregister previously
registered table.
[alias: dt]
capture list-table-sync-jobs      Lists all Asset Sync Jobs from
server.                            [alias: ltsj]
capture trigger-table-sync        Force table / asset
synchronization.
[alias: tts]
capture start                     Starts import
agent
[alias: s]
capture stop                     Stops import
agent
[alias: x]
capture status                   Shows import agent
status
[alias: st]
capture help                     Shows this
message
[alias: h]

-----
capture create-encryption-key
-----
usage: create-encryption-key <file> [-h]
Create an encryption key to encrypt/decrypt password for servers and
save to <file>.
Options:

```

```

-h,--help    Show help
Example:
capture create-encryption-key ~/.ceckey                Create
encryption key and save to file ~/.ceckey
-----
capture register-server
-----
usage: capture register-server <name> -e <endpoint> -u <user> -p <password>
[-k <key>] [-i <idcsurl>] [-c <clientid>] [-s <clientsecret>] [-o <scope>] [-m <timeout>] [-h]
Registers a CEC server. Specify -e <endpoint> for the server URL. Specify -u <user> and -p <password> for connecting to the server. Optionally specify -k <key> to encrypt the password.
Optionally specify <idcsurl>, <clientid>, <clientsecret> and <scope> for integration with IDCS app.
Options:
-e,--endpoint <endpoint>          Server endpoint
-u,--user <user>                  User name
-p,--password <password>         Password
-k,--key <key>                   The key file used to encrypt the password
-i,--idcsurl <idcsurl>           Oracle Identity Cloud Service Instance
URL
-c,--clientid <clientid>         Client ID
-s,--clientsecret <clientsecret> Client secret
-o,--scope <scope>               Scope -m,--timeout <timeout>
Timeout in millisecond when try to login to the server. Defaults to 30000ms
-h,--help                         Show help
Examples:
capture register-server server1 -e http://server1.com -u user1 -p password1 -i
i                                The server is a tenant on Oracle Public cloud
http://idcs1.com -c clientid -s clientsecret -o https://primary-audience-and-scope
capture register-server server1 -e http://server1.com -u user1 -p password1
password1                        The server is a tenant on Oracle Public cloud
capture register-server server1 -e http://server1.com -u user1 -p password1 -m 60000
m 60000                          The timeout is set to 60 seconds
capture register-server server1 -e http://server1.com -u user1 -p password1 -k ~/.mykey
k ~/.mykey                       The password will be encrypted
-----
capture list-servers
-----
usage: capture list-servers [-u <user>] [-f <pattern>] [-h]
Lists registered CEC servers. Optionally specify -u <user> and -f <pattern> to filter results based on user or server name.
Options: -u,--user <user>          User name
-f,--pattern <pattern>           String to search in server name
-h,--help                         Show help
Examples:
capture list-servers                Lists all
registered servers
capture list-servers -u user1       Lists all
registered servers linked to user 'user1'
capture list-servers -f demo        Lists all
registered servers whose name contains 'demo'

```

```

-----
capture list-import-jobs
-----
usage: capture list-import-jobs [-f] [-l] [-h]
Lists all Import Jobs from server. Optionally specify -f and -l to show
only folder or list file import jobs.
Options:
-f,--folder      Display only folder import jobs
-l,--listfile    Display only list file import jobs
-h,--help        Show help
Examples:
capture list-import-jobs                                Lists
all import jobs
capture list-import-jobs -f                            Lists
all folder import jobs
capture list-import-jobs -l                            Lists
all list file import jobs
-----

capture configure-import-job
-----
usage: capture configure-import-job -s <server> [-i <import>] [-p
<path>] [-e] [-E] [-d] [-D] [-h]
Configures the import job. Specify -s <server> -i <importjobid> to
select the server and import job. Optionally specify -p <path> to set
the import folder path.
Optionally specify -d to disable import job and -e to enable import job
Options:
-s,--server <server>  Set server name associated with import job
-i,--import <import>  Set Import Job Id
-p,--path <path>      Set Local Import Folder Path
-e,--enable           Enables specific import job
-E,--enable-all      Enables all import jobs
-d,--disable          Disables specific import job
-D,--disable-all     Disables all import job
-h,--help             Show help
Examples:
capture configure-import-job -s prod -i import_id -p /Users/user1/
data/          Sets the import directory
capture configure-import-job -s prod -i import_id -
e              Enables a specific import job
capture configure-import-job -s prod -
D              Disables all import jobs
capture configure-import-job -s prod -i import_id -
d              Disables a specific import job
-----

capture trigger-import-job
-----
usage: capture trigger-import-job -s <server> -i <import> [-h]
Forces import job processing.
Options:
-s,--server <server>  Set server name associated with import job
-i,--import <import>  Set Import Job Id
-h,--help             Show help
Examples: capture trigger-import-job --server production --import xx-
job-id-xx           Forces processing of specified import job

```

```

-----
capture refresh-config
-----
usage: capture refresh-config [-s <server>] [-h] Refresh configuration from
server.
Optionally specify -s to only refresh config for selected server.
Options:
-s,--server <server>   Specify the server
-h,--help              Show help
Examples:
capture refresh-config                               Force refresh configuration for
all servers
capture refresh-config -s production                Force refresh configuration
from specified server
-----
capture list-procedures
-----
usage: capture list-procedures -s <server> [-h]
Lists capture procedures. Must specify -s <server> to select a server.
Options:
-s,--server <server>   Specify the server
-h,--help              Show help
Examples: capture list-procedures -s octest
Lists all capture procedures available for current user
-----
capture register-database
-----
usage: capture register-database <name> -s <server> -w <procedure> -c
<connection> -u <user> -p <password> [-a] [-h]
Registers on-prem database with Capture. Specify -c <connection> for the
connection URL, -u <user> and -p <password> for connecting to the server.
Options:
-s,--server <server>           Specify the server
-w,--procedure <procedure>    Set procedure to be associated with database
-c,--connection <connection> Database connection url
-u,--user <user>              Database User name
-p,--password <password>     Database Password
-a,--attach                    Attach existing database
-h,--help                      Show help
Examples:
capture register-database ebsdb -s server1 -w 1 -c jdbc:oracle:thin:@//
host:port/service -u user1 -p pass          Register ebsdb with server1
-----
capture deregister-database
-----
usage: capture deregister-database -s <server> -w <procedure> -d <database>
[-e] [-h]
Deregister previously registered database. Specify -s <server>, -w
<procedure> and -d <database> to select the database.
Options:
-s,--server <server>           Specify the server
-w,--procedure <procedure>    Procedure associated with database
-d,--database <database>     Database to deregister
-e,--detach                    Only detach
-h,--help                      Show help

```

```

Examples:
capture deregister-database -s server1 -w 1 -d ebsdb
Deregister VENDORS table from ebsdb database
capture deregister-database -s server1 -w 1 -d ebsdb --detach
Detaches ebsdb database without deregistering it
-----
capture list-databases
-----
usage: capture list-databases -s <server> [-h] Lists registered
databases and tables. Must specify -s <server> to select a server.
Options:
-s,--server <server>    Specify the server
-h,--help                Show help
Examples:
capture list-databases -s octest        Lists all registered databased
linked to server 'ocetest'
-----
capture register-table
-----
usage: capture register-table -s <server> -w <procedure> -d <database> -
t <table> [-m <schema>] [-h]
Registers table with Capture. Specify -s <server>, -w <procedure> and -
d <database> to select the database.
Options:
-s,--server <server>    Specify the server
-w,--procedure <procedure> Specify the procedure
-d,--database <database> Specify the database
-t,--table <table>      Table to sync
-m,--schema <schema>   Override schema qualifier
-h,--help                Show help
Examples:
capture register-table -s server1 -w 1 -d ebsdb -t
VENDORS                Register VENDORS table from ebsdb database
capture register-table -s server1 -w 1 -d ebsdb -t VENDORS -m
SVR                    Register VENDORS table from ebsdb database in SVR schema
-----
capture deregister-table
-----
usage: capture deregister-table -s <server> -w <procedure> -d
<database> -t <table> [-m <schema>] [-h]
Deregister table. Specify table details.
Options:
-s,--server <server>    Specify the server
-w,--procedure <procedure> Procedure associated with database
-d,--database <database> Specify the database
-t,--table <table>      Table to sync
-m,--schema <schema>   Override schema qualifier
-h,--help                Show help
Examples: capture deregister-table -s server1 -w 1 -d ebsdb -t
VENDORS                Deregister VENDORS table from ebsdb
database
-----
capture list-table-sync-jobs
-----
usage: capture list-table-sync-jobs [-r] [-h] Lists all Asset Sync Jobs

```

```

from server.
Options:
-r,--refresh    Force refresh asset sync jobs from server
-h,--help      Show help
Examples:
capture list-table-sync-jobs                               Lists
all asset sync jobs
capture list-table-sync-jobs -r                           Refresh
asset sync jobs from server and list them
-----
capture trigger-table-sync
-----
usage: capture trigger-table-sync -s <server> -a <asset> [-h]
Force table / asset synchronization.
Options:
-s,--server <server>  Set server name associated with table sync job
-a,--asset <asset>    Set Asset Sync Job Id
-h,--help            Show help
Examples:
capture trigger-table-sync -s production -i xx-123-sync-id-xx  Forces
processing of asset synchronization job
-----
capture start
-----
usage: capture start [-h]
Starts capture agent.
Options:
-h,--help    Show help
Examples:
capture start                               Starts capture
agent if not running
-----
capture stop
-----
usage: capture stop [-h]
Stops capture agent.
Options:
-h,--help    Show help
Examples:
capture stop                               Stops capture
agent if currently running
-----
capture status
-----
usage: capture status [-s <server>] [-i <import>] [-u <user>] [-m <machine>]
[-l <limit>] [-d <duration>] [-c | -p] [-h]
Display capture agent status and activity.
Options:
-s,--server <server>      Set Server name
-i,--import <import>     Set Import Job name
-u,--user <user>         Set user name. Defaults to current user
-m,--machine <machine>   Set host name. Defaults to current hostname
-l,--limit <limit>       Set number of results to return. Defaults to 200
-d,--duration <duration> Set duration period in hours
-c,--completed           Display only completed uploads

```

```
-p,--pending          Display only pending uploads
-h,--help            Show help
Examples:
capture status                    Display capture agent
status
capture status -u user@example.com Show upload activity for
user : user@example.com
capture status -i Invoices        Show upload activity for
Invoices import job
capture status -m myhost.example.com Show upload activity for a
specific host / machine
capture status -p                Show uploads pending
completion
capture status -c                Show completed uploads
-----
capture version
-----
usage: capture version [-h]
Displays capture version details.
Options:
-h,--help    Show help
Example:
capture version                    Display Capture Agent version
```

モニター対象電子メール・アカウントからのファイルのキャプチャ

電子メール・アカウントを受信電子メール・メッセージをキャプチャして **Oracle Content Management** にインポートするソースとして使用して、インポート・ジョブを作成できます。インポートされた各電子メール・メッセージはバッチとして扱われ、その添付およびメッセージ本文はバッチ内の個別のドキュメントになります。インポート・ジョブでは、インポート・プロセッサがモニターする受信ボックス・フォルダを指定し、メッセージ・フィルタを構成し、プロセッサがバッチに含める添付ファイル・タイプを指定し、電子メール・アドレス、日時、件名などのメッセージ要素の処理方法を指定することができます。様々なタイプのファイルを処理する順序を選択することもできます。

従業員が多機能デバイスで経費報告書をスキャンするシナリオを考えてみましょう。各経費報告書は PDF ドキュメントに変換されて電子メール・メッセージに添付され、インポート・プロセッサによってモニターされている経費の受信ボックスに電子メールが配信されます。インポート・プロセッサは、インポート・ジョブの構成設定に従って、これらの電子メール・メッセージとその添付を処理します。

[電子メール・メッセージおよび電子メール添付のインポートの構成](#)で説明されているステップを実行し、電子メール・インポート・ジョブを作成できます。